

科目区分	開設大学	授業科目の名称	講義等の内容	備考
小学校 アドバ ンスト 科目	宇都宮大学	アドバンスト算数	小学校算数科の指導方法についての基礎的な知識を土台にして、小学校算数における教材研究や授業設計を行うための基礎的な資質・能力を育成することを授業の到達目標とし、学習指導案の作成及び模擬授業の実施を中心に展開し、算数の学習指導案の作成、算数の授業の省察の仕方、算数の指導方法についての実践的に学習する。算数教育に関する理論や今日的動向に関する講義と、算数の教材研究や授業づくりについての協働的な演習を織り交ぜて理論と実践の往還を図る。	
	宇都宮大学	アドバンスト小学校理科実験	(概要) 小学校理科における4つの柱, 「エネルギー」, 「粒子」, 「生命」, 「地球」各領域の実験指導に関する理解を深めることをねらいとして, 各領域2コマずつのオムニバス形式で演習中心の授業を行う。 (オムニバス方式/全8回) (21 南伸昌/4回) 「エネルギー」領域の中の「ふりこのきまり」, 「電気の活用」および, 「粒子」領域においては器具や試薬の使い方 の練習の後, 「水の状態変化」, 「水溶液の性質」を担当する。 (3 井口智文/2回) 「生命」領域の中の「植物の体のつくりと働き」の単元内容の実験(顕微鏡の使用法を含む)を担当する。 (142 瀧本家康/2回) 「地球」においてはPC等のICTを活用した効果的な指導方法を担当する。	オムニバス方式 演習 12時間 講義 4時間
	宇都宮大学	アドバンスト小学校英語教育	小学校英語の指導方法についての基礎的な知識を土台として、授業・教材研究や授業設計を行うための発展的な資質・能力を育成することを授業の到達目標とする。具体的には、授業・教材研究・相互文化理解について学びを深め、それに基づき学習指導案の作成及び模擬授業の実施し、小学校における英語の授業の省察の仕方、教材研究の方法、学習指導案の作成、評価方法について、オムニバス形式で、実践的かつ協働的に学ぶ。同時に小学校英語教育に関する理論、中学校英語との連携についても、理解を深める。 (オムニバス形式/全8回) (86 山野有紀/全6回) 小学校英語のための第2言語習得理論、小学校英語教育の教授法、小学校英語教育における相互文化理解、授業・教材研究、評価方法、模擬授業指導を担当する。 (143 田村岳充/全2回) 小中英語教育連携について担当する。	オムニバス方式
	宇都宮大学	アドバンスト特別支援教育	特別支援教育に関する基礎的な知識を土台として、小学校において特別な支援を必要とする児童を理解し支援するための発展的な資質・能力を育成することを目指す。特別支援教育に関する学校現場の課題について知るとともに、子どもの具体的な姿から支援や授業デザインを考える方法について学ぶ。 (オムニバス形式/全8回) (251 池本喜代正/全2回) 特別支援教育の理念と制度、特別支援教育をめぐる現状と課題について担当する。 (144 福田奏子/全2回) 見えにくさのある子どもへの理解と支援について担当する。 (65 石川由美子/全2回) 知的障害や発達障害の子どもへの理解と支援について担当する。 (77 司城紀代美/全2回) 通常の学校における特別支援教育、通常の学級での授業づくりや学級経営について担当する。	オムニバス方式

科目区分	開設大学	授業科目の名称	講義等の内容	備考
グローバル関連科目	宇都宮大学	International Political Economics	The course introduces students to some major topics in IPE, such as globalization, free trade, inequality, and the decline of US power. It does so by critically examining major theoretical approaches and concepts.	集中
	宇都宮大学	Global Management : Asia and Development	This course provides students with the opportunities for critically reviewing and analyzing the on-going global challenges, beyond borders and across disciplines around the world. Through providing conceptual clarity and concrete case studies, students will be directed to understanding and drawing an overall picture of global issues. Students will also learn about some practical technics and tools for problem analysis, in order to analyze the global issues and seek the real global agenda.	集中
	宇都宮大学	Globalization and Society	In this course, we learn and discuss about what "globalization" is and what have been going on in this global society. This course introduces some basic ideas of "globalization" and "global issues" in local and global communities. Also, through some groupworks and workshops, some participatory learning skills of global education will be introduced so that we can understand those global issues and take actions for our common future.	
	宇都宮大学	Risk Management	This course introduces risk management principles with the practical cases in and out of Japan. In general, "risk" is defined as an (exposure to) the possibility of loss, injury, or other adverse or unwelcome circumstance; a chance or situation involving such a possibility. This course focus on disaster risk from the third class.	集中
	宇都宮大学	Intercultural Education	The course format is primarily made of lectures, pair or group work, presentations and in-class discussions. Each student will be assigned to present one of case studies in a class. In your presentation, you have to summarize reference books and provide your comment on it. この授業は、全学共通科目の"Learning+1"が目標とする「英語運用力や異文化社会およびグローバルな共生社会への知識を深め、国際的なフィールドでの実践力を身につける」と関連します。	集中
幼稚園免許	各大学	幼児の健康・運動	本授業では、発育期の子どもの運動発達や健康の特徴を把握するとともに、スポーツ運動系の運動学習や運動指導についての正しい知識を身につける。発育期の子どもは心身ともに大きく成長する時期であることから、発育発達段階に合わせた運動能力の変化や健康の特徴を理解し、安全で効果的な指導を行う上での知識を養うとともに、各年代における運動能力を高める方法や健康の増進に関する専門的能力を習得する。	
	各大学	幼児と人間関係	安心の輪の中で自我の芽生え、自己主張をしながら信頼関係を築き、やがて自己をコントロールしていく社会性自我の芽生えに至る発達においてコミュニケーションの基礎が養われる。幼稚園教育要領に示された領域「人間関係」のねらい及び内容を踏まえ、幼児期を中心に人間関係の特徴について主に発達心理学的な視点から学ぶ。特に社会性の発達に焦点を当て、「人と関わる力」を培うプロセスについて講義を行う。	

科目区分	開設大学	授業科目の名称	講義等の内容	備考
幼稚園免許	各大学	幼児と環境	幼児の発達や学びの過程を理解し、領域「環境」に関わる基礎的な知識を習得し、幼児期の環境構成の重要性を理解することを目標とする。人間の発達における土台を形成する幼児期の育ち環境のあり方について、認知的発達を踏まえて幼児と環境との関わりについての専門的事項との関連を事例を交えて教示する。また、幼児期の保育の質保証としてのESDの課題について示し、深い学びを保障するために領域「環境」が保育に果たす役割について講義する。	共同（一部）
	各大学	幼児と言葉	幼稚園教育要領における領域「言葉」のねらい及び内容を理解し、幼児期の言葉の学問的背景と基礎的な知識を学ぶ。また、発達段階をふまえ、幼児が親しみをもって身に付けていく言葉をとおして、自分なりの言葉で表現し、他者の話す言葉を聞こうとする意欲、態度を理解する。幼児の言葉に対する感覚や表現する力を育む体験や環境を構築できるよう幼小連携を踏まえた主体的、対話的で深い学びの保障について講義する。	
	各大学	音楽表現	手遊び歌や伝統的な唱歌をはじめ音楽的表現は幼児の情操を豊かにし、感性的な発達には欠かすことができない。幼児の発達段階に応じた様々な音楽表現を身につけ、その指導法を習得することを目的とする。音楽を通じた表現活動として、四季折々の子どもの歌の歌唱および指導のための簡易伴奏付け、音楽レクリエーションとしての「手あそび歌」、子どもの合奏などの基礎的実践的能力を養う。また、教育現場で即戦力となるよう、保育における実践的な教材研究にも取り組む。	
	各大学	造形表現	表現のなかでも造形表現の特色や子どもの造形的な発達を理解し、幼児の造形表現を指導、支援するための基礎的な諸能力を高め、子どもの造形表現の意味と面白さを知り、実践につながる力を身につけることを目標とし、幼稚園教諭として必要な造形表現の知識・技能を講義や演習、実践を通して学修する。材料用具の扱い方や学習環境のデザイン、教材開発、造形活動の支援のあり方など、幼児の造形表現の実際を様々な文献・資料の他、実践を基に理解を深める。また、テーマに沿ったレポート課題や実践活動への取り組み、授業時の制作を通じて、発表や意見交換を行う。	
	各大学	保育内容の指導法（健康）	保育内容の領域「健康」に関わる指導についての基礎・基本的な知識や技能を修得し、子どもの心身の健全な発育発達を促し、遊び・身体運動の楽しみ方について指導する実践力を養う。講義では、領域「健康」の意義・ねらい・内容を理解し、子どもへの健康指導の視点および子どもの健康課題の解決に繋がる実践力を学習する。また、子どもの心身の健全な発育発達を促し、遊びを通じた身体運動、健康で安全な生活習慣を身につけるための知識と指導法を模擬保育を通して身に付ける。	
	各大学	保育内容の指導法（人間関係）	幼稚園教育要領における領域「人間関係」のねらいや内容を理解し、具体的な援助場面を想定して保育を構想することができるようになる。講義では、幼稚園教育要領における「人間関係」のねらい、内容を概説する。また、提示する事例（附属幼稚園保育実践、レジオエミリアの幼児教育実践等）について幼児、保育者それぞれの観点からディスカッションを行うことで、保育者として幼児の人間関係を援助する方法について考えていく。また、異年齢保育や気になる子、個人差等に対応するための保育指導案作成と模擬保育を実践する。	
	各大学	保育内容の指導法（環境）	幼児の発達や学びの過程を理解し、領域「環境」に関わる具体的な指導場面を想定した保育を構想する方法を身につけ、幼児期の環境構成の重要性を理解することを目標とする。人間の発達における土台を形成する幼児期の育ち環境のあり方について、幼稚園指導要領の幼児と環境との関わりについての専門的事項を踏まえて理解し、深い学びを保障するために、実地指導講師ならびに講義者の保育現場での経験を生かして具体的な指導場面を想定した模擬保育と振り返りを通して保育の構想、指導方法を修得する。	

科目区分	開設大学	授業科目の名称	講義等の内容	備考
幼稚園免許	各大学	保育内容の指導法 (言葉)	幼稚園教育で育む資質・能力を理解し、幼稚園教育要領・領域「言葉」のねらい・内容について理解を深め、幼児の発達に即して主体的・対話的で深い学びが実現する過程を踏まえて、具体的な指導場面を想定して保育を構想する方法を身に付ける。講義では、幼児の言語発達、コミュニケーションを通じた認知発達、脳科学と言葉の発達、遊びを通じた言葉の発達などについて心理学の知見を基に概説し、具体的に保育計画を立て、模擬保育の実践と省察により実践的な指導方法を習得する。	
	各大学	保育内容の指導法 (表現)	領域「表現」のねらい及び内容について、背景となる専門領域と関連させて理解を深め、幼児の発達に即した主体的・対話的で深い学びが実現する過程を踏まえ、表現支援に重要な視点や指導技術を習得し、具体的な指導場面を想定した保育を構想する指導方法を身につける。講義では、保育現場における参観や指導案作成・模擬保育等を通して、領域「表現」のねらい及び内容を理解し、「表現」を通じた実際的な保育や指導のあり方を考える。	
	宇都宮大学	幼児教育課程論	具体的な指導計画の編成や計画にあたって重要となる、子ども観の捉え方、カリキュラムの立案ならびに教材研究、そしてこれらの理解につながる歴史(現制度の現状と課題を含む)を踏まえ、子どもを主体として捉えた教育課程とは何かを理解することを目的とする。講義では、幼児教育制度の歴史、保育原理、幼児教育の特性及び意義を学ぶ中で保育と教育の在り方を整理し、各学校の子どもの現状を軸としたカリキュラム・マネジメントの基本を身につける。	
	宇都宮大学	幼児教育の方法・技術	「幼稚園教育要領」「幼保連携型認定こども園保育・教育要領」の内容及び平成29年改訂の背景を理解することが幼児教育の方法・技術を考えるためのスタートとなる。とくに新しく示された「幼児期の終わりまでに育って欲しい10の姿」を主体的・対話的で深い学びを通して、幼児期に育む教育を行うための方法や技術を身につけることが必要であるとの理解から、具体的な方法や技術、教材の開発、情報機器の活用などについて学ぶ。また、小学校とのスムーズな連結が可能となる教育方法やカリキュラムについても学ぶ。	
	宇都宮大学	子ども理解の心理学	幼児理解についての心理学的な理論、知識を身につけ、その意義を理解する。また、幼児理解から発達や学びを把握する原理、原則を理解するために、観察、記録の意義を具体的な事例から学ぶ。幼児の発達過程におけるつまずきや保護者対応について、自ら支援・援助できるようアクティブラーニング形式で受講生が主体的に考察し、幼児教育の現場で教師としてあるべき姿がとれるよう、幼児・保護者に対する基礎的態度を修得する。	
	群馬大学	幼児理解の心理学	幼児及び乳児の特性についての知識を身につける事で、幼児理解についての考え方や基礎的態度、その方法を理解する。講義では、乳幼児の発達を理解するための観察・検査法、保育記録の方法について述べ、乳児期の知覚・運動・認知・自己発達等について心理学の知見から述べる。その上で、幼児期における遊びの意味について5領域のベースとなる発達理論における基礎的知識を教授する。	
	宇都宮大学	幼児教育相談	幼児の発達を理解しつつ、幼児個別の特質や教育的問題を支援するために必要な基礎的知識を習得する。また、幼児と保護者に対するカウンセリングマインドの必要性を理解し、幼児の問題行動や不適応行動に対する教育相談を展開するために組織的な取り組みの重要性、関連機関との連携の在り方のあり方を理解する。カウンセリングの基本的な姿勢や技法については、アクティブラーニング形式で自らが実践できるように取り組む。	

科目区分	開設大学	授業科目の名称	講義等の内容	備考
高校免許	宇都宮大学	工芸科教育法Ⅰ	高等学校学習指導要領解説と資料をもとに、工芸の定義、工芸教育の変遷、工芸科教育の内容・目標・指導・評価等の基礎的知識に関する講義形式の授業を行った上で、実際の工芸の授業の具体的内容や進行について、演習課題に取り組みながら、課題発表やロール・プレーイング、鑑賞を織り交ぜながら模擬授業を通し、情報共有し学生同士の学び合いと振り返りを通し、工芸の授業を実践的に展開していくための指導案を作成する。演習課程は詳細に材料の扱い方や手順など詳細記録し、図や写真等を織り交ぜた記録ノートを作成することで、教科の内容を理解するとともに教材研究し、授業を展開するための情報機器及び教材の活用と資料作りとする。	
	宇都宮大学	工芸科教育法Ⅱ	高等学校学習指導要領解説と資料をもとに、工芸の定義、工芸教育の変遷、工芸科教育の内容・目標・指導・評価等の基礎的知識に関する講義形式の授業を行った上で、実際の工芸の授業の具体的内容や進行について、演習課題に取り組みながら、課題発表やロール・プレーイング、鑑賞を織り交ぜながら模擬授業を通し、学生同士の学び合いと振り返りを通し、工芸の授業を実践的に展開していくための指導案を作成する。演習課程は詳細に材料の扱い方や手順など詳細記録し、図や写真等を織り交ぜた記録ノートを作成することで、教科の内容を理解するとともに教材研究し、授業を展開するための情報機器及び教材の活用と資料作りとする。	
	各大学	工業技術基礎	本科目は、高等学校（工業）教員免許状取得に必要な教科に関する専門科目である。高等学校工業科の「各分野に関する科目」の内容について理解することを主な目標とする。授業では中学校技術・家庭科（技術領域）からのつながりに留意しつつ、各分野の専門的内容（工業材料、製図、機械工学、電気・電子工学、情報工学など）について学修する。また学修指導に際しては、建築や工業デザインなど、工業科の広がりにも留意して指導するものとする。 (宇都宮大学：単独) (群馬大学：オムニバス方式／全15回) (33 楠元一臣) (122 古田貴久) (136 小熊良一) (137 片柳雄大)	宇大単独/群大オムニバス方式
	各大学	職業指導論	工業高校の免許を取得するために必要な科目である。工業高校における職業指導の意義を理解する授業を行う。まずは職業指導の歴史的な流れについて学ぶ。また、小学校、中学校、高等学校普通科におけるキャリア教育を知ることを通して体系的に職業指導をとらえていく。さらに、進路指導計画の作成やキャリアアカウンセリングなど学校現場での実施を視野に入れた職業指導の具体的な方法を学習する。	
	各大学	工業科指導法Ⅰ	工業高校の免許を取得するために必要な科目である。工業高校の指導科目、工業科教育の目標、原則履修科目、共通的な基礎科目、選択的な基礎科目の内容を、指導要領や教科書を用いて理解する。また実際に工業高校において授業見学を行う。授業を行うための実践的な学習指導計画・指導案を作成し模擬授業を行う。学習指導要領の基づく評価の観点を考慮した学習評価の方法を学ぶ。	
	各大学	工業科指導法Ⅱ	工業高校の免許を取得するために必要な科目である。工業高校に関する科目、電気、機械、情報、金属材料、機械工作、製図等の指導法・教材開発について講義、演習を学ぶ。工業高校の教員である実地指導講師を招いて工業高校の実情を講話して頂く。また工業高校は、地域の産業との結びつきが大きい。よって、工場見学なども行う予定である。工業高校生のための研究成果発表会にも参加する。	共同（一部）
	各大学	工業科指導法Ⅲ	工業高校の免許を取得するために必要な科目である。工業高校に関する科目、電気、機械、情報、金属材料、機械工作、製図等の指導法・教材開発について講義、演習を学ぶ。工業高校の教員である実地指導講師を招いて工業高校の実情を講話して頂く。また工業高校は、地域の産業との結びつきが大きい。よって、工場見学なども行う予定である。工業高校生のための研究成果発表会にも参加する。	共同（一部）

科目区分	開設大学	授業科目の名称	講義等の内容	備考
その他の資格	群馬大学	生涯学習支援論	本授業では、学習者の多様な特性に応じた学習支援に関する知識及び技能の習得を図ることを目的とする。そのために、学習支援に関する教育理論、効果的な学習支援方法、学習プログラムの編成、参加型学習の実際とファシリテーション技法などを扱う。これらの学習を通じて、地域住民の生涯学習活動の支援を、行政だけでなく、NPOや企業等とも連携しながら進めることで、人づくり・地域づくりの中核的役割を担える人材の育成を目指す。	
	群馬大学	生涯学習概論Ⅰ	まず、生涯学習の理念と動向を理解する。次に、社会教育の意義と、社会教育を取り巻く法や行政のあり方を学ぶ。さらに、社会教育施設の役割と機能や、今日的課題と生涯学習との関連について把握する。そのうえで、公民館、図書館、生涯学習センター、青少年教育施設、文学館、教育事務所等の事例を通じ、社会教育施設の役割と専門的職員のあり方について理解を深める。これらの理解に基づき、最後に学習プログラムの作成と発表を行う。	
	群馬大学	生涯学習概論Ⅱ	時代の進展とともにこれまでの教育や学習に関し反省が行なわれ、教育・学習のとらえ方に変化が生じてきた。教育や学習が、人の一生を通じてどのような意味をもち、人の成長にとってどのような力を持つか。そのことをめぐって、その起こり、思想、施策、今日生涯学習と称して行なわれていること等を検証し、市民生活にとって生涯学習がどのような意義をもつか考察する。具体的には、美術館、博物館、公民館など、生涯学習現場での学習を多く実施する。	
	群馬大学	社会教育計画A	社会教育計画は自治体をはじめ、地域の学習活動を企画立案評価するものである。その際には、さまざまな知識や技術を必要とする。したがって、この授業ではそうした社会教育計画において必要となる基本的な知識や技術の理解・獲得をめざす。具体的には、社会教育計画の理論、社会教育計画の策定方法、社会教育事業計画の策定、策定した計画のプレゼンといった内容を扱う。担当教員は県教育委員会青少年課及び生涯学習課等で10年間生涯学習の実務経験があり、実務経験を生かして授業計画を立て、実務家教員としての経験を踏まえて実践的に学習できるよう配慮する。	
	群馬大学	社会教育計画B	本授業では、社会教育計画の基礎理論を理解し、社会調査を理解し、社会教育事業計画を作り、プレゼンテーション能力を向上させることを目的とする。そのため、具体的には、社会教育計画策定に必要な社会教育の基本的知識を理解し、社会教育のニーズを知り、社会教育調査を理解し、社会教育計画の策定方法を理解したうえで、社会教育計画を策定できるようにする、さらに、策定した社会教育計画を説明することもできるようにする。	
	群馬大学	社会教育実践研究Ⅰ	本授業では、教育における社会教育の公共性について理解を深め、社会教育主事として働く際に有効な、地域に根ざした教育観を形成することを目的とする。そのために、市民の社会教育実践に果たす社会教育主事および社会教育職員の職務について理解を深める。さらに、我が国および群馬県の社会教育実践の内容をつかみ、特色ある社会教育事業を自ら企画立案し、事業プログラムを作成する。これらを通じて、社会教育行政と社会教育実践の基本を理解し、社会教育実践の今日的課題を把握すること、群馬県の実践事例を研究し社会教育の実際を把握することを目指す。	
	群馬大学	社会教育実践研究Ⅱ	本授業では、社会教育職員の実践における役割の検討を通して、社会教育・生涯学習において大切にされるべき基本的視点の理解と実践力を身に付けることを目的とする。そのために、授業や社会教育施設で社会教育実践を具体的に体験と検討をし、学習プログラムと総括レポートの作成を行う。そのことによって、社会教育で行われる学習方法を体験することにより、実践的な人間関係能力を身に付けるとともに、学校教育での応用にも結び付けることができることを目指す。	

科目区分	開設大学	授業科目の名称	講義等の内容	備考
その他の資格	群馬大学	社会教育実践研究Ⅲ	本授業では、社会教育指導者として必要な専門知識や技能を、調査や具体的な実習を通して修得し、また優れた社会教育実践者の活動を学ぶことにより、社会教育実践の意義を理解することをねらいとする。そのために、社会教育行政施策の策定について調査をする。また、学校における地域連携について調査をする。具体的には、夏季休業中に、県内社会教育施設で実習し、後期にその体験・実習のレポートをする。さらに、優れた社会教育実践者の活動を講義し、社会教育指導者の姿を考察する。	
	群馬大学	博物館学	博物館に勤務する学芸員になるための基礎資格として、国家資格である学芸員資格がある。この資格を取得するには博物館資料の収集・整理、保管・保存、展示・活用、調査研究、教育普及、その他関連する事業に関する専門的事項について修得する必要がある。そこでこの科目では、博物館の歴史や機能などの概論から、資料の収集や保管、活用のしかた等、博物館と学芸員に関する知識・技能を理論的・体系的に学ぶことを目標とする。	
	群馬大学	博物館実習	学芸員資格を取得するための必修科目である。本授業では、博物館学関係科目で学んだ知識・技能や理論について総括的なまとめを行い、博物館の教育普及活動と学校教育の連携について講じ、あわせて資料の取り扱い方法の実習を行うことで学芸員の基礎・基本を修得する。実習に向けての事前指導と実習後の事後指導を行い、成績の判定は実習録の提出と事後指導における実習成果報告会を経て行う。	集中
	群馬大学	図書館情報学	学校図書館法により、学校には12学級以上の学校に必ず置かなければならない「司書教諭」を養成するための科目である。学校図書館の専門的職務を掌る役目を担うため、学校における学校図書館の役割を理解し、学校教育における読書の指導の意義を考え、理論を学び、司書教諭として学校の読書活動を推進できる指導力を身に付けるとともに、図書館を深く活用するために必要な情報活用能力を修得することを目標とする。	

授業科目の概要			
(共同教育学部学校教育教員養成課程)【群馬大学】			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
心理学領域	ジェンダー論	<p>ジェンダーについて理解し、教員としての姿勢を身につける。 (オムニバス方式/全15回) (齋藤周/3回)</p> <p>ジェンダーとは何かについて考察する。具体的には、性差のとらえ方と、家族、労働、教育、政治とジェンダーとの関連について検討する。 (小林陽子/5回)</p> <p>ジェンダーと暴力、生活とジェンダーについて扱う。ジェンダーと暴力については、デートDV、女性に対する暴力、性の多様性を取り上げる。生活とジェンダーについては、家事労働、介護とジェンダーの関係について考察する。 (新藤慶/5回)</p> <p>子どもの成育過程とジェンダーとの関連を検討する。具体的には、戦後日本の産業転換と子どもの将来展望、在日ブラジル人家庭の労働・生活、日本とスウェーデンの祖父母の育児支援、幼児の絵本体験とジェンダーの関わりを明らかにする。</p>	メディア オムニバス方式
総合系科目	防災・安全教育	<p>おもに学校における事故や災害による被害・被災事例をとりあげ、それらの実態について理解を深め、教職員が身に付けるべき学校安全や防災に関する基礎教養を提供する。 (オムニバス方式/全15回) (新井淑弘/4回)</p> <p>学校安全を取り上げる。具体的には、学校における事故・災害、学校安全の仕組み、セイフティプロモーション、東日本大震災からの教訓等について扱う。 (田中麻里/3回)</p> <p>防災教育を取り上げる。具体的には、小学校における防災教育の事例、国内外での災害経験の伝承、防災教材づくり等について扱う。 (青山雅史/4回)</p> <p>自然災害を取り上げる。具体的には、地域による災害の差異、ハザードマップ、自然災害とダークツーリズム、地域における災害学習等について扱う。 (岩崎博之/4回)</p> <p>気象災害を取り上げる。具体的には、気温・降水変動の実態の説明と豪雨災害や落雷事故から身を守る方法等について扱う。</p>	メディア オムニバス方式
教養基盤科目	学びのリテラシー(1)	<p>最初に大学生に必要なとされる日本語について、講義や演習を通して学ぶ。その後、自ら選んだテーマについて、情報を集め、吟味し、他者と議論することにより様々なものの見方に出会い、さらに得た情報を体系化して自らの考えを確立するという過程を体験する。これらを通じ、論理的思考能力とコミュニケーション能力の重要性を理解し、その能力を向上させることの必要性を認識できるようにする。</p>	
	学びのリテラシー(2)	<p>少人数のゼミ、講義、演習で行い、各教員が専門としている分野を中心に、課題の見つけ方、分析の仕方、発表の方法、文章のまとめ方など、これから4年間ないし6年間にわたる大学での学びにおいて求められる基本的な方法を修得させる。さらに、各学問分野に共通の思考力・判断力・表現力等を養い向上させることを目指す。</p>	
	英語	<p>グローバル化に伴い、英語は、米国や英国の言語という在り方を越えて、世界で最も使われる国際共通語になっている。この共通語を使いこなせるようにするために、リーディング、ライティング、リスニング、スピーキングの4技能に焦点を当て、その能力を伸ばす。各自の能力水準に合った授業を受けることができるようにするために、習熟度別クラス編成で授業を行う。</p>	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
教養基盤科目	スポーツ・健康	生涯を健康に全うするための基本となる健康観と実践力を、広い視点から学ぶ。現代の健康づくりの基盤、特に生活習慣病の蔓延に伴ってマスコミ等で目にするようになった予防医学の第一次予防の視点と生涯スポーツ論をリンクさせた講義を行う。	
	データ・サイエンス	コンピュータやインターネットの仕組みを理解し、情報倫理についての考えを深めるとともに、情報社会において重要となるデータ・サイエンスの初歩について学ぶ。授業は講義に加えてパソコンを使った演習やeラーニングなども行う。これにより、現代社会を生きるために必要とされる一般的かつ基礎的な情報リテラシーを身に付ける。	
教養育成科目	人文科学科目群	生きること、考えること、行動することなどの人間にかかわる諸問題、あるいは人間をとりまく文化現象について、伝統的なまた最先端の学問の立場から理解を深めること、そして人間や文化にかかわる様々な問題点を発見し、それらを解決するための発想や知見を得ることを目指す。	
	社会科学科目群	人間の集団である社会の仕組みや制度やその変動について、あるいは人間集団としての社会にかかわる諸現象について、伝統的なまた最先端の学問の立場から理解を深めること、そして社会にかかわる様々な問題点を発見し、それらを解決するための発想や知見を得ることを目指す。	
	自然科学科目群	現代の生活は、自然科学に基づいた様々な技術によって支えられており、それらは重要な社会・経済基盤にもなっている。また、科学・技術のさらなる高度化と発展は、環境・エネルギーから生命・医療などに至る諸問題の解決の鍵を握っている。そのため、自然科学に関する基本的な理解と基礎的な知識は、現代人にとって欠かせない素養となっており、この科目群では、様々な自然科学分野の基礎的な考え方や概念、その応用などを学び、それらの生活や社会における役割の理解を深める。これまでの物理や化学などの個別科目の学習とは異なり、複合領域的な要素や、自然環境・社会現象、生活との関連も加味され、高校時代に個別的科目の学習経験がない学生が履修しやすいように配慮した講義を行う。	
	健康科学科目群	「スポーツ・健康」の授業と並行して、身体的・精神的・社会的健康の保持・増進に必要となる、より発展的な内容を学ぶ。自らの夢を実現し、満足ゆく生涯を過ごすためには、その人なりの健康が前提となる。そのために必要な知識や技術の一端を専門的な視点から学ぶ。	
	外国語教養科目群	これまで学ぶ機会の少なかった言語について、基礎的な語彙や文法の学修に基づき、その言語で初歩的なコミュニケーションが行えるような運用能力を養成する。同時に言語学習を通じてそれぞれの言語圏の文化についての理解を深める。ドイツ語、フランス語、イタリア語、スペイン語、ポルトガル語、中国語、韓国語の7言語に加え、選択英語、選択ドイツ語を学ぶことができる。	
	総合科目群	現実の世界で起きる問題は、人文・社会・自然といった学問分野ごとに単純に分類されるものではない。世界は文字どおり総合的な在り方をしている。そのような社会や人間の現実を見すえ、問題意識を掘り起こし、多角的な視点から総合的に考える力を養うために、問題の背景や関連領域の広さや深さ、あるいは、様々な学問分野相互の関連を理解する筋道について学ぶ。その上に立って、伝統的な諸学問の成果を踏まえながら、総合的な視野の中に自己の専門的興味を位置付け、社会人としての自覚と実践力を養う学修をする。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
教職基礎科目	教育学理論探究	<p>教育を専門的に学んでいくにあたっての基礎的な知識・理解の涵養を目指し、教育に関する思想／理論を、歴史を通観することによって学ぶ。日本の教育ならびに、日本の教育に大きな影響を与えてきた西洋の教育思想が主な対象となる。(1) 歴史を歴史として学ぶこと(過去の教育の思想／理論を当時の歴史的・文化的背景の下で理解すること)と、(2) 歴史を現在とのつながりを意識しながら学ぶこと(現在の教育に関する思想／理論を、過去の延長上に位置づけながら理解すること)の二つを両立させる。</p> <p>そこで、西洋と日本の教育思想／理論を中心に、人類が教育をどのように考え実践してきたのかを、その歴史的背景と現在の日本の教育との関連を同時に射程に収めながら学んでいく。</p>	メディア
	教職論	<p>教師の日常的職務活動の具体的場面を中心に、学級担任としての具体的な教育行為の体験活動を通して、教育実践者としての教師のリアリティに接近する。幼・小・中・特支学校で学級担任として勤務した経験を踏まえ、学校種(子どもの発達)を超えた教師としての有り様と学校種(子どもの発達)に応じた教師の有り様についても具体的に考えていく。このことを通じて、「心ある教師」に不可欠な資質・能力について理解するとともに、その教育態度について実感することができるようになること、教師としての成長と振り返り(リフレクション)の関係について、体験的に理解することができるようになること、自身の理想とする教師像を具体化することができるようになることを目指す。</p>	メディア
	教育の制度と社会	<p>教育を取り巻く社会的・制度的・経営的な事項を、理論やデータ、事例をもとに理解する。高橋担当回では、教育制度や公教育の目的と課題、さらに学校における危機管理や安全教育について扱う。新藤担当回では、諸外国の教育事情や日本に暮らす外国につながる子供の教育、さらに地域と学校の連携について扱う。これらの学習を通じて、幅広い視野から、学校教育の位置づけと求められる役割について理解し、教育実践につなげられる力量の形成を目指す。</p> <p>(オムニバス方式／全8回) (115 高橋望／4回) 教育の経営と制度をテーマに、教育制度、公教育、学級経営、学校の危機管理等を扱う。 (111 新藤慶／4回) 教育と社会、学校と地域をテーマに、諸外国の教育事情、外国につながる子供の教育、地域と学校の連携などを扱う。</p>	メディア オムニバス方式
	発達と教育の心理学	<p>幼児・児童および生徒の心身の発達及び学習過程の過程を扱う。教育心理学や発達心理学の観点から、学校現場での児童生徒理解や学習支援の在り方を検討する。</p> <p>(オムニバス方式／全8回) (135 大島みずき／4回) 発達の諸理論、および幼児期から青年期までの発達のな特徴について講義を行う。 (36 佐藤浩一・55 山口陽弘／4回・クラス分け) 児童生徒の学習の支援および教育評価について講義を行う。</p>	メディア オムニバス方式

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
教職基礎科目	特別支援教育の実践と事例研究	<p>さまざまな障害等により特別な支援を必要とする幼児、児童及び生徒が学習活動や日常生活において達成感をもちながら学び、生きる力を身に付けていくことができるよう、幼児、児童及び生徒の学習上又は生活上の困難を障害例ごとに理解し、個別の教育的ニーズに対して、他の教員や関係機関と連携しながら組織的に実践していくために必要な知識や支援方法を理解する。</p> <p>(オムニバス方式/全8回) (59 吉野浩之/1回) 病弱のある幼児、児童、生徒について扱う。 (38 霜田浩信/2回) 知的障害、発達障害のある幼児、児童、生徒について扱う。 (31 金澤貴之/1回) 聴覚障害のある幼児、児童、生徒について扱う。 (94 任龍在/1回) 肢体不自由のある幼児、児童、生徒について扱う。 (120 中村保和/2回) 視覚障害、重複障害のある幼児、児童、生徒について扱う。 (101 木村素子/1回) 他機関との連携に基づく教育支援について扱う。</p>	メディア オムニバス方式
	カリキュラム開発とマネジメント	<p>最新の学習指導要領およびそこに至る変遷過程、各学校段階の幼児・児童生徒の発達特性、学校教育への社会的要請、育成すべき資質・能力等をふまえた上で、教育課程上の個々の領域および教科等横断的なカリキュラム開発のあり方を講じる。あわせて、教科等横断的な内容の組織、実施状況の評価に基づく改善、学校内外のリソースの組織といった諸側面をカバーするカリキュラム・マネジメントについて理解を深める。</p>	メディア
	道徳教育論：歴史・理論・実践	<p>道徳とはどのようなものかという根源から説き起こし、価値判断のぶつかり合いの連続である現実をどのように生き抜いていったらよいか、またそれを次の世代の子どもたちにどう伝えていったらよいかを体感しながら考える。このことを通じて、道徳教育の課題と展望について学び、道徳教育に対する自らの考えを深め、説明することができること、道徳教育の授業理論を理解し、実践的な指導力を身につけること、さまざまなかたちの道徳規範や価値基準と自分たちのそれとの間の共通点と相違点に着目することで、自分が（無意識に）拠って立っている基盤を再考できるようになることを目標とする。</p>	メディア
	特別活動論	<p>二名の教員により以下の内容についてオムニバスで行う。 (オムニバス方式/全8回) 教育課程における特別活動の位置づけ・各教科等との関連・歴史 (83 丸山剛史) 特別活動の目標・内容及び構成 (83 丸山剛史) 学校行事の理論と実践 (83 丸山剛史) 学級活動・ホームルーム活動の理論と実践 (57 吉田浩之) 児童会・生徒会活動の理論と実践 (57 吉田浩之) クラブ活動の理論と実践 (57 吉田浩之) 特別活動の指導計画・学習指導案作成の作成 (57 吉田浩之) 特別活動の評価・指導計画の発表 (57 吉田浩之、83 丸山剛史)</p>	メディア オムニバス方式
	教育方法の実践と事例研究	<p>教師の職務内容は多様であるが、その中心となるのは子どもに対する教育を行うことである。本講義では、現代の教育で求められる教育内容や、日本の教育の実態について学ぶ。さらに、自ら授業の計画を作成できるようになることを目指す。これからの社会で子どもたちに求められる資質・能力がどのようなものであるかを理解し、その育成するために必要な教育の方法を理解する。情報機器を活用した効果的な授業や、情報活用能力の育成を視野に入れた適切な教材の作成・活用に関する基礎的な能力を身に付ける。「教育方法」をどのようにして考えるか、現代社会で求められる「学力」と日本の子どもの学力の特徴、「主体的・対話的で深い学び」を目指す：協同的探究学習の提案、学力や授業の成果を測るためにどうするか、授業ビデオの視聴と批判的検討、情報機器の活用、指導計画の作成、作成した計画の相互評価・発表。</p>	メディア

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
教職基礎科目	教育カウンセリングの理論と事例研究	義務教育の学校現場が抱える問題の背景や現状などについて確認するとともに、児童・生徒の心理・社会的な発達を踏まえた具体的な支援・指導の方法について小学校、中学校での事例や実践を中心に検討する。また、単独の援助のみならず、チームでの援助の方法、および外部機関やスクールカウンセラーとの連携、さらには個人のみならず、集団を対象とした支援・指導の方法に関しても学びを深める。	メディア
	生徒指導・進路指導の実践と事例研究	(クラス分け／全8回) (57 吉田浩之／8回) 小・中・高校の教員を目指す上で理解しておくべき、生徒指導・進路指導に関する実践的な理論と方法を学ぶ。生徒指導・進路指導の意義や目的を理解した上で、日常的な指導のあり方や方法を踏まえ、さらに、今日的な生徒指導課題や進路指導課題に対する学級・ホームルーム経営のあり方、家庭や地域、関係機関との連携等の理論と実際を扱っていく。 (95 岩瀧大樹／8回) 小学生から思春期の生徒を対象とし、各々の特性を多面的に踏まえつつ、現在の子どもたちの生き方の問題や、生涯を見すえた働き方などを把握し、学校教育および教員に期待される教育・指導・支援を検討する。特にキャリアデザインの観点から、発達段階に応じて必要とされる、自己理解、社会人基礎力の育成、他者との協力などに関し、「働くこと」と関連させた教育的実践について考察する。	メディア
小学校教科専門	小学校社会	小学校社会科の学習内容について、基礎となる学問諸分野（歴史学・地理学・法学・政治学・社会学・倫理学等）の諸問題を取りあげ、実際の授業展開に必要な基礎教養を提供する。 (オムニバス方式／全15回) (76 小原一馬／3回) 小学校社会科の教育目標、社会科教科書の比較と分析、社会学の視点と方法。 (20 松村啓子・39 関戸明子／3回) 地理分野 (1) さまざまな地図の入手と読図、地理分野 (2) 土地利用の新旧比較、地理分野 (3) 自然環境と産業とのかかわり。 (20 松村啓子・89 青山雅史／1回) 地理分野 (4) 防災教育。 (79 高山慶子・51 藤森健太郎／2回) 歴史分野 (1) 歴史学習の意義、歴史分野 (2) 史料批判・史料解釈。 (12 下田淳・93 今井就稔／2回) 歴史分野 (3) 日本と西洋のであい、歴史分野 (4) 産業革命と近現代文明。 (85 山田有希子・104 小谷英生／2回) 公民分野 (1) 社会と倫理、公民分野 (2) 倫理学と倫理教育 (75 黒川亨子・35 齋藤周／2回) 公民分野 (3) 日本国憲法の基本的な考え方、公民分野 (4) 国民生活における政治の働き。	メディア オムニバス方式

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
小学校教科専門	小学校理科	<p>(概要) 理科の各分野(物理・化学・生物・地学)の基本事項を修得し、小学校理科の学習内容に対する理解を深めることを目標とする。理科の各分野を専門とする教員のオムニバスにより、小学校の理科の学習内容について科学的に概説する。</p> <p>(オムニバス方式・共同(一部)) (37 佐野史/2回) ガイダンス、植物の体のつくりとはたらきを担当。 (21 南伸昌/1回) 振り子としてこの性質を担当。 (88 青木悠樹/2回) 電気の性質、「物質・エネルギー」のまとめを担当。 (117 寺嶋容明/1回) 磁石の性質を担当。 (99 岸岡真也/1回) 物と重さ、金属・水・空気と温度を担当。 (49 日置英彰/2回) 物の溶け方と水溶液の性質、「物質・エネルギー」のまとめを担当。 (23 山田洋一/1回) 燃焼の仕組みを担当。 (108 佐藤綾/1回) 生物の分類を担当。 (3 井口智文/2回) 動物の体のつくりとはたらき、「生命・地球」のまとめを担当。 (27 岩崎博之/2回) 天気の変化、天体の運動を担当。 (142 瀧本家康/2回) 地球の内部と地表面の変動、「生命・地球」のまとめを担当。</p>	メディア オムニバス方式 共同(一部)
	小学校英語	<p>小学校外国語活動と外国語科における諸領域について、基礎知識をオムニバス形式で学び、実践指導力を養う。コミュニケーション活動を随時取り入れ、より効果的な授業展開のための英語運用能力を身に付ける。</p> <p>(オムニバス方式/全15回) (86 山野有紀/2回) 小学校学習指導要領の外国語科と外国語活動の概要と小学校外国語教育の現状と今後を担当。 (2 天沼実/3回) 小学校外国語教育の音声と英語の正書法、学校文法の基礎と展開、日本語からみた英語、英語からみた日本語を担当。 (288 幡山秀明/3回) 小学校外国語教育の英語の歌と英語の絵本、英語圏文化理解の基礎、英語児童文学作品理解の基礎を担当。 (110 柴田知薫子/1回) 母語獲得と第二言語習得を担当。 (129 山田敏幸/1回) 第二言語習得理論を担当。 (97 金田仁秀/1回) 小学校外国語・外国語活動における異文化理解を担当。 (宮本 文/1回) 授業実践に必要な教室英語を担当。 (田中 一嘉/1回) 異文化理解を担当。 (60 渡部孝子/1回) 小中学校の接続と連携を担当。 (143 田村岳充/1回) 授業のまとめと振り返り。</p>	メディア オムニバス方式

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
小学校教科専門	生活	<p>本講義は、生活科の内容に関する科目として、生活科の教育目標に関する理解を深めつつ、生活科の指導内容に関する科学的認識やスキル、内容構成や教材の研究・開発、学習評価に関する能力を実践的に学ぶことを目的としている。具体的には、自己認識、家庭生活、社会認識、自然認識、地域社会、公共施設、動植物の栽培飼育等の内容を取り上げる。</p> <p>(オムニバス方式/全15回・宇都宮大学) (単独・群馬大学)</p> <p>(80 出口明子/4回) 生活科の内容構成と教材の特色、学校内活動、四季の教材、人間関係づくりに関する教材、生活科における評価について担当</p> <p>(83 丸山剛史/2回) 公共物や公共施設に関する教材、家庭生活に関する教材、自己認識に関する教材について担当</p> <p>(71 川島芳昭/2回) 栽培活動・動物飼育に関する教材、学校内の自然に関する教材、遊び・おもちゃづくりに関する教材を担当</p>	宇大オムニバス/群大単独
	小学校音楽A	<p>小学校教科「音楽」を実際に指導するために必要な基礎的能力を、実技等の実践を通して身につける。具体的には、小学校の教員が音楽科の授業を行う際に必要な音楽の基礎として、楽譜の読み方、リズムや拍子をはじめとする簡単な音楽理論、小学校で取り扱う機会の多い楽器の奏法などを学修する。歌唱や器楽、創作を取り入れた様々な音楽活動や鑑賞との関連についても、演習を通して実践的に学修する。</p>	宇大単独/群大共同
	図画工作	<p>小学校図画工作科の内容について、学習指導要領や教科書、発達段階に即した理解を深め、児童の個性や主体性を生かした授業を担うための諸能力を身につけることを目標とする。</p> <p>図画工作の「造形遊び」「絵や立体、工作」「鑑賞」について、教育方法や授業実践の視点、題材の特性、図画工作科の理念などを講義する。また、実技制作と教師役のロールプレイ、模擬実践、教材試作などを取り入れ学修を深める。</p>	
	小学校体育	<p>小学校での体育指導に関する専門的な知識及び技能を学ぶとともに、実践的な指導力を身につけることを目的とする。本授業は小学校学習指導要領で示されている体育の運動領域に関する内容について、いくつかの内容を取り上げ、実践を通じて、それらの特性を理解し、児童に指導する際のポイントなどについて学ぶ。また、指導に際しての安全面での配慮事項などを学ぶことで、授業の実践力を身に付ける。</p>	共同

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
小学校指導法	初等国語科指導法	<p>小学校での国語の授業における学習指導について基礎から学ぶ。国語の授業を構想・実践するための能力を育成する。学習におけることばの役割や学習者の立場からの授業構想、学習指導要領における国語科の構造、学習指導法について学ぶ。</p> <p>(オムニバス方式／全15回)</p> <p>(宇都宮：63 飯田和明／3回、84 森田香緒里／4回) (群馬：121 濱田秀行／7回)</p> <p>子どもの言語能力の発達や学習デザインについて、また「読むこと」の指導について講義する。</p> <p>(宇都宮：84 森田香緒里／7回、176 中島望／1回) (群馬：98 河内昭浩／8回)</p> <p>学習指導要領について、また、「書くこと」の指導、[知識及び技能]の内容(書写を含む)について、情報機器の活用について講義する。</p>	オムニバス方式
	算数科指導法	<p>小学校算数科の目標、内容及び指導方法に関する基礎的な知識を獲得すること、小学校算数科の内容やその指導方法への関心・意欲を高め、授業実践に活かそうとすること、小学校算数科の指導内容を踏まえ、教材のもつ数学的な背景や教育的意義について考察することができること、算数の指導案や授業展開の仕組みなど、算数の指導法の基礎について理解することができることを授業の到達目標とし、学習指導要領に示された小学校算数科の目標と学習内容をはじめ、算数の学習指導の過程、学習評価の考え方など、算数の授業をつくる上での基礎を学ぶとともに、小学校教員として必要な算数教育に関する基本的な資質・能力を習得する。</p>	
	初等社会科指導法	<p>本授業では、小学校社会科の歴史や現状、諸問題を概観したのち、カリキュラム構成の方法や、発問のあり方について実際の授業事例をもとに考える。小学校社会科の指導の基本を学んだのち、学習課題に基づくグループワーク、単元をとおした学習指導案の作成、模擬授業、授業や指導案の検討を行う。基本的には、授業内容に関する配布資料や学習指導要領解説等をもとにした講義形式で進めるが、適宜、小学校社会科教科書や副読本等を用いた学習活動を取り入れる。</p> <p>宇都宮大学では熊田禎介が担当し、群馬大学では、宮崎沙織と中尾敏朗が以下のような分担で担当する。</p> <p>(単独・宇都宮大学) (オムニバス形式／全15回・群馬大学)</p> <p>(126 宮崎沙織／8回)</p> <p>小学校社会科の歴史や現状、教科の目的、カリキュラム構成論などを踏まえ、今後の小学校社会科授業のあり方について検討する。</p> <p>(43 中尾敏朗／7回)</p> <p>教材研究の進め方と教科書の活かし方など、授業設計や指導実践に関わる課題について学習し、その知見を踏まえて学習指導案を作成する。</p>	宇大単独／群大オムニバス方式

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
小学校指導法	初等理科指導法	学習指導要領に基づき、小学校理科の目標と学習内容についての理解を深めるとともに、具体的な授業場面を想定して教材の扱いと指導法を実践的に学習する。講義では、小学校理科の学習内容とその系統性、子どもの自然認識、科学的概念の形成、理科における問題解決、などを取り上げる。教材研究と指導法に関する解説では、粒子・エネルギー・生命・地球の各領域から具体的な教材を取り上げ、体験的に学習する。さらに、学習指導案の作成、模擬授業の実施や振り返りを通して、理科授業づくりのための実践的指導力の基礎を習得できるようにする。	
	生活科指導法	本講義は、生活科の指導法に関する科目として、生活科の教育目標、指導の内容及び方法の特質を理解し、学習指導案を作成することができるよう、授業設計に関する科学的認識及びスキルを学ぶことを目的としている。講義では、模擬授業及びその批判的検討等により、授業実施の実践的な能力を習得させる。その他、生活科における的確な情報機器・教材活用に関しても取り上げ、指導する。 (オムニバス方式／全15回・宇都宮大学) (単独・群馬大学) (80 出口明子／10回) 生活科と小学校低学年の発達／生活科における自己認識、学校と生活、家庭と生活、地域と生活、社会や自然との関わる活動に関する内容、学習指導案の作成等を担当 (83 丸山剛史／4回) 生活課設置の経緯・背景、学習指導要領における目標及び内容、身近な人々と関わる活動、幼児教育との接続を考慮した指導を担当 (71 川島芳昭／1回) 生活科の学習指導案の構成、効果的な教材・情報機器の活用方法を担当	宇大オムニバス/群大単独
	初等家庭科指導法	初等教育における家庭科教育の位置づけ、教育目標、教育内容、領域、学習形態等、家庭科の教科としての特徴(歴史の変遷を含む)を理解し、それに沿った授業設計と学習指導案づくり、指導方法等を学ぶことを目的とする。また、学習指導要領における目標を達成するための学習指導や授業展開、評価等のあり方について検討し、主要な教育理論を踏まえて具体的な授業場面を想定した授業設計の方法を身に付ける。学生自身が主体的に教材研究・教材開発や模擬授業に取り組む中で、情報機器及び教材の効果的な活用方法も身に付くように、授業研究と省察等を通して相互に批判・検討しながら家庭科教育実践の力量を高める。	
	初等音楽科指導法	小学校音楽科の教師として求められる幅広い知識や能力を培い、これらを基盤に学校現場での実践的指導力を養う。具体的には、我が国における音楽教育の歴史から初等教育における音楽科教育の位置づけを理解し、教育目標、教育内容、領域、学習形態等、音楽科の教科としての特徴を理解する。各論としては、歌唱では歌唱指導の方法や変声期について、器楽ではリコーダーや鍵盤ハーモニカを中心とした小学校で取り扱う機会の多い楽器について、音楽づくりでは教材の工夫について、鑑賞では鑑賞のポイント設定や取り扱う楽曲について理解する。その上で、学年ごとに各分野のバランスのとれた指導計画、学習指導案を作成し模擬授業を行う。さらには並行して、音楽科授業を実践するために必要な、歌唱や器楽等の演奏に関する基本的な知識と技能についても学習し、音楽科の授業をつくる力を身に付ける。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
小学校指導法	図画工作科指導法	図画工作科の成り立ちや教科の特性、学習内容について、教科書題材や理論的考察から理解を深め、図画工作科の学習指導における基礎能力と総合的な教育観を培うことを目標とする。 小学校図画工作科に関する基礎的事項について、その現況および今日の諸課題、教科書掲載題材の分析、また、理論と歴史などから抽出される学的諸問題や学習指導法を解説・講義する。		
	初等体育科指導法	小学校での体育授業の学習指導に関する基礎的な知識（目標、内容、方法、評価）を習得するとともに、授業設計および実践的な指導法を身につけることを目的とする。小学校学習指導要領における体育の領域について、いくつかの内容を取り上げ、その特性を踏まえた教材づくり・授業づくりを学ぶことによって、学習指導案を作成する。さらにマイクロティーチング等の実践により、体育の学習指導についての理解を深め、指導法を習得することをめざす。	共同	
	初等英語科指導法	小学校外国語教育に関わる日本の英語教育政策や第二言語習得について理解を深め、多様な指導環境での教育実践という実情を踏まえながら、基本的な英語の指導技術や学習計画の立て方から学習の評価の仕方までの基本的な知識を身に付ける。指導法としては、学習指導要領に示された4技能5領域の力を育てるために、TPR, Communicative Approach, Natural Approach, CLILの理論から小学校英語教育の実践のあり方、具体的な指導技術について学び、考える。また、教科書や教材の分析のための基礎的観点を示し、教材分析を行うための能力を養うための活動も取り入れる。		
中学校「国語」に係る科目	教科	日本語学概説A	日本語の話し言葉について理解を深め、日本語の仕組みを自分自身で分析できるようになることを目的とする。具体的には、1) 感動詞（「ええと」と「あのー」の使い分け）、2) 指示詞（現場指示用法における「これ」、「それ」、「あれ」の使い分けなど）、3) 音声をめぐる様々な問題（音声器官、母音、子音、連濁など）、4) 話し言葉と書き言葉の相違、5) 敬語（尊敬語、謙譲語Ⅰ、謙譲語Ⅱ（丁寧語）、丁寧語、美化語）について、身近な例をあげながら解説していく。	メディア
		日本語学概説B	日本語学の諸分野の知識について体系的に整理して理解し、わかりやすく説明できるようになることを目的とする。基礎的な事項を講義し、教員としての関わり方を考察する。言語や日本語を相対化して捉え直し、文字・語彙・文法・言語生活の分野から基礎的な知識を確認し、体系的な知識として整理しなおすことで、習得過程にある子どもたちの言葉に対して、教員としてどのようにアプローチしていくか、受講者相互の関わり合いを経ながら、自分なりの知見を得る。	メディア
		日本語学講読A	日本語の文法について理解を深め、日本語の仕組みを自分自身で分析できるようになることを目的とする。具体的には、1) 述語の構造、2) 動詞の自他（「クッキーが焼きました」vs. 「クッキーを焼きました」）、3) ヴォイス（「する」vs. 「される」）、4) やりもらい（「あげる」、「くれる」、「もらう」）、5) テンス（「する」vs. 「した」）などのトピックを取り上げる。教える側からの一方通行の授業にならないように、学生にも発表（上記のトピックを扱った論文の紹介など）を行ってもらおう。	
		日本語学講読B	日本語史上のさまざまな言語事象についての知識を得、説明できるようになることを目的とする。また、言語の歴史的な変化に対する知識に基づいて、教員として古典の言葉や日本語の変化にどのように接するか、知見を得る。 日本語学の諸分野について、歴史的な変化を概説する。古代日本語の特徴や現代の日本語に至る過程を知り、両者を連続的に捉え、現代も変化の過程にあることを意識できるようになる。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
中学校「国語」に係る科目	日本文学講読A	中学校・高等学校の国語科で文学的教材（小説・評論・随筆・詩歌）を扱う際に必要な日本近現代文学の基礎的知識と博く深い興味関心を涵養するために、近代日本の代表する作家・作品を、明治初年代から昭和戦前期まで、おおむね刊行年代順にとりあげ、その史的位相と文学的な特質と意義、および今日的な魅力を作品の抜粋の講読を通して講義する。文学の変遷を、時代の社会文化状況と関連させ、通史的・俯瞰的・多角的にとらえる見地を修得させる。	
	日本文学講読B	文学的教材（小説・評論・随筆・詩歌）を扱う際に必要な基礎的技術と態度を養うために、明治から昭和期の文学作品を面白く読むためのアプローチ方法を、作品に即して実践的に指導する。年度毎に「恋愛」「家族」「友情」「宗教」「死生」「都市」「自然災害」「少年少女」「犯罪」「怪奇幻想」「狂気」等々のテーマを設け、夏目漱石・森鷗外・樋口一葉・泉鏡花・志賀直哉・芥川龍之介・谷崎潤一郎・太宰治・井伏鱒二・中島敦・川端康成・太宰治・宮澤賢治等々の近現代日本を代表する作家の優れた作品を取りあげる。	
	日本文学講読C	上代から中世までの我が国の言語文化の流れを概観することを通じ、そこに見て取れる表現の特色を理解する。『古事記・日本書紀』『万葉集』『古今和歌集』『伊勢物語』『大和物語』『土佐日記』『蜻蛉日記』『枕草子』『源氏物語』『今昔物語集・宇治拾遺物語』『新古今和歌集』等、各時代を代表する古典作品を、おおむね成立年代順に取り上げて読解。話型・歌語の変遷・和歌の応酬・歴史的背景と准拠など、多様な視座から考察することで、我が国の言語文化の伝統性への理解を深める。	
	漢文学概説	中国文学、思想、東洋史等の学習の基礎となるべき漢文訓読法を習得する。更に、中国の散文、韻文の成立・展開を理解し、また我が国の漢文学の展開をも理解する。漢文すなわち文言文の語法や文を構成する基本構造について説明する。また、文言文の特徴や漢文訓読に使用される訓読語についても講義する。更に中国の散文・韻文がどのような歴史的背景において成立したか概説する。特に高等学校・中学校の教材として使用される『論語』、『孟子』などの思想書、司馬遷によって記された『史記』等の歴史書、唐代の漢詩、唐宋の文章等については、詳述する。	
	書写法	国語科書写の概要を理論・実践の双方から理解する。書写の基礎的事項を踏まえた上で、硬筆・毛筆の技能を習得する。硬筆では、筆記具の持ち方から平仮名・片仮名の字母、漢字の筆順まで十分に理解する。毛筆では、楷書・行書の基本的な技法を学び、その技能を十分に発揮することができるようになるまで習熟する。日中の名跡を臨書することで、古典が今日の学校現場における文字指導の基盤となっていることを理解し、文字文化の伝承に対する関心も深める。	メディア
指導法	中等国語科指導法A	「主体的・対話的で深い学び」の視点について理解を深め、中等教育段階での国語科授業における学びのデザインについて具体的に考える。学習指導要領における学力観にかかわる議論について検討し、今日的な授業観・学習指導観について理解を深める。また、学習指導要領のキー概念「主体的・対話的で深い学び」の視点と教科国語の内容構成について、具体的な教材の分析・構成と授業事例の検討を通して理解を深める。国語科学習指導の基本的な原理を踏まえた教材づくりと授業構想に必要な知識・技能を身に付ける。	
	中等国語科指導法B	中学校及び高等学校の国語教育において、「主体的・対話的で深い学び」の実現を通して言葉の価値を認識し、言語生活を豊かにしていける方途を、理論的・実践的に考察する。中学校、高等学校の国語科の各領域における教材研究、及び指導法研究について、実際の授業場面を想定しつつ考察を深める。具体的には〔思考力、判断力、表現力等〕のA、B、C各領域における指導事項、及び学習過程の確認を行い、それらをもとに教材研究法の検討に進む。また、〔知識及び技能〕の(1)、(2)、(3)で示される事項についてもその内容を確認し、教材研究法の検討を行う。最終的にはそれらを踏まえて授業実践事例の検討、模擬授業の構想に取り組むことから、実践的な場面を想定した総合的な考察を行う。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
中学校「国語」に係る科目	指導法	中等国語科指導法C	中学校及び高等学校の学習指導要領における「国語」の目標や内容を理解した上で、教材研究に関わる基礎的な知識を修得する。また、授業場面における生徒の言語行動を具体的に想定しながら教材分析を行い、教材開発や学習指導案の構想等、授業設計に必要な基礎技能を修得する。さらに、情報機器を用いて授業場면을様々な観点から分析することで、生徒の思考や言語力の実態に迫り、「主体的、対話的で深い学び」の要件について討議する。また別に、教材の分析や開発、学習目標と学習活動の設定、授業展開の構想、学習指導案の作成など、グループ活動を通して実践的な課題に取り組む。	
	指導法	中等国語科指導法D	中学校及び高等学校学習指導要領における「国語」についての、教材研究・指導法研究に関わる基礎的な方法を理解した上で、教材開発から模擬授業までの活動を行い、具体的な授業設計の方法を修得する。教材研究法・指導法研究法の基礎知識を生かし、教科書教材の分析や国語教材の開発などを行う。グループ毎に、生徒の発達段階や授業における反応等を具体的に想定して学習指導案を作成し、模擬授業を実施する。グループ活動や模擬授業での相互評価等によって授業改善の視点を得るとともに、「主体的、対話的で深い学び」についても実地的に学ぶ。	
中学校「社会」に係る科目	教科	日本史概説	そもそも「日本」史「概説」とはなにか、そしてそれは学校現場での営みとどんな関係があるのか、という基本的な問いについて最初に考える時間を設ける。ついで、日本の原始・古代から近現代までの通史を概説する。ただし、日本史上の個々の出来事を同じ比重でまんべんなく見ていくのではなく、政治上の事件や華々しい文化の表面よりは、根底にある社会や経済のしくみの変化に着目する。特定のテーマの通史を取り上げたり、時代の移行期に着目したりすることで、歴史の大きな流れを捉え、現代社会とのつながりを考えられるような内容とする。また、現行の指導要領・教科書と最近の学界動向を比較対照する。	
		外国史概説B	近世および近代の中国史を中心とする東アジア史を扱う。歴史学の方法論や東洋という概念に関する説明をしたあと、・同時代の日本のあゆみを意識すること、・中国と日本の社会構造の異同を念頭におくこと、・義務教育段階で学習することになる日本史関係の内容を外国史（東アジア史）の視点からさらに掘り下げること、の3つを意識し、日中関係史および中国史を政治、経済、文化など多角的視点から理解することを目指す。	メディア
		人文地理学概論	はじめに「位置と分布」「地域」「人間と自然環境との相互依存関係」「空間的相互依存作用」等の地理学の基礎概念、および地図表現と地域調査の手法について学ぶ。それをふまえて、地理的な見方・考え方を働かせ、系統地理的なアプローチを用いて、人文地理学に関する諸課題を考察する。具体的には、農業と食料、集落立地、通勤圏・商圏の変化、都市の発展と衰退、地域づくり・地域振興のあり方などを取り上げ、問いを立てながら、地理的な見方・考え方を体験的に修得する。また、地形図・主題図の読み方や、児童・生徒が理解可能な地理情報を効果的に提示するための基礎的な力を身につけることを目指す。	
自然地理学概論	地形、気候、植生など多様な構成要素からなる自然環境と人びとの暮らしとの関係について、身近な地域から海外諸地域の具体的事例に即しながら、地形図などの資料も活用しつつ理解を深めていく。地形の成り立ちを知り、地形と自然災害との間には密接な関係性があることを、過去の自然災害発生事例を取り扱いつつ確認していく。地理的な見方を通した土地の履歴を理解することが、地域における防災や減災にも有効であることを確認し、防災教育のあり方などについても考えていく。	メディア		

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
中学校「社会」に係る科目	教科	地誌学概論	中学校社会科の地理的分野における諸地域学習を念頭に、静態地誌・動態地誌などの地誌学習のあり方を検討する。まず、地誌学の基本的な視点を押さえたのち、地誌書の構成と編纂の目的の変化を探る。次に、中学校地理的分野の教科書の記述を題材に、動態地誌的な追求課題の具体例を概観する。最後に、日本と世界の様々な地域について、地域の諸事象や地域的特色を理解し、地理的な課題を考察することによって、地誌学習に必要とされる基礎的な知識と技能を修得する。自然環境・人口・都市と農村・産業・地域間交流・文化など、それぞれ中核となるテーマを設定し、ローカルからグローバルまでマルチ・スケールな視点を活かして地域を捉える方法を身に付けることを目指す。	
		法学概論	法学上の基本問題を検討する。基礎的な問題としては、法とは何か、法規範は他の社会規範とどう異なるのか、ルールは守るべきものなのか、憲法、民法、刑法はそれぞれどのような役割を果たしているのか、憲法学、民法学、刑法学それぞれの考え方にどのような特徴があるのか、といった問題を検討する。このような過程を通して、わが国の法制度や社会事象に関し、本来あるべき姿は何かについて、法的観点から論理的に思考し、法を根拠として自分の意見を表明できるようになることを目的とする。	
		倫理学概論	基礎的な倫理学的思考法の涵養と、倫理学史の理解を主目的とし、それらを現代社会および学校現場における諸問題に応用していく。講義では倫理学者の基本的な議論の紹介に加え、現代的なトピックを取り上げ、グループワークを通じて倫理学的思考法を習得していく。その際、関連論文やニュース記事をその都度参考資料として用いることで、多角的・多面的に物事の価値を吟味する能力を養っていく。	メディア
	指導法	中等社会科指導法A	中学校社会科、高等学校地理歴史科の目標および内容について理解した上で、歴史的分野、日本史領域・世界史領域を中心に、教材研究の方法や授業づくりについて学習する。具体的には、資料調査・読解の方法や学習問題・単元づくりのあり方等を取り上げ、授業事例について検討する。その上で、中学校社会科歴史的分野、地理歴史科に関わる模擬授業を構想・実践し、相互検討を行う。 宇都宮大学では松本敏と熊田禎介が以下のような分担で担当し、群馬大学では中尾敏朗が担当する。 (オムニバス方式／6回・共同／9回・宇都宮大学) (単独・群馬大学) (宇都宮:149 松本敏／3回) 中学校社会科の特質の探究と授業観察、教科書の内容と構成、深い学びの視点による指導方法の工夫 (宇都宮:74 熊田禎介／3回) 歴史的分野および地理歴史科の目標と内容、資料調査・授業構成の方法 (宇都宮:149 松本敏・74 熊田禎介／9回) (共同) 学生自身の教育体験の振り返り、学習問題・単元づくりのあり方、模擬授業と相互検討	宇大オムニバス方式・共同(一部)／群大単独
		中等社会科指導法B	中学校社会科、高等学校地理歴史科の目標および内容について理解した上で、地理的分野、地理領域を中心に、教材研究の方法や授業づくりについて学習する。具体的には、カリキュラム構成論や教授・学習過程、学習指導と評価等を取り上げ、その理論的・実践的動向や授業事例について検討する。その上で、中学校社会科地理的分野、高等学校地理歴史科に関わる模擬授業を構想・実践し、相互検討を行う。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
中学校「社会」に係る科目	指導法	<p>中等社会科指導法C</p> <p>中学校社会科公民科の分野、高等学校公民科の目標および内容について理解するとともに、教材研究の方法や授業づくりの基礎について学習する。具体的には、教科論・内容構成論や授業設計論、学習指導理論等を取り上げ、授業事例について検討する。その上で、中学校社会科公民科の分野、高等学校公民科に関わる模擬授業を構想・実践し、相互検討を行う。</p> <p>宇都宮大学では溜池善裕と熊田禎介が担当し（共同）、群馬大学では宮崎沙織と中尾敏朗が以下のような分担で担当する。</p> <p>（共同・宇都宮大学）（オムニバス方式／全15回・群馬大学）</p> <p>（群馬：126 宮崎沙織／8回） 中高公民教育における教科論と内容構成論、また公民教育の世界的な動向と参加型学習の方法論に関する講義を行う。</p> <p>（群馬：43 中尾敏朗／7回） 中高公民教育における授業設計論と指導実践論に関する講義を行う。また現代的な諸課題に関わる模擬授業を設計・実施し、その相互検討と指導・助言を行う。</p>	宇大共同／群大オムニバス方式
		<p>中等社会科指導法D</p> <p>中学校社会科公民科の分野、高等学校公民科の理論・歴史や諸課題について学んだ上で、教材研究の方法や授業づくりのあり方について学習する。具体的には、中学校・高等学校公民教育の理論・歴史について学ぶとともに、深い学びを実現するための授業設計や指導の難しい単元・教材を使った具体的な授業場面を想定したグループワーク等を行う。その上で、中学校社会科公民科の分野、高等学校公民科に関わる模擬授業を構想・実践し、相互検討を行う。</p> <p>宇都宮大学では松本敏が担当し、群馬大学では宮崎沙織と中尾敏朗が以下のような分担で担当する。</p> <p>（単独・宇都宮大学）（オムニバス形式／全15回・群馬大学）</p> <p>（群馬：126 宮崎沙織／8回） 中高公民教育における教科論と内容構成論、また公民教育の世界的な動向と参加型学習の方法論に関する講義を行う。</p> <p>（群馬：43 中尾敏朗／7回） 中高公民教育における授業設計論と指導実践論に関する講義を行う。また現代的な諸課題に関わる模擬授業を設計・実施し、その相互検討と指導・助言を行う。</p>	宇大単独／群大オムニバス方式
中学校「数学」に係る科目	教科	<p>代数学概論</p> <p>初等整数論について、演習を交えながら講義する。素数の基本的な性質や、合同式に関する基本的な演算について理解し、合同方程式の具体例の計算ができるようになることが目標である。学校教育における算数・数学科の内容の背景にある数学の理論について学習する。全15回の講義のうち、前半の5回において、整数の基本的な性質（除法の定理、ユークリッドの互除法、素因数分解）について学び、中盤の5回において、合同式とオイラー関数について学び、後半の5回において、平方剰余の相互法則について学ぶ。</p>	メディア
		<p>代数学基礎Ⅱ</p> <p>線形代数の発展的な内容について、演習を交えながら講義を行う。ベクトル空間や線形写像の性質および行列の対角化について理解できることが目標である。学校教育における算数・数学科の内容の背景にある数学の理論について学習する。全15回の講義のうち、前半の5回において、ベクトル空間についての基本事項（一次独立性、基底、次元等）について学び、中盤の5回において、線形写像の定義およびその表現行列について学び、後半の5回において、行列の対角化とその応用について学ぶ。</p>	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
中学校「数学」に係る科目	教科	幾何学概論	集合論の基礎的事項を整理した後、数学で用いられる論理がどのような体系であるのか、「命題論理」と「述語論理」に分けて整理する。ここで、数学的記述に使われる記号の意味と扱い方を習得する。続いて、まったく別の集合間に何らかの関係を定める概念である「写像」について学ぶ。さらに、集合の元を分類すること、そのための「同値関係」という概念を解説する。最後に、無限集合の「濃度」という考え方を示し、「無限」とは何か、どのように捉えうるものなのかを学ぶ。	メディア
		幾何学基礎 I	平面上または空間内の直線、および空間内の平面について、それらをベクトル表示することの意味への理解を深める。そのために用いられる線形代数学で学んだ知識、特に内積空間における正規直交基底の概念について整理する。さらに、ユークリッド幾何の根本概念である「ユークリッド合同変換」について論ずる。ユークリッド合同変換が行列表示されることを示し、それによって、ユークリッド合同変換全体の集合が群構造を持つこと、その生成系、さらに変換どうしの関係について明らかにしていく。	
		幾何学基礎 II	ユークリッド空間が自然に持つ「ユークリッド距離」が、ユークリッド空間の「位相」構造を与えていることを理解する。さらに、このことを踏まえて、一般の集合に「距離」の概念を与えること、および「位相」の概念を与えることの意味を理解することを目標とする。まずは、ユークリッド距離のもつ基本性質について整理した後、ユークリッド距離によって空間内の各点に「近傍」が定まり、「開集合」と呼ばれる特別な部分集合が定義されることを見る。この「開集合」の概念が「位相」の概念に直接的に関わることを解説する。講義の後半で、一般に距離空間、位相空間の定義とその性質を具体的な例を観察しながら学ぶ。	
		解析学基礎 I	この授業では、中学校・高等学校の「数学」免許を取得するための必修科目である。主に1変数の関数の積分法と多変数関数の微分法(偏微分)についての講義と演習を通し、積分や偏微分の計算力を養い、解析学の基礎を身につける。具体的には、積分や広義積分の意味が理解するとともに、積分の計算ができること、具体的な図形の面積が計算できること、多変数関数についての偏微分やテーラーの定理を関数の解析に応用できることを到達目標とする。	メディア
		解析学基礎 II	この授業では、まず多変数関数の積分法を学び、具体的な立体の体積を計算する。次に、級数や基本的な微分方程式についての講義と演習を通し、解析学の基本的な考え方と計算力を身につける。具体的には、重積分や線積分の意味がわかり重積分の計算ができること、具体的な図形の体積や表面積が計算できること、級数について基礎的な計算ができること、基本的な微分方程式を解くことができることを到達目標とする。	
		確率論	古典的確率論から初めてコルモゴロフによる公理的に構成された確率論の考え方を学ぶことを目標とする。確率論を公理的に構成し、離散的な内容だけでなく連続的な内容の確率論まで扱えるようにする。また、確率分布関数と確率密度関数を理解し、平均、分散の意味を理解できるようにする。確率変数の収束に触れ、大数の法則、中心極限定理を扱い、最後に、ランダムウォークについて述べる。講義を中心に、演習として、毎回、レポートを出し、中間試験と定期試験を実施する。	
		情報基礎	この授業では、情報処理の基礎知識と、基礎的な数学の知識を用いた簡単なプログラムの仕方について学ぶ。授業は講義とパソコンを用いた実習によって行われる。パソコンがどのような部品で構成されているか?それらはどのような機能を担っているか?インターネットはどのようにして実現されているのか?パソコンにはどのような言語を使って命令するのか?プログラミングとは何か?どのようにしてプログラミングするのか?といった情報処理の基礎を理解することが、この授業の目標である。授業は、前半に情報処理やプログラミングに関する基礎知識についての講義を行い、後半は実際にプログラミングの実習を行うことによって進められる。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
中学校「数学」に係る科目	指導法	中等数学科指導法A	本授業の到達目標は、中学校数学科の目標、内容（主に、数と式、図形）及び指導方法に関する基礎的な知識を獲得すること、中学校数学科の内容やその指導方法への関心・意欲を高め、授業実践に活かそうとすること、中学校数学科の指導内容を踏まえ、教材のもつ数学的背景や教育的意義について考察することができること、数学の指導案や授業展開の仕組みなど、数学の指導法の基礎について理解することができること、である。目標達成に向けて、学習指導要領に示された中学校数学科の目標と学習内容（主に、数と式、図形）をはじめ、数学の学習指導の過程、学習評価の考え方など、数学の授業をつくる上での基礎を学ぶとともに、数学科教員に必要な資質・能力を習得する。授業では、附属中学校の教員を实地指導講師として迎え、「主体的・対話的で深い学び」の実現のための指導法について内容を盛り込んでいる。	
		中等数学科指導法B	中学校数学科の目標、内容（主に、関数、データの活用）及び指導方法に関する基礎的な知識を獲得すること、中学校数学科の内容やその指導方法への関心・意欲を高め、授業実践に活かそうとすること、中学校数学科の指導内容を踏まえ、教材のもつ数学的背景や教育的意義について考察することができること、数学の指導案や授業展開の仕組みなど、数学の指導法の基礎について理解することができることを授業の到達目標とし、学習指導要領に示された中学校数学科の目標と学習内容（主に、関数、データの活用）をはじめ、数学の学習指導の過程、学習評価の考え方など、数学の授業をつくる上での基礎を学ぶとともに、数学科教員として必要な基本的な資質・能力を習得する。	
		中等数学科指導法C	本授業の到達目標は、算数・数学の学習指導を通して育成を目指す資質・能力について理解を深めること、算数・数学の学習指導上の諸問題を踏まえて、教材の工夫、授業展開や学習活動の工夫、指導や評価の工夫について理解を深めること、これらの活動を通して、算数・数学教育の授業の在り方についての理解を深めることである。本授業では、全国学力・学習状況調査の問題を使った授業をつくり、模擬授業を協働で行う。模擬授業へ向けて、各グループの指導案について協議する。そして、模擬授業の指導案を作成する過程をリフレクションして、算数・数学の授業の在り方について考察する。本授業では、内地留学中の現職教員も参加し、一緒に議論することで、現職教員の視点から算数・数学の授業について考える機会を設定している。	
		中等数学科指導法D	「生涯学び続けることのできる教員」の基本的な資質・能力として、数学の教材を解釈したり、設計したり、具体化したりする数学における教材研究プロセスを遂行する資質・能力を獲得することができることを授業の到達目標とし、数学教育における教材研究の入門として、中学校数学科の教科書の問題を「現実の世界」と「数学の世界」およびその行き来の視点から捉え、指導目的に応じて、その問題をアレンジし、模擬授業を通じて教材の評価・改善を行う。	
中学校「理科」に係る科目	教科	物理学	電気と磁気に関する物理学であり、電磁と時期に関する基本的な性質と、身近な活用に関する講義を行う。電磁気学の基礎を理解し、電気、磁気に関連する分野の指導ができるようになることを目的とする。身近な活用を例にとり電磁気学の基本的な概念を理解する。全15回の授業を大きく3つに区分し、第1区分では電気に関する学習、第2区分では磁気に関する学習、第3区分では電気と磁気の相互作用に関して学習する。各区分の区切り、学期末に演習の時間を設けることで、現象を数式による記述ができる力を養う。	メディア

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
中学校「理科」に係る科目	教科	基礎物理学実験	<p>物理学の基礎的な実験（コンピュータの活用を含む）を行い、基本的な実験機器の原理や取り扱いに習熟し、あわせて実験上の留意点、測定値の処理方法を学ぶ。さらに、実験とレポート作成を通して、理科教員としての基礎的資質を育成する。宇都宮大学は南伸昌と瀧本家康が共同で担当し、群馬大学は寺嶋容明と青木悠樹が以下のように分担で担当する。</p> <p>（共同・宇都宮大学）（オムニバス方式／全15回・群馬大学）</p> <p>（117 寺嶋容明／7回） レポート作成、抵抗の測定などを担当する。</p> <p>（88 青木悠樹／8回） テスターによる様々な量の測定、電熱線による熱の仕事当量の測定などを担当する。</p>	宇大共同／群大オムニバス
		化学	<p>中学校、高等学校の単元や実生活における化学の関わりを意識しながら無機化学、分析化学、有機化学、高分子化学に関する各論について基本的事項を概説する。</p> <p>（オムニバス方式／全15回）</p> <p>（99 岸岡真也／7回） 無機・分析化学の専門担当教員としての専門性に基づき、素材の専門科学としての内容の解説に加え、実社会との関連、科学教育としての意味等について解説する。</p> <p>（49 日置英彰／8回） 有機・高分子化学の専門担当教員としての専門性に基づき、素材の専門科学としての内容の解説に加え、実社会との関連、科学教育としての意味等について解説する。</p>	メディアオムニバス方式
		基礎化学実験	<p>中学校、高等学校理科で実施される化学分野の実験に関連づけながら、化学実験の基礎を修得する。具体的には状態変化や化学変化、滴定、有機化合物に関する基本的な化学実験の内容を扱い、各実験についての理解を深める。また、レポートの書き方を学ぶことにより、実験を自身の指導にフィードバックする術を学ぶ。宇都宮大学では山田洋一が担当し、群馬大学では岸岡真也と日置英彰が以下のような分担で担当する。（単独・宇都宮大学）（オムニバス方式／全15回）</p> <p>（99 岸岡真也／8回） 実験の基本操作、理科実験の安全指針、中和実験などを担当する。</p> <p>（49 日置英彰／7回） 有機化合物に関する実験、併せて化学実験においてネットワーク配信教材の活用方法などについても担当する。</p>	宇大単独／群大オムニバス
		生物科学	<p>（概要）小・中・高で生物分野の内容を教える上で知らなくてはならない基本事項として、高等学校の「生物基礎」、「生物」で学ぶ内容を正しく理解し、説明できることを目標とする。高等学校の「生物基礎」、「生物」で学ぶ基本事項のうち、発生学、免疫学、生理学を取り上げ、科学的に掘り下げた解説を加える。</p> <p>（オムニバス方式／全15回）</p> <p>（佐藤 綾／2回） 無性生殖と有性生殖、動物の配偶子形成と受精に関する講義を担当する。</p> <p>（佐野 史／4回） 植物の配偶子形成と受精、種子形成、免疫を含む生体防御、植物の環境応答に関する講義を担当する。</p> <p>（井口 智文／9回） 動物の初期発生、形態形成、消化器等の臓器のはたらき、内分泌系、神経系に関する講義を担当する。</p>	メディアオムニバス方式

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
中学校「理科」に係る科目	教科	基礎生物学実験	<p>基礎的な生物学実験を行い、小・中・高の理科に含まれる生物分野の実験・観察の基本的な方法や結果のまとめ方、考察のしかたを習得し、子どもに自ら指導できるようになることを目標とする。さまざまな動・植物の観察、解剖、実験を行って方法を習得するとともに、毎回レポートを作成することで結果のまとめ方や考察のしかたを学ぶ。また、動・植物の同定やデータ整理、レポート作成などはコンピュータを活用して行う。</p> <p>宇都宮大学では井口智文が担当し、群馬大外では、佐藤綾と佐野史が以下のような分担で担当する。</p> <p>(宇都宮大学：単独) (群馬大学：オムニバス方式／全15回)</p> <p>(群馬：108 佐藤綾／8回) 動物を材料とする実験を担当する。</p> <p>(群馬：37 佐野史／7回) 植物を材料とする実験を担当する。</p>	宇大単独／群大オムニバス
		地球科学	<p>中学理科の地学分野で扱う基本的な現象の実態を知り、それらの現象が起きる過程と機構を学ぶことで、地学分野の内容の理解を深めることを目標とする。授業は気象・地震・天文の3つの分野からテーマからなる。気象分野に関しては、天気とその変化の範囲から海陸風や低気圧に伴う風が吹く過程と機構を力と運動の視点から説明する。地震分野に関しては、近年の地震災害の特徴にも触れながら、地震や地震波の特徴、及び、地震波の解析から解明された地球の内部構造について説明する。天体の公転と自転に注目して、1)地球の季節変化 2)月の自転周期と朔望月(月の満欠の周期)が一致しない理由 3)地球潮汐と海洋潮汐 4)金星の満欠を天動説・地動説の歴史を説明する。</p>	メディア
		基礎地学実験	<p>中学理科に関連した地学分野の実験・観察に必要な基本的な技術を習得し、それに関わる内容の理解を深め、実験・観察結果をレポートにまとめることを目標とする。実験は固体地球、地質・岩石、気象、天文分野の内容で行う。実験やデータ解析においては、ICT機器も活用することで、従来の実験手法とともに新しい実験手法についても修得できるようにする。実験を通じて、理科教員としての基礎的資質を育成する。高等学校での学習内容とも関連する実験も取り上げ、実験を通して中等教育における地学分野の理解が深まるようにする。宇都宮大学では瀧本家康が担当し、群馬大学では、岩崎 博之が担当する。</p>	
	指導法	中等理科指導法A	<p>学習指導要領に基づき、中学校及び高等学校の理科の目標と学習内容についての理解を深める。具体的な授業場面を想定し、理科教材の扱いと指導法を実践的に学習する。講義では、中学校理科および高等学校理科の目標、理科の教育課程編成、中学校理科及び高等学校理科の学習内容とその系統性、科学的概念の形成などを取り上げる。また、具体的な学習指導案作成を通して、指導上の留意点や発展的な学習内容の取り扱いなどを理解する。さらに模擬授業の実施とその意義の考察および振り返りを通して、具体的な授業場面を想定した授業を設計する方法を習得できるようにする。</p>	
中等理科指導法B		<p>中学校及び高等学校理科の学習指導要領に基づき、目標や学習内容についての理解を深める。理科教育の原理、教材研究や授業を行うに当たっての心得や、具体的な指導上の留意事項等を習得する。観察や実験の観点の指導や、薬品使用等における安全な実験指導についても取り扱う。受講者自身による教材研究や学習指導案の作成を行い、模擬授業等を通して受講生同士の対話的な活動も取り入れる。また講義全体を通して、理科における言語活動や科学的コミュニケーション、対話的で深い学び等の現代的課題を考慮した理科授業づくりの基礎を習得できるよう進める。</p>		

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
中学校「理科」に係る科目	指導法	中等理科指導法C	現代的な教育の課題を踏まえ、考え方として示された思考の枠組である探究の過程を、その各過程の関係を構築する観点からとらえ、これを資質・能力を育成する方法として検討する。さらに、第一分野および第二分野の具体的な授業場面をそれぞれ取りあげて、学習指導案を作成して模擬授業を実施するとともに、各過程の関係を構築する観点や指導の効果という観点で模擬授業を振り返ることで、実践的な指導力を身につける。	宇大共同／群大単独
		中等理科指導法D	新しい中学校学習指導要領理科の理念を踏まえた実践の動向から、見方・考え方を働かせるための探究の過程の重点化の理解を深める。また、中学校・高等学校理科における教材の位置付けや特質、教材研究の方法と学習指導の関係を理解し授業実践力の修得を目標とする。具体的には、受講者による主体的・対話的で深い学びになるよう、模擬授業の構想・実施やその評価としての振り返りを受講者同士で行い協議する。また、協議の結果を踏まえて改善した授業提案を受講者が行う一連の学びによって、理科教師としての総合的・実践的指導力を身に付ける。 (宇都宮大学：オムニバス方式／全15回) (群馬大学：単独) (23山田洋一／4回) 化学分野を担当。 (3 井口智文／5回) 生物分野を担当。 (142 瀧本家康／6回) 物理・地学分野を担当。	宇大オムニバス／群大単独
中学校「音楽」に係る科目	教科	ソルフェージュ	音楽の基礎である初見視唱、初見視奏、リズム、スコアリーディング、コード奏など、ソルフェージュの実践を通じて、教育現場での実践能力や専門的な勉強をする上での基本的な能力を養う。初めて見た楽譜を準備なしで歌うことができる。(初見視唱) 初めて見た楽譜を準備なしでピアノで演奏することができる。(初見視奏) 楽譜に書かれたリズムを正確に再現できる。演奏された音を聴き取り楽譜に記すことができる。ピアノを使って和声の課題を実施することができる。	
		声楽A	声楽に必要な演奏基礎技能を習得するため、グルーブレッスンを中心とした実技指導を行う。レッスンでは、各自が自分の声の特徴を把握し、改善すべき課題を認識することをふまえ、声楽の技能を構成する姿勢・呼吸・発音・共鳴などを含めた発声全体について理解を深めながら、具体的な楽曲を通して基礎技能の能力を高める。基礎技能の一つとして、各母音の自然な発声に重点を置いて響きのある安定した発声方法の獲得を目指す。個人の声楽基礎能力を伸ばし、それを基本に合唱における表現能力も身に付けます。また、日本の伝統的な声楽に触れ、教員として音楽科の学習指導に必要な基礎を学ぶ機会を持つ。実地指導講師担当授業は講師と日程調整の上実施する。	
		声楽B	声楽Aの内容のうち、特に声楽発声と歌唱表現を中心に学習を発展させる。声楽Aと同様に、演奏基礎技能を習得し伸長するため、グルーブレッスンを中心とした実技指導を行う。レッスンでは、各自が自分の声の特徴を把握し、改善すべき課題を認識することをふまえ、声楽の技能を構成する姿勢・呼吸・発音・共鳴などを含めた発声全体について理解を深めながら、具体的な楽曲を通して基礎技能の能力をさらに高める。また、声楽演奏に関する基本について実技指導を行う。	
		日本の伝統的な歌唱	日本音楽の特徴を把握しつつ、箏曲について講義と実技実習、鑑賞を交えながらより理解を深めていく。箏の実技と箏歌の歌唱法実技を同時進行で習得していく。 音楽教育において、まず日本の伝統音楽の歴史や芸術的価値を理解し、幅広い教養を持つことは大変重要である。音楽教育の実践的指導者として力を養うことをねらいとして、日本音楽の伝統的な歌唱法を身につけながら箏曲についての知識を深める。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
中学校「音楽」に係る科目	教科	器楽A	<p>器楽実技を通じて表現、指導を行う上での基礎的・基本的な知識・技能を身につけることを目標とする。 (宇都宮大学：単独) (群馬大学：オムニバス方式/全16回)</p> <p>(宇都宮：134 平井李枝/8回) (群馬：53 三國正樹/8回) 第1回～第8回は、「伴奏法」とし、伴奏全般についての理解を深めるとともに、学校音楽で取り上げる歌唱・合唱教材を中心としたピアノ伴奏、旋律への伴奏づけ(コードネームによるものを含む)の実技演習をおこなう。</p> <p>(宇都宮：134 平井李枝/8回) (群馬：112 菅生千穂/8回) 第9回～第16回は、「和楽器演習」とし、中学校の音楽教員に必要な器楽の学習においての和楽器(箏など)の基礎的実践的能力を養うため、実技を中心に行う。実践的な教材研究にも取り組む。</p>	宇大単独/群大オムニバス
		器楽B	<p>音楽の表現、指導を行う上で必要な基礎的・基本的な知識・技能を身につける。リコーダー、撥弦楽器(ギター、ウクレレ等)、和楽器(篠笛、箏、三味線)等の器楽実技の実践を通して器楽を伴う音楽活動について理解を深め、基礎的実践力を養う。和楽器実技を通して、日本音楽の美意識に触れ、我が国の伝統的な音楽文化について理解を深める。さらに楽曲演習を取り入れ、レパートリーの拡充にも努める。</p>	
		合奏I	<p>合奏における基本的な事柄を、様々な形態のアンサンブルを通じて学ぶ。オーケストラ、吹奏楽の基礎知識、呼吸法等を含めた楽器の演奏技術、合奏上の音色の調和、響きの作り方を、基礎合奏や楽曲演奏を通して、楽器学的見地、演奏学的観点から学ぶ。さらにそれらの過程を重視しながら、指揮者と奏者の関係を体感し、指導法を学ぶ。また、楽器の特性を活かし、アンサンブル技能を高め、コミュニケーション能力を身につけていく。</p>	
		合奏II	<p>合奏における基本的な事柄を、様々な形態のアンサンブルを通じて学ぶ。オーケストラ、吹奏楽の基礎知識、呼吸法等を含めた楽器の演奏技術、合奏上の音色の調和、響きの作り方を、基礎合奏や楽曲演奏を通して、楽器学的見地、演奏学的観点から学ぶ。さらにそれらの過程を重視しながら、指揮者と奏者の関係を体感し、指導法を学ぶ。また、楽器の特性を活かし、アンサンブル技能を高め、コミュニケーション能力を身につけていく。</p>	
		指揮法	<p>指揮法の基本と、音楽作りの関係を実践的に学び、楽曲を用いて指導する際に必要な基本的知識、基礎的な技術・表現力の習得を内容とする。指揮者として音楽を作り上げるという実践の中で、演奏者と呼吸を合わせることや、人間的にコミュニケーションをとることを目的とする。「叩き」「平均運動」「しゃくい」に大別される指揮の基礎的スキルを習得し、楽曲演習を通して様々な拍子、様式、編成における実践演習を中心に行う。</p>	
		作曲技法	<p>音楽形式、非和声音、和音、調性、転調、主題展開等の作曲技法について実際の楽曲を用いて講義し、指定した音楽形式によるピアノ曲、またはピアノを含む二重奏作品を作曲します。講義では様々な作曲技法により楽曲が形成させている楽曲構造を学習し、演習を行うことによって、自ら作曲を行う際に作曲技法を用いるための素養を身につける。作曲は個人レッスン形式で行い、完成度の高い作品制作に繋げてゆき、授業の最終週には実際の演奏を全員で聴き合い、講評し合うことで作曲学習を通して身についた音楽に対する深い洞察力を生かす。また、学校現場で必要と考えられる様々な楽器の編成の編曲を行う。</p>	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
中学校「音楽」に係る科目	教科 音楽基礎実践	音楽理論の基礎である音、音程、音階、調、和音、楽語等楽典についての講義、課題の実施を行うことを通して、実際の楽曲における演奏、楽譜にある情報を元に音楽を解釈をする上での基礎的な能力を養い、さらに楽典についての問題作成、創作における記譜法、楽曲分析、楽曲研究、教材研究など、楽典で学んだ諸要素が様々な場面に置いて能動的な音楽への取り組みへと発展させられるように具体的に課題として提示し、実施する。	メディア
	指導法 中等音楽科指導法B	中等科音楽科の目的や教育内容の理解と、指導者として必要な歌唱や器楽の基礎技術の習得を目指す。具体的には、中学校及び高校における音楽科教育の位置づけ、教育目標、教育内容、領域、評価の方法、学習形態等、音楽科の教科としての特徴を理解し、実際の授業例を手がかりに学習指導案を作成し授業を行う。また、自ら声を出して歌う、楽器に触れる、音楽を聴く活動を通して様々な音楽に親しみ、表現する楽しさを味わうことで、音楽科を担当する者としての素質を高める。教科書のみならず幅広い分野での音楽の教材研究を行いながら歌唱、器楽、鑑賞、創作の領域ごとに音楽科の授業をつくる力を身に付けていく。	対面
	指導法 中等音楽科指導法D	中等科音楽教育の基礎的理念を踏まえ、学習指導要領の目標や指導内容等を理解し、より充実した授業実践に向けて計画することができるよう取り組む。具体的な内容としては、中等科音楽教育において幅広く且つ奥深い知識や技能を習得し、学習指導案を作成して授業を実践する。実際は、事前に与えられたテーマから各自が選択し、そのテーマによる模擬授業の実践を行う。振り返り等を通して議論を行い、より望ましい指導法を考察する。同時に、中等科音楽教師に期待される高度な知識、技能を習得し、それを生かす実践的指導力の到達を目指す。	対面
中学校「美術」に係る科目	教科 表現基礎〔絵画〕	美術における表現実践の諸相ならびに社会における機能を知ることを通して、絵画表現（映像メディア表現を含む）の特性を理解する。 前半では、表現行為の意義を社会と美術の両面から考え、特に美術による表現実践の展開を理解する。後半では、視覚の基本的特性を踏まえ絵画表現における「見方」を確認し、技法や構図の基本について解説する。。1回目はオリエンテーション、2-7回は喜多村担当、8回は株田と喜多村が担当、9-14回は株田担当、15回は株田と喜多村が担当。(70 株田昌彦)(100 喜多村徹雄)	メディア オムニバス方式
	教科 絵画A	『表現基礎〔絵画〕』の内容を基に鉛筆デッサンや木炭デッサンを通して表現の実際理解を深める。素材による表現効果の違いを認識し、空間感や質感表現や明暗法、線の強弱、動勢、プロポーションの把握等の技能を身に付ける。 様々な対象を題材として、前半では鉛筆、後半では木炭を用いたデッサンを課す。それにより基礎的描画能力の向上を図り、それぞれの素材特性の違いにも目を向けさせる。また、受講生には自分の制作した作品について解説を課し、絵画に関するリテラシーの強化も図る。	
	教科 絵画B	絵画の構成要素ならびに描画材の違いにおける表現の特性を体験的に学修し、理解する。それらが個別の表現と密接に結びついていることを理解する。 『表現基礎〔絵画〕』の内容を基に、透明水彩やアクリル絵の具を用いて課題制作することを通して、支持体や描画材の特性（透明性、可塑性）による絵画表現手法の違いを体験的に学修する。主題と素材選択の観点を養う。また、受講生には自分の制作した作品について解説を課し、絵画に関するリテラシーの強化も図る。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
中学校「美術」に係る科目	教科	表現基礎〔彫刻〕	立体造形としての彫刻の理念と基礎的な知識について身につけると共に、図画工作科・美術科教育における「立体」「彫塑」など立体造形の意義と価値について考察し理解できるようにする。そのために本授業においては、「彫刻とは何か」について、講義の他、各自の課題に基づく作家や作品についての調査・美術館等における鑑賞活動・身近な材料を用いた簡単な彫刻制作などの造形思考を通して検討していく。具体的には、塑造・彫造、具象・抽象などの彫刻表現の指向性について理解し、一般的に彫刻ととらえられているような素朴な彫刻観に基づく作品群だけでなく、多様な展開を見せている現代彫刻にも多くふれられるようにしていく。これらを通して、空間表現～立体造形である彫刻の可能性についての視野を広げること重要な課題である。	メディア
		彫刻A	立体造形としての彫刻の理念と基礎的な知識及び技能を、実制作（主に塑造）を通して身につけると共に、美術科教育における彫刻の意義と価値について考察できるようにする。 具象と抽象という表現の指向性について実制作を通して体験的に学修する。塑造を中心課題とし石膏取り等の技能も身につける。また彫刻作品についての批評を小レポートとして課し発表会をもつ。これらの課題を通し、美術科教育への可能性と意義について考察する。	
		彫刻B	立体造形としての彫刻の理念と基礎的な知識及び技能を、実制作（主に彫造）を通して身につけると共に、美術科教育における彫刻の意義と価値について考察できるようにする。 実材を用いた彫造を彫刻制作を通し体験的に学修し、基礎的技能を身につけるとともに、彫刻表現の意味と可能性について検証する。また彫刻作品についての批評を小レポートとして課し発表会をもつ。これらの課題を通し美術科教育への可能性と意義について考察する。	
		デザインA	本授業では平面デザイン（グラフィック・デザイン）の実習課題を行うことで、デザイン分野の教科内容における題材開発や指導力向上をテーマとする。そして、平面デザインにおける基本的なプロセスや、生活の視点で造形を捉える判断力、デザイン的思考によって発想や構想力、デザインの意図を適切に伝えるためのプレゼンテーション力などの能力育成を目標とする。 教員が設定する平面デザイン（グラフィック・デザイン）の課題（内容が異なる2課題）を授業回ごとに段階を追って行う。課題制作においては、各段階でポートフォリオにまとめてもらい、それらをもとにした全体や個人指導によって展開する。	
		デザインB	主に立体（プロダクト）デザイン及び、空間（建築・環境）デザインの実技課題を行うことで、デザイン分野の教科内容における題材開発や指導力向上をテーマとする。そして、立体、空間デザインにおける基本的な過程や、生活の視点で造形を捉える判断力、デザイン的思考によって発想や構想力、デザインの意図を適切に伝えるためのプレゼンテーション力などの能力育成を目標とする。 教員が設定する立体（プロダクト）デザイン及び、空間（建築・環境）デザインの課題（内容が異なる2課題）を授業回ごとに段階を追って行う。課題制作においては、各段階でポートフォリオにまとめてもらい、それらをもとにした全体や個人指導によって展開する。	
		美術理論	美術を理論的に探究するための専門領域における基礎的な事項を学ぶ。芸術学、美術史、美学などの基礎を包括的に理解し、美術を客観的に整理分析できる学術的な姿勢を養う。多様な学的視座を講義・解説・議論・ワークショップ的な手法などから取り上げ、幅広く美術の特質を考察する。テーマごとのレポート課題や小論文および必要に応じ実践活動などの調査を取り入れる。1回目はオリエンテーションで本田・市川担当、2-8回は本田担当、9-15回は市川担当（81 本田悟郎）(92 市川寛也)	メディア オムニバス方式

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
中学校「美術」に係る科目	教科	美術実地調査演習 作品作家研究など、美術に関する調査活動を実地に演習することを通し、美術が作品単体で述べられるものではなく、その時代・地域・社会との関係の中で成立していることを捉えると共に、実地調査、資料検討などの研究の具体的なスキルを身につける。 テーマ設定、調査方法の検討をふまえ、個人またはグループで、作品或いは作家などについて文献等の資料調査及び実地調査をすると共に、その結果をまとめ報告会をもつ。	
	指導法	中等美術科指導法A (1) 中学校美術科教育の歴史を通して、教科の理念・目的や主要な学習理論を学修する。 (2) 中学校美術科教育の学習指導要領で示される教科目標や内容を理解し、育成を目指す資質・能力を「主体的・対話的で深い学び」によって学修する。 (3) 中学校美術科教育の基礎的な学習指導理論を理解し、具体的な授業場面を想定した授業設計を行う方法や評価方法を身に付ける。 (4) 授業は、必要に応じ反転授業を活用し、講義の他、ワークショップ型学習を行う。また、適宜、実践活動から課題を導き教育実践のための諸能力を身に付ける。	
		中等美術科指導法B 学習指導要領における美術科のねらい及び内容について背景となる美術領域と関連させて理解を深める。学生一人ひとりの模擬授業（マイクロティーチング）を通じて、美術教師としての立居振る舞いに対する意識を高めると共に、様々な学習指導理論を踏まえて具体的な授業場面を想定した授業設計を行う方法を身につける。模擬授業においては、実際の授業研究会と同様にITCを活用した記録の可視化等を重視し、協同的な省察に至るプロセスも同時に学びつつ教育現場での実践力を養う。	
		中等美術科指導法C (1) 中学校美術科教育をつくる理念・目的及び学習理論を学修する。 (2) 情報メディア時代の新しい中学校美術科教育の授業設計を理解し、教科書題材の分析・考察などを踏まえ、実践を通して教材・題材開発を行い検証する。 (3) コンピュータ等の映像メディア機器の活用方法を学び、情報メディアリテラシーのスキルを身につける。 (4) コミュニケーション能力を養う交流実践やメディアの活用から学びを深める。	
		中等美術科指導法D 学習指導要領における美術科のねらい及び内容について背景となる美術を中心とした芸術領域と関連させて理解を深める。中学生の実態や現状等を踏まえた上で、学生一人ひとりの興味関心に基づく芸術領域のリーサーチをもとに、生活や社会と接続する美術科のあり方について協議検討を重ねると共に、様々な学習指導理論を踏まえて具体的な授業場面を想定した授業設計を行い、日常的視点から教材研究を深めていく思考を育む。	
中学校「保健体育」に係る科目	教科	陸上競技 陸上競技の歴史、特性に加え、陸上競技の技能の向上に関わる専門的知識について実践を通して理解する。また、小学校の陸上運動および中学校、高等学校の陸上競技の授業における指導法についても学習する。その際には、「陸上競技」が得意な児童生徒の能力をもっと伸ばしたり、不得意な児童生徒には苦手意識を減らして積極的に取り組めるような指導方法を学び、体育やスポーツの指導者としての素養を高めることを目指す。	
	ダンス 講義及び実技をまじえ、現代的なリズムのダンス、フォークダンス、創作ダンスの3つの内容について、知識・技能の習得とそれらの実践や指導法を学ぶ。それぞれの内容の特性を理解し、現代的なリズムのダンスでは、ステップを踊る・創る、作品創作の技能を身につけ、フォークダンスでは、民族舞踊を教材としてその動きを習得する。また、創作ダンスでは、イメージを表現するための基礎的な身体の使い方やまとまりで踊ることを学ぶ。さらに、作品創作や発表などを通じて、現場における指導力を養う。		

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
中学校「保健体育」に係る科目	教科	武道A	<p>本授業では、武道としての柔道の歴史・特性の理解とともに、正しい基本動作や技能を身に付ける。また、安全な身の処し方の理解や、投げ技、及び固め技の原理の学習を通じて、保健体育科教師として、体育授業で柔道を安全に指導する能力の向上を目指して、以下の3点を達成することを目的とする。</p> <p>① 柔道の歴史・特性を理解し、説明できるようになる ② 柔道の基本動作や個々の技能及び対人技能を身に付ける ③ 安全に配慮した実技指導能力を身に付けることができる</p> <p>はじめに、柔道の歴史や基本理念等に関する講義を実施し、以降は、柔道の技術体系ごとに、簡単なものから難しいものへと学びを進めることで、安全かつ高い学習効果が得られるように、実習を行う。さらに練習や試合を通して、対人競技としての技能や能力を高める。また、柔道試合審判規定についても理解を深めて、試合運営ができるようにする。</p>	
		器械運動	<p>器械運動に関する指導に必要な基本的な知識や技術を身に付けるとともに、器械運動の指導方法と発展的な運動に関する学習および実習を通して、器械運動の指導能力を高めることを目標とします。マット運動、鉄棒運動、跳び箱運動など器械運動の各種目の基本技について実習を行い、それらの技の習得を行なう。また、様々な指導上の工夫などについて学習して、器械運動の指導能力を高めていく。さらに、各自の能力に合った技能の習得と運動の理解を深め、器械を通した身体操作の発展について学んでいく。</p>	
		水泳	<p>水泳の技能とその指導法について実技と講義を通して学習する。具体的には、①クロール、平泳ぎ、背泳ぎ、バタフライの各泳法の基本的技術及びその指導法の習得、② 水中における安全技術及び安全指導の知識や技能の習得、③ 規律ある行動、協力、リーダーシップ及びファロアシップなどに関する態度の涵養、を目指す。その際、受講者各自が水泳指導に関する資料集や個人記録簿を作成した上で進める。</p>	
		球技A	<p>実技を通して、保健体育科の教材づくり・授業づくりについて基礎的な理解を深める。これにより、教科指導に必要な知識、ならびに実践的な指導力の育成を行うことを目標とする。ボールゲームの学習内容には、ボール操作の技能やボールをもたないときの動きに加えて、戦術に関する知識や知識を活用した状況判断がある。そこで、これらの学習内容を内包したゲーム教材を用いてゲームパフォーマンスの向上を図るとともに、指導法についても学ぶ。</p>	
		球技C	<p>投げるといふ基礎的な運動能力の向上を目指すとともに、運動技能の発達段階に合わせた投動作や捕球指導、ベースボール型授業運営の基礎を身に付けることを目標とする。授業を通して安全に留意し、段階を踏んで運動技能を身に付けるための指導・アプローチを体験する。捕球、投球、守備、攻撃、走塁戦術の基礎を学び、ゲームへ活かすことによってそれらの技能を身に付ける。また、安全で楽しい授業づくりを行う方法についても学ぶ。</p>	
		球技E	<p>ネット型ゲームについての基礎的なルールの理解、技術の向上と簡易ゲームの指導法について実習を行う。授業の履修を通して、ネット型単元授業の基礎的知識を身に付けるとともに、効果的な授業の組み方を学習する。前半は、主に、ネット型ゲームの基礎技術を習得し、それらを用いた簡易ゲームについて体験を通じて学習する。後半は、基礎戦術を習得し、最終的に、リーグ戦によるゲームを行うなかで、応用的な技能習得を図るとともに、安全で効果的な指導法についても学ぶ。</p>	集中

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
中学校「保健体育」に係る科目	体育原理	本授業では、身体、体育、スポーツに関する原理的アプローチについて理解すること、身体、体育、スポーツについての歴史的理解を踏まえて現在の問題について意見を持つことを目的とする。授業では、①「体育」「スポーツ」に関する研究分野について、②「体育」「スポーツ」の現状について、③体育について、④スポーツについて、⑤スポーツ倫理について、などのトピックスを取り上げる。	メディア
	運動学	本授業では、運動学習論とスポーツバイオメカニクスの知見をもとに、運動指導に関する専門的能力を高める。運動学習論では、運動技能の習熟レベルや運動観察などについて、スポーツバイオメカニクスでは、力学、生理学、解剖学などの基礎知識をもとに身体運動のしくみについて概説する。これらをもとに、体育やスポーツ場面などにみられる運動を客観的・科学的に理解できる能力を養う。	
	生理学	身体や脳の構造・機能や、身体活動やトレーニングによるそれらの変化や適応について学習する。具体的には、①運動が身体や脳にもたらす効果や、発育・発達における運動の役割について理解する、②教育現場での授業や課外活動に活かすことができる、③運動生理学の観点から体育人としてのミッションを考えることができる、の3点を目標とする。授業では、教育現場や競技スポーツで、運動生理学的の視点から、健康増進や運動パフォーマンスの向上を目指す授業計画や運動指導ができるよう、ディスカッションを通じて理解と思考能力を深める。	メディア
	学校保健 I	学校現場において児童・生徒の健康や安全を守っていくための「保健管理」、健康や安全の保持増進に関わる児童・生徒自身の能力を育てていくための「保健教育」の基礎的かつ重要な内容について講義する。具体的には、学齢期の子どもにおける発育発達特徴や起こりやすい健康問題、学校において児童・生徒の健康や安全を保障するための主要なシステムや活動、担当者の役割等について取り上げる。その際、受講生がこれまでの学校生活で体験したことや感じたことを取り上げながら進める。	メディア
指導法	中等保健体育科指導法 A	体育科教育学の入門的な基礎知識をテキストの学習を通して獲得するとともに、すぐれた体育授業の映像教材などを用いて、より良い授業づくりに必要な知識を身に付けるとともに、実際に体育指導を経験する。具体的には、体育の目標・内容、教材づくりや教材の有効性を高める教具の機能などを理解する。後半では、学習指導案を作成し、模擬授業を実践することによって体育の授業づくりを学ぶ。	
	中等保健体育科指導法 C	本授業では、保健体育の授業における単元全体の構造を理解するとともに、授業に必要な知識・技能並びに指導方法を身に付ける。保健体育の授業づくりや授業改善につながる具体的な方法の提案ができるようにするなど、授業の観察力を身に付ける。また、単元構造を踏まえ、今まで学んできた保健体育領域の知識を授業づくりに活かせるようにする。	共同
	中等保健体育科指導法 D	中学校及び高等学校の保健体育科授業に関する実践的な指導力の向上と、授業改善の方法を身に付けることを目標とする授業である。具体的には、指導計画の作成方法や情報通信機器（ICT）の活用、授業観察及び授業評価の仕方等について講義した上で、実際に受講生が保健体育科授業の学習指導案の作成や教材づくりを踏まえた模擬授業の実践とその省察を通じて、課題を明らかにし改善策を考える内容とする。	
中学校「家庭」に係る科目	衣生活論	衣服とは、生理的・心理的・社会的・物理的環境の一つであることを概説する。衣服の着用目的や機能、着用時の快適性や安全性について基礎的知識を得る。また、衣服をとりまく現代の課題について取り上げ、地球環境、地域社会や生活との関係について触れる。衣服を着用するヒトの生理・心理学的影響に興味を抱き、被服衛生学の基礎的知識を得る。様々な視点から衣服を環境の一つとして捉え、理解することを到達目標とする。	メディア

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
中学校「家庭」に係る科目	教科	被服構成実習 I	家庭科教育に必要な衣生活における被服構成について、科学的に理解し、裁縫技術を身に付けることができるよう、平面・立体構成の基礎的な実習をおこなう。採寸・製図・裁断・仮縫い・本縫いをおおして、小中高等学校における手縫いやミシンの適切な取り扱い方法、用具を安全に取り扱い製作が適切にできる環境づくり等の指導方法についても修得する。また、身体を覆う衣服の構造について理解を深める。	
		衣生活環境実験	衣生活論ならびに被服素材論、衣管理論で理解した専門知識をもとに、繊維、糸、布の特性を実験や加工実習等で確認する。また、衣服を着装する側の人体の形態、体温、生理学的・物理学的・心理学的特性を知る。また、実験で得られたデータを解析・考察し、レポートにまとめる力を身につける。小中高の家庭科実習で必要となる実験実習の準備および実施能力を身につけ、家庭科の学習内容に関連させることができるようにする。	
		被服素材論	衣服の材料となる繊維高分子材料に関する基礎的知識を修得し、繊維及び繊維集合体の物理化学的な特性を理解し、快適な衣生活について材料学の視点から考えられるようになることを目標に、天然繊維と化学繊維の物理化学的特性の基礎として、糸や布の構造特性と消費性能について学ぶ。また、素材の視点からエコプラスチック等の環境対応技術の動向や地域の伝統染織の素材特徴から快適な衣生活を論じる。	
		食生活論	食生活のあり方全般を栄養学、食品学の内容を含んで包括的に述べる。まず食物の本質と働きを理解し、次に何をどれだけ食べたらよいかを、各種栄養素の働きや代謝と関連付けて理解する。調理の基礎知識にも触れ、食物を食事として活用できることをめざす。また、ライフステージと身体の変化を理解し、成長と健康に寄与する食生活を生涯にわたって主体的に実践できる力をつけることを目標とする。	メディア
		調理実習 I	小学校、中学校、高等学校で行う調理実習の内容について、和食、洋食、中華、韓国等のメニューを段階的に取扱い、最後に各班で献立立案から実習までを行う。①基本的な調理操作や調理材料の取扱い、②調理科学的知識に基づいた実践力、③郷土食や伝統食への理解、④環境を意識したエコクッキングおよび食材の廃棄、の4項目について修得し、小中高の家庭科の調理実習で必要となる準備および実施能力を身につけ、家庭科の学習内容に関連させることができるようにする。	
		食生活環境実験	食生活論ならびに栄養学、食物科学で得た専門知識をもとに、食物を科学的に捉えることを中心に、食品の加工、食品の調理性、食品に含まれる栄養素、食品衛生などについて実験を通して理解を深める。①基本的な実験操作や実験器具類の取扱い、②食品加工の方法、③食品間の化学反応への理解、④食品に含まれる成分や衛生微生物の検出方法、の4項目を修得し、小中高の家庭科の調理実習で必要となる準備および実施能力を身につけ、家庭科の学習内容に関連させることができるようにする。	群大集中
		栄養学	五大栄養素、食物繊維を中心に、各栄養素の化学構造や身体における代謝、生理作用などについて基礎知識を詳説する。そして栄養素摂取と健康との関係について、食事摂取基準を考慮して不足のなく栄養素を摂取する必要があること、エネルギー摂取量と消費量のアンバランスが生活習慣病に繋がることなどについて取り上げ、エネルギー代謝とその算出方法をもとにバランスのよい献立づくりに活用できるようにする。	
		住生活論	住居領域の内容の基本となる、日本の住まいおよび住まい方について基礎的知識を習得することを目的とする。日本の住まいが成立してきた歴史や背景を理解し、安全な住まいや快適な室内環境の整え方やその工夫を知り、住まいの地域性やまちの環境、さらには住居製図の基礎となる住宅の構造、使いやすい空間（人体寸法と空間）について学ぶことで、住まいと住まい方について総合的に理解を深めることができるようにする。	メディア

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
中学校「家庭」に係る科目	教科	住環境論	住居領域の専門性を深めるため、住居と地域社会との関わりについて様々な視点から検討し、適切な住居領域の教育内容や教材を検討できるための基礎的知識を得る。また、都市環境や地域施設に関連する文献や資料をもとに、住環境の変遷や多様性について歴史的背景を含めて理解を深め、小中高の家庭科で住環境のあり方について学ぶための内容や教材研究を通して住居領域の学習内容について考える。	
		住生活環境実習	住環境の測定と分析を通して、住生活に対する子どもの理解や関心を高める授業実践力を身につけることを目標に、安全で快適かつ健康な生活を営む場としての住居について、日照、採光、換気、温熱、空気環境などを配慮できるよう測定を行うとともに、その結果と測定器具を用いた授業実践力を高める。また、住環境デザインの手法について造形活動を通して体験的に学び、子どもたちがバリアフリーなどの社会的課題等について体験的に学ぶための授業実践力を高める。	
		住居製図実習	家庭科の住居領域の内容理解を深めるため、設計、製図の基礎を習得することを目的とする。建築図面から住生活をよみとることができ、製図を行うことができることを到達目標とする。授業では、製図の基本や製図道具の使い方を習得し、木造住宅図面のトレースを行い図面の種類や図面を読み解く方法について学び、小中高の家庭科における住居領域での授業への応用について基礎的な知識と実践力をを修得する。	
		保育学	生涯発達の視点から、胎生期・乳幼児期・児童期の心身の発達の諸相と発達理論、各ライフステージの発達課題とそれらの達成に重要な意味を持つ家族関係、地域・社会関係について理解を深める。また、「保育」「児童」「親性」「保育環境」の概念とそれらに関する現代的課題について検討し、児童の生涯発達を保障する保育環境と保育教育のあり方を家庭科の観点から考察する。	
		家庭電気機械及び情報処理	家庭で適切に機器や情報を扱うための要素として、その仕組みやエネルギーについて講義する。そして、生活の向上にそれらが果たす役割や適切な利用の仕方について、自分の生活に即して主体的に考えられるようにする。エネルギーの種類と特性を理解し、エネルギー機器の効率的かつ安全な利用や、省エネルギーや情報セキュリティなどの持続可能社会に向けての必須事項の理解を深める。	
指導法	中等家庭科指導法A	本授業は中等教育における現代家庭科の教科論及びカリキュラムについて、戦後の変遷を踏まえながら、目標・内容、指導方法、評価等について概説する。また、家庭生活を取り巻く諸課題と家庭科教育との関係性を考察することにより、その意義や役割について検討し、(1)中等教育における現代家庭科の教科としての特質を理解する、(2)中学校家庭科および高等学校家庭科学習指導要領の内容を把握する、(3)中学校および高等学校における家庭科学習の現状を知り学習指導に生かそうとする、ことを達成目標とする。	演習を含む	
	中等家庭科指導法B	本講義は、学習指導要領等における中学校・高等学校の家庭科の目標、内容について理解を深め、それに沿った授業設計と学習指導案づくり、指導方法を学ぶことを目的とする。また、学習指導要領における目標を達成するための学習指導や授業展開、評価等のあり方について検討し、主要な教育理論を踏まえて具体的な授業場面を想定した授業設計の方法を身に付ける。学生自身が主体的に教材研究や教材開発、模擬授業に取り組む中で、情報機器及び教材の効果的な活用法も身に付くように、演習、討論、授業研究と省察等を組織して、相互に批判・検討しながら家庭科教育実践の力量を高める。	演習を含む	
	中等家庭科指導法C	学習内容の科学的理解や、課題解決能力の育成を目指した家庭科の授業のあり方について講義、議論する。また、授業における「指導と評価の一体化」の考え方について解説した上で、授業の学習指導案づくりや教材づくり、模擬授業、相互検討を通して、実践力をつける。模擬授業では「主体的、対話的で深い学び」の視点を取り入れた学習活動を積極的に取り入れる。	演習を含む	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
中学校「家庭」に係る科目	指導法 中等家庭科指導法D	中学校、高等学校の家庭科の授業設計と学習指導案作成および授業改善の具体的な手法を身につける。また、授業における「指導と評価の一体化」の考え方のもと、授業の学習指導案づくりや教材づくり、模擬授業、相互検討を通して、総合的な実践力をつ修得する。模擬授業では「主体的、対話的で深い学び」の視点を取り入れた学習活動を積極的に取り入れ、次世代の家庭科学習について検討する。	演習を含む
中学校「技術」に係る科目	木材加工学	技術・家庭科(技術分野)、工業高校の木材加工の指導に必要な木材の性質、木材加工に利用する手工具、電気工具、工作機械に関する学習を行う。授業を通して、木材の材料としての性質と特徴、木材の切断・切削・塗装に関する理論、木材の加工に関する手工具・電気工具・工作機械の種類、使い方・管理方法、学校における手工具・電気工具・工作機械の安全な加工について理解することを達成目標とする。	メディア
	木材加工学演習	技術・家庭科(技術分野)、工業高校の木材加工の指導に必要な木材の加工に利用する手工具、電気工具、工作機械に関する演習を行う。授業を通して、手工具・電気工具・工作機械を適切に利用した木材加工の技能、作品の構想図、部品図を等角図、第三角法等の図法を使って表す技能、手工具・電気工具・工作機械を使用して、安全・適切に材料取り、部品加工、組立て・接合、仕上げや、検査等を行い、製品を製作する技能を習得することを達成目標とする。	宇大共同/群大単独
	製図 I	技術・家庭科(技術分野)、工業高校の加工分野の指導に必要な製図法についての基本的な知識の学修および手製図の演習を行う。これらを通し投影法および製図法について理解し、機械の構想図や組立図、部品図の見方や描き方を修得する。描画に用いる線の太さや種類について知り製図におけるそれらの使い分けについて学修する。作品の構想図、部品図を等角図、第三角法等の投影法を使って描くことができる。製作の構想を製図により具体的に表示できる。	
	金属加工学	技術・家庭科(技術分野)、工業高校の金属加工分野の指導に必要な金属加工の理論、切削加工、研削加工、成形加工、鋳造、接合・切断、表面加工、デジタル加工について講義する。各加工法の加工の原理、種類と特徴を中心に工作機械の安全な操作を行うことも考慮して説明する。本科目を修得することで金属加工実習を行う際の基礎知識を得ることができ、安全で目的にあった金属加工ができるようになる。	メディア
	金属加工学演習	技術・家庭科(技術分野)、工業高校の金属加工分野の指導に必要な手工具、電気工具、工作機械を用いた演習(製図を含む)を行う。これらを通し手工具、電気工具、工作機械を実際に利用して、金属加工の理解を深めることができる。作品製作に必要な構想図、展開図、組立図を製図法に則って製作することができる。手工具、電気工具、工作機械のしくみや操作法を理解し、安全に作品を製作することができるようにする。	
製図 II	技術・家庭科(技術分野)、工業高校の加工分野の指導に必要な製図法についての基本的な知識の学修および手製図の演習を行う。これらを通し投影法および製図法について理解し、機械の構想図や組立図、部品図の見方や描き方を修得する。製図を通して製作物の設計や加工方法について考えることができ、製作物の形状だけでなく、その設計意図や加工方法についての伝達手段としての製図ができる。		

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
中学校「技術」に係る科目	機械工学	「機械とは何か」（機械の概念）について、および機械を構成する機械部品や機械要素について学修する。機械の目的とする機能を達成するための手段・方法について学修する。運動（動力）の伝達、変換、制御のための仕組みについて学修する。機械設計における基礎概念（荷重、応力、強度など）について学修する。産業における工作機械（マザーマシン）の重要性を理解し、工作機械の精度・確度の重要性（母性原理）について理解する。	
	機械工学演習	身近な機械や機械模型（ラジコンカー・組立キットなど）を組み立てたり分解したりする活動を通して、機械を構成する機械部品や機械要素の機能や、機械の目的とする機能を達成するための機構等について学修する。機械の機能や構造の理解し、それに基づきその機械の設計意図を考えることが出来る。機械に用いられている各種の機構や機械要素の機能や仕組みを理解し、その役割を具体的な言葉で説明することが出来る。	
	電気工学演習	複数箇所自由に電灯を点滅することができる回路の製作などを通して電気回路と実体配線の対応関係について学修や、白熱電球と発光ダイオードの電気的特性の違いと使い方や発光ダイオードの順方向電圧と発光色の関係、電圧計や電流計（または回路計など）の仕組みと使い方、ダイオードやトランジスタ、IC等の能動素子を用いた簡単な電気・電子機器の製作などを通して電気・電子回路についての演習を行う。	
	生物育成学	現在の農業について理解するなかで、作物栽培の基本的技術を学び、身近な野菜類を栽培することが可能になるまでの十分な知識を取得する。中学校技術・家庭科（技術分野）を担当する教員として、農業の現状を理解し、身近な農作物の基本的な生理、生態の知識を身につける。農作物栽培のための土壌、肥料、病害虫防除の知識を身につける。薬物としての農薬について正しい知識と環境への影響を理解する。	
	生物育成学演習	学内の農場において、数種の農作物について播種から収穫までの体験をすることにより、基本的な栽培管理方法、肥培管理方法、病害虫防除の方法などを体得する。中学校技術・家庭科（技術分野）を担当する教員として、基本的な圃場管理、農機具の使用法を指導することができる。身近な農作物の栽培を行うことができる。農作物の病害虫防除、肥培管理（農薬の適正な管理法および使用法を含む）を行うことができるようにする。	
	情報工学演習	本授業は、中学校技術・家庭科技術分野の教員に必要なプログラミングの基礎的知識・技能を、「Excel VBA」及び「Scratch」を用いて修得することを目指します。さらに、センサの制御技術の基礎をシングルボード・コンピュータである「Micro:bit」を用いて修得することも目指す。これらを通して、学校現場で利用可能なオリジナルソフトを制作できる能力をつける。	
指導法	中等技術科指導法B	技術・家庭科（技術分野）の各4つの内容について指導計画学習指導要領に示される技術教育の理解と変遷を学ぶことを通じて、技術教育を体系的に理解することを目的とする。また、教科等の教育内容を相互の関係で捉え、教科横断的な視点で、技術教育をとらえられるように小学校、中学校の他教科、中学校の他教科、高等学校「情報」、工業高校における技術・家庭科（技術分野）の学習とのつながりについても学ぶ。	メディア
	中等技術科指導法C	「技術科教育法A」「技術科教育法B」で学習した成果に基づき、中学校技術・家庭科（技術分野）の教育に携わる教員として、技術分野の「材料と加工の技術」「生物育成の技術」「エネルギー変換の技術」「情報の技術」の4つの内容について、学校現場での実践を視野に入れた「指導方法」「教材開発」のについて学ぶ。授業を通して、技術科教育の目的と課題の理解を理解し、指導計画、指導案を作成することができることを達成目標とする。（19 松原真理，71 川島芳昭）（小倉良一，33 楠元一臣，122 古田貴久，137 片柳雄大）	オムニバス方式

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
中学校「技術」に係る科目	指導法 中等技術科指導法D	「技術科教育法A」「技術科教育法B」「技術科教育法C」で学習した成果に基づき、学校現場の実践を踏まえた技術分野の4つの内容について実践的な指導力を身に付けるための模擬授業を中心に授業を行う。授業全体を通して、技術分野4つのそれぞれの指導内容及び授業のねらいに基づいた授業設計、教材作成を行い、模擬授業を実施する。また、模擬授業についての協議を行い、授業改善についての視点について学ぶ。(19 松原真理, 71 川島芳昭)(小倉良一, 137 片柳雄大)	オムニバス方式
中学校「英語」に係る科目	英語学入門	現代言語学・英語学の基本的な考え方、英語の音声の仕組み(音声学、音韻論)、英文法(形態論/語形成論、統語論、意味論、語用論)、英語の歴史の変遷(英語史)、国際共通語としての英語(社会言語学)、ことばの獲得と学習(第一言語獲得論、第二言語習得・学習論)の基礎概念を概観し、ことばの様々な側面に対する理解を深め、将来授業を行う際に役立つ知識・技能を修得することである。到達目標は、①現代言語学・英語学の基本的な考え方、取り上げる各分野の基礎概念を理解できている、②言語現象の観察から得られた洞察を、将来の授業実践にどのように応用できるか自ら考えることができる、③物事を科学的に分析できる思考力を養い、自ら考えたアイデアを明快にプレゼンテーションできることである。	メディア
	英語学演習A	児童・生徒が英語の非母語話者としてどのような発音を身につけるのが適切かを考えるために、以下の項目を設定する。 (1) 英語の母音体系を日本語と対照しながら学習する。 (2) 英語の子音音素を日本語と対照しながら学習する。 (3) 国際音声字母(IPA)を習得する。 (4) 英語の音節構造とアクセントについて学習する。 (5) 英語のリズムとイントネーションを学習する。 (6) 音声学的に正しい英語の発音を身につける。	
	英語学演習B	英語科教員養成の観点から、教材研究開発の基礎となる専門力を身につけるため、英語の言語学的研究の目的や方法、成果などを概観し、具体的な言語現象についての基本的な知見を理解し、基礎的な観察・分析力を身につけるための演習を行なう。到達目標は、具体的な英文や音声資料等の英語表現の事例について、文法や英語の音声の仕組みなどに関する言語学的な観点からの基本的な分析ができ、教材理解や教材研究等への応用ができることである。	
	英語文学入門A	(授業形態) 講義 (目標) (1) 様々な時代、場所、書き手によって書かれた英語のテクストを読むことによって多様性への気づきを深め、他者に対する想像力を涵養する。(2) 異文化へのより深い理解を通して、豊かな人間性と教養を身につける。 (概要) 17世紀植民地時代から19世紀末までのアメリカ文学について、代表的な作家と作品を取り上げながら概観する。具体的にテクストに触れながら各作品や作家の文学的特徴を考察するほか、作品の書かれた社会的・文化的背景にも目を向け、作品と時代背景との関係を検討する。	メディア
	英語文学入門B	イギリス文学作品を読むことで、多様な英語表現を学びながらイギリスの歴史や文化について理解を深め、英語教育に不可欠な素養を身につける。授業においては、童話、ナーサリー・ライム、ソネットを含むさまざまな種類の詩、演劇、ロマンス、小説を取り上げ、それぞれの特徴や形式を理解する。また、新批評、フェミニズム批評、ポストコロニアル批評、クイア批評などを概観することで、研究対象としてイギリス文学を考察する方法を学ぶ。	メディア

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
中学校「英語」に係る科目	教科	英語文学演習 A	<p>(授業形態) 演習</p> <p>(目標) (1) 多様な英語のテキストを精読することによって英語力の向上を目指す。(2) 他者の意見を踏まえながら自らの考えを述べ、また他者の意見に回答するアカデミックなコミュニケーション能力の向上を目指す。(3) 異文化へのより深い理解を通して、豊かな人間性と教養を身につける。</p> <p>(概要) 代表的なアメリカの短編小説を精読する。受講者の発表を元にグループディスカッションを行う。発表では、ディスカッションの論点を挙げてもらうほか、語学的な注釈や疑問を挙げてもらい、その都度、解消していく。</p>	
		英語文学演習 B	<p>イギリス文学作品を読むことで、多様な英語表現を学びながらイギリスの歴史や文化について理解を深め、英語教育に不可欠な素養を身につける。授業においては、ナラティブ構造や修辞に注目しながら、18-20世紀の小説を取り上げ、それぞれのナラティブ構造や修辞に注目することで、内容だけではなく形式から文学作品を読み解く態度を養う。その際、「文学」の位置づけ、批評の機能、ナレーター、作者と読者、視点といった文学批評に纏わるさまざまな事項を題材とする。</p>	
		オーラルコミュニケーション演習 I	<p>(授業形態) 演習</p> <p>(目標) 生徒の理解のレベルに応じて英語で授業を行える英語運用能力を育成する。そのため、①目的や状況に応じて、様々なトピックやジャンルについての英語を聞いて理解できたり話したりできる能力、②目的や状況に応じて、読んだり書いたりできる能力を育成する。</p> <p>(概要) 全て英語で行い、グループやペアでの活動、ロール・プレイ、個人とグループでの発表を多く取り入れ、履修者が英語を使う場面を多く設定する。様々なトピック、ジャンル、コンテキストに触れながら正確さと流暢さに焦点を当て、多聴のプログラムを行い、聞いたことに関して、互いにその場で要旨を述べたり、ディスカッションを行ったりする。各自がオーディオジャーナルとして課題についての私見を録音し、教師にその音声ファイルを送ってはフィードバックをもらって改善していくスパイラル方式の学習活動も行っていく。読む・書くことも加えた全ての技能を統合的に組み合わせ、英語運用能力全体の向上を図る。</p>	
		オーラルコミュニケーション演習 II	<p>(授業形態) 演習</p> <p>(目標) 生徒の理解のレベルに応じて英語で授業を行える英語運用能力を育成する。そのため、①目的や状況に応じて、様々なトピックやジャンルについての英語を聞いて理解できたり話したりできる能力、②目的や状況に応じて、読んだり書いたりできる能力を育成する。</p> <p>(概要) 「オーラルコミュニケーション演習 I」と同様、全て英語で行い、履修者が英語を使う場面を多く設定する。様々なトピック、ジャンル、コンテキストに触れながら正確さと流暢さに焦点を当て、多聴のプログラムを行い、聞いたことに関して、互いにその場で要旨を述べたり、ディスカッションを行ったりする。オーディオジャーナルを活用したスパイラル方式の学習活動を継続し、ディベートや英検準1級・1級の2次試験問題を参考にしながら、「やり取り」と「発表」の力を伸ばす。読む・書くも含め、全ての技能を統合的に組み合わせることで、英語運用能力全体の向上を図る。</p>	
		英作文 I	<p>より自然で正確な英語作文をするための文法知識の整理・発展をはかり、聞き取りや発話練習と合わせて、総合的な英語の表現力と理解力の向上を見据えた英作文演習を行う。授業では、日英語比較等の観点から、書いたり話したりするうえで注意すべき文法や語法の項目を単元とし、事前学習に基づく小テストや課題を踏まえて必要な知識を再確認・拡充し、口頭練習を合わせた総合的な学習を進め、英文法の正確な運用に基づく表現力と理解力(読解力)の涵養と学習指導上のポイントの理解をはかる。</p>	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
中学校「英語」に係る科目	教科	英作文Ⅱ	より自然で正確な英語作文をするための文法知識の整理・発展をはかり、聞き取りや発話練習と合わせて、総合的な英語の表現力と理解力の向上を見据えた英作文演習を行う。授業では、日英語比較等の観点から、書いたり話したりするうえで注意すべき文法や語法の項目を単元とし、事前学習に基づく小テストや課題を踏まえて必要な知識を再確認・拡充し、口頭練習を合わせた総合的な学習を進め、英文法の正確な運用に基づく表現力と理解力(読解力)の涵養と学習指導上のポイントの理解をはかる。さらにパラグラフ等のより長い表現単位の発展的なライティングに接続させる。	
		異文化理解と言語教育	異文化コミュニケーションに関わる理論を学び、英語科教材に描かれている「異文化」について捉え、英語による表現力への理解を深める。そのために英語と日本語の比較をイメージ、ジェンダー、ポライトネス、階層・役割という視点から比較する。またバイリンガリズムや言語教育の視点から、英語科教育がいかに日本における多文化共生社会に向けた教育実践に資することができるかを検討する。さらに、受講生同士のディスカッションや留学生との交流活動を通して考察を深める。	
		言語文化論Ⅰ	自然言語の構造的特徴および機能を明らかにしたうえで、それをモデルとして、民話、モード、儀礼など様々な文化的所産の構造と機能を検証する。加えて、日本語・英語・ドイツ語の対照を行うことで、自然言語の普遍性と個別性に基づいた、人間の文化の普遍性と多様性についての視座の獲得を目指す。授業は受講者の発表と討論を中心とし、多くの具体例を扱いながら、必要に応じて異文化を背景にしたゲストも迎える。	
	指導法	言語と世界	本授業では、諸外国ならびに日本の文化・社会・歴史について授業回ごとにテーマを設定し、教員が講義を行うとともに、受講者自身が同テーマについて複数の文献を読み、比較検討を行う。随時、発表課題を課すことにより、受講者の能動的な参加を促す。受講者が自分自身で何かを発見する過程を重視する。特定のトピックについては、留学生へのインタビューをもとに議論を行う。授業の目的は、世界の文化の多様性、日本の文化・制度、ならびに異文化コミュニケーションの現状と課題を学ぶことである。あわせて、多様な意見を尊重しつつも、自らの視点をもって議論に参加するための知見を身につけることを目指す。	
		中等英語科指導法A	中学・高校の学習指導要領(外国語編)の目標・内容および小学校英語教育との関係を中核として、国際社会における英語の役割から今日求められる英語力の育成のあり方を学ぶ。教科書・教材、学習者の特性、各技能の育成、言語活動、第二言語習得と外国語習得の特性、誤りの処理、文法や語彙の習得などを中心に授業の組み立てや実践の基礎となる話題を取り入れ、指導に関する知識と基礎的な技能を育成する。ディスカッションと発表をとおして、習得した知識に基づく私見を持てるようにする。必要に応じて、模擬授業的な活動を取り入れる。	
		中等英語科指導法B	「中等英語科指導法A」での学習内容を踏まえ、到達目標と年間指導計画、題材配列、単元指導計画、学習指導案の作成について学ぶとともに、評価のあり方を考える。CAN-DOリストやルーブリックを用いたパフォーマンス力の育成・測定・評価など、今日の英語教育で取り組まれている話題を取り入れ、指導に関する知識と基礎的な技能を育成する。また、英語教師に求められる資質と能力を考え、教育実習に向けた視野を持てるようにする。ディスカッションと発表をとおして、習得した知識に基づく私見を持てるようにする。必要に応じて、模擬授業的な活動を取り入れる。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
中学校「英語」に係る科目	指導法 中等英語科指導法D	「中等英語科指導法C」と同様に、新学習指導要領における中学・高校の英語教育の目標達成に向け、「中等英語科指導法」での学びを生かしながら、指導計画立案、目標設定、各時の授業の組立て方について実践的に学習する。授業で行う様々な言語活動について理解し、それらを支える基礎的な指導技術の習得を目指す。「小・中・高の一貫した英語教育の目標」の理解の下に、中学校で用いられている教科書を使用し、教材研究・指導案作成・模擬授業/授業映像・授業研究ディスカッション等の活動を多く取り入れて、履修者は主体的に学ぶ。授業実践で重要な項目については、毎回スポットを当てて学習する。	
特別支援教育科目	特別支援教育総論	特別支援教育免許状を取得するための必修科目であり、教育職員免許法施行規則に規定される「特別支援教育に関する基礎理論」に関する科目である。本授業では、我が国における「特殊教育」制度から「特別支援教育」制度への移行を踏まえながら、1)障害の社会的・文化的・歴史的意味を理解すること、2)日本における障害児教育の理念と制度に関する基本的知識を習得すること、3)インクルーシブ教育の理念と制度に関する基本的知識を習得することを目的とする。障害について、その種類・程度の理解だけでなく、障害の意味するところの社会的・文化的・歴史的変遷を理解したうえで、障害種別によらない教育的ニーズに基づく教育とは何か、さらに障害のある子どもの社会参加において学校教育が担う役割について概説する。	
	知的障害児の心理・生理・病理	知的障害児の心理的特性、解剖・生理についてその基礎的な知識を学ぶ。知的障害の原因を理解するうえで重要な脳の構造と機能を解剖・生理学的に解説する。知的障害を引き起こす素因と要因について学び、さらに知的障害を引き起こす疾患とその病理性について学びを深める。知的障害の生理学・病理学的理解に基づき、知的障害の心理特性について学ぶ。また、知的障害児の幼児期から思春期にかけて発達について学習し、知的障害を持つ幼児・児童・生徒への理解を深める。	
	肢体不自由児の心理・生理・病理	肢体不自由のある子どもを理解するために教員が必要とされる心理・生理・病理の知識を習得し、肢体不自由のある子どもが抱える困難と障害状況について理解を深める。さらに、肢体不自由がある子どもとの教育的係わり合いの実際について具体的に検討することをとおして、肢体不自由がある子どもの行動の意味を捉えるための基本的な観点について学ぶ。 まず、肢体不自由が児童生徒に及ぼす心理的影響について学習し、肢体不自由をきたす疾病についての理解を深め、適切な肢体不自由児の支援を行うための基礎知識および肢体不自由教育の特色・教育内容について実践事例を通して学ぶ。さらに、肢体不自由がある子どもとの教育的係わり合いの展開過程について紹介し、係わりの糸口や行動のとらえ方、行動の意味などについて具体的に検討する。	
	病弱児の心理・生理・病理	病弱の子どもを理解するために教員が必要とされる心理・生理・病理の知識を習得し、病弱の子どもが抱える困難と障害状況について理解を深める。また、疾患・外傷などが病弱の子どもに及ぼす心理的影響や長期入院を要する疾病についての理解を深め、適切な支援を行うための基礎知識を学ぶ。さらに、病弱の子どもとの教育的係わり合いの実際について具体的に検討することをとおして、病弱の子どもとの行動の意味を捉えるための基本的な観点について学ぶ。 具体的には、病弱教育の特色・教育内容について実践事例を通して学ぶ。また、病弱な子どもとの教育的係わり合いの展開過程について具体的に紹介し、係わりの糸口や行動のとらえ方、行動の意味などについて具体的に検討を重ねる。	
	知的障害児心理学特論	知的障害児における日常生活、言語、認知、運動、社会性、行動などに関する発達課題を学び、それに対する心理学的な視点に立った指導方法の理解を図る。具体的には、知的障害児、およびその周辺領域の子どもたちへの支援に生かすことができる認知・発達理論と心理アセスメントを中心に学びを深める。また、知的障害の判断基準にかかわる、発達の水準、適応行動、認知機能をアセスメントする検査について学ぶと共に、その知見を個別支援に有効に利用する方略について事例を交えて主体的に学び合う機会とする。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
特別支援教育科目	視覚障害児の心理・生理・病理	特別支援学校等の教員に求められる、盲・弱視児理解と、心理・病理・病理の知識を習得することを目的とする。視覚器官の解剖学および生理的理解をもとに、盲・弱視をきたす疾患とその疾患特有の経過と支援を学び、視覚障害がきたす心理的影響と学校での取り組みについて検討する。さらに、視覚障害に対するさまざまな矯正機器や教具について、その生理学的意義を認識しつつ、現在または近未来における医療の変化に伴う視覚障害児の環境について理解し、今後の視覚障害をめぐる社会的変化にも対応できる力を身に着ける。	メディア
	視覚障害児の心理特論	教育分野における視覚障害の定義を踏まえたうえで、視覚障害児の発達、弱視児の視知覚、盲児の触知覚および空間認知、視覚障害のある重複障害児の心理的特性、視覚障害児の評価等について概観し、理解を深める。とくに、見えない、見えにくいことによる人間行動の様相と発達・学習への影響についての理解を深める際には、疑似体験や視覚障害当事者の手記の講読を通じた意見交換および討論を行い、個に応じた働きかけの本質と実践的な視点を養う。	メディア
	聴覚障害児の心理・生理・病理	特別支援学校等の教員に求められる、難聴児理解のための、心理・病理・病理の知識を習得することを目的とする。聴覚器官の解剖学および生理的理解をもとに、難聴をきたす疾患とその疾患特有の経過と支援を学び、難聴がきたす心理的影響と学校での取り組みについて検討する。さらに、補聴器や人工内耳について深く理解し、その身体的影響と子どもの発達に及ぼす心理的影響について実践的に学び、今後の聴覚障害をめぐる社会的変化にも対応できる力を身に着ける。	メディア
	聴覚障害児の心理特論	聴覚障害児・者の心理の捉え方は、ろう両親のもとに育つろう児の発達や手話言語についての新たな知見などが加わることで、歴史的に大きく変化してきた。そのような歴史的変遷を踏まえて様々な知見を解説した上で、聴覚障害児の心理発達に即した支援のあり方や、聴力検査の実践方法、手話言語環境のろう児の言語発達などの現在の到達点について、具体的事例をもとに解説する。聴覚障害児の心理とその支援に関する基本知識と、聴覚障害児の支援において必要な視点を身につけることを目的とする。	メディア
	知的障害児教育課程・指導法	この授業では、知的障害のある児童生徒の特性について知るとともに、以下の観点を中心に知的障害教育の特色と内容について理解することを目的としている。特に、特別支援教育における教育課程や指導形態について理解し、知的障害のある子どもの各教科、合わせた指導の考え方や編成の方法について知り、特別支援学校教員としての基礎的な知識を習得してほしい。講義のみならず、実際の授業のビデオを視聴したり、学生自身が調べて発表したりする時間も設けながら進めていく。	
	肢体不自由児教育課程・指導法	肢体不自由教育（知的障害を伴う重複障害児を含む）における教育課程の編成と運営について理解したうえで、肢体不自由児の学習特性（運動と認知を中心に）、教育課程の類型と特性、教育の内容と方法などについて講義する。その後、肢体不自由児一人一人の教育的ニーズに応じた指導及び支援について講義と演習を実施し、受講者の実践的な指導力を高めることを目標とする。なお、受講生の理解を高めるために、必要に応じて学校現場の映像等を適宜使用する。	メディア
	知的障害教育特論	以下の3つの観点を踏まえながら知的障害児への指導方法について具体的に考えることができることを目指す。①知的障害のある子どもの指導と学級経営の基本について理解する。②知的障害のある子どもの単元計画の考え方と作成方法について理解する。③知的障害のある子どもの社会生活を意識した授業作りの方法を知る。 知的障害のある子どもの卒業後の社会参加を意識しながら、講義及びグループワークの活動等を通して知的障害児の指導と学級経営について理解を深める。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
特別 支援 教育 科目	聴覚障害児教育課程・指導法	我が国において、聴覚障害のある子どもたちに対してどのような教育目的からどのような教育の場でどのような教育方法がとられてきたのか、現在、聾学校のみならず、難聴学級、通級による指導、通常の学級、知的障害特別支援学校等の様々な教育の場においてどのような教育が行われているのかを理解し、国内外の新動向とも対置させながら、聴覚障害教育の現状と今日的課題について知る。本科目は主に講義形式をとり、現代までの聴覚障害教育における主要なコミュニケーション方法、言語指導法、就学の場とその教育目的について説明できること、現代日本における聾学校で行われている教育活動について教育課程に即して説明できること、国内外における聴覚障害教育における今日的課題について理解することを目標とする。	メディア
	聴覚障害児指導法特論	聴力特性、知的発達、生活環境等が多様な聴覚障害児に対して、その子どもの間口に合わせた適切な指導・支援を行うための指導技術を獲得していくために、その基本となる手話等の学習、ビデオ教材等を使用した手話による指導の実際の理解、聴覚障害のある子どもをつまづきや強みを踏まえた教材の研究、指導案の立案と模擬授業の実施を行う。本科目は、前半は講義形式、ならびに授業場面のビデオ等を教材にした対話を含んだ形式で進め、後半は手話の実技とグループワークによる指導案立案及び模擬授業を行う。本授業の目標は、音声言語による言語指導の長所と限界について説明できること、日本手話の言語学的な基本的事項について説明できること、日本手話の文法に基づいた簡単な手話表現ができること、聴覚障害のある子どもの特徴や教科の特性に応じた教材研究について理解することである。	メディア
	障害児自立活動論	知的障害児や肢体不自由児、病弱児の自立活動について学ぶために必要な基礎知識を概説した後、自立活動の前身である養護・訓練の成立、養護・訓練から自立活動が成立するまでの歴史、そして自立活動の理念と基礎概念（個別の指導計画を含む）を概説し、自立活動の考え方とその問題、学校現場で実際に行われている自立活動や個別の指導計画に基づいた授業のづくりの実際についての学びを深める。また、共同活動による自立活動の指導計画作成や模擬授業などを通して自立活動の意義を体験したりする。	
	聴覚障害教育概論	聴覚障害に起因する、言語獲得の困難さの問題や、人と繋がれない孤立感という心理的な問題、職場定着の困難さといった社会参加の問題など、様々な問題を概観するとともに、手話を使う聾者の豊かな世界も対照させて検討することで、単に耳をふさいでみても見えてこない、聴覚障害児者の抱える問題の本質について理解を深めた上で、聴覚障害児教育の歴史と現状について理解することで、聴覚障害児教育の全体像を把握することを目的とする。	メディア
	発達障害教育概論	現在一般の小学校・中学校に知的に障害を伴わない高機能自閉症、アスペルガー症候群、LD、ADHDのある人が約6.3%存在するといわれている。共生社会を目指す現代の学校教育において、彼らの障害特性の理解と支援のあり方を学習することは極めて重要である。本講義は、1. 発達に即した発達障害児者の特性についての理解を深める。2. DSM5に添って、発達障害(神経発達障害)の特性理解ができる。3. 生活障害といった概念を解して、発達障害児者の発達に即した『認知と関係の発達』を理解し、対象児および支援者への適切な支援について事例を交えながら主体的に学び合うことで、発達障害の特性理解と支援の方法について理解を深める。	
	重複障害教育概論	障害の重い子どもが抱える困難と障害状況について理解を深めるとともに、障害の重い子どもとの教育的係わり合いの実際について具体的に検討することをとおして、障害の重い子どもの行動の意味を捉えるための基本的な観点について学ぶ。 障害の重い子どもへの教育のあり方について、特に実践的・臨床的観点から学ぶ。実践研究論文の講読、映像資料に基づく事例検討などを重ね、個別性に基づいた教育的係わり合いのプロセスを共有する。こうした取り組みのなかで、受講生は、障害の重い子どもとの教育的係わり合いの実際について見識を重ねていくことになる。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
特別支援教育科目	盲ろう教育概論	<p>盲ろうの子どもの有する障害の独自性を理解したうえで、実践場面の映像視聴や資料(実践研究論文、報告書、図書など)の講読を通して、盲ろうの子どものコミュニケーションの方法や学習の進め方について理解する。さらに、国内外の盲ろう教育の展開と様々な障害のある子どもの教育との共通点に視野を広げながら、盲ろう教育の発展が我が国の特別支援教育に果たす役割やその意義について理解を深める。</p> <p>具体的には、①盲ろう障害の概念とその原因について知る、②視覚障害と聴覚障害を同時に有することで生じる盲ろう独自の困難について理解するとともに、それによって生じる発達の課題を理解する、③盲ろうの基本的な困難であるコミュニケーションおよび周囲の情報摂取に関する実際的な配慮を知る、④盲ろう教育の展開について、国内および国外の動向を踏まえつつ、さまざまな障害のある子どもの教育との共通点を見出す。</p>		
分野専門科目	教育分野	教育研究原論	<p>輪講形式で教育関連諸学の初歩を講ずる。各回において、受講者は教員から提示された課題に即して討論、小レポート執筆等を行う。</p> <p>(オムニバス方式/全15回)</p> <p>(56 山崎雄介/3回) 「教育改革」について扱う。</p> <p>(124 三澤紘一郎/3回) 教育哲学の初歩について扱う。</p> <p>(115 高橋望/3回) 学校教育における自己マネジメントについて扱う。</p> <p>(111 新藤慶/3回) 教師の社会学的研究について扱う。</p> <p>(113 鈴木豪/3回) 教育内容・方法学の初歩について扱う。</p>	メディア オムニバス方式
		教育調査法	<p>教育を研究する場合には、そのテーマに関わる実態を把握することが重要となる。その実態把握を行ううえで有効なのが、社会調査の手法である。そこで本授業では、教育を研究する際に有用な社会調査の手法を学ぶことで、卒業論文の作成や、教育活動に活用できる調査の力量を養うことを目的とする。</p> <p>はじめに、教育調査とは何か、調査を行うにあたってどのようなことが必要かなど、教育調査の概要について確認する。次に、調査票調査と質的調査の手法について学ぶ。それらをふまえ、簡単な教育調査を企画、実施し、調査報告書をまとめる。</p>	メディア
		教育社会学特講	<p>教育社会学は、教育と社会との関係を問う学問領域である。この授業では、学力と、教育・仕事・家族の関係という今日的な教育に関わる問題を対象とした教育社会学的な研究を学ぶ。このことを通じて、これらの問題についての理解を深めることと、教育を社会との関わりで捉える見方を身につけることを目的とする。</p> <p>そこで本授業では、教育社会学に関わる著作を取り上げ、それぞれの問題の構造と解決の視点について理解を深める。また、文献を通じて学んだことを、将来の教育実践にどのように結びつけられるかについて考える。</p>	メディア
		授業と生徒指導の国際比較	<p>自分たちが当たり前と思っている授業、生徒指導のあり方を国際的な視野から見直すことにより、自身が教師として授業や生徒指導を行っていく上での広い視野、柔軟な考え方を獲得することをめざす。</p> <p>基本的に講義形式であるが、授業や生徒指導の場面が登場する海外の映画、アニメ、ドキュメンタリー等を可能な限り視聴して理解を深める。また採りあげる国・地域の選択については受講者の希望も考慮する。</p>	メディア

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
分野 専門科目	教育分野	教育・倫理・哲学	教育哲学という学問分野が取り組んでいるいくつかの主要なテーマを学ぶ。そこで、英米圏の教育哲学を中心に、教育に関する哲学的な探求が現在の日本の教育を理解するうえでも重要な貢献をしていることを学んでいく。具体的には、知識、社会正義、相対主義と多文化主義、認識と言語、価値理論などをテーマに掲げる。これらを通して、教育を哲学的な思考と洞察によって専門的に学び、教育についての理解を深めることを目指す。	メディア
		学校教育原論	主として、小中学校における学習指導や生徒指導はどのように行われているか、学校と児童生徒、教師、保護者、地域社会、教育関係機関はどのように有機的に結びついているかなどを様々な観点から学ぶ。「学校とは何か」「教師の職務及び服務」「学習指導」「児童生徒理解」「教材研究及び教育関係法規」「生徒指導及び学級経営」「学校種の特徴及び学習評価」「学校と保護者・地域社会等との連携」「学校教育についての自己省察」などについて、講義および具体的な体験的活動を行なう。	
		教育内容・方法学演習A	ひとりの教師として教育内容を研究・咀嚼し、授業づくりを行うための基礎的な知見を、さまざまな教師たちの実践に触れることを通じて身につけることを目的とする。「授業」を中心とした教師の力量形成について、テキストと、関連する授業等の映像、実践記録などをあわせて検討する。具体的には、教師の資質向上をめぐる動向、「能力」をめぐる国際的動向と教育実践への影響、教師のライフサイクルと力量形成、授業力をどう高めるかといったテーマを扱う。	
		教育経営学演習A	教育行政学、教育経営学の学問的基礎、考え方について学修する。また、卒業論文を作成するための基礎的知識、技術の習得を目指す。そこで本授業では、教育行政学、教育経営学に関する文献を購読することを通じて、同分野における基礎的な素養を学修する。また、受講者の卒業論文作成を視野に入れ、文献リストの作成や先行研究の分析を実施する。これらを通じて、教育行政、教育経営に関する基礎的な知識、事項を学習することを通じて、同分野の素養を身につけることができるようになること、あわせて、卒業論文作成のための礎を築くことができることを目指す。	隔年
		教育経営学演習B	教育行政学、教育経営学の学問的基礎、考え方について学修する。また、卒業論文を作成するための基礎的知識、技術の習得を目指す。そこで本授業では、教育行政学、教育経営学に関する文献を購読することを通じて、同分野における基礎的な素養を学修する。また、受講者の卒業論文作成を視野に入れ、文献リストの作成や先行研究の分析を実施する。これらを通じて、教育行政、教育経営に関する基礎的な知識、事項を学習することを通じて、同分野の素養を身につけることができるようになること、あわせて、卒業論文作成のための礎を築くことができることを目指す。	隔年
		日本教育史概説	本授業では、教育に関する思想を歴史を通観することによって学び、現在のわれわれが目にしていく「教育」を捉えなおすことを目的とする。そのために、日本の教育に関する思想、制度を歴史を通観することによって学び、現在のわれわれが目にしていく「教育」を捉えなおす。具体的には、近代以前から、明治、大正、昭和、平成、これからの教育を扱う。このことを通じて、教育を思想史の面から専門的に学び、教育についての理解を深めることを目指す。	隔年
		西洋教育史概説	本授業では、教育に関する思想を歴史を通観することによって学び、現在のわれわれが目にしていく「教育」を捉えなおすことを目的とする。そのために、西洋の教育思想を中心に、人類が教育をどのように考え実践してきたのかを、その歴史的背景と現在の日本の教育との関連を同時に射程に収めながら学んでいく。このことを通じて、教育を思想史の面から専門的に学び、教育についての理解を深めることを目指す。	隔年

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
分野 専門科目	教育思想史演習A	教育に関する思想を、歴史を通観することによって学ぶ。(1) 歴史を歴史として学ぶこと(過去の教育の思想を当時の歴史的・文化的背景の下で理解すること)と、(2) 歴史を現在とのつながりを意識しながら学ぶこと(現在の教育に関する思想を過去の延長上に位置づけながら理解すること)の二つを両立させる。そのために、教育の歴史的背景と現在の日本の教育との関連を同時に射程に収めながら学んでいく。	
	教育社会学演習	本授業では、教育社会的な研究の報告、討論を通じて、教育社会学の基本を理解するとともに、自ら教育社会学の視点で研究を進める基礎的な力量を形成することを目的とする。そこで、受講生に、各自の関心に基づき選択した教育社会的な研究を順番に報告してもらい、その報告に基づいて参加者全体で討論を行うという形で進める。報告する研究は、『教育社会学研究』『社会学評論』『教育学研究』『子ども社会研究』など、教育社会学および関連領域の学会誌掲載論文を中心に選択することとする。	
	教育学研究セミナー I	教育現場などでは、答えの出ない問題に直面することは多々ある。その際に、その問題と格闘し、自ら答えを出す力が欠かせない。そのような力を、卒業論文での研究などを通じて獲得することが求められる。そこで、本授業では、ものの考え方など研究の出発点を確認した後、教育学の代表的な研究方法について学ぶことを目的とする。 前半では、教育学諸分野の概要を説明する。後半は、興味・関心に応じ、教育専攻所属の各教員にわかれて、演習形式で行う。	
	教育学研究セミナー II	教育学研究セミナー I の講義を基に、受講生が研究テーマとして選んだ個別課題についての研究方法を修得することを目的とする。第1回に全体でのオリエンテーションを行い、以降は、それぞれの受講生が取組みたい研究テーマに応じ、特定の担当者のもとに分属する。受講生は、それぞれの研究分野に応じた文献の探し方、調査方法、研究方法等々について学修し、個別課題について毎週進捗状況を報告するという形式で進める。	
	心理教育統計学の基礎	統計法を初めて学ぶ者を対象として、心理学の研究に必要な統計分析法の基礎の習得を目指す。基礎統計領域、すなわち測定値の取り扱い、度数分布、中心傾向の測定、散布度、正規分布、相関と回帰(単回帰のみ)、母集団と標本、仮説検定の基本的考え方、2つの平均の差の検定(t検定)、1要因および2要因の分散分析と多重比較、度数の検定(カイ2乗)を扱う。基礎統計を理解し、実際にパソコンで分析できるようになることが目標である。	メディア
	保育内容の指導法(人間関係)	幼稚園教育要領における領域「人間関係」のねらいや内容を主に社会性の発達についての心理学的な視点から概説する。具体的な事例を用いて保育場面を想定し、その中での幼児の様子を考えることで、幼児にとって人間関係におけるより良い援助について考えていく。このことを通じて、乳幼児期の人間関係の発達について理解し、具体的な援助場面を想定して保育を構想することができるようになることを目指す。	
学習心理学	学習と記憶の心理学的な研究について、基礎・基本となる知見、研究方法、理論等を学ぶことをねらいとする。学習心理学・認知心理学の理論や仮説に即して、日常生活の諸現象を説明したり、小中学校での授業への適用を考えたりできるようになることが目標である。記憶システム、長期記憶と短期記憶、エピソード記憶と意味記憶、リハーサルと学習、効果的な学習方略、インストラクショナルデザイン、レスポナント条件づけ、オペラント条件づけ、スモールステップ、フィードバック、随伴性、罰、消去、行動修正法などを扱う。		

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
分野専門科目	幼児理解の心理学	幼児および乳児の特徴について主に発達心理学的な立場からの知識を身につけることで、幼児理解についての考え方や基礎的態度、およびその方法を習得する。授業の中では乳幼児の知覚、運動、認知、自己、対人関係の発達などについて理論的な説明と合わせて、保育場面で見られる幼児の各側面での発達について紹介していく。これらを通じて、乳幼児期の発達の心理的な特徴や変化について説明することができることを目指す。	
	保育内容の指導法(言葉)	乳幼児の言語発達(母語学習)の仕組みを、心理学の知見をもとに検討する。乳幼児期の言語発達に関して、基礎的な知識を身につけるとともに、それをもちに、幼児教育のありかたについて自ら考え判断することができる力を養う。幼児の言語発達の基礎を理解し、それに基づいて幼児教育の在り方を自ら考えることができるようになることが目標である。母語学習の複雑さ、言葉の機能、非言語的なコミュニケーション、応答性と学習性無力感、コミュニケーションの不足が及ぼす影響、実験を通してみる言語発達、親子のコミュニケーションと言語・記憶の発達、言葉の発達とメディア、ことば遊び、読み書きの発達、早期教育、脳科学と発達、発達における「未熟さ」の意味、遊びのなかで育まれる言葉、等のテーマを扱う。	
	学校教育原論	主として、小中学校における学習指導や生徒指導はどのように行われているか、学校と児童生徒、教師、保護者、地域社会、教育関係機関はどのように有機的に結びついているかなどを様々な観点から学ぶ。「学校とは何か」「教師の職務及び服務」「学習指導」「児童生徒理解」「教材研究及び教育関係法規」「生徒指導及び学級経営」「学校種の特徴及び学習評価」「学校と保護者・地域社会等との連携」「学校教育についての自己省察」などについて、講義および具体的な体験的活動を行なう。	
	心理教育統計学	心理教育統計学の基礎を履修した受講生に、心理実験で収集したデータをもとに、実践的な分析を学ぶ。SPSSを実際に使用して、分散分析・多変量解析などを、実データを使って分析する。主として質問紙中心のデータから、アンケート分析や心理尺度をどうやって作成するのかが中心課題とする。グループで一種類先行研究となる心理尺度を千選んだ上で追試し、その信頼性と妥当性の分析を行う。	
	教育心理学実験Ⅰ	実験と調査という心理学の研究方法の基礎を習得し、実験調査を報告する力をつけることをねらいとする。実験計画法や心理学統計法の基礎について再確認した後、受講者同士がお互いに実験者、被験者となって、主に基礎心理学(知覚・認知、学習、思考)についての心理学実験を行なう。そして収集したデータを統計処理し、レポートにまとめるまでの一連の過程を実習する。心理学の実証研究論文を作成するための基礎的なスキルを習得することが目標となる。	
	教育心理学実験Ⅱ	実験と調査という心理学の研究方法の基礎を習得し、実験調査を報告する力をつけることをねらいとする。受講者同士がお互いに実験者、被験者となって、代表的な心理検査法(田中ビネー検査、WISC、その他の発達検査)を用いて模擬的なデータを収集し、実施方法や採点方法、解釈方法について学ぶ。また、幼児を対象とした行動観察法、集団を対象とした調査方法についても演習を行なう。心理学の実証研究論文を作成するための基礎的なスキルと、心理臨床に必要な心理テスト技法の基礎を習得することが目標となる。	
	カウンセリング実習	学校教育現場で想定される様々なカウンセリングの場面(不登校、キャリアなど)や、対象者(児童生徒、保護者、同僚など)を設定したロールプレイングなどに取り組むとともに、認知行動療法を中心としたストレスやメンタルヘルスに関する知見をワークショップ形式で体得する。また、子どもたちに適用されることの多い芸術療法(描画や箱庭など)や遊戯療法、代表的な知能検査やパーソナリティ検査などに関しても、その概要をとらえつつ、学校教育現場における活用の可能性について、体験を中心に学んでいく。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
分野 専門科目	教育心理分野	心理教育的指導論	心理教育psychoeducationおよびピア・サポート、対話型アプローチをベースに、心理教育的支援の方法、対児童生徒コミュニケーションのとり方等について習得することを目標とする。自己・他者理解、コミュニケーションスキル・トレーニング、グループ単位での課題解決スキル・トレーニングなど、多様な実践法を取り上げ、それぞれ理論的解説とともに受講者自らが参加体験する。さらに後半の授業ではグループ単位で課題解決ワークを実践し、その成果を相互に発表、検討する。	
		教育心理学研究セミナーⅠ	教育心理分野での4年次の卒業論文作成に向けて基本的・発展的内容について学修する。学生たちは各教員のもとで、専門文献や学術論文等に触れることによって、通して専門的内容についての知識確認、専門性の深化等を図る。これによって卒業論文を作成するために必須の素養と視点とを獲得し、次年度の作成に向けての準備・計画を行う。また、これらの中で教員との指導関係や学生との協力関係を築き、研究上の人的ネットワークを構築できるようにもする。	
		教育心理学研究セミナーⅡ	教育心理分野での4年次の卒業論文作成に向けて基本的・発展的内容について学修する。学生たちは各教員のもとで、専門文献や学術論文等に触れることによって、通して専門的内容についての知識確認、専門性の深化等を図る。これによって卒業論文を作成するために必須の素養と視点とを獲得し、次年度の作成に向けての準備・計画を行う。また、これらの中で教員との指導関係や学生との協力関係を築き、研究上の人的ネットワークを構築できるようにもする。ⅡはⅠに続いて行うものである。	
	国語分野	日本語学演習A	日本語の語彙について理解を深め、日本語の仕組みを自分自身で分析できるようになることを目的とする。具体的には、1) 語と語彙、2) 語の基本的な特徴(形式、意味、文法的特徴、文体的特徴)、3) 語種(和語、漢語、外来語)、4) 語構成(単純語、複合語、派生語)、5) 類義語(「たのしい」、「うれしい」)などのトピックを取り上げる。教える側からの一方通行の授業にならないように、学生にも発表(上記のトピックを扱った論文の紹介、上記のトピックについての模擬授業など)を行ってもらう。	
		日本語学演習B	日本語史上の資料を読み、現代語と比較しながら語彙や語法について調査・発表を通して学習する。資料の性質や背景、当代の言語の概観や、言語の歴史的变化について理解を深め、古典に対する知識を広め、古典指導へ資する知識を体験的に得ることを目的とする。また、調査・発表・討議・まとめという演習の流れを通し、言語研究の基本となる形や、プレゼンテーション能力を高めることを体験的に学習する。	
		日本文学演習C	『源氏物語』の影印本(テキスト:宮内庁書陵部蔵 青表紙本『源氏物語』、新典社)を用いて、変体仮名連綿体の本文を、その字母に当たる万葉仮名と併記しつつ、現行のひらがな・歴史的仮名遣いによって翻刻する演習。初回には、ガイダンスを兼ねたレクチャー(『源氏物語』の異本系統について)と、今年度扱う巻名、発表順、各自の分担等を決め、2回目以降の演習は、発表も翻刻の正誤検討も、すべて学生主体に行う。変体仮名に習熟することで、漢字から万葉仮名へ、そしてひらがな・カタカナへという変遷のメカニズムを深く理解することができ、小学校教材として定番の「かなの成り立ち」(第6学年)などの指導する際にも、大いに役立つ。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
分野 専門科目	国語分野	日本文学演習D	中学校の国語科教科書において、各社共通して採られている『竹取物語』『枕草子』『徒然草』『平家物語』『万葉集・古今和歌集・新古今和歌集』『奥の細道』を主たる対象に、その指導法について受講者各人が考察し、その成果を発表。それに対して学生相互に検討を重ねる演習。なおその際、上記以外の作品を対象とすることも、中学校以外の校種を想定することも可。また、学生の演習に先立ち、ガイダンスを兼ねた導入として、数回の講義(内容：『枕草子』『春はあけぼの』の教材観、『平家物語』を他学年教材につなげる)を設定している。	
		漢文学演習	句読点や返り点がない漢文(白文)を、漢文学概説で習得した漢文法その他の知識を利用して、正確な訓読並びに現代語訳ができる方法を習得することを目標とする。高等学校・中学校で教材として使用されるものを中心として中国古典の散文・韻文を読解する。時には本文だけでなく、注釈を読解することを行う。また、本文校訂の方法をも修得する。演習形式で行い、発表者には、レジュメを作成することを課す。なお、読解する作品としては、『論語』『史記』、唐宋八大家の文章、唐詩、『聊齋志異』、文学理論書等の中から適宜選択する。	
		書写演習A	「書写法」を履修した上で、さらに国語科書写への理解を深める。硬筆では、行書を中心に点画や連綿の書き方を学ぶ。毛筆では、日中の名跡(漢字)を中心に臨書し、基本的な筆遣いや筆法を習得する。楷書・行書を基盤として、草書・隸書といった発展的学習にも取り組む。実技指導に加え、中国書道史についても講義し、楷書・行書・草書・隸書・篆書の各書体の成立や文字の歴史、名跡の特徴、古典の遺した足跡について学ぶ。また、展覧会の鑑賞も推奨し、鑑賞眼を涵養する。	
		書写演習B	「書写法」を履修した上で、より国語科書写に対する理解を深める。硬筆では、毛筆の基礎となるよう草書のくずしや連綿(仮名)と両者の関連性について認識する。毛筆では、日本の古筆(仮名)を臨書し、基本的な筆遣いを習得する。仮名の習熟が、硬筆の技量向上に活かされることに留意させる。実技指導に加え、日本書道史についても講義し、万葉仮名・草仮名・平仮名の成立の歴史、各古筆の特徴について理解を深める。また、展覧会の鑑賞も推奨し、鑑賞眼を涵養する。	
		国語教育演習A	国語科における授業実践の目的、内容、方法について理解を深め、学習指導要領を踏まえた授業を構想していく。〔思考力、判断力、表現力等〕のA、B、C各領域における指導事項、及び学習過程を踏まえながら教材を分析・構成し、授業を具体的にデザインする演習を行う。「社会に開かれた教育課程」の視点から国語科の学習指導を捉え直すとともに、初等・中等教育の期間における子どもの発達段階に応じた国語科学習指導のあり方について理解を深め授業研究の能力を培う。	
		国語教育演習B	国語科の教材研究や授業分析、児童の言語発達や言語環境等に関わる先行研究の講読を通して、教材研究の方法、授業の作り方や授業の見方、児童言語の捉え方等の実際を学ぶ。具体的には、これまでの教材研究の歴史や授業実践研究、言語データの分析方法などについて学ぶ。授業場面の視聴や様々な言語データの収集などを行い、国語教育に関わる多面的な観察や分析の方法を学ぶ。研究や分析で得た知見を活かしてさらなる実践力の養成を行うとともに、国語教育領域における諸課題について理解を深め、卒業論文につなげる。	
		国語研究演習	国語学、国文学、国語教育に関する先行研究や近年の研究動向を調査して、解決すべき今日的課題を各自で設定する。その上で、各自で設定した課題の解決のために必要なさらなる情報の収集や分析に努める。本授業は、教育実習A、教育実習Bの後に行われる。教育実習によって体感できたはずの、実際の子供の様子、教師・学校の役割、責務を、それぞれの研究テーマと関連付けて、研究を進めていく。各研究室において、口頭発表を複数回行い、教員、所属学生と意見交換を行い、互いに学び合う。	集中

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
分 野 専 門 科 目	社 会 分 野	日本史特講	日本史の特定の時代やテーマについて学習しながら、歴史学的思考を高める。社会科・地歴教員として必要な日本史に関する知識を習得すると同時に、歴史教育の中で思考を育む方途を探っていく。授業では、(1)史料(典籍・記録・古文書等)の読解を取り入れ、史料から何を読み取り、そこからどのような歴史がわかるのかを考えることで、歴史に対する理解を深める。また、(2)最新の研究成果やさまざまな学説を紹介し、固定された知識の暗記には留まらない論点を強調し、思考を促す。(1)と(2)を通して、歴史研究の現場では何が行われているのかを学び、それを歴史教育にいかにか活かしていくのかを考える。	
		日本史講読	まず、日本史に関する史料にはどんなものがあり、それぞれどのように読めばいいのかを解説する。つぎに、史料を輪読方式で読解するとともに、史料講読に関する代表的な解説書を授業に平行して読みながら、各人に指定された史料の読解結果を報告してもらい、それに対して参加者全体で討論を行う。社会科・地歴教員として、教科書・史料集等に出てくる基本的な史料に親しみ、できる限り自分で読解できるようにする能力を身に付けていく。	
		外国史特講	「死者の埋葬・祖先崇拝と近代社会」と題して講義する。おおまかにいって、前近代社会においては、死は血縁・地縁共同体に担われていた。死が近づくとき親類・近所、在地聖職者が集まって死を看取った。通夜、葬式も血縁・地縁共同体の仕事であった。その後の法要も同じである。死者と生者は1つの共同体をつくっていた。墓地は、教会・寺院による儀式の場であると同時に、世俗の場でもあった。墓地では、手仕事、商売、祭りのダンス、裁判などがおこなわれている。 19世紀以降、死者は地縁共同体から徐々に排除され始める。墓地につくられた遺体安置所が通夜を不要にしていっていった。墓地も、もはや市内ではなく郊外に造られることによって、その管理が、地縁社会から行政の手に移っていくことになる。 しかし、その具体的なあり方は日本と諸外国では異なっている。講義においては日本、ドイツ、華僑社会などの事例をとりあげながら中近世から21世紀までを概観し、人々の死へのかかわり方について考える。	
		外国史講読	夏目漱石、芥川龍之介の中国に関する紀行文を読むこと、また近代中国を代表する作家・魯迅の短編小説を読むことを通じ、小中学校の国語科でも必ず登場する作家の作品を歴史学・外国史の視点から理解することを目指す。当然ながら、作家の作品には当時の時代背景が投影されている。彼らの生きた時代が、中国や日本にとっていかなる時代だったのか、政治史、メディア史、社会史など、多角的な視点から考える習慣を身に付けたい。	
		人文地理学特講	経済地理学の研究視角を学びながら、農業、製造業、流通・サービス業などの地域的展開を科学的に説明するための立地論や各種モデルについて講義する。次に歴史地理学的観点から、それら経済活動の舞台となった地域について、さまざまな時間と空間における歴史的景観を読み解き、地域の歴史的背景をふまえて、過去から現在に至る地域変容について考察する。中近世の地図、中世の荘園、近世の城下町、近世の農地開発などの具体的な事例の検討を通じて、景観の特色を理解し、産業地域に関する地理的認識を深めるとともに、社会科の地理的分野と歴史的分野をつなぐ視点を修得する。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
分野 専門科目	社会 分野	自然地理学特講	国内外における過去の自然災害発生事例を概観し、人間社会と災害リスクとの関係とその変化について学んでいく。自然災害のリスクは地域的な差異があり、なぜそのような差異が生じるのか、既往の災害事例を通して考察していく。また、自然環境の地域的特質についても学んでいき、地域の自然環境と産業などとの関係について、過去から現在までの多時期の地形図や空中写真などを活用しつつ理解を深めていきたい。	
		地理学実習	地理学の分野で卒業論文を作成するために必要な手法について学ぶ。地理学における資料・統計の収集と分析、主題図などの各種地図の作成方法、野外調査の手法について学ぶ。2泊3日のフィールドワーク（共同／全9回）を含む。 （オムニバス方式／全6回） （39 関戸明子／3回） 地図表現・統計データの概要，統計を利用したグラフ・地図の作成，主題図の活用方法を学ぶ。 （89 青山雅史／3回） 現地観察や地図・空中写真を用いた地域の自然環境や土地利用の調べ方、GISを活用した主題図の作成方法などを学ぶ。	共同（一部） オムニバス方式
		地理学野外調査実習	地理学における野外調査の手法について修得し、データの図表化、レポート作成能力を養う。3泊4日の野外調査を実施する。野外観察の仕方、聞き取り調査やアンケート調査、地形測量や露頭における地層観察・記載、気温・地温・水温観測など、基礎的な地理学の野外調査を行い、地域調査レポートを作成する。事前に調査地域・調査内容の概説、テーマに関する文献講読、事後にデータの整理を行う。	共同 集中
		法学特講A	日本国憲法第3章の基本的な人権について、自由権、社会権、参政権、平等原則のそれぞれにかかわって、どのような法制度があるのか、またどのような課題があるのか、どのような紛争が生じていて裁判所はどのように判断しているのか、といったことを検討する。また、人権保障の意義と司法の役割について、具体的な裁判例を取り上げながら検討を加える。さらに、現代日本法制の立法論上または解釈論上の課題を、国際比較の視点を取り入れながら検討する。このような過程を通して、受講生が法的思考法を身につけることを目的とする。	
		法学特講B	国家の権力作用の中でも立法・行政に比べて情報に接することの少ない司法について、その果たしている役割を、憲法の諸規定を踏まえながら手続き法に即して検討する。また、現代日本法制の諸課題を、それらを通じた法政策の視点から、最近の立法動向を視野に入れながら分析する。さらに、法教育、主権者教育、人権教育、消費者教育といった法と教育にかかわる諸課題について、中学校社会科ないしは高等学校公民科における授業実践を念頭において検討する。	
		法学講読	ジェンダーと法についての文献の講読を通じて、現代日本の課題を考察する。女性差別撤廃条約など国際社会の動向とジェンダー主流化の展開、人権とジェンダー、セクシュアル・ハラスメント、性的自己決定権の侵害、買春と人身取引、性と生殖の権利（リプロダクティブ・ライツ）、家族法とその課題（婚姻適齢、再婚禁止期間、夫婦別姓など）、離婚をめぐる諸問題、親子関係と生殖補助医療、親密圏における暴力（ドメスティック・バイオレンス）、労働者保護の基本、雇用における差別（男女雇用機会均等法など）、ワーク・ライフ・バランス（育児介護休業法、労働基準法など）、労働法の保護から排除される労働者といった問題を取り上げる。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
分野 専門科目	社会分野	社会学特講	社会学の方法論を用いて、現代日本社会が抱える様々な問題を分析し、解決するための方法を考察する。 宇都宮大学では学歴社会という問題を中心に考察し、群馬大学ではジェンダー、若者のアイデンティティ、格差社会についてとりあげるが、ともに現代社会の特質や他社会との比較を重視し、客観的なデータに基づいて社会的に捉える仕方を身につけることを目的とする。	
		経済学概論	まず、家計の選好、効用最大化、需要、供給、などのマイクロ経済学の議論、及びGDP等の経済統計や景気変動の理論などのマクロ経済学の議論を基礎的に学習する。そのあと、具体的な経済のあり方、現代社会の経済をめぐる諸問題（国家の役割、他国との経済関係の変遷、代表的な産業の動向、格差の拡大、環境問題など）を日本社会の変遷に注目しつつ学習していく。その際、日本と諸外国との間の経済的なつながりやアメリカ、中国など代表的な国との経済のあり方に関する比較の視点を織り交ぜながら授業を進める。経済学の基本的な方法論の応用を学び、経済学的な思考のセンスを養うことを最終的な目標とする。	
		哲学特講	西洋近代哲学史を概観し、その概念・論理・主張と歴史的意義について理解する。原則として一回の講義で一人の思想家を取り上げ、主要な哲学的議論を解説していく。カントとヘーゲルについてはとくに重要かつ難解なため、複数回に分けて解説していく。哲学および哲学史に学びながら、同時に、哲学の一分野である「論理学」を基礎に、①他者の論証を正確に理解する力、②自らの主張を他者に向けて論証する力、③他者との対話を構築する力を身につける。以上を通じて、現実社会における諸問題の認識能力が高まることが期待される。	
		倫理学特講	「論理的に考える力」を基礎に、社会科教育、公民分野に関わる、自由、人権、民主主義といった基本的価値について、その発想の根幹と論理を含めて理解する。そのために、哲学者・倫理学者の議論を紹介し、彼らのテキストを読み、哲学的論証を再構成し吟味することを通じて現代的諸価値の意味を理解する。また、グループ活動など、アクティブ・ラーニングをとりいれて、学生相互の「対話」を通じて自身の考えを整理、深めることを目指す。適宜、関連論文やニュース記事、独自の解説文章などをその都度配布し、参考資料として用いる。	
		倫理学講読	倫理学的古典的テキストの読解を通じて概念的思考と哲学的論証について理解し、抽象的かつ概念的な思考力を養うことが目的である。そのために倫理学的古典的テキストを輪読していく。授業の進め方としては担当者を決め、毎回レジュメ発表を行い、参加者全員で検討・議論していく。テキストは日本語または英語を用いるが、日本語の場合には原典テキスト（原典が英語でない場合には英訳）を参照し、適宜参照していく。	
		社会科地域調査実習	社会科授業における教材研究とはどのようなものだろうか。この授業では、教材研究の一つであるフィールドワークを中心に行いながら、社会科授業の設計を行う。第一に、対象となる地域と校種や分野を選択し、文献調査を通して教材を選定し深める。第二に、実際にフィールドワークを中心とした地域調査を行い、授業設計の中核を構想する。第三に、これまでの教材研究を踏まえ、授業設計を行う。最後に、成果発表会を実施し、批評しあう。	
		社会科教育学特論	社会科教育に関わる諸理論と授業実践に関わる各種の文献を収集・読解し、それらを踏まえて、深い学びを重視した社会科の授業設計のあり方を学ぶ。諸外国における小学校社会科教育や中高歴史教育の実情に着目し、学習者自身が諸資料を手にしなが、社会的な課題について協同で考察・構想したり対話・討議したりする学習のあり方とその意義について学習する。それを通じて、学習課題と思考過程を重視した深い学びを実現するための社会科の授業設計の在り方について理解を深め、授業実践力を高める。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
分野 専門科目	社会 分野	日本史演習	日本史上の事実や歴史の大きな流れを把握し、日本史に関する史料を読解できることを前提に、ある研究テーマについて積み重ねられてきた研究史を的確に押さえた整理し、自分の考えとの関係を明示しつつ、独自の研究成果を報告する能力を獲得する。そして、それらが学校現場での営みとどんな関係があるのか、社会科の教員としてどう授業に応用可能か、という点まで踏み込んで考える力を獲得する。小・中学校・高等学校での社会科、地歴・公民教育の基盤として、日本史に関する認識を深めることが目標となる。	
		外国史演習	テーマの設定、著書・論文の探索、先行研究の読み込み、各種史料の性格と取り扱う際の注意事項、など、外国史の分野で卒業論文を作成する際の基本的な作業を確実にこなせるようにすることが第一の目標である。次に実際の論文を書くにあたっての議論の進め方、取り組むべき課題などを中間報告によって明確化しながら最終的に卒業論文を完成させることが最終的な目標となる。	
		地理学演習	地理学の分野で卒業論文を作成する能力を修得するために、学術論文の紹介、あるいは卒業論文の中間報告に基づく討議を行う。地理学に関する学術論文を的確に読みこなし、理解できるようにし、文献講読や調査報告をとおして、各自の研究テーマを深めていく。多くの学術論文を読むことで各自の研究テーマにおける研究動向を把握することにより、卒業論文において適切なテーマ設定を行えるようにする。	共同
		法学演習	法学上の多種多様な問題を理解し、自らの研究テーマを見つけ出し調査・分析をすすめることのできる力をつけることを目指して、現代法の諸問題を扱った文献を読んで検討する。その際、国際連合等の国際機関が発表した英語文献を読むことを通して、国際的な視点から人権または民主主義に関わる問題を検討する。テーマとするのは、例えば、性的指向、性自認、障害者の権利、子どもの権利、民主主義と政治参加といった問題である。また、それと合わせて最新の日本語文献を読むことを通して、民主主義と法、平和と法、ジェンダーと法、労働と法といった日本法の現代的課題を検討する。	
		倫理学演習	倫理学の基礎文献（論文または書籍）を講読する。テキストは日本語または英語を用いるが、日本語の場合には原典テキスト（原典が英語でない場合には英訳）を参照し、適宜参照していく。担当者を決め、毎回レジュメによる発表を行い、参加者全員で検討・議論していくことで、深い内容理解を旨とする。また、1か月に一度4年生の卒業研究中間報告を行い、卒業研究の中間成果を参加者全員で共有すると共に、研究内容や手法について学んでいく。	
		社会科教育学演習	社会科教育学では、教科の目的論や内容論、方法論、評価論、学力論など、多様な研究領域を有している。この授業では、認識を深めたい社会科教育学の研究領域について、自ら図書や論文を選定して読解・研究した成果を報告し、質疑応答・指導助言を重ねることを通して、社会科教育学の理論及び実践に関する理解を深める。そして、最終的には、社会科教育に関わる諸課題の解決を目指し、それぞれの研究テーマに関する考えを構築する。	共同

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
分野 専門科目	数学 分野	代数学 I	代数学における群論の初歩について、演習を交えながら講義する。群の定義やその様々な具体例について理解すること、また、非常に基本的に思える群の定義から多くの性質が導かれることを理解することが目標である。学校教育における算数・数学科の内容の背景にある数学の理論について学習する。全15回の講義を通して、「群の定義と具体例」、「部分群の定義とその判定法」、「剰余類とラグランジュの定理」、「準同型写像」等について学ぶ。	
		幾何学 I	平面内または空間内にある曲線、および空間内の曲面について、その幾何的性質を調べる方法を解説する。曲線については微分幾何学的アプローチをとる。すなわち、微分可能なパラメータ表示が与えられた曲線に対し、長さ・曲率・回転数といった量の定まることを示し、それらによって曲線の（パラメータ表示に仕方に依らない）性質が明らかにされることを見る。空間内の曲面については位相幾何学的アプローチにより論ずる。すなわち、曲面上の閉曲線全体の集合を考え、その上に曲線の連続変形に関する同値関係を与え、その同値類が群構造を持つことを解説する。さらに、この群が有向閉曲面の位相型を決定することを示す。	
		解析学 I	この授業では、複素数や複素関数の性質、複素関数の微分積分法についての講義と演習を通し、計算力を養い、複素数の世界における解析学の基礎を身につける。具体的には、全15回の授業を通して、複素数を平面幾何へ応用できること、複素関数の極限值や微分を計算できること、そしてコーシーの積分定理や積分表示の意味がわかり、正則関数の級数展開を複素関数の解析に応用できることを到達目標とする。	
		環論	この授業は、2年生を対象とした選択科目である。本授業の目標は、多項式環を例に環の一般論を身につけることである。全15回の授業を通して、具体的にはイデアル、商環、準同型定理などを理解し、多くの演習問題を通して関数環など様々な具体的な環を紹介し、環論の一般論を身につける。最後には単項イデアル整域の概念を理解し、体上の多項式環の素元分解の一意性を示せるようになるのが目標である。	
		体論	代数学における体論について、演習を交えながら講義する。体の拡大とガロア群との間の関係、及びそれらの代数方程式の可解性や作図問題への応用について理解することが目標である。学校教育における算数・数学科の内容の背景にある数学の理論について学習する。全15回の講義のうち、前半の5回において、体の拡大に関する基本的な性質について学び、中盤の5回において、体の拡大とガロア群との間の関係について学び、後半の5回において、代数方程式の可解性と作図問題への応用について学ぶ。	
		関数解析学	この授業では、各関数の性質を調べる解析学（例えば微分積分）の視点を拡張し、ある性質を満たす関数の成す空間を対象とする。そのためベクトル空間に長さの拡張概念であるノルムを導入し、そのノルムから入る距離によって極限を導入する。また解析学で重要な完備性についても多くの例を用いながら解説する。対象となる空間は、数列空間、関数空間であるが、自ずと無限次元空間を扱うことから、『関数解析学＝無限次元の幾何学』という視点を身につけることが出来る。さらに、内積と呼ばれる計量を導入し、完備化をおこなうことにより、ユークリッド空間に類似の無限次元空間を実感できることを目標とする。	
		現代数学講読	小学校算数から中学校・高等学校の数学において扱われる内容のいくつかに対し、その背景にある理論体系を現代数学の視点から学ぶ。授業はゼミ形式で行われる。各クラスにおいて選定されたテキストを学生自身が読んで理解し、その内容を各回に交代で発表する。その中で、参加者同士による議論を重ねることで理解を深めていく。各受講者の発表の様子や、発表以外の回での議論への参加の仕方によって評価をする。	集中

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
分野専門科目	数学分野	数学研究セミナーⅠ	本授業は、卒業研究を視野に入れて、その基盤を形成することが目標である。代数学、幾何学、解析学、数学教育学の各分野の中で、興味・関心のある分野について学ぶ。授業はゼミ形式で行われる。授業で、学生は調べて考えてきた内容について発表し、教員や他学生とのディスカッションを通して、その内容についての理解を深める。講義を通して、卒業研究に向けて、数学的な視野を広げていく一方で、当該学問分野のテキスト、研究論文及び書籍、国内外の報告書等の調査資料を読解する力をはじめ、批判的に考察する力、対話力、課題を発見し解決する力を身につけていく。	
		数学研究セミナーⅡ	数学研究セミナーⅠにつづき、本授業は、卒業研究を視野に入れて、その基盤を形成するために、代数学、幾何学、解析学、数学教育学の各分野について、ゼミ形式で行われる。授業で、学生は調べて考えてきた内容について発表し、教員や他学生とのディスカッションを通して、その内容についての理解を深める。講義を通して、卒業研究に向けて、数学的な視野を広げていく一方で、当該学問分野のテキスト、研究論文及び書籍、国内外の報告書等の調査資料を読解する力をはじめ、批判的に考察する力、対話力、課題を発見し解決する力を身につけていく。	
	理科分野	物理学特論B	光の基本的な性質や伝わり方を学び、それらが関係する身近な現象についての理解を深め、物理学的な視点から説明できるようになるのが目標である。光を光線として扱う幾何光学、光波として扱う波動光学、光子として扱う量子光学といった、光に対する見方が異なる3つの光学について講義を行う。特に、幾何光学では鏡やレンズ、波動光学では回折や干渉を中心に取り扱い、身近な例などの画像を提示しながら解説し、実際のレンズなどを使った観察も行う。	
		物理学特論C	熱学を初めて学ぼうとする学生を対象とした講義と演習を行う。熱に関しては日常生活の経験から漠然とした理解をしているが、その実験的根拠を明らかにし、基礎法則との関係を理解することから、熱に関連する分野の指導ができるようになることを目的とする。全15回のうち、前半では熱力学第一法則を取り扱い、後半では熱力学第二法則を取り扱うが、適時演習を設けることを計画している。	
		化学特論B	中学校や高等学校理科で扱う有機化学、高分子化学分野を生徒に深く理解させるには、教師自身が有機分子の性質や反応性を体系化して理解している必要がある。そのために本講義では、有機電子論に基づいて有機分子の構造や反応の原理について学ぶ。「反応がどのような道筋を辿って起こるのか」を理解することで、どのような反応が起こるか記憶するのではなく、予測することが可能になる。そのうえで、実社会・実生活で有機化合物や高分子化合物がどのように製造され、利用されているか理解を深める。さらに科学的発展性や教育実践への活用への見通し等についても考える。	
		化学特論C	中学校、高等学校の単元や実生活における化学の関わりを意識しながら無機化学、分析化学、電気化学などを含む各論について基本的事項を概説する。具体的には中学校理科での水溶液、イオン、化学変化、電池、酸とアルカリなどの諸分野や高等学校での化学基礎および化学で学習する理論や無機物質に関する内容をより深く理解し、活用できるようになることを目標とする。無機・分析化学の専門担当教員としての専門性に基づき、素材の専門科学としての内容の解説に加え、実社会との関連、科学教育としての意味等について解説する。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
分野 専門科目	理科分野	生命科学特論B	植物は自然界の「生産者」としてなくてはならない存在であり、その重要性から小学校理科から高等学校生物にかけて、形態から生理、生態まで幅広く学ぶ。この授業では、植物の「生産者」としての特徴と、地球上のさまざまな地域でその位置づけを示すことを可能にしている柔軟な生理学的性質について、最近の研究のトピックスを含めて講義形式で概説し、教員になった際に教科書に書いてある内容以上の植物学の深さ、おもしろさを子どもに伝えられるようになることを目標とする。	
		生命科学特論C	本授業では、行動生態学、動物行動学の内容について講義形式で授業を行う。行動生態学は動物の行動や生態を進化的な視点から明らかにする学問である。本授業において、進化学や遺伝学、数理モデル等を基盤とし、動物の繁殖行動や社会行動などについて学習することで、動物の様々な行動の進化的背景についてその理論や実証研究を理解することを目標とする。また、本授業を通じて、動物の生態について教員や子どもが抱きやすい動物の生態についての誤概念を理解し、それら事象について科学的な説明を行えるようになることを求める。具体的な内容として、動物の利他行動や協力行動などの社会行動、配偶や子の保護などを含む繁殖行動、性の進化、性淘汰、性配分など性に関わる生態について取り上げる。	
		地学特論B	積乱雲の発生・発達機構および雷の発生機構、稲妻の進展過程と避雷方法について理解することを目標とする。授業は積乱雲と雷に関する2つのテーマからなる。積乱雲については、水蒸気の熱力学的特徴を基に上昇気流と下降気流の成因を説明し、ダウンバーストのような積乱雲に伴う災害の発生機構についても説明する。雷については、積乱雲の上昇気流に伴う電荷分離機構と稲妻の進展過程について説明する。また、稲妻の電気としての性質を基に落雷事故が起きる機構を説明し、その知識の応用として、落雷事故から身を守る方法とその原理についても説明する。	
		理科教育実験C	(概要) 基礎物理学実験に引き続き、物理学の基礎的な実験(簡単な放射線の実験を含む)を行い、基本的な実験機器の原理や取り扱いに習熟し、あわせて実験上の留意点、測定値の処理方法、レポートのまとめ方などを学ぶ。実験機器を適切に取り扱うことができ、実験結果を正確にわかりやすくレポートにまとめられるようになることが目標である。2人1組となつて、割り当てられたテーマの実験を行い、テーマごとに各自がそれぞれレポートを提出する。 (オムニバス方式/全15回) (117 寺嶋容明/6回) 振り子による重力加速度の測定や回折格子による光の干渉の実験などを行う。 (88 青木悠樹/9回) GM計数管による放射線の測定、光電効果によるプランク定数の測定、ミリカンの油滴実験による電気素量の測定などを行う。	オムニバス方式
		理科教育実験D	中学校、高等学校理科の化学分野の実験教材の作成やそれを使った実験を通して、実験技術を習得すると同時に、既存の教材の改良や新規教材を作製する技能を習得する。 (オムニバス方式/全15回) (99 岸岡真也/7回) 例えば理科の教材となり得る色素増感太陽電池の作製などを通して無機・分析化学分野における実験技術を習得すると共に、既存の教材の改良や新規教材の開発、理科授業における活用方法について考える。 (49 日置英彰/8回) 例えば理科の教材となり得るインジゴ系染料の合成と染色などを通して、有機・高分子化学分野における実験技術を習得すると共に、既存の教材の改良や新規教材の開発、理科授業における活用方法について考える。	オムニバス方式

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
分野専門科目	理科分野 理科教育実験E	<p>基礎生物学実験では小・中・高における生物学実験の基礎となる最低限の手法を学んだ。この授業ではより発展的な内容について実験を行い、手法を身につけるだけでなく、科学的な思考法で結果の考察を行えるようになり、またそれを指導できるようになることを目標とする。</p> <p>(オムニバス方式／全15回)</p> <p>(108 佐藤綾／7回) 土壌動物の観察、ダンゴムシの行動特性、カエルの解剖、脊椎動物の脳の解剖と観察、実験におけるデータの取り扱いなどの実験を担当する。</p> <p>(37 佐野史／8回) 光合成の検出、光合成色素の分離、プロトプラスト調製、メンデル遺伝の確認、DNA抽出と電気泳動などの実験を担当する。</p>	オムニバス方式
	理科教育実験F	<p>気象分野の発展学習を意識した共通実験と個別実験の2つのテーマについて、学生が実験を計画・実行し、実験結果を発表することを目標とする。共通実験では、トリチェリーの実験で使われる水銀の代わりに水を使った気圧計を作製し、精密気圧計から得られた測定値との比較を行う。その過程で、飽和水蒸気分圧の補正方法や水から脱気した空気分圧の補正法を学生が考え、気圧の測定には地学・化学・物理分野の知識が必要なることを理解する。また、個別実験では、人工雪、チンダル像、気象データ解析などから学生が興味を持つテーマを1つ選び、各学生が明らかにしたいことを明確にした上で、それ実験・解析方法を学生が計画、実行し、成果を発表する。</p>	
	音楽分野 ソルフェージュ応用	<p>音楽の基礎である初見視唱、リズム、コード奏、ハ音記号などソルフェージュの実践を通じて、教育現場での実践能力や専門的な勉強をする上での基本的な能力を養う。初見視唱は調、テンポ、リズム、音程等の音楽的諸要素を瞬時に把握し、演奏に繋げる。リズムは両手の叩きによる複雑なリズムへの対応。コード奏は、前段階の「ソルフェージュ」で学んだことを土台として、より複雑な旋律、コード記号への理解と曲想に合わせたピアノ演奏を行うことが求められる。ハ音記号読みの習得は管弦楽、吹奏楽の移調楽器等の読みや、移調楽器のための編曲に不可欠であり、教育現場での指導を踏まえ、読むことに止まらず、音楽表現にも結びつけてゆく。</p>	
音楽分野 和声法基礎	<p>和声は調性音楽において楽曲を形作る基盤をなすもので、楽曲を分析、解釈、演奏、創作するためにかかせない学修である。本講義ではバス課題を中心とした基本位置、第一転回形、第二転回形、属七の和音について学び、課題の実施については、上三声の和音の配置、連結、ソプラノの旋律線に留意し、和声の規則を厳守することに留まることなく音楽的に優れた解答に導くこと、その音楽的效果を感受することが求められる。また、段階に応じた実際の楽曲の分析により、楽曲における和声の役割と実用性について理解し、音楽の成り立ちに留意された演奏や、創作を行うことの素養を身につけることを目標とする。</p>		

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
分野専門科目 音楽分野	和声法応用	和声は調性音楽において楽曲を形作る基盤をなすもので、楽曲を分析、解釈、演奏、創作するためにかかせない学修である。本講義では、バス課題は属九の和音、II7の和音、準固有和音、ドッペルドミナントについて学び、課題の実施については、上三声の和音の配置、連結、ソプラノの旋律線に留意し、和声の規則を厳守することに留まることなく音楽的に優れた解答に導くこと、その音楽的効果を感じることが求められる。また、段階に応じた実際の楽曲の分析により、楽曲における和声の役割と実用性について理解し、音楽の成り立ちに留意された演奏や、創作を行うことの素養を身につけることを目標とする。	
	指揮法応用	指揮を行う際の姿勢、振り方、楽曲の特徴や性格を音楽として表現するための方策について講義を行うとともに、個人指導を基本とする実技指導を行う。特に指揮において大きな課題となる変拍子への理解と指揮の実際、フェルマータの様々な扱い、テンポの変化やセクションの転換に伴う指揮の動作について、理論的に理解し、実際の動作に繋げてゆく手法を獲得する。また、深い作品への解釈に裏付けられた指揮が音楽作品を高い次元に導いてゆくことを、実際に楽曲を指揮することを通して体感するとともに、様々な楽曲のどんな局面においても適切に対応できる能力を養う。	
	邦楽器演習	我が国の伝統的な芸術、芸能、音楽について、理解と経験を深めるために、和楽器に親しみ、様々な実践を通して伝統音楽についての意識を活性化する。生田流箏曲の基本的奏法を学び、様々な奏法や演奏形態を体験しながら実践を通してその良さを知る。また、箏を用いた学校器楽授業を想定し、1つの楽器を複数人で演奏したり、他の楽器と合奏をしたりするなど、将来学校現場において創意工夫した教材提供を可能にするためのアイデアを実践を通して探る。	
	管弦打楽器演習	音楽授業に振幅と深みをもたらす器楽分野のよりよい理解と実践力の養成のために、管弦打楽器の演習を通してその特徴を理解し、演奏技能の修得、上達を図る。履修者の実力に応じて個人またはグループでのレッスンをを行い、ソロやアンサンブルでの演奏実践を通して楽器の特徴を理解し、より高度な表現を追求する。学期中に1、2回の演奏発表の機会を設け、個別の到達目標を明確に掲げて取り組むだけでなく、相互に鑑賞することで幅広い演奏形態への理解を深める。	
	ピアノ演習	ピアノの演奏実践を行う。バロック、古典派、ロマン派、近現代、それぞれの音楽史上の意義を把握することを前提とした上で、ピアノ作品の演奏を通して、作品の様式理解・技巧の分析・練習の方法論等を学び、作品の難易度と自己の演奏グレードも認識した上で作品の選択方法についても学習する。そして読譜の段階から高度な音楽表現にいたるまでの過程も学ぶことで、種々のグレード別の演奏技巧習得法も学ぶ。	
	ピアノ学習法	ピアノ演奏の学習者自身が、演奏に必要な知識を習得することを目指す。ピアノ作品を初級・中級・上級に分類し、それらの詳細なグレードも研究すること、および演奏技巧について包括的な学びを通じて、作品の技巧を習得するのにどのような練習が必要なのかを考え、また、どのような学び方・指導が必要なのかについても考える。それにより、「技術の習得」のみにとどまらない実技の学び方についても考察する。	
	合唱	基礎学習を基に、教育家あるいは演奏家の立場として進んで音楽に参加しようとする態度を鍛える。既習曲や共通教材の模擬指導・弾き歌いを通じ、指導上・演奏ポイントに対して多面的な関心を持ち、自主的で自律的な学習を目指す。主に西洋・日本の合唱曲を取り上げる。目標は音楽や詩はもとより、現代と過去の音楽・文化・時代などの背景を考えることができる。音楽の基本的な実践的能力を身につけ、個性的・独創的な表現ができ、また他者のその点を認めることができる。美しい響きを感じながら、音楽的に歌うことができ、楽しい合唱指導ができる。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
分野 専門科目	音楽 分野	和楽器授業実践演習	中学校における和楽器授業について、より効果的で実践可能な教材研究・授業研究を行う。楽器の台数や、授業時間数が制限される場合が多い学校現場を想定し、複数名で同一の箏を演奏するアンサンブルや創作活動、または歌唱との領域横断など、創意工夫した教材・授業案の開発を行う。その後、附属中学校での箏の連携授業において、実際に授業に参加し生徒をサポートする中で、それらの教材授業研究を実践的に検証し、指導力を養う。	
		室内楽（二）	履修者による管弦打楽器、ピアノによるアンサンブルを通して、室内楽について実践的に学ぶ。同種や、木管楽器、弦楽器、金管楽器等での異種の楽器のアンサンブル（二重奏～五重奏など）はもちろん、ピアノと管弦打楽器による二重奏においても、各パートが重要な役割を担い、室内乐的な楽曲も多い。履修者は選曲しアンサンブルを編成して受講し、グループレッスン、発表を行う。その過程で取り進む曲の背景や編成、各楽器の役割について理解を深め、適した表現力を磨く。	
		声楽演習	声楽A・Bにおいて、声楽の技能を含めた発声全体について学び、それに引き続き、さらなる歌唱技能を磨き、教育のスキルアップを目指す。歌唱活動の最も基本となるイタリア語に加え、ドイツ語、フランス語、英語、日本語の歌曲にも取り組む。さらにオペラやオラトリオ等の作品も取り上げ、任意の楽曲または課題曲などを分析的に把握する力をつけ、音楽と詩（台本）が表現していることを自らを感じ取り、歌を通して豊かな表現力を養い、そのことがそれぞれの演奏ジャンルにも結び付けられるようにする。	
		音楽史概説	西洋音楽、日本の伝統音楽、民族音楽を概観し、それぞれの音楽についての理解を深めることをねらいとする。授業の到達目標は、主要な音楽作品やジャンルを説明できること、音楽の歴史的な流れや社会における役割の変化を説明できることとする。授業では、西洋音楽、日本の伝統音楽、民族音楽を概観する。そして、それぞれの音楽の特徴や歴史的な変遷について学ぶ。授業では講義を中心に、音源や映像、楽譜や画像などの資料を用いながら進める。	
		中等科音楽科授業演習A	附属学校における授業参観及び授業分析を通して、中学校及び高等学校の音楽授業の具体像をもてるようにする。それを踏まえ、実習での経験を活かしながら、学生各自が指導案を作成し、模擬授業を実施して授業内容や方法の検討を行う。扱う内容は今日的課題を踏まえ、創作、鑑賞、我が国の伝統音楽、諸民族の音楽を中心に行い、教材研究を踏まえて歌唱、器楽、鑑賞、創作の領域ごとに音楽科の授業をつくる力を身に付けていく。これらを通して、中等科音楽教師に求められる高度な知識、技能を獲得し、それらを授業に生かす実践的指導力を目指す。	
		中等科音楽科授業演習B	中等科音楽教育の理論と実践について理解し、学習指導要領の目標や指導内容等について、また指導内容に対する知識をもとに教材理解や解釈を深め、学習指導に生かす指導理念や方法を各自が説明できるようにする。 教育実習での経験をもとに、中学生や高校生が意欲的に授業に取り組み、音楽的な知識及び音楽的な諸能力を培うための指導法について考察する。具体的な課題等を各自が提示し、音楽教育に関連する様々な学問的背景を踏まえながら音楽科教育の理論と実践の統一を志向する。以上を通して、中等科音楽教師に期待される高度な知識、技能を獲得し、それらを授業に生かす実践的指導力を目指す。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
分 野 専 門 科 目	美 術 分 野	絵画C	学習者自らが主題を生み出し、主題を表現するのに適切な媒体や技法を模索・創出することを通して、絵画における色・形・イメージに対する理解を深め、表現に必要な思考方法や態度を養う。学習者が個々に生み出した主題に基づき、『表現基礎〔絵画〕』による既習事項を応用・発展させながら、主題に適した表現媒体や技法を創出して作品を制作し、合わせて作品の展示方法についても考察する。また、受講生には自分の制作した作品について解説を課し、絵画に関するリテラシーの強化も図る。	
		絵画特別研究	本演習では、人物モデルを対象にした実制作を通して、絵画制作に不可欠な空間や対象を認識する力、構成力、描画力の基礎を高める。特に、美術教育における人物表現の意義と価値について考察できるようにする。演習は、課題制作を行うことによって進める。制作前には人体構造を講義するとともに、題材の価値ならびに、描画上の造形知識について説明を行う。課題後には制作者によるプレゼン形式の発表を行い、受講者相互で批評を行う。	
		彫刻C	塑造による人体像の制作を通し、対象をとらえ立体に表現する基礎的技能を身につけるとともに、彫刻表現の意味と可能性について考察し立体造形追求のための視野を広げる。ここでは、モデルを使い全身像（またはトルソ、胸像）を制作する。粘土による塑造から石膏取りまで、塑造による彫刻制作の基本を実習する。また、批評会・制作について小レポートにまとめることを含み一連の課題を通し美術科教育への可能性と意義について考察する。	
		彫刻D	自ら設定した自由な主題及び課題を表現するために、塑造・彫造、具象・抽象、材料・技法など既習経験をもとに各自で最適なアプローチを模索しながら、立体表現を試みる。具体的には、彫刻の概念を拡大することを視野に、インスタレーション的な空間構成も試み、現代彫刻の状況や可能性についての検討を含む。また、批評会・制作について小レポートにまとめることを含み一連の課題を通し美術科教育への可能性と意義について考察する。	
		彫刻特別研究	中学校美術科・小学校図画工作科における彫刻・立体造形に関する題材開発および指導力をつけるための演習を行う。現行の美術科・図画工作科の教科書で紹介されている題材について調査し、その価値、問題点などを検討する。その上で、より適切な題材のあり方を考え、児童生徒に指導する場面を想定しながら題材開発を行う。また、「鑑賞」領域における立体作品の扱いについても検討する。常に、空間における立体表現の意義、彫刻とはなにかという本質について考察しながら、教育的意義や必要性に関して論考を深める。	
		デザインC	本授業ではグラフィック・デザイン及び、主に地域等を主題としたデザイン・プロジェクトの実習課題を行い、デザイン分野の教科内容における題材開発や指導力のより一層の向上をテーマとする。そして、様々な対象に応じるプロセスの計画力、課題を社会とのつながりの中で捉え発想や構想していく能力、デザインの意図を適切かつ効果的に伝えるためのプレゼンテーション力など、デザイン分野での発展的な能力の獲得を目標とする。教員が設定するグラフィック・デザイン及び、地域等のデザイン・プロジェクトの課題を授業回ごとに段階を追って行う。課題制作においては、各段階でポートフォリオにまとめてもらい、それらをもとにした全体や個人指導によって展開する。	
		デザイン特別研究	本授業は、デザイン分野における教科内容の題材開発や指導力のより一層の向上をテーマとする。色彩等の基礎的な既習のデザイン造形を踏まえ、さらに光やテクスチャ、動きなどの造形要素にも着眼し、それら造形要素と発想・構想や技能との関係を演習によって考察し、デザイン分野での発展的な能力の獲得を目標とする。内容は、教員が設定する金属、木材、プラスチック等の材料要素、あるいは光、空間、動き、テクスチャ、構成手法等に着目した課題を授業回ごとに行い、各課題作品を発想・構想、技能などから考察したポートフォリオにまとめ、それらをもとにした全体や個人指導によって展開する。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
分野 専門科目	美術分野		
	美学芸術学概論	美術の歴史と理論を幅広く取り上げ専門的な知識を深める。古代から現代までの様々な美術と美の概念について、美学、芸術学、美術史のこれまでの研究成果を踏まえその学的観点を体系的に理解するとともに、美術・芸術を論理的に考察する力を培い、教育・研究に活用するための素養を高める。ギリシア哲学から派生する美学の流れ、近代の美術概念の変容、日本における美術概念の受容と生成、現代におけるコミュニケーションの美学など、諸理論の文献講読と作品の調査・分析を行ない、幅広い観点から「美／美術とは何か」という学的根本問題を視野に探究する。テーマごとに、調査、レポート、小論等の作成を課題とする。	
	日本美術史概論	そもそも「美術」とは、近代以降に訳語として用いられるようになった概念であるが、それ以前にも様々な「美術的なもの」がつけられてきた。この授業では、日本において生み出されてきた造形の歴史について、先史・古代から現代に至る通史を概観する。その際、「かざり」「ユーモア」「平面性」などのテーマを設定することで、美術作品を通して日本文化の特徴について理解を深める。また、マンガをはじめとするいわゆる「サブカルチャー」も取り上げることで、今日の多様な視覚文化とのつながりについても講じる。授業では、対話型鑑賞の手法も交えながら、日本美術史で得た知識をどのように鑑賞教育に取り込んでいくことができるのかについても考察する。	
	美術教育特別演習	地域学習としてのワークショップの意義や手法を学び、ワークショップの企画、運営、記録、発表までの一連のプロセスを学習する。県内における教育現場をフィールドとして、アーティストによるアート・ワークショップを体験し、学生はファシリテーター（進行・促進役）として学習内容及び参加者（地域の児童生徒ら）同士をつなぐ役割を担い、アートが人々とのコミュニケーションに大いに関連することを学ぶ。特に、ワークショップの活動記録等も協同でまとめ、学習の過程を省察する力も身につけていく。	
	美術教育研究セミナーI	美術教育研究セミナーIは、美術の各専門分野（絵画・デザイン・美術理論・美術教育等）の中から自ら定めた分野の基礎演習課題に取り組みながら、専門性を深めていく授業である。卒業研究に向けて、美術教育を踏まえた上での専門的知識と経験を深める目的で開講する。各専門分野の教員によるチュートリアルやゼミ形式の授業において、学生個人の研究テーマ設定から探究に至るまで、リサーチ・メソッドに基づく研究プロセスを重視し、学生自身が主体的に学べるような授業展開とする。	
	美術教育研究セミナーII	美術教育研究セミナーIに続き、美術の各専門分野（絵画・デザイン・美術理論・美術教育等）の中から自ら定めた分野の基礎演習課題に取り組みながら、専門性を深めていく授業である。卒業研究に向けて、美術教育を踏まえた上での専門的知識と経験を深める目的で開講する。各専門分野の教員によるチュートリアルやゼミ形式の授業において、学生個人の研究テーマ設定から探究に至るまで、リサーチ・メソッドに基づく研究プロセスを重視し、学生自身が主体的に学べるような授業展開とする。	
芸術学特別演習	今日の芸術学を象徴するテーマとして「地域と芸術」について取り上げる。近年、日本各地で開催されているコミュニティ型アートプロジェクトや地域芸術祭の事例を取り上げながら、地域社会において美術・芸術に求められる役割や文化行政との関わり方について講じる。また、海外での事例も参照しつつ、日本における現代美術の動向を客観的に把握する視点を構築する。その上で、各自が関心のある芸術実践を取り上げ、歴史的な位置づけや社会との関わりについて文献やフィールドワークを通して調査する。調査結果はレポートにまとめ、芸術学の論文を執筆するための基礎を身につける。		

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
分野専門科目	運動方法論	様々な運動動作について、運動の仕組みや構造を理解することで、その運動が持つ動作の特性を把握し、指導の際により効果的な指導法を模索できるよう学習を進める。また、実際に運動を行い、その動作特性について考察を行うことで、体格や運動能力の違いによる動きの違いや、その際の改善点などを運動の仕組みを踏まえた上で安全で効果的な学習指導につながるよう、運動動作がもつ特性を読み解く能力を身につける。	
	解剖生理学	本授業では、細胞単位から臓器・器官まで、人体の構造や機能について学習し、その理解を通じて、以下の3点を達成することを目標とする。 ① 発育発達、身体活動の基盤的な仕組みについて理解する。 ② 解剖学的、生理学的視点から運動を捉えて、技能の発達、上達を目指すことができる。 ③ 教育現場での授業や課外活動に活かすことができる。 講義は、細胞単位の学習からはじめ、人体の系統ごとに分けて学習を進める。学校現場等において、子どもの発育発達や技能向上を目指す授業計画や指導ができるよう、学生間でのディスカッションの時間を設けて、解剖学的、生理学的な思考能力を深める。	
	スポーツ哲学	本授業では、スポーツ、身体運動文化、身体、身体教育に関する哲学的アプローチについて理解することを目的とする。スポーツ、身体運動文化、身体、身体教育についての研究成果をもとに、スポーツ、学校体育全般における現在的問題について意見を持つことを目的とする。授業では、①体育概念について、②スポーツ文化論について、③「体育」「スポーツ」の現在的問題について、④身体論についてを主なテーマとして取り扱う。	
	体育・スポーツ心理学演習	本講義を通して、運動・スポーツにおける心理的側面の重要性について理解する。また、運動パフォーマンス発揮や健康づくりに役立つ、諸理論および諸技法について理解し、それらを実際に活用できる技術を養う。授業は、「競技スポーツの心理学」と「健康スポーツの心理学」「学校体育の心理学」との3つの内容に大別して展開し、各内容では、さらに毎週詳細なテーマを設定し、それぞれについて学習を進める。	集中
	学校保健Ⅱ	教育現場で発生する健康に関する問題について、その背景、発生要因、問題発見、解決方法、事後処置などについて、事例をあげて学習する。これらの学習を通して学校における保健管理的視点の育成と能力の開発を行う。到達目標としては、学校保健Ⅰで学んだ保健や安全に関する活動についての知識や技術を活用しながら、学校における健康や安全にかかわる新しい問題について、実際の事例を通して学習を進める。これらの学習を通して、より良い学校保健活動の運営を行う能力を高めていく。講義形式の授業で基本事項の確認を行った後に、グループを作り、課題学習形式で問題発見から問題解決方法の検討までを行い、最後にグループでの成果発表を行う。	
	健康教育	本授業の目的は健康教育の意義を理解し、健康教育に必要な基本的なスキル、教材作成、及び実践について学ぶことである。健康教育の理論、指導法、評価方法を学習した上で、グループに分かれ健康教育を企画し教材を作成し、模擬授業を行う。前半は講義形式で、健康教育と健康行動、健康教育研究の基礎理論、学校における健康教育、生活習慣・メンタルヘルス・性の問題などについて学び、後半では教材化の方法、授業実施、評価について、授業づくりの作業を通して学習する。	
	体づくり運動	①体づくり運動の学習指導要領上の位置づけについて理解でき、②各校種や発達の段階に応じて取り上げる運動について理解するとともに、実際にその運動を行うことができる、③複数の運動を組み合わせる行うことができる、④生活に生かす運動の計画を立案し、それを行うことができる、を目標とする。学習指導要領で取り上げられている運動の例をもとに、体づくり運動の実技を行い、運動の取り上げ方を知るとともに、運動の組み合わせ方を考え実践する。	集中

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
保健体育分野	球技G	ゴール型の球技種目の一つであるサッカーを中心に、基本的なルールを理解や技能の習得を目指す。また、ゴール型の球技種目の運動特性を踏まえた上で、発達段階に合わせた基本技能を身につける際の指導方法の模索や、チームスポーツの持つ特性を活かした授業づくりについて実践を通じて学習する。また、模擬授業を行い、互いに指導を行うことで指導力を高めるとともに、ゴール型の教材の授業づくりの能力を高める。	集中
	野外実習 A	野外活動の一つであるスキーを取り上げ、自らの技能を高めるとともに、指導の際のポイントを身につける。また、用具を使うスポーツであることから、用具の管理方法や場所や指導の際の安全管理についての基礎的知識を身につける。さらに、スキーが生涯スポーツへの位置づけとなるよう、その特性や基礎的技能、楽しみ方について理解する。授業においては、実際のスキー場での集中講義を通して、スキーの技能を習得し、その指導法について学ぶ。	共同／集中
	野外実習 B	野外活動としてのスキーについて、基礎的技能の習得および指導力のさらなる向上を目指す。動画などを用いて動作の改善ポイントなど、互いの滑りを比較したり、声掛けや指導を積極的に行うことで、野外実習 A において身に付けた技能をさらに向上させる。また、受講者相互の指導を通じて、野外実習 A で身につけた基礎的知識を、自らが指導の際に活かすことができる実践的で応用の効くものへと昇華させ、指導能力の向上を図る。	集中
分野専門科目	家族関係論	私たち人間は、特殊な場合を除いて、家族の中で生まれ育てられる。家族はあまりにも身近な存在であるために、家族について自分なりの見解をもち確信をもって語る者も少なくない。しかしそれは、個人の私的体験の範囲内で得た情報をベースにしている場合が多い。家族に関する概念や客観的データに基づいて、また現代社会の動きも視野に入れながら、現代日本の家族関係について科学的・体系的に説明する。	
	衣管理論	衣服は着用によって汚れが付着し、本来持っている性能が低下する。そのため、衣服を長く、快適に着用するためには、洗濯や補修などの被服管理・保管の専門知識が必要である。被服管理学の基礎的知識を身につけ、環境保全と日常生活に直結した科学的視点から洗濯について理解し、修繕等を含む被服管理技術を修得する。また、小中高の家庭科の被服領域における学習内容に関連させることができるようにする。	
	環境生理学	生物であるヒトは、環境から独立して存在することはできない。様々な環境要素（自然、進化、遺伝、文化、気象、温熱、電磁波、光、音、住居、被服、食品など）が人体の生理機能に影響を及ぼしている。個々の環境が人の生活や健康に影響するメカニズムと相互作用を理解することで、健康維持や快適性の概念を習得する。家政学の学問領域である、個人主体のライフスタイルから、客体となるコミュニティとの関係にも言及し、具体的にわかりやすく解説する。環境とヒトの生理機能の関係に興味を抱き、環境生理学の基礎的知識を得ることを到達目標とする。	
家政分野	食物科学	本講義では、(1)食品に含まれる成分や特性、おいしさ等の基礎知識の修得、(2)調理過程における成分間反応について理解し、調理科学的視点をもって調理操作を捉えられるようになる、ことを達成目標とし、食品に含まれる成分や特性、調理過程における食品材料の化学的・物理的変化について、また、食の安全を確保するための食品衛生に関する基礎知識について講義する。食品の分類方法や成分・特性機能性・調理性などについて概説した後、食品成分間化学反応について取り上げる。また、食品に含まれる有害な物質や生物について食品衛生の視点から説明する。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
分野専門科目	家政分野	看護学	生涯発達し続ける人間を理解するために、まず、小児期から老年期までの各発達段階について理解する。そして、各発達段階における健康管理のために、現状の課題と改善に資する有効な対策について最新の情報やデータを用いて理解を深める。さらに、発達の延長線上にある人間の死について解説する。また、主に生活習慣病の現状や成人期の生活を整える方法を理解し、技術演習により基本技術を習得する。	集中
		環境に配慮した生活	消費と環境についての基礎知識を修得し、家庭科において環境問題を取り上げるための能力を身につけることを目的とする。大量生産、大量消費、大量廃棄をもたらす環境問題は深刻になっており、学校教育においても環境教育を進めていくことが求められるようになった。まず主として家庭科の分野に関連する環境問題を洗い出し、次に環境問題の歴史的な変遷をとらえ、これからの環境教育で取り上げるべき内容について検討する。具体的には地球環境問題の扱い方、水質汚濁など生活環境の対策などについて詳説する。	
		家政研究セミナーⅠ	教員が専門分野を中心に研究成果等を学術論文、著書を取り上げて教員が問題提起を行い、受講生自らの問題設定を行うことで卒業研究の方向性を定めていく。	
		家政研究セミナーⅡ	家政教育に関する諸分野について、セミナーⅠで設定したテーマについて自発的に問題意識を持ち、調査研究し、論理的に考察し、それを口頭および文章で表現する能力、集団において議論する能力を養う。	
	技術分野	技術学演習Ⅰ	個々の学生の卒業論文における研究テーマの決定に向けて、「技術・家庭科」（技術領域）における木材加工、金属加工、機械、電気、情報の各分野の、より専門的な内容についての輪講、各分野に関連する教材についての研究、教育実践例について、実地研修、文献等による調査、および予備実験等を行い、教員及び学生間でその方法、過程、結果、および次の実験計画についてディスカッションをする。この授業は各専門を担当する指導教員ごとにクラス別で開講する。	
		技術学演習Ⅱ	「技術学演習Ⅰ」に引き続き、卒業論文執筆に向けて、より専門的な内容についての輪講、各分野に関連する教材についての研究、教育実践例について、実地研修、文献等による調査、および予備実験等を行い、教員及び学生間でその方法、過程、結果、および次の実験計画についてディスカッションをする。この授業は各専門を担当する指導教員ごとにクラス別で開講する。	
		技術学演習Ⅲ	「技術学演習Ⅱ」に引き続き、卒業論文のテーマの方向性を決定し、執筆に必要となる考文献調査と整理、教育実践研究の実施、実験研究などを行い、教員及び学生間でその方法、過程、結果、および次の実験計画についてディスカッションを行い、卒業論文執筆に向けた指導等を行う。この授業は各専門を担当する指導教員ごとにクラス別で開講する。	
		技術学演習Ⅳ	「技術学演習Ⅲ」に引き続き、卒業論文のテーマの方向性を決定し、執筆に必要となる考文献調査と整理、教育実践研究の実施、実験研究などを行い、教員及び学生間でその方法、過程、結果、および次の実験計画についてディスカッションを行い、卒業論文執筆に向けた指導等を行う。この授業は各専門を担当する指導教員ごとにクラス別で開講する。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
分野専門科目	技術分野	工業材料	中学校「技術・家庭科」(技術領域)および高等学校「工業」の専門的内容の理解に必要な基礎的な数学(集合論および論理式、ベクトルや行列などの線形代数、複素数および複素平面、オイラーの公式、三角関数・指数関数・対数関数等、関数の連続および微分・積分)、物理学(質量と慣性、力の合成、力の釣り合い、力のモーメント、運動方程式、電気回路理論、電磁気学)、工業力学(荷重、撓みと歪み、応力と歪み、弾性係数、圧縮・引張・曲げ・剪断、動力とトルク)等についての演習を行う。	
		創造工作実習	本講義は、物質の基礎、材料の性質と機械的性質、物理的性質と化学的性質を説明した後、工業材料を金属材料、無機材料、有機材料に分けて各材料の特徴や用途を中心に講義する。金属材料では鉄鋼材料(炭素鋼、合金鋼、鋳鉄)、銅合金、アルミニウム合金、無機材料では陶磁器や電子材料、有機材料では工業プラスチックや3Dプリンタ用材料について講義する。本科目を修得することで、金属加工実習等の製作実習を行う際の基礎知識を得ることができるようになる。	
		工業数理	金属加工実習を受けて、溶接、鋳造、3Dプリンタによる創意工夫を取り入れた製作実習である。溶接実習ではアーク溶接法の基本的な操作法を学んだ後、自ら設計した図面をもとに部材を接合して製作する。鋳造実習ではロストワックス法による低熔点金属を用いた製作を行う。3Dプリンタ実習では3DスキャナーやCADにより造型を通じて、デジタルファブ리케이션技術を学修する。本実習を通じてモノづくりは材料学、加工学、製図などの知識が関連して成り立っていることが理解できるようになる。	
		デジタル実習	この授業では、問題解決という視点から、論理的思考と情報教育との関わりについて概説する。論理的思考の内、計算論的思考では、その中心的な要素とされる課題の分解・合成・抽象化・アルゴリズムに加え、パリティなどをとりあげ、これらが小中学校段階の問題解決の文脈でどのように取り扱っているかを論じる。また、心理学的論理的思考としては、人間の思考のバイアス、批判的思考、統計的データの解釈に触れる。これらが、情報の科学的な理解や実践力の育成という情報教育の目標とどのように関連するか論じる。	
		論理的思考と情報教育	本授業では、主に、ホームページ作成、フィジカルコンピューティング、3Dプリンタを扱う。ホームページの作成では、小中学生の情報モラルを啓蒙するための、起承転結の複数ページから成るイラスト入りホームページをHTMLで作成する。フィジカルコンピューティングでは、粘土やアルミホイルなど身近なものを加工してセンサとして利用するプログラム作品を作成する。3Dプリンティングでは、最終的に、3D-CADを使って立体物を設計し、それを3Dプリンタで出力するまでの手順に習熟することを目標とする。	
		エネルギー変換と制御	電気エネルギーを中心としたエネルギー技術や制御技術について講義を行う。受動素子や能動素子を用いた回路の電流制御や電圧制御による出力制御の方法(抵抗制御方式・PWM制御方式など)について学修する。ICやマイクロコンピュータ(マイコン)などの構造や仕組みについて学修する。マイコンなどの低電圧・低電流な出力を用いてモータなどの大電圧や大電流な電気機器を制御する方法について学修する。マイコンへのプログラミングによる電気・電子回路の制御について学修する。	
		エネルギー変換と制御実習	電気エネルギーを中心としたエネルギー技術や制御技術について実習を行う。受動素子や能動素子を用いた回路の電流制御や電圧制御による出力制御の方法(抵抗制御方式・PWM制御方式など)について実習する。ICやマイクロコンピュータ(マイコン)などの構造や仕組みを踏まえて、マイコンなどの低電圧・低電流な出力を用いてモータなどの大電圧や大電流な電気機器を制御する方法(半導体継電器など)について実習する。マイコンへのプログラミングによる簡単な自律ロボットについて実習する。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
分野 専門科目	英語学特殊講義A	日本の学校教育で教えられている現代の標準的な英語が国際的に見るとどのような位置付けにあるかを理解するために、以下の項目を設定する。 (1) 英語という自然言語の通時的な変化を概観する。 (2) 現代英語が国際共通語となった過程を理解する。 (3) 現代英語における地理的変異(方言)を観察する。 (4) 現代英語の社会的変異を標準英語と対照する。 (5) 非母語話者として習得すべき英語を発見する。	
	英語学特殊講義B	英語学の理論的な知見を英語教育の授業実践にどのように応用できるか考える。日本語と英語の文法構造を比較対照し、日本人英語学習者がつまづきやすい学習項目を明らかにすることで、実際にどのような支援が効果的であるか考察する。到達目標は、①日本の英語教育における課題を分析し考察することができる、②日本の英語教育における課題について英語学で培った理論的な知見を活用して自分なりの解決策について考えることができることである。	
	英語文学特殊講義A	なるべく多くの作品に触れるために、アメリカの代表的な作家の短編を翻訳を交えながら、できる限り原文で読み、作品の解釈・分析を行う。作品の背景(出版時のアメリカの社会的・文化的状況、作者の伝記的背景など)にも目を向けつつ、主に作品が提示している様々な問題や語り的手法について考察する。到達目標は以下のとおり。 (1) コンテキストを踏まえ、時に翻訳を参照しながら英語を読む訓練をし、英語力と読解力の向上を目指す。 (2) 他者の意見を踏まえながら自らの考えを述べ、また他者の意見に応答するアカデミックなコミュニケーション能力の向上を目指す。 (3) アメリカの代表的な作家の短編を時系列で読んでいくことによって、アメリカの歴史や社会、文化についての理解を深める。	
	英語文学特殊講義B	イギリス文学作品を読むことで、多様な英語表現を学びながらイギリスの歴史や文化について理解を深め、英語教育に不可欠な素養を身につける。この授業では特に古英語の時代から現代までのイギリス文学の流れを概観しながら、代表的な散文、詩、劇だけではなく、これまで扱われてこなかったマイナーな作家の作品も取り上げて精読し、それぞれの特徴や歴史的な位置づけを考える。同時に、イギリスの歴史や文化についての幅広い知識を身につけ、イギリス文学や歴史について英語で説明し、議論できる能力を養う。受講生は、多くの作品を原文で通読することが求められる。	
	英語科指導法特殊講義A	英語科指導法について、理論・実践の両面から理解を深める。特に、指導法・評価法について焦点を当て、具体的な事例を取り上げるケーススタディを行い、教室で起こる様々な事象に対応できるような実践的能力を養う。また、小・中・高等学校の多様な授業を映像で視聴し、受講者相互の気づきを交流させつつ授業分析を行う。一つの事象を多面的・多角的かつ批判的に検討し、意味付けることを通して、教員の指導、児童・生徒の学び、言語習得、授業規律、教員と児童・生徒の信頼関係、指導技術等様々な視点から授業研究力の育成を図る。	
	英語学特別演習A	児童・生徒が非母語話者としてどのような発音を身につけるのが適切かを考えながら、教師自身は可能な限り教材と同じ発音に近づくために、以下の項目を設定する。 (1) 英語の母音がアクセントの有無や隣接する子音によってどのような影響を受けるかを観察する。 (2) 英語にあって日本語にはない子音同士の結合によって生じる様々な現象(同化現象など)を観察する。 (3) 発音練習を通して可能な限り標準的な英語母語話者の発音に近づけることを目標とする。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
分野 専門科目	英語 分野	英語学特別演習 B	英語学分野、とりわけ文法・語法研究、談話分析、意味論等を巡る卒業研究の計画立案・遂行や論文作成等の過程に応じたディスカッションや先行研究・基本資料調査等の報告やレビュー、中間発表等にかかる演習、指導を行なう。具体的には、英語教育における課題について、英語学の観点から解決策を探り、それを具体的な研究課題として卒業研究において設定し追究する。到達目標は、①英語学と英語教育に関連した研究課題を先行研究に基づいて発掘することができる、②設定した研究課題について独自のアプローチを提案し、追究することができることである。	
		英語文学特別演習 A	代表的なアメリカの長編小説を、それについて書かれた論を参照しながら精読する。受講者の発表を元にグループディスカッションを行う。発表では、ディスカッションの論点を挙げてもらうほか、語学的な注釈や疑問を挙げてもらい、その都度、解消していく。また、同時にタームペーパーの構想を発表してもらい、アカデミックペーパーを書く練習を行う。 (目標) (1) 多様な英語のテキストを精読することによって英語力の向上を目指す。 (2) 他者の意見を踏まえながら自らの考えを述べ、また他者の意見に応答するアカデミックなコミュニケーション能力の向上を目指す。 (3) 他者の意見を引用しながら、アカデミックな論を書く訓練をする。 (4) 異文化へのより深い理解を通して、豊かな人間性と教養を身につける。	
		英語文学特別演習 B	イギリス文学作品を読むことで、多様な英語表現を学びながらイギリスの歴史や文化について理解を深め、英語教育に不可欠な素養を身につける。扱う題材としてはイギリス短編小説とするが、19世紀後半から20世紀の比較的新しい作品だけではなく、幾つかの18世紀の短編にも触れることで、さまざまな歴史的な視座からテキストを研究する能力を養う。授業形態としては、発表者の発題を元に議論をしながら進めるため、十分な予習が不可欠となる。また最終のレポートは英語で作成し、自らの考えを英語で論理的に表現する力も身につける。	
		英語史	英語の歴史を4期に分類し、各時代の英語の音韻・形態・統語上の特徴を詳細に観察する。その後、各時代の英語で書かれた文献を読み、英語という自然言語の成立過程を深く理解する。 (1) 古英語期：豊富な屈折接辞と語頭強勢 (2) 中英語期：屈折接辞の水平化と開音節長化 (3) 近代英語期：屈折接辞の消失と大母音推移 (4) 現代英語期：英語の多様化と変化の方向性	
		音韻論	英語と日本語を含む自然言語の構造と体系について理解を深めるために以下の項目を設定し、自ら言語資料を収集して音韻理論に基づく分析を試みる。 (1) 音韻理論に基づいて英語の母音体系・子音音素と韻律構造を日本語と対照しながら分析する。 (2) 英語と日本語が普遍的な音韻構造を共有しながら全く異なる言語として現れる理由を考える。 (3) 子どもが言語を獲得する過程について、最適性理論の枠組みを用いて考察する。	
		アメリカ文学作品研究	代表的なアメリカの詩や短編・長編小説を精読する。受講者の発表を元にグループディスカッションを行う。発表では、ディスカッションの論点を挙げてもらうほか、語学的な注釈や疑問を挙げてもらい、その都度、解消していく。 (目標) (1) 多様な英語のテキストを精読することによって英語力の向上を目指す。 (2) 他者の意見を踏まえながら自らの考えを述べ、また他者の意見に応答するアカデミックなコミュニケーション能力の向上を目指す。 (3) 異文化へのより深い理解を通して、豊かな人間性と教養を身につける。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
分野専門科目	英語分野	イギリス文学作品研究	イギリス文学作品を読むことで、多様な英語表現を学びながらイギリスの歴史や文化について理解を深め、英語教育に不可欠な素養を身につける。題材としては、さまざまな時代、形式のイギリスにおける小説、劇、詩、エッセイ、評論、雑誌記事などをジャンル横断的に扱う。受講生は、英英辞典を参照しながらそれぞれの語彙やニュアンスを詳細に分析し、批評することが求められる。その際、単なる内容の理解や鑑賞ではなく、形式に注目することでそれぞれのテキストの言語行為を考え、言語と意味作用の問題を考える視点を養う。	
	言語文化論Ⅱ	認知言語学におけるカテゴリー化の問題を取り上げ、古典理論とプロトタイプ理論を対比することにより、言語とカテゴリー化がどのように関わるかを検証する。そして、様々に異なる言語と文化の背後に横たわる普遍性を見据えたうえで、そこから多様性が生み出されてゆく過程とそのメカニズムをカテゴリー化を手掛かりに追究する。授業は受講者の発表と討論とともに進行する。		
	英語科言語活動研究	(授業形態) 演習 (目標) 中学・高校における英語の授業で「踏み込む言語活動」「言語活動の高度化」が行える実践的指導力の基礎育成を目標とし、新学習指導要領が示す「英語によるコミュニケーションの見方・考え方を働かせる学習過程」に沿う言語活動のあり方を検討する。 (概要) 「中等英語科指導法A・B・C・D」で得た知識と技能を生かし、中学校教科書を使用して、言語活動を立案し、英語で展開できる力を身に付ける。そのため、小・中・高の学習指導要領の目標・内容と学習到達目標・年間指導計画・単元計画・各授業時間の指導計画についての理解を一層深め、言語活動の立案(指導案作成)・ミニ模擬授業・ディスカッション・振り返りという流れを毎回繰り返して行う。その際、英語による授業やALTとのティーム・ティーチングの状況を想定したり、教材やICTの積極的に活用したりしながらグループ活動やペア活動を多く取り入れる。		
	英語科研究セミナーⅠ	文献の検索方法、先行研究の扱い方、仮説の設定と検証方法、論理的な議論の展開方法、データの分析方法など、卒業論文作成に必須の研究能力を養う。研究テーマとしては、各受講生の興味や関心を重視するが、言語学、英語文学、英語コミュニケーション、異文化理解、英語教育学を横断的に扱うことで、学際的な研究を行うことが求められる。先行研究を網羅しながら、新たな視点を提示する卒業論文を作成する土台を作り上げる。		
	英語科研究セミナーⅡ	「英語科研究セミナーⅠ」で養った卒業論文作成に必須の研究能力を発展させながら、さらに高度な研究を行えるように、さまざまな視点から自らの論を検証する視点を身につける。授業では、実際に論文を作成し、また発表しながら、他の受講生との議論を通して、論理的思考能力や批評能力を養う。最終的には、多角的な視点に立った卒業論文を作成し、その成果発表としての卒業論文発表会では、英語によるプレゼンテーションと質疑応答を行う。		
特別支援教育分野	知的障害教育演習AⅠ	障害児・者のインクルーシブ教育ならびに知的障害児教育に関する論文を読むことを通して、以下の技術・能力を培うとともに、自身の問題関心を深める。1) 必要な論文を収集する技術・能力、2) 論文を正確に読解する技術・能力、3) 論点を把握してレジメを作成し、発表する技術・能力、4) 論旨に沿って討議する技術・能力。授業の最初には、文献検索と文献リスト作成の方法の講義を行い、その後は、インクルーシブ教育に関する論文を講読するとともに、後半は授業当初に講義した文献検索と良質な文献選びのスキルを向上させるように、学生に文献を適切に選べるような指導し、それらの選んだ論文を講読する。		

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
分野 専門科目	特別 支援 教育 分野	知的障害教育演習 A II	自身の問題関心に基づく論文を読解し、関連する基本事項を整理することを通して、研究実施に関わる方法論の基礎の習得を目指す。それぞれ、発表担当の論文を選定、読解、発表を行い、自身の問題関心を深化させ、研究構想を立てる。具体的には、それぞれの選定した論文を読解、討議を行う活動を通して、第1回～第5回は問題の発見をテーマにしつつ考察方法の確認、討議のルールの習得などを行い、第6回～第10回はテーマの焦点化をテーマにしつつレジュメの形式、分析方法の理解などを行い、第11回～第15回はテーマの深化をテーマにしつつ研究課題設定の仕方や先行研究の整理の仕方などを学ぶ。	
		知的障害教育演習 A III	3年次ゼミで習得した研究の基礎的知識や技能を踏まえ、研究のデザインを作成し、研究を実施しながら、研究の軌道修正等を適宜進め、研究論文を執筆する。第1回～第3回は研究デザインの作成、第4回～第6回は研究手続きの検討、第7回～第9回は研究の実施、第10回～第12回はデータの集計・分析、第13回～第15回は原稿の執筆についての指導を行う。	
		知的障害教育演習 B I	知的障害教育と福祉に関する論文を読むことを通して、以下の技術・能力を培うとともに、自身の問題関心を深める。1) 必要な論文を収集する技術・能力、2) 論文を正確に読解する技術・能力、3) 論点を把握してレジュメを作成し、発表する技術・能力、4) 論旨に沿って討議する技術・能力。授業の最初には、文献検索と文献リスト作成の方法の講義を行い、その後は、知的障害教育と福祉に関する論文を講読するとともに、後半は授業当初に講義した文献検索と良質な文献選びのスキルを向上させるように、学生に文献を適切に選べるような指導し、それらの選んだ論文を講読する。	
		障害児心理学演習 A	障害児心理学に関わる研究テーマ、研究テーマを探求するための方法を定め、方法に基づいた検証と考察を行い、研究論文の作成ができることを目標とする。また、研究レポートの作成を通して、あるテーマを明らかにする際の実証的な検証に基づいた見解を導き出せる資質を養う。 各自の研究テーマを設定するための先行研究の検討、また先行研究に基づいた研究方法の設定と検討、ならびに研究実施と研究経過の検討を行う。	
		障害児心理学演習 B	障害児心理学に関わる研究テーマに基づく研究を遂行し、研究論文の作成を通して、あるテーマを明らかにする際の実証的な検証、明快なプレゼンテーション能力を身につけることを目的とする。あるテーマを明らかにする際の実証的な検証に基づいた見解を導き出せる資質を養う。 各自の研究テーマに基づく研究実施と研究報告、ならびに検討を行う。検討した研究を論文として執筆し、中間発表、研究成果発表を通してプレゼンテーション能力を養う。	
		障害児心理学演習 C	障害児心理学に関わる研究テーマを設定するための先行研究の講読・検討、また先行研究に基づいた研究方法の検討、ならびに研究実施と研究経過の検討を行う。テーマを明らかにする際の実証的な検証に基づいた見解を導き出せる基礎的資質を養う。	
		肢体不自由教育演習 A	肢体不自由教育を中心に、卒業論文の作成に向けて、課題設定、情報収集、調査および実験、分析、論文執筆、研究発表という一連の研究プロセスを学ぶことができる。演習Aでは、課題設定と情報収集に注目した上、科学的視点から課題を設定する力を身に付けるとともに、多角的な観点からその課題への理解をより深めることができるよう、情報を収集する力を身に付けることを目標とする。情報収集については、国内外の論文の検索だけではなく、特別支援学校を含む研究フィールドに関する情報も幅広く収集することが求められる。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
分野専門科目 特別支援教育分野	肢体不自由教育演習 B	肢体不自由教育を中心に、卒業論文の作成に向けて、課題設定、情報収集、調査および実験、分析、論文執筆、研究発表という一連の研究プロセスを学ぶことができる。演習Bでは、調査や実験に注目した上、課題によって調査や実験の方法を学ぶことを目標とする。また、卒業論文に用いる調査や実験の研究手法をもとに、データを分析・整理するプロセスについても学ぶ。なお、研究の手法を学ぶこの授業では研究の倫理について学び、教育者や研究者としての姿勢や態度を身に付けるように指導する。	
	肢体不自由教育演習 C	肢体不自由教育を中心に、卒業論文の作成に向けて、課題設定、情報収集、調査および実験、分析、論文執筆、研究発表という一連の研究プロセスを学ぶことができる。演習Cでは、論文執筆と研究発表に注目した上、調査や実験で得られたデータをもとに、論文をどのように執筆するのかについて学び、発表会ではどのように発表するのかについて学ぶことを目標とする。内容面としては結果と考察の客観的な書き方、形式面としては論文全体の構成と引用文献の記載方法などに力を入れる。	
	障害児医学演習 A	演習として、あらゆる障害種についてのより深い理解を深め、自ら探求し、問題解決を行うことができる実践力をつけることを目的とする。特に、課題の発見とその分析の方法について重きを置き、さまざまな文献の検索方法やその価値の理解、適切な文献を批判的に抄読する実力を養う。加えて、英文の文献についても適切に対処できることを求める。それらを的確にまとめ、互いに討議することで、障害児を取り巻く幅広い問題について知識と理解を持つことができる実践力を獲得する。	
	障害児医学演習 B	演習として、あらゆる障害種についてのより深い理解を深め、自ら探求し、問題解決を行うことができる実践力をつけることを目的とする。特に、自ら発見した課題に対して、どのようなアプローチを行うことができるか、その手法と実現に向けて、具体的な活動を行い、その実現に向けた実践的な学習を行う。精読した文献をもとに、科学的視点から問題の解決のための教育的・福祉的・医学的な研究を行うとともに、卒業研究へ展開する力と論文を執筆できる実力を養う。	
	障害児医学演習 C	演習として、あらゆる障害種についてのより深い理解を深め、自ら探求し、問題解決を行うことができる実践力をつけることを目的とする。特に、問題の発見から、問題点の社会的・教育的背景に切り込み、実際の研究へのさまざまなアプローチ法をはじめとする研究手法の探求など、卒業研究へつながる学びを一貫して行いつつ、各段階をより深く追及していく。さらに、論文の検索とより深い読み、科学的アプローチのテクニックを学びつつ、卒業研究へ展開する実践的な力を養う。	
	聴覚障害教育演習 A	聴覚障害児教育や福祉等の関連分野に関する諸問題を中心とする諸課題に関するテーマをもとに、毎回、各々が調べてきたことをレジュメにし、発表を行い、その上で、受講者同士の間での討議を行い、最終的には、ある程度絞られたテーマについて、先行研究のレビューを行う。これらのことを通して、聴覚障害児教育に関する諸問題を中心とする諸課題について、自ら情報収集をし、分析的に考察していくスキルを身につけることを目的とする。	
	聴覚障害教育演習 B	聴覚障害児教育や福祉等の関連分野に関する諸問題を中心とする諸課題に関するテーマをもとに、毎回、各々が調べてきたことをレジュメにし、発表を行い、その上で、受講者同士の間での討議を行い、最終的には、ある程度絞られたテーマについて、先行研究のレビューを行う。これらのことを通して、聴覚障害児教育に関する諸問題を中心とする諸課題について、自ら情報収集をし、分析的に考察していくスキルを身につけることを目的とする。 聴覚障害教育演習 Aを受講していることを条件とする。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
分野専門科目	特別支援教育分野	聴覚障害教育演習C	手話通訳技術を習得した学生を対象に、聴覚特別支援学校の現場で求められる実践力としての手話表現及び手話通訳技法について学ぶことで、聴覚特別支援学校において、幼児・児童・生徒が、手話で学び、手話で各教科領域を学ぶために、教員に求められる手話のスキルを身につける。具体的には、(1)聾児の手話表現の読取り、(2)聾幼児の理解力に即した手話による絵本の読み聞かせ、(3)高等部での専門教科の手話表現、(4)学術レベルの手話通訳、について実践的に学習する。	
		聴覚障害教育演習D	ろう重複障害児の障害特性、言語・心理発達を概観し、その上でろう重複障害児とのコミュニケーションを成立させるための身振り、指差し、そして手話の技術および手話通訳技法について学ぶ。さらに、聴覚障害教育演習Eと併せて履修することで、厚生労働省が指定する盲ろう者支援者養成事業のカリキュラム内容を含むものとなり、手話通訳技法を習得した学生が学ぶことで、触手話や指点字通訳技術を含む盲ろう者支援者の専門技術も習得することができる。	
		聴覚障害教育演習E	ろう重複障害児の障害特性、言語・心理発達を概観し、その上でろう重複障害児とのコミュニケーションを成立させるための身振り、指差し、そして手話の技術および手話通訳技法について学ぶ。さらに、聴覚障害教育演習Dと併せて履修することで、厚生労働省が指定する盲ろう者支援者養成事業のカリキュラム内容を含むものとなり、手話通訳技法を習得した学生が学ぶことで、触手話や指点字通訳技術を含む盲ろう者支援者の専門技術も習得することができる。	
		重複障害教育演習A	障害の重い子どもや重複障害の子どもの実践的課題を中心とする諸課題に関するテーマをもとに、受講生各々が調べてきたことをレジュメにして発表を行う。その際、受講者同士の間での討論を行い、重複障害教育で主要な課題とされている「コミュニケーション」や「探索行動」などのテーマに迫りながら、諸課題について実践的視点から考察していく力を身につけることを目的とする。	
		重複障害教育演習B	3年次(重複障害教育演習A)で習得した実践的基礎知識や技能を踏まえ実践研究を開始する。同時に、各自が実践の振り返りを行いながら実践的成果を上げるための方法を学んでいく。第1回～第3回は実践記録の書き方や振り返りの方法についてガイダンスを行い、第4回以降からは、受講生が1人ずつ自身の実践計画と実践経過について発表していく。発表に際しては、実践検討(事例検討)の形式をとりながら、各自が自身の実践を振り返り、より精度の高い実践的手法を見出ししていくことを目標とする。	
		重複障害教育演習C	自身の実践研究を進めていくなかで、以下の技術・能力を培うとともに、卒業論文執筆を念頭において自身の実践上の課題を明確にしていく。1) 必要な論文(主に実践研究論文)を収集する技術・能力、2) 論文を正確に読解する技術・能力、3) 論文で述べられている実践手法を理解して自身の実践に応用していく能力、4) 論文を参考としながら、自身の実践を研究の観点から記述して発表していく能力。以上を通して、重複障害教育における主要なテーマと自身の関心に関連させながら、卒業論文執筆へとつなげていく。	
	卒業研究	教員養成課程における4年間の学びの集大成として、指導教員と相談の上で自らの意志により決定したテーマについて研究し、その成果を論文やプレゼンテーションの形に結実させ、発表する。研究を進めるにあたっては、自らがそれまでの学修を通じて獲得した知識・技能を活用し、先行研究等を丹念に探索・検討しながら、課題の解決を目指す。このような研究に取り組むことによって、教員としての資質・能力を高めるとともに、将来において直面するであろう種々の問題と主体的に向き合い解決するための力を育む。		

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
教育実習	教育実習事前事後学習	事前学習として、大学では「全体オリエンテーション、現職小中学校教員及び附属学校教育臨床総合センター専任教員による学校実態に関する講義（服務、生徒指導、カウンセリング、学級指導、道徳指導等に関する講義）、学習指導案の作成指導及び模擬授業」について実施する。実習校では、「学校長の講話、実習校の学校経営、実習中の生徒指導、教師としての基礎・基本、学習指導の実際、総合的な学習の時間の指導の実際、特別活動の実際、各教科の学習指導、学校保健、道徳指導の実際、学年、学級経営等」について実施する。事後学習として、大学では「校種別に各学校種で行った研究授業の内容確認及び検討、専攻別に主として自専攻内容に関わる授業内容の確認、生活指導・生徒指導などで経験したことの報告、教職に向けての改善方法の検討、附属学校教育臨床総合センター専任教員による振り返りと今後に関する講義」について実施する。	
	教育実習 A（幼小）	小学校（附属小・特別協力校の小学校）にて5週間又は中学校（附属中・特別協力校の中学校）にて5週間実施する。内容としては「授業参観、各教科の授業実践、道徳・特別活動・総合的な学習の時間の授業実践、指導案作成、教材研究、授業の振り返り、生活指導・学級経営などの指導実践、クラブ活動・部活動などの指導実践、研究授業及び授業研究会等」について実施する。また、大学教員が実習校を訪問し、実習生が行う研究授業の参観及び授業後の授業研究会に出席し、講評や指導を行う。	
	教育実習 A（中高）	中学校（附属中・特別協力校の中学校）にて5週間実施する。内容としては「授業参観、各教科の授業実践、道徳・特別活動・総合的な学習の時間の授業実践、指導案作成、教材研究、授業の振り返り、生活指導・学級経営などの指導実践、クラブ活動・部活動などの指導実践、研究授業及び授業研究会等」について実施する。また、大学教員が実習校を訪問し、実習生が行う研究授業の参観及び授業後の授業研究会に出席し、講評や指導を行う。	
	教育実習 B（幼小）	小学校（群馬県内公立小学校）にて3週間又は中学校（群馬県内公立中学校）にて3週間実施する。内容としては「授業参観、各教科の授業実践、道徳・特別活動・総合的な学習の時間の授業実践、指導案作成、教材研究、授業の振り返り、生活指導・学級経営などの指導実践、クラブ活動・部活動などの指導実践、研究授業及び授業研究会等」について実施する。また、全大学教員が実習校を訪問し、実習生が行う研究授業の参観及び授業後の授業研究会に出席し、講評や指導を行う。	
	教育実習 B（中高）	中学校（群馬県内公立中学校）にて3週間実施する。内容としては「授業参観、各教科の授業実践、道徳・特別活動・総合的な学習の時間の授業実践、指導案作成、教材研究、授業の振り返り、生活指導・学級経営などの指導実践、クラブ活動・部活動などの指導実践、研究授業及び授業研究会等」について実施する。また、全大学教員が実習校を訪問し、実習生が行う研究授業の参観及び授業後の授業研究会に出席し、講評や指導を行う。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
教育実習	教育実習（幼）	附属幼稚園にて2週間実施する。内容としては「保育・授業参観、保育・授業実践、指導案作成、教材研究、保育・授業の振り返り、教室経営などの指導実践、研究授業及び授業研究会等」について実施する。また、事前に、幼稚園でのオリエンテーションと事前指導・指導案作成児童を行う。さらに、大学教員が実習校を訪問し、実習生が行う研究授業参観及び授業後の授業研究会に出席し、講評や指導を行う。終了後も、幼稚園での事後指導を行う。	
	教育実習（高）	高等学校（群馬県立高等学校）にて2週間実施する。内容としては「授業参観、各教科の授業実践、道徳・特別活動・総合的な学習の時間の授業実践、指導案作成、教材研究、授業の振り返り、生活指導・学級経営などの指導実践、クラブ活動・部活動などの指導実践、研究授業及び授業研究会等」について実施する。また、大学教員が実習校を訪問し、実習生が行う研究授業の参観及び授業後の授業研究会に出席し、講評や指導を行う。	
	特別支援学校教育実習事前事後学習	本授業では、学校現場の講師から具体的な講義を受け、学習指導の実践について理解を深めること、教育実習C・Dへの準備を進めること、本実習後に、各自の実習経験を総括し、その後の学習活動につなげることを目的とする。この授業を通して、教育実習の意義を理解し、心構えを養うこと、授業計画、学習指導案の作成方法を身につけること、実際の授業をイメージした授業（模擬授業）の実施をとおして、児童・生徒の学習段階に合った授業を考えることができることを目指す。	
	教育実習C（特支）	特別支援学校（附属特別支援学校）にて2週間実施する。内容としては、授業参観、各教科の授業実践、道徳・特別活動・総合的な学習の時間の授業実践、指導案作成、教材研究、授業の振り返り、生活指導・学級経営などの指導実践、クラブ活動・部活動などの指導実践、研究授業及び授業研究会等」について実施する。また、大学教員が実習校を訪問し、実習生が行う研究授業の参観及び授業後の授業研究会に出席し、講評や指導を行う。	
	教育実習D（特支）	特別支援学校（附属特別支援学校）にて3週間実施する。内容としては、授業参観、各教科の授業実践、道徳・特別活動・総合的な学習の時間の授業実践、指導案作成、教材研究、授業の振り返り、生活指導・学級経営などの指導実践、クラブ活動・部活動などの指導実践、研究授業及び授業研究会等」について実施する。また、大学教員が実習校を訪問し、実習生が行う研究授業の参観及び授業後の授業研究会に出席し、講評や指導を行う。	
教育実践総合科目	教育実践インターンシップ	教育実習の履修が修了していて教員就職を志望している4年生、大学院生、専攻科生、もしくは教育実習を終えた3年生が履修する科目である。小中学校等で各学校の実情に合わせて学習補助等を行い、教員として必要な専門性と学習指導、生活指導、生徒指導、保育などの実践的指導力を身につけ、高めることを目標とする。現場教員の指導を受けながら30時間以上の活動を行った場合に単位を認定する。	
	教職実践演習（教論）（幼・小・中・高）	授業は、4年生全体で行う回と、専攻別に編成したクラス別に実施する回とを設ける。教員は、いずれも教職担当教員から構成する。全体で行う回は、教職の基礎的理解に関する科目等の担当教員が担う。クラス別については、各教科の指導法領域を専門とする教員が担当する。 内容については、第1に、現代的な学校教育の課題についての理解を深める。これは、全体での講義を通じて行う。第2に、授業力の向上である。ここでは、教科や道徳、総合的な学習の時間を対象とした模擬授業等を行う。第3に、学級経営力の向上である。ここでは、現場の課題に沿った演習を行う。	共同

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
foreFront科目	ICT教育の授業設計	さまざまな情報機器が身近にある現在、学校（特に高等教育機関）においてもICT機器を活用した授業が盛んに行われるようになってきている。この講義では、学校の授業で活用することのできるICT技術とそれらを活用した授業の特徴を理解し、将来自らが行う授業に役立てる知識と技能を身に付けることを目標とする。概要として、学校の授業で活用されるICT技術とそれらを活用した授業法の概要について講義を行う。また、その具体例の一つとして共同教育学部における講義の特徴でもある遠隔教育の概要について学び、実際に大学における遠隔授業のサポートを行う実習を通して実践性を養う。 (247 吉良元) 講義および実習を担当する。 (37 佐野史・137 片柳雄大) 実習を担当する。	メディア 共同（一部）
	プログラミング教育 法	平成29年告示の学習指導要領においては、小学校でプログラミング教育を取り入れることが必須となり、いくつかの教科で導入のしかたが例示された。しかし、小学校段階で求められるプログラミング的思考は全ての教科に関わる基本的概念である。そこで各教科の内容とプログラミング的思考との関係をフローチャート等の可視化手法を用いることで整理しながら概説し、教員になった際にさまざまな教科でプログラミング的思考を養う授業ができるように意識付けを行う。また、プログラミング教育の導入経緯の解説やプログラミング的思考に関する概説の講義も行う。	メディア 共同（一部）
	SDGs総合演習	「環境教育」「ESD教育法」で修得した環境問題に関する基礎的知識と指導法を元に、発達段階に適応した指導案立案、模擬授業と振り返り活動を通して実践力を高める。具体的には、グループ毎（一括クラスを想定）にSDGsの17の目標に基づいて演習課題を設定し、関連する資料収集（学術論文、実践先行事例等）を行い、それらを分析して与えられた発達段階に適応した指導案作成を行う。教グループ毎に模擬授業を展開し、相互評価とディスカッションを通して指導案を改善し、SDGs授業実践事例集としてまとめる。	
	海外教育施設教育実習	既に国内での教育実習を行った高学年対象のプログラムである。群馬大学教育学部と包括連携協定を締結している日本人学校や在外教育施設において教育実習を行うことにより、グローバルな視点を持つ教員の育成を目的とする。本実習は、群馬県が国内有数の多文化共生地域であり、益々、外国籍児童、生徒の教育に直接かかわることも増えていることから、教職に就く前の多様な教育環境での学びとなる。そのため、渡航前の語学指導や異文化への準備等、海外教育実習への適応を促すための事前指導ののち、実習を行う。さらに帰国後の事後指導、報告会を実施する。	
総合教職科目	教職特別演習 I	教育実習前に、演習を通して、子ども理解、教職への使命感・責任感、教育的愛情、対人的関係能力、教科指導にかかわる自らの資質能力を振り返り、確認する。また、実習に対して自信を持って臨めるよう、教員として最小限度必要な資質能力の育成を到達目標とし、これまでに習得した理論的知識・技能、実践的指導力を演習を通して振り返り、グループワーク等で、子ども理解、教職への使命感・責任感、教育的愛情、対人的関係能力、教科指導にかかわる資質を向上させる。	集中 共同
	教育現場体験学習	3年次の教育実習の基礎となる科目である。マナー、子どもとの関わり方、授業観察の視点などについて事前指導を受けた後、公立小学校又は中学校に出向いて学校教育の一端に携わる体験学習を一週間程度行い、児童生徒とのふれあいを通して学校現場についての理解を深める。また、実習後の振り返りを通じて、学校における授業や授業以外の仕事について理解し、教師として必要な資質・能力について考察する。	
	授業実践基礎学習	事前指導で心構え等を確認したのち、附属学校において学校現場における教育諸活動を注意深く見聞し、授業の構成、進め方等、学校教育の実際に関する初歩的理解を得る。また、教育実習生が行う研究授業の参観と授業研究会への参加を通して、授業実践や学習指導の実際について学ぶ。事後指導における振り返りでは、自らが見取った内容をもとに他の学生や教員と議論し、自らの授業観察の能力を養う。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
総合 教職 科目	教職実践基礎演習	教育実習を終えた3年生対象の授業科目である。代表学生による教育実習で行った研究授業の授業実践の発表を行った後、小グループにおける集団討論に基づいて模擬授業を計画し、実施する。これらの活動を通じて、附属学校および公立学校における8週間に渡る教育実習での学びの定着を図るとともに、改めて教員になる自覚を持たせる。また、教育の最新事情・動向に関する講義により、教員採用試験に向かう動機付けを行う。	
	体験的科目	今日の教育改革の中で最も重視されているのが、人と人、教師と子ども、子ども同士、人と自然のふれあい体験である。「生きる力」の源泉は、このふれあい体験から生まれる。そこで、「体験的科目」では、いろいろな体験を通して、教員にふさわしい豊かな人間性を培うことを目的とする。 具体的には、附属学校園、サークル活動等でのボランティア体験、コミュニティ学習ワークショップ、ロボコン教室、スポーツ教室指導実践、中学生学習サポート、放課後児童クラブ活動ボランティア体験、ネイチャー・カウンセリング、コミュニティ・サービス・ラーニング等から選択して履修する。	
	クィア・スタディーズ	レズビアンとゲイを中心に、LGBTQ+に関するさまざまな事象に焦点を当てながら、ジェンダーやセクシュアリティに纏わる言説を読み解き、男女の二元論や異性愛体制を支えるイデオロギーを考察する。題材としては、初めに世界と日本のLG(BT)情勢を概観した後、レズビアン・ゲイ・スタディーズの流れとその問題意識に触れ、そこから家族、身体、セクシュアリティ、強制的異性愛体制、「女」、「男」、アイデンティティなど、様々な個別の問題を扱う。また、同性愛の歴史を概観することを通して、差異と同一性について考え、クィア・スタディーズの可能性を理解する。	
	小学校英語教育のための基礎英会話	小学校で外国語（英語）・外国語活動を指導するための英会話能力を養う。本授業は演習を中心とし、授業を行う際に使用する教室英語、Assistant Language Teacherと一緒にチーム・ティーチングを行う際に必要な授業の打合せや教材作成及び授業中におけるコミュニケーションを円滑にするための英会話を中心に学ぶ。また音声指導のためのフォニックス活用や発音指導の基礎的トレーニングを取り入れる。さらに、教育現場で活用される歌、チャンツ、ゲーム活動について体験的に理解しながら、指導者としての教育実践力を身につける。	
	実践的教職論（キャリアサポート演習）	「就職」や「働くこと」について適切なキャリア意識を身につけ、教育の意義や学校の役割についての見識を有し、教員採用試験等の面接のためスキルと実力を養成することを目的とする。就職の現状、仕事・職業生活をめぐる諸問題、集団討論のスキルとテクニック、面接のスキルとテクニックについて理解を深め、集団討論・面接の演習を通じて、任意のテーマ（社会問題や教育問題）について、他の学生との討論に進んで参加できるコミュニケーション力を身につける。そして、教師として子ども、親、同僚などとコミュニケーションをとりながら課題を解決する能力を高める。	
	実践日本語	交換留学で群馬大学が受け入れる留学生には、来日時に日本人学生対象の授業を履修するには日本語能力が不十分な学生も含まれる。それらの学生には教養教育科目として開講されている日本語科目、教育学部開講の留学生支援科目としての日本語科目を1学期間集中的に履修することで十分な日本語能力を身につけさせ、その後の群馬大学での学習を円滑に行えるよう配慮している。本講義もそのような位置づけで開講されるものである。日本語能力を高めるためには基礎的な文法の確実な習得が不可避であり、本講義では、初級文法の確認をしつつ、そこから派生的に初中級、中級の文法の理解を進めていく内容となっている。本講義は教育学部開講の講義ではあるが、他学部で受け入れた留学生にも開放されており、例年10名以上の学生が履修しており、成果を上げている。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
総合教職科目	比較文化文化・異文化理解(for International Students)	本講義では、グローバル社会で次世代を担う人材となるために本講義を通して、英語と日本語といった言語がいかに社会の変容を映し出していくのかを学び、言語の揺れに関する要因、また比較言語学的視点から言語表現の文化的差異について考察する。具体的な題材としては、アメリカ英語とイギリス英語の相違、言語とジェンダー、漫画の翻訳における表現、英語科教科書に映し出された異文化コミュニケーションなどを扱う。また、これらの題材に関する講義だけではなく、グループ・ディスカッションやプレゼンテーションを通して、他者認識・他者理解も深めていく。	
	特別支援教育 (Special Education)	日本の特別支援教育の歴史の変遷（特に、特殊教育から特別支援教育への転換）を概観したうえ、通級による指導と特別支援学校のセンター的機能を中心に、日本型のインクルーシブ教育のメリットとデメリットなどについて講義する。受講者には、日本の特別支援教育への理解を深めたうえ、母国の特別支援教育の発展のための方向性について考察してもらう。本授業は、受講者の背景（国籍、言語、文化など）を考慮し、目標を設定するため、具体的な目標は受講者によって異なる。また、特別支援学校における教育実習を行い、日本型の教育モデルを理解するとともに、受講者の実践力を高めることを目的とする。本授業は、留学生のみを対象とした科目であり、教員免許を取得するために必要な科目ではない。	
幼稚園免許	幼児の健康・運動	本授業では、発育期の子どもの運動発達や健康の特徴を把握するとともに、スポーツ運動系の運動学習や運動指導についての正しい知識を身につける。発育期の子どもは心身ともに大きく成長する時期であることから、発育発達段階に合わせた運動能力の変化や健康の特徴を理解し、安全で効果的な指導を行う上での知識を養うとともに、各年代における運動能力を高める方法や健康の増進に関する専門的能力を習得する。	
	幼児と人間関係	安心の輪の中で自我の芽生え、自己主張をしながら信頼関係を築き、やがて自己をコントロールしていく社会性自我の芽生えに至る発達においてコミュニケーションの基礎が養われる。幼稚園教育要領に示された領域「人間関係」のねらい及び内容を踏まえ、幼児期を中心に人間関係の特徴について主に発達心理学的な視点から学ぶ。特に社会性の発達に焦点を当て、「人と関わる力」を培うプロセスについて講義を行う。	
	幼児と環境	幼児の発達や学びの過程を理解し、領域「環境」に関わる基礎的な知識を習得し、幼児期の環境構成の重要性を理解することを目標とする。人間の発達における土台を形成する幼児期の育ち環境のあり方について、認知的発達を踏まえて幼児と環境との関わりについての専門的事項との関連を事例を交えて教示する。また、幼児期の保育の質保証としてのESDの課題について示し、深い学びを保障するために領域「環境」が保育に果たす役割について講義する。	共同（一部）
	幼児と言葉	幼稚園教育要領における領域「言葉」のねらい及び内容を理解し、幼児期の言葉の学問的背景と基礎的知識を学ぶ。また、発達段階をふまえ、幼児が親しみをもって身に付けていく言葉をとおして、自分なりの言葉で表現し、他者の話す言葉を聞こうとする意欲、態度を理解する。幼児の言葉に対する感覚や表現する力を育む体験や環境を構築できるよう幼小連携を踏まえた主体的、対話的で深い学びの保障について講義する。	
	音楽表現	手遊び歌や伝統的な唱歌をはじめ音楽的表現は幼児の情操を豊かにし、感性的な発達には欠かすことができない。幼児の発達段階に応じた様々な音楽表現を身につけ、その指導法を習得することを目的とする。音楽を通じた表現活動として、四季折々の子どもの歌の歌唱および指導のための簡易伴奏付け、音楽レクリエーションとしての「手あそび歌」、子どもの合奏などの基礎的実践的能力を養う。また、教育現場で即戦力となるよう、保育における実践的な教材研究にも取り組む。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
幼稚園免許	造形表現	表現のなかでも造形表現の特色や子どもの造形的な発達を理解し、幼児の造形表現を指導、支援するための基礎的な諸能力を高め、子どもの造形表現の意味と面白さを知り、実践につながる力を身につけることを目標とし、幼稚園教諭として必要な造形表現の知識・技能を講義や演習、実践を通して学修する。材料用具の扱い方や学習環境のデザイン、教材開発、造形活動の支援のあり方など、幼児の造形表現の実際を様々な文献・資料の他、実践を基に理解を深める。また、テーマに沿ったレポート課題や実践活動への取り組み、授業時の制作を通じて、発表や意見交換を行う。	
	保育内容の指導法(健康)	保育内容の領域「健康」に関わる指導についての基礎・基本的な知識や技能を修得し、子どもの心身の健全な発育発達を促し、遊び・身体運動の楽しみ方について指導する実践力を養う。講義では、領域「健康」の意義・ねらい・内容を理解し、子どもへの健康指導の視点および子どもの健康課題の解決に繋がる実践力を学習する。また、子どもの心身の健全な発育発達を促し、遊びを通じた身体運動、健康で安全な生活習慣を身につけるための知識と指導法を模擬保育を通して身に付ける。	
	保育内容の指導法(人間関係)	幼稚園教育要領における領域「人間関係」のねらいや内容を理解し、具体的な援助場面を想定して保育を構想することができるようになる。講義では、幼稚園教育要領における「人間関係」のねらい、内容を概説する。また、提示する事例(附属幼稚園保育実践、レジャエミリアの幼児教育実践等)について幼児、保育者それぞれの観点からディスカッションを行うことで、保育者として幼児の人間関係を援助する方法について考えていく。また、異年齢保育や気になる子、個人差等に対応するための保育指導案作成と模擬保育を実践する。	
	保育内容の指導法(環境)	幼児の発達や学びの過程を理解し、領域「環境」に関わる具体的な指導場面を想定した保育を構想する方法を身につけ、幼児期の環境構成の重要性を理解することを目標とする。人間の発達における土台を形成する幼児期の育ち環境のあり方について、幼稚園指導要領の幼児と環境との関わりについての専門的事項を踏まえて理解し、深い学びを保障するために、実地指導講師ならびに講義者の保育現場での経験を生かして具体的な指導場面を想定した模擬保育と振り返りを通して保育の構想、指導方法を修得する。	
	保育内容の指導法(言葉)	幼稚園教育で育む資質・能力を理解し、幼稚園教育要領・領域「言葉」のねらい・内容について理解を深め、幼児の発達に即して主体的・対話的で深い学びが実現する過程を踏まえて、具体的な指導場面を想定して保育を構想する方法を身に付ける。講義では、幼児の言語発達、コミュニケーションを通じた認知発達、脳科学と言葉の発達、遊びを通じた言葉の発達などについて心理学の知見を基に概説し、具体的に保育計画を立て、模擬保育の実践と省察により実践的な指導方法を習得する。	
	保育内容の指導法(表現)	領域「表現」のねらい及び内容について、背景となる専門領域と関連させて理解を深め、幼児の発達に即した主体的・対話的で深い学びが実現する過程を踏まえ、表現支援に重要な視点や指導技術を習得し、具体的な指導場面を想定した保育を構想する指導方法を身につける。講義では、保育現場における参観や指導案作成・模擬保育等を通して、領域「表現」のねらい及び内容を理解し、「表現」を通じた実際的な保育や指導のあり方を考える。	
	幼児理解の心理学	幼児及び乳児の特性についての知識を身につける事で、幼児理解についての考え方や基礎的態度、その方法を理解する。講義では、乳幼児の発達を理解するための観察・検査法、保育記録の方法について述べ、乳児期の知覚・運動・認知・自己発達等について心理学の知見から述べる。その上で、幼児期における遊びの意味について5領域のベースとなる発達理論における基礎的知識を教授する。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
高校免許	工業技術基礎	<p>本科目は、高等学校（工業）教員免許状取得に必要な教科に関する専門科目である。高等学校工業科の「各分野に関する科目」の内容について理解することを主な目標とする。授業では中学校技術・家庭科（技術領域）からのつながりに留意しつつ、各分野の専門的内容（工業材料、製図、機械工学、電気・電子工学、情報工学など）について学修する。また学修指導に際しては、建築や工業デザインなど、工業科の広がりにも留意して指導するものとする。</p> <p>（宇都宮大学：単独）（群馬大学：オムニバス方式／全15回）</p> <p>（33 楠元一臣） （122 古田貴久） （136 小熊良一） （137 片柳雄大）</p>	宇大単独/群大オムニバス方式
	職業指導論	<p>工業高校の免許を取得するために必要な科目である。工業高校における職業指導の意義を理解する授業を行う。まずは職業指導の歴史的な流れについて学ぶ。また、小学校、中学校、高等学校普通科におけるキャリア教育を知ることを通して体系的に職業指導をとらえていく。さらに、進路指導計画の作成やキャリアカウンセリングなど学校現場での実施を視野に入れた職業指導の具体的な方法を学習する。</p>	
	工業科指導法Ⅰ	<p>工業高校の免許を取得するために必要な科目である。工業高校の指導科目、工業科教育の目標、原則履修科目、共通的な基礎科目、選択的な基礎科目の内容を、指導要領や教科書を用いて理解する。また実際に工業高校において授業見学を行う。授業を行うための実践的な学習指導計画・指導案を作成し模擬授業を行う。学習指導要領の基づく評価の観点を考慮した学習評価の方法を学ぶ。</p>	
	工業科指導法Ⅱ	<p>工業高校の免許を取得するために必要な科目である。工業高校に関する科目、電気、機械、情報、金属材料、機械工作、製図等の指導法・教材開発について講義、演習を学ぶ。工業高校の教員である実地指導講師を招いて工業高校の実情を講話して頂く。また工業高校は、地域の産業との結びつきが大きい。よって、工場見学なども行う予定である。工業高校生のための研究成果発表会にも参加する。</p>	共同（一部）
その他の資格	生涯学習支援論	<p>本授業では、学習者の多様な特性に応じた学習支援に関する知識及び技能の習得を図ることを目的とする。そのために、学習支援に関する教育理論、効果的な学習支援方法、学習プログラムの編成、参加型学習の実際とファシリテーション技法などを扱う。これらの学習を通じて、地域住民の生涯学習活動の支援を、行政だけでなく、NPOや企業等とも連携しながら進めることで、人づくり・地域づくりの中核的役割を担える人材の育成を目指す。</p>	
	生涯学習概論Ⅰ	<p>まず、生涯学習の理念と動向を理解する。次に、社会教育の意義と、社会教育を取り巻く法や行政のあり方を学ぶ。さらに、社会教育施設の役割と機能や、今日的課題と生涯学習との関連について把握する。そのうえで、公民館、図書館、生涯学習センター、青少年教育施設、文学館、教育事務所等の事例を通じ、社会教育施設の役割と専門的職員のあり方について理解を深める。これらの理解に基づき、最後に学習プログラムの作成と発表を行う。</p>	
	生涯学習概論Ⅱ	<p>時代の進展とともにこれまでの教育や学習に関し反省が行なわれ、教育・学習のとらえ方に変化が生じてきた。教育や学習が、人の一生を通じてどのような意味をもち、人の成長にとってどのような力を持つか。そのことをめぐって、その起こり、思想、施策、今日生涯学習と称して行なわれていること等を検証し、市民生活にとって生涯学習がどのような意義をもつか考察する。具体的には、美術館、博物館、公民館など、生涯学習現場での学習を多く実施する。</p>	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
その他の資格	社会教育計画 A	社会教育計画は自治体をはじめ、地域の学習活動を企画立案評価するものである。その際には、さまざまな知識や技術を必要とする。したがって、この授業ではそうした社会教育計画において必要となる基本的な知識や技術の理解・獲得をめざす。具体的には、社会教育計画の理論、社会教育計画の策定方法、社会教育事業計画の策定、策定した計画のプレゼンといった内容を扱う。担当教員は県教育委員会青少年課及び生涯学習課等で10年間生涯学習の実務経験があり、実務経験を生かして授業計画を立て、実務家教員としての経験を踏まえて実践的に学習できるよう配慮する。	
	社会教育計画 B	本授業では、社会教育計画の基礎理論を理解し、社会調査を理解し、社会教育事業計画を作り、プレゼンテーション能力を向上させることを目的とする。そのため、具体的には、社会教育計画策定に必要な社会教育の基本的知識を理解し、社会教育のニーズを知り、社会教育調査を理解し、社会教育計画の策定方法を理解したうえで、社会教育計画を策定できるようにする、さらに、策定した社会教育計画を説明することもできるようにする。	
	社会教育実践研究 I	本授業では、教育における社会教育の公共性について理解を深め、社会教育主事として働く際に有効な、地域に根ざした教育観を形成することを目的とする。そのために、市民の社会教育実践に果たす社会教育主事および社会教育職員の職務について理解を深める。さらに、我が国および群馬県の実践の内容をつかみ、特色ある社会教育事業を自ら企画立案し、事業プログラムを作成する。これらを通じて、社会教育行政と社会教育実践の基本を理解し、社会教育実践の今日的課題を把握すること、群馬県の実践事例を研究し社会教育の実践を把握することを目指す。	
	社会教育実践研究 II	本授業では、社会教育職員の実践における役割の検討を通して、社会教育・生涯学習において大切にされるべき基本的視点の理解と実践力を身に付けることを目的とする。そのために、授業やプログラムと総括レポートの作成を行う。そのことにより、社会教育で行われる学習方法を体験することにより、実践的な人間関係能力を身に付けるとともに、学校教育での応用にも結び付けることができることを目指す。	
	社会教育実践研究 III	本授業では、社会教育指導者として必要な専門知識や技能を、調査や具体的な実習を通して修得し、また優れた社会教育実践者の活動を学ぶことにより、社会教育実践の意義を理解することをねらいとする。そのために、社会教育行政施策の策定について調査をする。また、学校における地域連携について調査をする。具体的には、夏季休業中に、県内社会教育施設で実習し、後期にその体験・実習のレポートをする。さらに、優れた社会教育実践者の活動を講義し、社会教育指導者の姿を考察する。	
	博物館学	博物館に勤務する学芸員になるための基礎資格として、国家資格である学芸員資格がある。この資格を取得するには博物館資料の収集・整理、保管・保存、展示・活用、調査研究、教育普及、その他関連する事業に関する専門的事項について修得する必要がある。そこでこの科目では、博物館の歴史や機能などの概論から、資料の収集や保管、活用のしかた等、博物館と学芸員に関する知識・技能を理論的・体系的に学ぶことを目標とする。	
	博物館実習	学芸員資格を取得するための必修科目である。本授業では、博物館学関係科目で学んだ知識・技能や理論について総括的なまとめを行い、博物館の教育普及活動と学校教育の連携について講じ、あわせて資料の取り扱い方法の実習を行うことで学芸員の基礎・基本を修得する。実習に向けての事前指導と実習後の事後指導を行い、成績の判定は実習録の提出と事後指導における実習成果報告会を経て行う。	集中

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
その他の資格	図書館情報学	<p>学校図書館法により、学校には12学級以上の学校に必ず置かなければならない「司書教諭」を養成するための科目である。学校図書館の専門的職務を掌る役目を担うため、学校における学校図書館の役割を理解し、学校教育における読書の指導の意義を考え、理論を学び、司書教諭として学校の読書活動を推進できる指導力を身に付けるとともに、図書館を深く活用するために必要な情報活用能力を修得することを目標とする。</p>	

授業科目の概要			
(共同教育学部学校教育教員養成課程) 【宇都宮大学】			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
初期導入科目	新入生セミナー	<p>(1) 大学という場を理解するとともに、学生生活や学修習慣などの自己管理・時間管理能力の重要性について理解を深める。</p> <p>(2) 教職を中心としたキャリア形成を見通しながら、自己認識と大学での学修についての理解を深め、特に二年次以降所属を希望する専門分野への関心を高める。</p> <p>(3) 日本語表現として、レポートの書き方等の論理的な文章表現力、プレゼンテーションやディスカッションに対応できる口頭表現力など、大学で学ぶための基礎的な学修スキルを身につける。</p> <p>(4) 大学での学修を深めるため、論理的思考法や相互理解・合意形成のためのコミュニケーション方法を学び、研究倫理に則った研究方法のあり方を知る。</p>	
リテラシー科目	Integrated English I A	<p>(英文) Classes will be conducted in English, twice a week by the same instructor to the same students. Students are always expected to use English in class. Although both sections are aimed at developing integrated skills, one is mainly focused on reading skills, while the other is focused on listening and speaking skills using authentic language from movies. In the first stage of the class, students will acquire the study skills necessary for success in English studies. Students will be provided guidelines for efficient use of a dictionary, reading and using English handwriting, understanding phonetic transcriptions, taking notes, etc. In the reading section, students will develop the skills necessary to use professional journals, books, websites, and other media in order to conduct academic research after advancing to their major area. In the section using movies, students will develop oral communication skills. They will also be introduced to various foreign cultures through these movies in order to promote intercultural understanding.</p> <p>(和訳) 授業は全て英語で行う。はじめに辞書の使い方、筆記体の読み書き、発音記号、ノートの取り方など英語学習の基本を解説。総合的な英語力を伸ばすため、リーディング、リスニング&スピーキングに重点を置く。リーディングの授業では専門課程での研究に備えて学術雑誌、専門誌、書籍、ウェブサイトやその他の媒体の読み方を学び、リスニング&スピーキングの授業では映画を使って「生の英語」に触れ、会話の力を向上させると同時に、映画が発信する様々な異文化への理解を深める。</p>	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
リテラシー科目	Integrated English I B	<p>(英文) Classes will be conducted in English, twice a week by the same instructor to the same students. Students are always expected to use English in class. Although both sections are aimed at developing integrated skills, one is mainly focused on reading skills, while the other is focused on listening and speaking skills using authentic language from movies. In the reading section, students will develop the skills necessary to use professional journals, books, websites, and other media in order to conduct academic research after advancing to their major area.</p> <p>In the section using movies, students will develop oral communication skills. They will also be introduced to various foreign cultures through these movies in order to promote intercultural understanding.</p> <p>(和訳) 授業は全て英語で行い、週に2回同じ教員が担当する。総合的な英語力を伸ばすために、リーディングとリスニング&スピーキングに重点を置いた授業をする。リーディングの授業では専門課程での研究に備えて、学術雑誌、専門誌、書籍、ウェブサイトやその他の媒体の読み方を学ぶ。リスニングとスピーキングの授業では映画を使って「生の英語」に触れ英語を話す力を伸ばすと同時に、映画が発信する様々な異文化への理解を深める。</p>	
	Integrated English II A	<p>(英訳) Classes will be conducted in English, twice a week by the same instructor to the same students. Students are always expected to use English in class. Although both sections are aimed at developing integrated skills, one is mainly focused on reading skills, while the other is focused on listening and speaking skills using authentic language from movies. In the reading section, students will develop the skills necessary to use professional journals, books, websites, and other media in order to conduct academic research after advancing to their major area.</p> <p>In the section using movies, students will develop oral communication skills. They will also be introduced to various foreign cultures through these movies in order to promote intercultural understanding.</p> <p>Students are expected to complete a required number of lessons of the e-Learning course in their own time during the semester.</p> <p>(和訳) 授業は全て英語で行い、週に2回同じ教員が担当する。総合的な英語力を伸ばすために、リーディングとリスニング&スピーキングに重点を置いた授業をする。リーディングの授業では専門課程での研究に備えて、学術雑誌、専門誌、書籍、ウェブサイトやその他の媒体の読み方を学ぶ。リスニングとスピーキングの授業では映画を使って「生の英語」に触れ英語を話す力を伸ばすと同時に、映画が発信する様々な異文化への理解を深める。</p>	
	Integrated English II B	<p>(英訳) Students focus on the strategies and skills of speaking, listening, and writing in English.</p> <p>(和訳) 英語で話して、聞いて、英語で書く戦略と技術を重点に授業する。</p>	
	Advanced English I (Intensive Reading)	<p>(英文) This is an intermediate to advanced integrated course with the primary focus on reading in English.</p> <p>(和訳) 中級者向けの英語を読み取ることの主要な焦点に接する先進の集積されたコースです。</p>	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
リテラシー科目	Advanced English I (Pleasure Reading)	(英文) This course aims at developing reading skills by reading English extensively and enjoyably. The course consists of two sections: One is the classroom activities — using a textbook, the students learn how to read fast and get the ideas of the contents quickly. The other is the reading lab activities — The EPUU reading laboratory has some 5,000 English graded readers; The students are to check out those books, and read a large number of books assigned to each student according to his/her reading ability. (和訳) このコースは楽しみながら多くの本を読むことで読解力の向上を目指す。授業の中では英文をさっと読んで内容を把握する練習を行う。さらに受講生はEPUUリーディングラボに蔵書された5000冊のgraded readers(英語学習者の語彙レベルに合わせた本)の中から自分の英語力に合わせた本を大量に借りて読むことになる。	
	Advanced English I (Academic Writing)	(英文) Students employ a process writing approach using a number of writing formats to gain the skills needed to progress towards writing academic papers. (和訳) フォーマットを使ったプロセス・ライティングアプローチを学び、研究論文を書ける英語力をつける。	
	Advanced English I (Essay Writing)	(英文) Students practice using a process approach to essay writing in English. (和訳) プロセス・ライティングアプローチを練習し、小論文を書ける英語力をつける。	
	Advanced English I (Public Speaking)	(英文) Students focus on speaking and organizational skills for use in front of an audience. (和訳) 聴衆を前に話すスキルや、その内容を構成するスキルに焦点をあてる。	
	Advanced English I (Presentation)	(英文) Students focus on organizational and speaking skills to give clear and effective presentations. (和訳) プレゼンテーションを効果的にするための構成や話し方のスキルに焦点をあてる。	
	Advanced English I (Discussion& Debate)	(英文) Students focus on speaking and organizational skills for discussions and debates. (和訳) ディスカッションやディベートで話すスキルや、その内容を構成するスキルに焦点をあてる。	
	Advanced English I (Speech Clinic)	(英文) Students focus on improving English pronunciation and listening skills. (和訳) 英語の発音とリスニングの上達に焦点を置く。	
	Advanced English I (Vocabulary Building)	(英文) Students increase their ability to use the most common vocabulary for reading and speaking English. (和訳) 英語を「読む」「話す」際に使用頻度の高い語彙を使う能力を高める。	
	Advanced English I (Communicative Grammar)	(英文) This is an advanced integrated course with the primary focus on English grammar. More specifically, students learn how to identify, analyze, and use phrasal verbs and other multi-word verbs in English. (和訳) 文法に焦点をあてた総合英語のアドバンスコース。具体的な目標としては、句動詞や多語動詞をマスターする。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
リテラシー科目	Advanced English I (Media English)	(英文) Students use authentic English materials from various media to practice reading, writing, speaking, and listening. (和訳) 新聞, テレビ, WEBなど様々な媒体で入手した正しい英語で書かれた資料を使って, その英語を読み, 書き, 話し, 聴き取れるよう練習する。	
	Advanced English I (Cinema English)	(英文) In this course, using a movie as a learning material, students will improve their oral communication abilities, and deepen intercultural understanding. (和訳) 映画視聴によって受講生の会話力をUPさせ, 異文化理解を深める。	
	Advanced English I (TOEIC)	(英文) Students practice higher level listening and reading strategies for success when taking TOEIC. (和訳) リスニングとリーディングを強化してTOEICテスト高得点を目指す。	
	Advanced English I (TOEFL)	(英文) Students practice strategies for success on the TOEFL iBT Speaking Section. (和訳) TOEFL iBTのスピーキングセクション強化対策。	
	Advanced English I (EAP)	(英文) Students study the discipline of Community in English (和訳) コミュニティ学を英語で学ぶ。	
	Advanced English II (Pleasure Reading)	(英文) This course aims at developing reading skills by reading English extensively and enjoyably. The course consists of two sections: One is the classroom activities — using a textbook, the students learn how to read fast and get the ideas of the contents quickly. The other is the reading lab activities — The EPUU reading laboratory has some 5,000 English graded readers; The students are to check out those books, and read a large number of books assigned to each student according to his/her reading ability. (和訳) このコースは楽しみながら多くの本を読むことでさらに読解力の向上を目指す。授業の中では英文をさっと読んで内容を把握する練習を行う。さらに受講生はEPUUリーディングラボに蔵書された5000冊のgraded readers(英語学習者の語彙レベルに合わせた本)の中から自分の英語力に合わせた本を大量に借りて読むことになる。	
	Advanced English II (Presentation)	(英文) Students focus on organizational and speaking skills to give clear and effective presentations. (和訳) プレゼンテーションを効果的にするための構成や話し方のスキルに焦点をあてる。	
	Advanced English II (TOEIC)	(英文) Students practice higher level listening and reading strategies for success when taking TOEIC. (和訳) リスニングとリーディングを強化してTOEICテスト高得点を目指す。	
	Advanced English II (Academic Writing)	(英文) Students employ a process writing approach using a number of writing formats to gain the skills needed to progress towards writing academic papers. (和訳) フォーマットを使ったプロセス・ライティングアプローチを学び, 研究論文を書ける英語力をつける。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
リテラシー科目	Advanced English II (Cinema English)	(英文) In this course, using a movie as a learning material, students will improve their oral communication abilities, and deepen intercultural understanding. (和訳) 映画視聴によって受講生の会話力をUPさせ、異文化理解を深める。	
	Advanced English III (Pleasure Reading)	(英文) This course aims at developing reading skills by reading English extensively and enjoyably. The course consists of two sections: One is the classroom activities — using a textbook, the students learn how to read fast and get the ideas of the contents quickly. The other is the reading lab activities — The EPUU reading laboratory has some 5,000 English graded readers; The students are to check out those books, and read a large number of books assigned to each student according to his/her reading ability. (和訳) このコースは楽しみながら多くの本を読むことで読解力の向上を目指す。授業の中では英文をさっと読んで内容を把握する練習を行う。さらに受講生はEPUUリーディングラボに蔵書された5000冊のgraded readers(英語学習者の語彙レベルに合わせた本)の中から自分の英語力に合わせた本を大量に借りて読むことになる。	
	Advanced English III (Presentation)	(英文) Students focus on organizational and speaking skills to give clear and effective presentations. (和訳) プレゼンテーションを効果的にするための構成や話し方のスキルに焦点をあてる。	
	Advanced English III (TOEIC)	(英文) Students practice higher level listening and reading strategies for success when taking TOEIC. (和訳) リスニングとリーディングを強化してTOEICテスト高得点を目指す。	
	Advanced English III (Academic Writing)	(英文) Students employ a process writing approach using a number of writing formats to gain the skills needed to progress towards writing academic papers. (和訳) フォーマットを使ったプロセス・ライティングアプローチを学び、研究論文を書ける英語力をつける。	
	Advanced English III (Cinema English)	(英文) In this course, using a movie as a learning material, students will improve their oral communication abilities, and deepen intercultural understanding. (和訳) 映画視聴によって受講生の会話力をUPさせ、異文化理解を深める。	
	Honors English A	(英文) Advanced students use the four skills in English for discussion, listening comprehension, reading, and writing in order to complete classroom tasks and class projects. (和訳) 英語の上級者向けクラス。ディスカッション力、聴解力、読解力、ライティング能力をつかって、クラスに与えられた課題や研究に取り組む。	
	Honors English B	(英文) Advanced students use the four skills in English for discussion, listening comprehension, reading, and writing in order to complete classroom tasks and class projects. (和訳) 英語の上級者向けクラス。ディスカッション力、聴解力、読解力、ライティング能力をつかって、クラスに与えられた課題や研究に取り組む。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
リ テ ラ ン ー 科 目	Honors English C	(英文) Advanced students use the four skills in English for discussion, listening comprehension, reading, and writing in order to complete classroom tasks and class projects. (和訳) 英語の上級者向けクラス。ディスカッション力、聴解力、読解力、ライティング能力をつかって、クラスに与えられた課題や研究に取り組む。	
	Honors English D	(英文) Advanced students use the four skills in English for discussion, listening comprehension, reading, and writing in order to complete classroom tasks and class projects. (和訳) 英語の上級者向けクラス。ディスカッション力、聴解力、読解力、ライティング能力をつかって、クラスに与えられた課題や研究に取り組む。	
	Honors English E	(英文) Advanced students use the four skills in English for discussion, listening comprehension, reading, and writing in order to complete classroom tasks and class projects. (和訳) 英語の上級者向けクラス。ディスカッション力、聴解力、読解力、ライティング能力をつかって、クラスに与えられた課題や研究に取り組む。	
	Honors English F	(英文) Advanced students use the four skills in English for discussion, listening comprehension, reading, and writing in order to complete classroom tasks and class projects. (和訳) 英語の上級者向けクラス。ディスカッション力、聴解力、読解力、ライティング能力をつかって、クラスに与えられた課題や研究に取り組む。	
	Honors English G	(英文) Advanced students use the four skills in English for discussion, listening comprehension, reading, and writing in order to complete classroom tasks and class projects. (和訳) 英語の上級者向けクラス。ディスカッション力、聴解力、読解力、ライティング能力をつかって、クラスに与えられた課題や研究に取り組む。	
	Honors English H	(英文) Advanced students use the four skills in English for discussion, listening comprehension, reading, and writing in order to complete classroom tasks and class projects. (和訳) 英語の上級者向けクラス。ディスカッション力、聴解力、読解力、ライティング能力をつかって、クラスに与えられた課題や研究に取り組む。	
	Honors Camp A	(英文) Students will do individual and group research before the camp. At the camp they will work in groups, presenting and sharing their information and opinions. After the camp they will turn in academic papers based on their research and conclusions. (和訳) キャンプ前に受講生は個別にそしてグループで研究を行う。キャンプではグループの中でお互いの情報や意見を共有する。キャンプ後に結果を論文にまとめて提出する。	
	Honors Camp B	(英文) Students will do individual and group research before the camp. At the camp they will work in groups, presenting and sharing their information and opinions. After the camp they will turn in academic papers based on their research and conclusions. (和訳) キャンプ前に受講生は個別にそしてグループで研究を行う。キャンプではグループの中でお互いの情報や意見を共有する。キャンプ後に結果を論文にまとめて提出する。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
リテラシー科目	Honors Camp C	(英文) Students will do individual and group research before the camp. At the camp they will work in groups, presenting and sharing their information and opinions. After the camp they will turn in academic papers based on their research and conclusions. (和訳) キャンプ前に受講生は個別にそしてグループで研究を行う。キャンプではグループの中でお互いの情報や意見を共有する。キャンプ後に結果を論文にまとめて提出する。	
	Honors Camp D	(英文) Students will do individual and group research before the camp. At the camp they will work in groups, presenting and sharing their information and opinions. After the camp they will turn in academic papers based on their research and conclusions. (和訳) キャンプ前に受講生は個別にそしてグループで研究を行う。キャンプではグループの中でお互いの情報や意見を共有する。キャンプ後に結果を論文にまとめて提出する。	
	Study Abroad A	英語圏の大学や英語学校等における学修に対し、授業シラバス、授業時間数、成績を確認し、適当と思われる単位数を授与する。各個人で手続きをして学修してきた場合と、EPUU 主催の短期語学研修の場合の、両方を対象としている。	
	Study Abroad B	英語圏の大学や英語学校等における学修に対し、授業シラバス、授業時間数、成績を確認し、適当と思われる単位数を授与する。各個人で手続きをして学修してきた場合と、EPUU 主催の短期語学研修の場合の、両方を対象としている。	
	Study Abroad C	英語圏の大学や英語学校等における学修に対し、授業シラバス、授業時間数、成績を確認し、適当と思われる単位数を授与する。各個人で手続きをして学修してきた場合と、EPUU 主催の短期語学研修の場合の、両方を対象としている。	
	Study Abroad D	英語圏の大学や英語学校等における学修に対し、授業シラバス、授業時間数、成績を確認し、適当と思われる単位数を授与します。各個人で手続きをして学修してきた場合と、EPUU 主催の短期語学研修の場合の、両方を対象としています。	
	スポーツと健康	生涯にわたり適切なスポーツを楽しく行えるように、選択した運動種目の技術及び知識の習得と実践力を身につけ、身体活動を通して豊かなライフスタイルを形成できる能力を高める。	
	データサイエンス入門	情報化社会を賢明に生きるとともに、専門分野でリーダーシップを発揮するためには、情報の検索、交換、表現や分析等の利用技術に通じること、とりわけインターネットを効果的に活用する能力が必要になります。また、情報犯罪から身を守るため、そして、知らずして社会的な迷惑を与えたり、不法行為を行うことが起きないように、基本的なエチケットや情報倫理を学び、インターネットの持つ光と陰の両面を理解する必要がある。本授業では、情報化社会で必要不可欠とされる情報リテラシー(情報機器の操作法、情報および情報手段を自主的に選択し、活用していくための基礎的な能力)を修得する。	
とちぎ仕事学	「とちぎ仕事学」の授業で議論される「仕事」という言葉は、単に報酬に代える「労働」ではなく、広義に社会参画の「活動」として捉えている。宇大生の7割近くが県外出身者という構成の中、最低4年間はこの地を起点(もしくは基点)として活動するわけで、授業を通して、栃木の現状や課題を学び、地域コミュニティに関与することや主体的に参画することで、各人の成長につながることを期待するものである。		

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
人文科学系科目	哲学領域	西洋思想	本講義では、「西洋」とは何か、「思想」とは何か、という大前提を問うことから始め、次に、古代ギリシャから現代思想にいたるまでを概観する。その上で「近代」に着目し、「科学」と「自由」をキーワードに、「西洋思想」の本質およびその問題点を探っていく。先人たちの思想と現代社会に生きる我々のそれとの比較および影響について考えながら、現代社会が抱える具体的諸問題（環境問題、先端医療技術にまつわる倫理問題）にも言及する。	
		現代思想	「現代思想」という名のもとに包括される現代の様々な思想を概観する。また、概観を通じて「現代思想」の特性を検討し、どのような点で近代の思想などと異なるのかを考える。こうした作業を通じて、私たちが生きる現代の思考様式がいかなるものであるのかを学ぶ。	
		東洋思想	過去の思想理解を支点軸として、現代に生きる私たちの思想を考察する内容となる。日本人の思想の歴史は、「東洋」のテキストの解釈史とも言い換えられるため、本講義では、主に儒教の思想が日本において歴史的にどのように受容されてきたかを主軸に考えていく。	
		論理学	論理学の基本的な諸問題について学ぶ。 基本的な論理的概念を習得し、それらが論理的思考の中で果たす役割を理解すること。 教養科目中の人文科学系科目であり、あらゆる学問の基礎となる論理的思考について理解する。	
		西洋の倫理思想	価値観が多様化したといわれる現代において私たちが社会で様々な問題に直面したとき、歴史のなかで伝承されてきた先人たちの知恵から学ぶところは極めて多いといえる。本講義では、古代ギリシアから現代に至るまでの主要な西洋の倫理思想を理解するために、「正義」という観点からそれら諸思想について講義する。	
		科学思想史	科学思想史の基本的な諸問題について学ぶ。 神話から科学への歴史的発展と共に、科学方法論の種々の立場を理解する。 教養科目中の人文科学系科目であり、科学に対する歴史・反省的な見方を教養として身につける。	
		東アジアの宗教と文化	東アジアにおいて、宗教はどのような役割を担ってきたのであろうか。本講義では、特に中国仏教に焦点を当て、その基本的な知識を紹介するとともに他地域の仏教との関連性を考察する。授業の中では、フィールドワークの成果に基づく具体的な文化事例を示し、多角的な視点から社会と宗教との関係を示したい。	
心理学領域	認知心理学入門	パーソナリティ心理学とは、従来の「人格心理学」や「性格心理学」に概ね相当する。 本授業では、心理学がパーソナリティをどのように捉えているのかについていくつかの代表的立場の考え方について学び、パーソナリティの形成に関わる生物学的・心理社会的要因にはどのようなものがあるか、パーソナリティをどのように測るのか、パーソナリティは変わるのか、といったテーマに関して、これまでに蓄積されている知見に触れる。		
	パーソナリティ心理学概論	パーソナリティ心理学とは、従来の「人格心理学」や「性格心理学」に概ね相当する。 本授業では、心理学がパーソナリティをどのように捉えているのかについていくつかの代表的立場の考え方について学び、パーソナリティの形成に関わる生物学的・心理社会的要因にはどのようなものがあるか、パーソナリティをどのように測るのか、パーソナリティは変わるのか、といったテーマに関して、これまでに蓄積されている知見に触れる。		

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
心理学領域	言語習得論	本授業では、母語や外国語がどのように習得されるのか、そのプロセスとメカニズムについて主に言語心理学的観点から概説する。言語習得に関する関心と理解を深めることを目指す。学修・教育目標との関連 基盤教育教養科目人科学系科目の達成目標に対応する。講義形式で授業を進めるが、内容に応じてペアワークやグループワークを通して各自考えたことを発表することがある。子ども・第二言語話者の誤用、小学生作文の発達の分析、学習者と母語話者の会話などを取り上げながら、言語習得上の特徴と困難点について考察する。	
	質的心理学研究法入門	数値で示すことが難しいその人の在り方や、すくい上げられにくい少数者の声に着目する研究方法として、質的研究法がある。この授業では、心理学において質的な研究をするとはどういうことなのか、また実際にどのような方法で研究が行われているのかについて扱う。	
	児童生徒の思考と認知	児童生徒の思考、認知について、基礎的な知識や概念について講義を行う。その際、デモンストレーションも交えながら、伝統的な方法論から最新の研究まで紹介する。この授業では、思考・認知についてのこれまでの知見を学び、それらを学校教育に活かすにはどうしたらよいかについて考えることが出来る人材を育成する。基盤教育の授業であり、全ての学部が選択履修することが出来る。児童・生徒の思考・認知のメカニズムについて、基礎的な知識を身に着ける。	
	対人関係の心理学	私たちは、自分も意識しないうちに、他者や集団、文化の影響を受けながら生活している。本講義では、対人関係に関わる心理について、社会心理学の知見から学び、日常生活を心理学的な視点から考える態度を養うことを目的とする。	
文学領域	日本近代文学講読	俳句・短歌・現代詩といった文学活動に始まり、放送劇・演劇・映画の脚本・演出、さらには社会評論から歌謡曲の作詞まで、まさにメディアを横断して最先端の創造活動を続けた異能が寺山修司である。メディアの構造を揺さぶるその実験的な活動は、常に異端であり、前衛であり続けた。この授業では、寺山修司の作品と思想を考察する。	
	フランス文学	人文科学系科目では、教養の根本である哲学、心理学、文学、芸術の入門を学び、人間の本性や行動の背景を理解するための基礎的な知識や考え方、文学、文化、芸術の評価や鑑賞のための基本を身につける。この授業ではフランスの文学を対象とし、基礎的な知識と考え方を身につける。	
	比較文学	比較文学の歴史や研究方法、各国の文学動向を概観しつつ、西欧文学と深くかかわりながら発展を遂げてきた日本近代文学が、韓国や中国、台湾といった東アジア地域の近代文学の形成過程に大きな影響を及ぼした事実を明らかにする。と同時に、韓国近代文学の成立過程に深い影響を与えた日本近代文学の知られざる側面を浮き彫りにする。	
	ロシア文学	ロシアの文学について、歴史・社会的背景と関連付けながら学ぶ。文学史を時系列に沿って概観するとともに、19世紀に重点を置いて、解説を加えつつ重要作品の抜粋を講読する。あわせて同時代のロシア文化についても講義を行い、テキストの内容への理解を深める。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
人文科学系科目	文学領域	英文学入門	欧米各国の文学のうち、英国の文学に関する入門的な講義を行う。 イギリス文学について基礎的な知識や考え方を身につける。 人文科学系科目では、教養の根本である哲学、心理学、文学、芸術の入門を学び、人間の本性や行動の背景を理解するための基礎的な知識や考え方、文学、文化、芸術の評価や鑑賞のための基本を身につける。この授業では英国の文学を対象とし、作品の評価や鑑賞のための基本を身につける。	
		米文学入門	米国文学への入門として、20世紀を中心に主要な小説について概説する。 米国文学を理解するための基本的な知識や観点を学ぶ。 教養科目（人文科学系）として、米国文学を素材に、文学を評価・鑑賞するための基本を身につける。	
		ヨーロッパ地域文化論	旧来のハイ・アート（建築、彫刻、絵画等）の分類には含まれないロウ・アートに注目して、ヨーロッパの文化・芸術についての知識を得る。その際に、現代の様々なデザイン（グラフィック・デザイン、インダストリアル・デザインなど）へと至る過程を理解することによって、現代の生活の中にあるロウ・アートの重要性に目を向ける。	
		現代美学	自然をどうとらえるかによって、生み出される作品も異なってくる。思想やメディアの変化をふまえつつ、芸術が提示する諸問題について検討していく。 美学を学ぶ上での基礎的な知識を習得し、イメージや美をめぐる諸問題について考察できるようになる。 この授業では、人文科学系科目の到達目標である教養の根本としての哲学、心理学、文学、芸術のうち、美学・芸術に関する基礎的な知識を身につけ、幅広い教養を育むとともに、人間の本性や行動の背景を理解するための基礎的な知識や考え方、文学の評価のための基本を身につける。	
		芸術学	芸術学における基本的な概念及び方法論について学ぶ。イメージをとおして何が伝えられてきたのか、どのように解釈しうるのかを、現代芸術をめぐる状況も踏まえつつ、考察していく。 あるイメージを目にしたときに、その内容や意味、背景、制作された意図などについて自らの言葉で語れるように、また、現代における様々な視覚的イメージについて、批判的に検討できるようになる。 この授業では、人文科学系科目の到達目標である教養の根本としての哲学、心理学、文学、芸術のうち、芸術に関する基礎的な知識を身につけ、幅広い教養を育むとともに、人間の本性や行動の背景を理解するための基礎的な知識や考え方、文学の評価のための基本を身につける。	
		管打合奏演習	吹奏楽器（管楽器・打楽器群）構造とその奏法を理解し管打合奏の基本を習得する。 また、演奏を通じて社会に対してどのように貢献していくか探求する。 吹奏楽オリジナル作品を中心に演奏研究を行い、オーケストラアレンジ作品、ポップス、ジャズ等にバリエーションを広げ、研究発表を行う。また、多方面との連携し、より幅広いコミュニケーション能力を身につけていく。	
		日本文化A	俳句を通して、日本語の音、リズムに意識を向け、日本語を人前で話すことを探究する。そして、日本語の文字（漢字、ひらがな、カタカナ）が作る視覚的効果や音のイメージにも意を向け、言語感覚を磨く。さらに、季節感についても学ぶ。	
		日本文化B	俳句を通して、日本語の音、リズムに意識を向け、日本語を人前で話すことを探究する。そして、日本語の文字（漢字、ひらがな、カタカナ）が作る視覚的効果や音のイメージにも意を向け、言語感覚を磨く。さらに、季節感についても学ぶ。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
人文科学系科目	芸術領域	近現代美術論	広範なジャンルの作品を取り上げ、近代および現代の美術について考察する。批評的言説、美術史、芸術学、美術理論、さらには作家論、作品論なども交え、今日の美術を読み解く。 近代および現代の美術表現の多様性とその変遷を理解し、美術への関心を高めることを目標とする。また、自らの視点で美術を考察する能力を培い、明確に社会のなかで美術を位置づけられるようにする。	
		身体文化A	自分の身体に意識を向け、呼吸、発声、立つ、座る、歩くなどの日常生活での動作を、どのように行っているか知る。そして、フランクリン・メソッドを用いて、人間の身体が本来どのように機能するのかを学び、自分の状態を観察して、よりよい動きを探究する。さらに、それを、日本の伝統文化である能の身体技法に応用して実践する。	
		身体文化B	自分の身体に意識を向け、呼吸、発声、立つ、座る、歩くなどの日常生活での動作を、どのように行っているか知る。そして、フランクリン・メソッドを用いて、人間の身体が本来どのように機能するのかを学び、自分の状態を観察して、よりよい動きを探究する。さらに、それを、日本の伝統文化である能の身体技法に応用して実践する。	
		身体文化C	自分の身体に意識を向け、呼吸、発声、立つ、座る、歩くなどの日常生活での動作を、どのように行っているか知る。そして、フランクリン・メソッドを用いて、人間の身体が本来どのように機能するのかを学び、自分の状態を観察して、よりよい動きを探究する。さらに、それを、日本の伝統文化である能の身体技法に応用して実践する。	
		身体文化D	骨格、筋肉、内臓の存在と働きを意識しながら、機能的な呼吸、姿勢、発声、発音を、どのように行うのかを知る。そして、第一言語としての日本語の母音、子音について、一つずつ学び、アクセントを確認する。さらに、それを、日本の伝統文化である能の謡に応用して実践する。	
	人文総合領域	多言語コミュニケーション学A	(英文) situations we try to obtain mutual understanding rather than correctness of grammar or pronunciation. We will experience achieving understanding with some good use of our limited knowledge and ability in foreign languages throughout classroom activities. (和訳) 世界を見渡せば日常的でありふれたことだとさえ言える多言語を用いた意思疎通を、授業の中で実践する。多言語状況では、発音や文法の正確さよりも意思疎通の実現が優先され、不完全な言語運用能力も工夫ひとつで非常に役に立つ。そのため多言語状況は言語コミュニケーション自体に関する理解を深める絶好の場であり、授業をとおして自分の母語のあり方を振り返るとともに、クラスメートがやっている自分とは違ったコミュニケーションの仕方にも目を向ける視点を養う。	
		多言語コミュニケーション学B	(英文) situations we try to obtain mutual understanding rather than correctness of grammar or pronunciation. We will experience achieving understanding with some good use of our limited knowledge and ability in foreign languages throughout classroom activities. (和訳) 世界を見渡せば日常的でありふれたことだとさえ言える多言語を用いた意思疎通を、授業の中で実践する。多言語状況では、発音や文法の正確さよりも意思疎通の実現が優先され、不完全な言語運用能力も工夫ひとつで非常に役に立つ。そのため多言語状況は言語コミュニケーション自体に関する理解を深める絶好の場であり、授業をとおして自分の母語のあり方を振り返るとともに、クラスメートがやっている自分とは違ったコミュニケーションの仕方にも目を向ける視点を養う。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
人文科学系科目	人文総合領域	Linguistic Typology and Language Communication	In this course we will conduct classroom activities to discover various formal aspects of human languages, diversity of communication, relations between language and culture and so on, with interests in our own ways of communication in mother tongues/dialects as well as classmates' different ways. For this purpose we will grasp observed phenomena by utilizing methods and findings in language science.	
		日本語を文法的に考える	現代日本語の文法を日本語教育の立場から見直し、その論点や問題点を検討する。	
		論理表現の技術	教員採用試験に必要な、論理表現の技術を修得する。具体的には、「集団面接」「論作文」「集団討論」を想定し、それぞれに必要な知識と言語技能を修得する。個人で試験対策がしにくいような内容を優先し、集団の力を使って対策を行うための授業である。	
		綴方と生活	「綴方」という日本の戦前期に生まれ、戦後に息づく教育について知り、「生活」に結び付けた視点から、実作とその交流を行い、知見を広め考えを深める。	
		Japanese Communication Arts	COURSE DESCRIPTION In this course; we will explore various aspects of Japanese Communication Arts. This course will introduce different communication styles; which are crucial for successfully functioning in Japanese society. Japanese has a set of discourse styles; or registers that can seem complex to newcomers. We will look at the styles of speech used in personal versus public situations; by men and by women; by old people and young people; in a way that will help clarify the differences and offer you a window into Japanese culture. In addition to presenting the different styles; the class will help you situate them in terms of Japanese history; society; culture and education.	
		ことばから見た人間	「ことば」に対する言語学的（科学的）な接近法の初歩を学び、その視点から人間の有様や営みの諸相について考察する。形態は「講義」としてあるが、実際には対受講者または受講者間の質疑応答や議論、あるいは演習や課題などをまじえて授業を進める。ほぼ毎回の授業冒頭で事前に指定した課題（使用テキストの内容の事前理解）について小エッセイを記述・提出してもらう。AL20：総授業時間数の10～30%がアクティブラーニングである。	
		教育の裏側に光を当てる	教育にまつわる極めて実際的なトピックであるにも関わらず、学校教育では真正面から扱われることの少ない事柄をあえて組上に載せ、徹底的な討論をさせることで、受講生が受けてきた教育をより広い視点から捉えさせ、固定観念を乗り越えてあらたな社会を切り開く力を身につけさせることを志向するアクティブ・ラーニング科目である。	
社会科学系科目	法学領域	日本国憲法	憲法とは、国民の人権を保障するために、国家権力を制限し拘束する規範である。講義では、人権論を中心に検討していく。また、可能な限り最高裁判例等の事例を紹介する。幅広く深い教養を修得するにあたり、憲法を中心にしてこれからの社会や国のあり方を考える科目である。	
		法学入門	この授業では、賛否や意見の分かれる時事問題を主な素材として、「法的に考える」とはどういうことか、なぜ「法的に考える」ことが必要かを体験してもらうことを主な内容とする。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
社会科学系科目	法学領域	国際化と人権	1948年世界人権宣言は2018年には70周年を迎えた。この世界人権宣言第1条は「すべての人間は、生れながらにして自由であり、かつ、尊厳と権利とについて平等である。人間は、理性と良心とを受けられており、互いに同胞の精神をもって行動しなければならない。」と謳う。皆さんはこれを読んで何を思うだろうか？1948年に国際的にはこのような理念が示されながらも、どうして、アパルトヘイトは90年代まで続けられ、今なお人種差別や女性差別が問題となり、大量虐殺が発生しているなど、人権侵害の事例は後を絶たないのであるだろうか？本コースでは、上記の問いと向かい合いながら、グローバルな視座から人権問題を考察し、ローカルな視座からこれら問題を捉え直す。	
	法学領域	法学概論	本講義では、法学を学ぶ基礎を修得したうえで、わが国の司法制度をその担い手や手続の観点から概観する。また、憲法学、民法学および刑法学について、基本的な考え方を学ぶとともに、各法分野における論点をひとつずつ取り上げ、さまざまな角度から検討する。さらに、最高裁判例などの事例も可能な限り紹介し、考察を加える。 なお、裁判傍聴や検察庁訪問などを実施することがある。	
	社会科学系科目	国際政治史	近代ヨーロッパに生まれた国際政治のしくみは、大きな変容を繰り返しながら、二〇世紀には地球全体を包み込んでいくことになる。この授業は、(1) 国際政治史を考えるための導入、(2) 近現代国際政治の歴史的变化の概観、(3) 二〇世紀後半の歴史という三部構成で展開される。特に、(3) に重点をおく。	
	社会科学系科目	現代政治の理論と実際	現代政治はまさに生きものであり、刻々と変化する。この授業では、紙媒体の新聞報道やインターネット情報をもとに、とくに新聞報道を素材にして、その時々々のタイムリーな課題に注目しつつ、日本および世界における政治のダイナミズムを論じる。現在進行形で生じている政治・政策課題や社会的課題について取り上げこれを前半の授業では中心に進める。基本的にその年その年の大きな政治課題を取り上げる。	
	政治学領域	現代日本の政治と行政	政治はどこで、どのように決定されているのだろうか。なぜ、日本は政権交代が可能な選挙制度を取っているにも関わらず、結果として自民党の長期政権となるのだろうか。講義では、国会議員、官僚、利益団体・有権者、自治体の首長・議員、諸外国といった諸アクター(行動主体)の役割やその目的、相互の関係やアクターに影響を与える制度について、選挙、立法過程、事業実施、対外交渉といった場面に沿って説明する。加えて、日本と米国との政治過程について比較し、違いを説明する。	
	政治学領域	グローバル・ガバナンス論入門	本授業は、グローバル・ガバナンスの入門編として、世界での様々な具体的な例を挙げながら世界の急速なグローバル化を背景に、グローバル・ガバナンスとは何か、どのような問題が起きているのかを考えていく。21世紀に入り、南北問題をはじめ、新興国の台頭など、世界のグローバル化はより一層複雑さを増してきている。IT技術の進展とともに世界中の情報ネットワークは途上国においても進歩しているが、その反面経済活動における格差や貿易不均衡、環境問題などは益々深刻になっている。グローバル・ガバナンスとは何か、何が問題なのか、討論を交えながら考えていく。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
政治学領域	政治の世界	近代国家は、人々の多様に分節化した政治意識を一定の領域で国民の名の下に統合して発展してきた。だが、主権や自由といった近代国家を支配してきた主要な価値基準は、だれを当事者とするかによって正当性を動揺させる契機を常にもってきた。ことに近年のグローバル化の波は否応なく国家における「主権」という概念の転換を促しており、政治への無力感や無関心を誘発するとともに、「市民」の資格をめぐる排除・包摂の問題が改めて提起されている。こうした問題意識から本講義では、政治とはなにか、という本質的問題について、政治における価値や規範の多様性・流動性の理解を念頭に置いた、歴史的かつ批判的な政治学を講義していきたい。とりわけ後半では、「国家」と「国民」の乖離をめぐる問題として、外国人参政権問題、移民や無国籍者に対する市民権政策について世界各国の事例に関する比較研究を重要課題として提起するとともに、「国民主権」や「国益」といった概念がいかなる時に権力によって「同調」の圧力へと転化していくのかを議論してみたい。	
	現代日本政治論	本講義では、現代に至るまでの日本政治の構造と歴史を学んでいく。1回完結式で日本政治の重要な論点を取り上げて批判的に論じていく。特に日本政治の展開をアジアや欧米をめぐる国際政治的緊張関係において把握し、政治における理想と現実の関係、内政と外交の不可分性に焦点を当てる。政治学を学ぶ上で、日本の政治はいかに「開かれた」ものであったか、また日本政治において戦前と戦後はいかなる連続性をもっているのか、というのが履修者に問いかけたいテーマとなる。	
社会科学系科目	経済分析入門	経済学が蓄積してきた分析手法の詳細、経済理論の具体的内容については、専門教育科目で取り上げることとし、この授業では経済を分析するということの射程とその内容についての概要を解説する。	
	資本市場の役割と証券投資	直接金融への期待が高まる現在、資本市場に求められる役割とは何か。金融ビッグバン以降、激変する日本の資本市場の全容と投資とリスク&リターンのお考え方、株式投資・債券投資・グローバル証券投資・分散投資の方法などを実務の観点から解説する。	
	資本論を読もう	社会科学の古典としてマルクスの「資本論」を材料に、近代社会のものの見方や考え方を学び、社会問題・経済問題に関する視点を学習する。 経済学の一つの考え方であるマルクス経済学を通して、現実社会の様々な問題に自ら考え、自ら判断する能力を養う。	
	応用経済学入門	経済学の基礎を解説しながら、それが世の中に活かされている事例や、これから活かされることが期待されている分野などを紹介する。経済学の基本的な考え方や基礎理論について事例を参照しながら理解することで、学生生活や進路選択、その後の社会人としての人生において、物事のとらえ方や考え方の引き出しを増やしていくことを目標とする。	
	ゲーム理論入門	経済学、生物学などをはじめ、応用範囲の広いゲーム理論の基礎的知識を学ぶ。基礎的分析ツールの一つとして、ゲーム理論を学び、実際の社会をとらえ、分析を行い、問題解決を図る力を培う。	
	農業経営入門	どのような農業経営を行っている人がいるかの実例に基づいて、農業に関わろうとする際に直面する問題について考える、基本的な素養を身につける。農業経営や関連産業を素材として、現実社会の様々な問題に対応可能な理解力や思考能力を養う。	
	現代社会と金融	この授業では、現代社会における金融の機能や役割について考える。基本的な到達目標は以下の点である。(1) 金融の基本的な仕組みについて理解する (2) 経済過程全体の発程と金融との相応関係について理解する (3) 現実の金融的事象について考察を加えることができる。	
経済学領域			

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
社会科学系科目	社会学領域	社会的相互行為のデザイン 社会は人々の相互行為によって組み立てられており、そこには秩序だったデザインを観察することが可能である。ではそのような秩序だったデザインはいかにして観察可能か。こうした方法論が「会話分析」である。本講義を通じて、受講生は、この社会を分析する一つの視角を身につける。	
		現代日本の社会 現代日本の社会問題を社会学の視点から論ずる。「家族」「女性」「外国人労働者」をテーマとする。現代日本の社会問題の実態とその構造的な背景についての基本的な知識を得るとともに、それらに関する論理的な思考力・判断力を身につける。	
		オセアニア地域研究 文化人類学の立場からの地域研究を講義する。本講義では太平洋の島嶼域ミクロネシアの諸社会の比較研究を行う。中心となる主題は、1) 文化史から見た太平洋社会の成立、2) 生計経済と生活の基盤、3) 伝統的社会・政治組織の三つである。講義では太平洋諸社会の文化史的関係を概観したのち、文化人類学の方法論にもとづき個別社会の事例を検討し、諸社会の環境への適応、村落・家族を中心とする小規模社会の社会研究、また異文化理解の方法一般を検討する。	
		環境と国際社会 20世紀から21世紀に至るまで、国際社会がどのように環境問題に向きあってきたかを、通史的に学ぶ授業である。環境学の古典とも言われるレイチェル・カーソンの「沈黙の春」、ロンドンスモッグ事件、ベトナム戦争枯れ葉剤使用、ストックホルム人間環境会議、公害、酸性雨、砂漠化や森林破壊、ポパール化学工場事故、有害廃棄物の越境移動、チェルノブイリ原発事故、オゾン層破壊、気候変動問題、リオサミット、グローバリゼーションに起因する環境問題から、近年の低炭素社会・循環型社会形成、福島原発事故に至るまで、代表的な事件や文献、論争や国際的取組を取り上げ、地球環境政治の歴史的展開を学んでいく。	
	歴史学領域	多文化共生論入門 多文化共生という用語で表現される対象を具体的に理解するために、国際比較や理論的検討を通じて、多文化社会の現実と理念を考察するものである。日本だけでなく北米や欧州の動向にも目を向けて、多角的な分析を可能にしたい。	
		歴史学入門 歴史学入門といっても、歴史学の抽象的理論を紹介するわけではない。具体的な歴史をみる。今回は「世界の文明と宗教」と題してを概観する。 現在は、資本主義とサイエンス・テクノロジーの文明である。これはヨーロッパがたかだか200年前に生み出したものに過ぎない。それ以前の文明の本質は宗教であった。人類の歴史をみるには、宗教史を知っていなければならない。	
		歴史と民族 世界の歴史を「文明」と「民族」をキーワードに検討する。文明と民族の関係についての大枠の知識を身につけ、現代社会、未来社会を生き抜くための教養と思考力を身につける。 現代、資本主義とサイエンス・テクノロジーの文明は、もろもろのひずみを抱えている。過去の諸文明と諸民族の歴史の知識を身につけることによって、今後の諸問題に対応する能力を身につける。	
		歴史と文化 前近代の日本史を、文化事象や美術作品に注目しながら概説する。	
		地域の歴史 栃木県(下野国)の歴史と地域特性について、栃木県に現存する史資料を通して具体的に考えていく。主に、現代生活の基盤を形成した江戸時代、時代の主役に躍り出た庶民(百姓・町人)の活動を取り上げ、政治・経済・社会・文化など、さまざまな角度から地域史を学ぶ。適宜、明治時代以降の歴史や現在の状況、県外の事例についても触れていく。	
	社会総合領域	中東の社会と文化 中東諸国に関する様々なトピックスを入り口に、歴史・政治・経済・文化の基本的な知識を獲得する。その上で、中東地域を理解するための基本的な視角を得る。中東地域の概要を理解する。日本とは大きく異なる(ように見える)地域を理解する際の基本的方法を学ぶ。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
社会科学系科目 社会総合領域	遊びの理論とゲーム開発	前半では、遊びとは何か、人はなぜ遊ぶのか、人が「楽しい」と感じるのはなぜなのかを考察してきた理論を学び、後半では、そうした理論に基づいて、既存の（あまり面白くない）ボードゲームをより面白くするためのゲームバランスの調整を行うとかたちで、ゲーム開発の実習を行う。	
	遊び論と遊び指導	授業では、①子どもの遊びの教育的意義、②歴史的背景、③現状、④論点について講義を行うとともに、遊び指導に関して学び、実践を行う。	
	住まいづくり・まちづくり入門	わたしたちの日常生活を支える住まいとまち環境をどのようにすれば持続可能なものにできるのか、環境共生、超高齢社会、少子化などの観点から体験的に学ぶことにより、それらをより良くしていくための知識と能動的態度を養う。このため、E S D（持続可能な開発のための教育）の観点も取り入れる。	
	オイコス入門	現代社会に資する基本的な学問を取り上げ検討するとともに、学際的な視野から今後の学問について考える。学問の基礎を学び、学問の面白さを知るとともに、学問を探究する力をつけることを目標とする。	
	栃木県の歴史と文化	栃木県の歴史と文化の豊かさを認識するとともに、足尾鉍毒事件と渡良瀬遊水地の歴史と現在を学ぶ。目標は2つある。1つは栃木県の歴史と文化の豊かさを認識すること、もう1つは足尾鉍毒事件と渡良瀬遊水地の歴史と現在を学ぶことである。47都道府県の中で、栃木県の知名度・ブランド力はきわめて低いとされるが、内実は、1人当たり県民所得4位、農業生産高9位などと高く、評価と内実がかけ離れている。これは栃木県民にとって大問題である。知名度が低いのは、県民の郷土意識が低いことにもよる。本授業はその原因を探ってみたい。その過程で栃木県の歴史と文化の豊かさを掘り起こし、栃木県の知の中心を担う宇都宮大学で学ぶことの意義を認識したい。栃木県の人間にとって、日本の近代化の過程で起こった足尾鉍毒事件は避けて通れない大事件である。この深刻な環境破壊事件・人権侵害事件はどのような構造のもとに発生し、なぜ理不尽な結果に至ったのか。義人田中正造は被害者とともに事件とどう闘ったのか。谷中村を追われた村民はどのような生活を送ったのか。銅山の煙害で荒廃した足尾溪谷の治山・治水はどうなっているのか。谷中村を滅亡させてできた渡良瀬遊水地は現在どうなっているのか。このような問題を考察して、よりよい栃木県をつくるための糧にしたい。	
	グローバル化と外国人児童生徒教育	教育学部、国際学部の教員がそれぞれの専門分野の立場から、外国人児童生徒教育に関する今日的なテーマを取り上げて講義し、授業全体を通して、（1）外国人児童生徒教育の実情及び意義、（2）外国人児童生徒教育の現状と課題、（3）外国人児童生徒教育問題の論点について理解を深め、グローバル化する学校教育環境への適応するための素養を修得する。 （オムニバス方式／15回） （丸山剛史／4回） 教育課程論、教育社会学の立場から。 （田巻松雄／4回） 多文化教育、比較教育の立場から。 （威傑／4回） 日本語教育、多文化教育の立場から。 （鎌田美千子／3回） 日本語教育の立場から。	メディア オムニバス方式
	著作権法入門	知的財産法の中の著作権法を中心に、権利の保護のあり方、著作物の利用の仕方を知り、文化の発展に寄与することを目的とする著作権法の果たす役割を考える。現代社会でより身近になってきている著作権法を知ることにより、事例に遭遇した時に自らの力で考えることができる人材を育てる。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
社会科学系科目	社会総合領域	希望の地域社会論	少子高齢化, 家族など人間関係の疎遠, 社会的孤立, ストレスや雇用不安, さらには自然災害など, 希望をもちにくいように見える閉塞化した地域社会をどのようにとらえれば希望が生まれ得るのか, 人々が希望をもつにはどのようなアプローチが必要か, 地域社会におけるまちづくりの現場に即して受講生と共に考える。	
		農業と文明	人間が農業を開始したのは今からおよそ1.2万年前とされている。場所は現在のイラクとトルコにまたがる山の中であるとそうていされている。それは麦と豆, そして畜産を交えた混合農業であった。それから8000年を経て, 人間は農業によってメソポタミア文明を成立させるまでに至った。それは, エジプト文明へ, そして古代ギリシア文明, 古代ローマ文明へと引き継がれ, 古代社会の終わりとともにヨーロッパの中世社会を形成した。この授業では西洋を形成した農業について, 古代から中世を中心に講義する。	
		世界の農業	農業は, それぞれの地域・国の気候や風土を巧みに活用することによって成り立つ産業である。そのため, 世界には多様な気候・風土に立脚した多様な農業が展開されている。本講義では, それらの世界各地の多様な農業の実態と特徴を浮き彫りにする。さらに, 農業は食料問題のみならず, 自然環境やエネルギー問題とも密接に関連している。そこで, グローバルな視野から食料・環境・エネルギーの諸問題を農業問題と関連づけながら検討する。	
		アフリカ学入門	皆さんのアフリカのイメージは, 距離的に遠く, 自分の生活との直接的な関係が分かりにくいので, 少ない偏った情報から形成されているかもしれない。アフリカ大陸には多くの国々が存在し, 地域によって異なる自然・社会環境の基で異なる歴史をもった様々な人々がそれぞれの生業のもとで生活している。またアフリカ問題に関する誤解も流布している。本授業ではその多様性・多面性の一部を, 等身大で理解することを目指す。	
		国際協力の実際と課題	国際協力の現場は, 一つの学問だけでは問題が解決されず, 様々な分野の融合によって総合的に解決していくことが多い。本授業では, そのような国際協力の現場を理解するとともに, 国際協力では各々の所属学部分野においてどのような専門性が求められるのかを理解し, 今後のキャリア形成へとつなげていく。	
自然科学系科目	数学領域	電気電子数学入門	電気電子工学科の学生にとって必須である数学科目の学習は, 1年次前期の線形代数及演習 I, 微積分学及演習 I から始まる。これらと同時進行する本講義では, 上記数学科目を履修する上で土台となる数学の知識を学ぶ。 高校数学の数Ⅲまでの領域について学び, 大学における数学科目の履修に支障がないレベルまでの知識を習得することを目指す。さらに演習を通して計算能力の向上を目指す。	
		振動の科学	振動と波は密接に関係しているだけでなく, 楽器の仕組みも空気振動を使っており, 建物には免震構造が採用されている。また, 携帯電話などの無線や光通信でも電波や光として伝わっている。これらに潜む数字, 文字の成り立ちや本質にせまりながら, 振動や波の現象の科学に触れて自分の頭で考えるための基礎を築いて, 振動の科学に興味をもっていくことができるように願っている。	
		数学の世界	数学は, 現代の科学や技術の礎であることは明白であるが, 数学それ自身にも専門分野ごとに数学者を起点としたドラマがある。数学の研究とは, 未知の事柄を数学的に解明することであり, その推進には新たな世界を開拓し構築する知と行動力が必要不可欠である。この授業では, 未知の事柄の解明に向け, 数学者がどのような手段で, どう解決したか, 或いは解決しようとしているか等, オムニバス形式により「数学がもつその独特の世界」について講義すると共に簡単な演習を行う。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
自然科学系科目	物理学領域	家庭の中の物理	現代社会で用いられている科学技術のうち、物理学を用いているものについて、その基礎的な物理現象を理解する。 家庭で使われている電気や電気製品について興味を持ち、それらが物理法則に従って動いていることに注目し、自分の身の回りに興味を持つようになることを期待する。	
		放射線科学入門	放射線とは何かなど、身近にある放射線について理解を深めていけるように解説する。本来、放射線の分野は物理学であることから、数式が多く出てくると思っているかもしれないが、本講義では、なんとなくこう思っている、という感覚や思い込みを、少しでも正しく理解できるようになることを目指している。医療分野などで使われている放射線などについても知って、世の中にある多くの情報を鵜呑みにせず、その背景にも触れて、これらに潜む科学の成り立ちや本質にせまりながら、理解していく。	
		エレクトロニクス科学史	エレクトロニクスは、現代社会を支える重要な基盤であり、将来にわたって人々が豊かな社会生活を営むために不可欠なものである。本講義では、エレクトロニクスの歴史を概観することにより、如何にし新しい技術が誕生したか、また、その意義について解説する。エレクトロニクスの発展は多くの先人たちの貢献に支えられてきたが、これら先人たちの思考や経験を学ぶことにより、現代社会と自然科学の関係を理解する。	
		バイオミメティクス入門	生物が持つ高度な機能や製造過程を模倣して、技術開発に活かす学問領域バイオミメティクス(生物模倣技術)に関して体系づけて解説する。基本的な生物の組織構造から地球環境全体から見た「技術体系」、そしてこの学問領域の研究・市場動向、生物が進化によって得てきた効率的な動きや構造がいかん技術開発に用いられているのかを学ぶ。 生体力学(バイオメカニクス)から生体模倣技術(バイオミメティクス)が生まれた経緯や技術開発過程を習得することを目的とする。また同時に技術研究開発の実践過程についても触れ、工学研究の基礎を身につける。また最新の研究や技術に関する情報調査能力、グループワークによるコミュニケーション能力を養う。	
		ガリレオの静力学	イタリアの物理学者・天文学者・哲学者であるガリレオ・ガリレイは、天秤あるいはてこ(てこ)の釣合い原理のみを用いて、梁(はり)の強度論を展開させた。本講義では、釣合い原理と幾何学的手法で展開されるガリレオの静力学を学び、現代科学の基礎となった理論体系の端緒を理解する。	
化学領域	環境と生物化学	環境と生物のかかわりを、特に生物化学的な視点から取り上げる。地球規模での物質循環には、さまざまな生物、生命反応がかかわっている。また、地球の環境は、生物、特に微生物によって整えられてきた。一方、現在の環境の大きな問題として、環境汚染がある。地球環境の歴史および現状、そして、環境汚染の要因および環境汚染修復技術について、主に微生物学、生物化学、生物工学の観点から概説する。		
	不思議な化学	現代社会には、化学に関連した事柄が多く登場する。この授業では、化学の不思議な面を実際に実験で確かめ、考えながらその内容を理解する。 不思議で面白い化学現象の中身を調べてみると、様々なことが見えてくる。この授業では、化学の不思議な内容を理解することを目的とする。 日本化学会や応用化学科の一日体験化学教室などで紹介されている興味深い化学実験の中から、いくつかのテーマを選定して取りあげる。		
	リメディアル化学	高校化学の内容に自信が持てない学生を対象に、基礎・基本の理解の徹底と、大学の化学へのスムーズな移行をめざす。 高校化学の内容が理解でき、あわせて基礎的な教養レベルの化学を修得することをめざす。また、現代の科学技術および最先端の研究に関する知識に触れ 方法論を学ぶことによって、持続可能な社会の形成を担う先進性と独創性を有する 21 世紀型市民にふさわしい自然科学に関する幅広い教養を身につけることを達成目標とする。		

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
化学領域	物質・材料の機器分析入門	大学の研究室や分析の現場に常備されているような汎用型の分析機器を多数取り上げ、各機器に対して原理、機能、特徴などを横断的に概括する。 機器分析法の全体像、種々の分析機器に関する横断的かつ概括的な理解、知識を得ることを目標とする。 分析機器は日々高度化、高性能化しており、今日では誰でも簡単に分析結果を得られるようになってきている。しかしながら本当に意味のある分析データを得るためには、機器の操作者に、より高い知識や能力が求められているとも言える。本講義を受講することにより機器分析への理解を深め、更なる知識を身につけるための足がかりとなることを期待する。	
	ノーベル化学賞周辺の化学	ノーベル化学賞に関連した化学における重要な知見や分析手法を講義で説明し、また、2つの主要な化学機器分析法を実習を通して説明する。 ノーベル化学賞に関連した化学における重要な知見や分析手法を、講義及び実習を通して理解し、修得する。これによって、専門分野における化学の基礎知識を修得すると同時に、化学に対して更なる興味を抱く動機付けを行う。	
自然科学系科目 生物学領域	人間生活と植物	私たちの生活となじみが深い植物たちのルーツを探り、森林資源保護と地球温暖化、食料の安全性を脅かす放射線対策、食糧資源としての植物の重要性と世界的な需給関係、農業とバイオテクノロジーなどを取り上げる。また、暮らしに潤いや彩を与える「くだもの」と「花、庭園、市民農園」などをテーマに実例を紹介しながら機能的特徴と文化的側面について解説する。 店頭に並ぶ色とりどりの野菜や果物、花々や食べ物、庭園や公園の植物たち。しかし、日本原産あるいは自給可能な植物は意外と少ないことなどへの興味・理解を深めることで、植物と食物の生物学への関心を高め、環境保、身体や心の栄養としての植物の重要性を認識することを目指す。	
	食料生産の生物学	本講義では、私たちの食料の来し方、行く末について考えながら生物学を学ぶ。 皆さんは、本授業計画にある？にいくつ答えられるだろうか。少しでも多く答えられるようになってもらおうとともに、これらを考えながら未来を拓く知恵のトレーニングになるよう授業を進めたいと考えている。 宇都宮大学の教育目標「現代社会に必要なリテラシー（素養）、幅広く深い教養と豊かな人間性を身につける教養教育を行います。」に対応している。	
	野外における野生動物識別テクニックの基礎	日本では、人間と野生動物との軋轢が激化する一方で、絶滅に瀕した種が存在するなど、自然に関連する事象が社会問題として注目されつつある。こうした問題の本質を理解するためには、日本の自然に何が起きているのかを認識できる技術が必要である。本講義では、自然の変化を捉えるために欠かせない野生動物識別技術についての基礎を解説する。	
	ウイルスの世界と生物の世界	本講義では、風邪の原因であり健康を害する最も身近な存在であるウイルスについて、そもそもウイルスとは何なのか、生物との関わりは病気だけなのか、ワクチンとは何なのかといった疑問について幅広く概説する。 ウイルスを単に病気の原因としてではなく、どのような存在であるのか、現代のバイオテクノロジーによって医療やワクチン製造にも寄与していること、更には生物の進化にも関わってきたことについて理解することを目標とする。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
自然科学系科目	情報科学領域	C言語・プログラミング入門	パソコン、ゲーム機、携帯電話等、ソフトウェア無しでは機能しない機械が身の回りにたくさんある。本授業では、ソフトウェアの作成に欠かせないプログラム言語の一つ、C言語について、多くの課題をこなすことにより、その基礎知識や基本文法を学ぶ。C言語の影響を受けた言語が数多くあるので、C言語をマスターすれば、他言語の習得にも役立つ。 ハードウェア・ソフトウェアの働きについて理解を深め、資格取得や、勉学・研究に役立つプログラムが作れることを目標とする。プログラムの手続きとはなにか、情報科学的考え方とはなにか、基礎をしっかりと身につける。	
		プログラミング応用	コンピュータの使い方を覚えても、コンピュータについて学んだことにはならない。この科目では、プログラミングの側面からコンピュータへの理解を深め、能動的に使う姿勢を養う。そのために、まずプログラミングの初歩を学んだうえで、実社会の中での我々とコンピュータとの係わりについて学んでいく。 現代社会に参画しながら造り続ける（あるいは、身に付け続ける）幅広く深い教養の基礎を学ぶ。	
		グラフィックス入門	コンピュータグラフィックス（CG）に関する講義と、CGモデリングソフトによる3次元世界の記述の作成実習、3DCG開発環境によるCGプログラミング実習からなる。中間と期末の2回に分けて制作した作品の発表会を行う。	
		インターネットのしくみ	インターネットの基本的な「しくみ」を習得し、世界の情報通信について実例を通じて理解を深める。 DNS、HTTP、IP アドレス、MAC アドレス、Ethernet などに関連する各種の方式および応用を学び、今日の情報化社会における基盤を担うインターネットのしくみを理解することを目標とする。	
		Webのしくみ	World Wide Web（ワールドワイドウェブ）の基本的な「しくみ」を習得し、世界の情報通信について実例を通じて理解を深める。 今日の情報化社会において重要な機能を担う World Wide Web のしくみを理解することを目標とする。	
		身のまわりのICT	身のまわりにあり、私たちの生活や社会を支えている ICT について、幅広い事例学習を通じ、その基本的なしくみを習得するとともに、ICT 関連企業が求める人材像や栃木県内の ICT 企業の活動・方向性を学ぶ。 今日の情報化社会を支える ICT の様々な展開事例やそれらのしくみを理解するとともに、ICT 関連企業の活動やそこで求められる人材像等を知ることが目的とする。	
		ワイヤレス通信のしくみ	携帯電話に代表されるワイヤレス通信システムの基本をやさしく紹介する。簡単な通信システムを作ってみる。	
地学領域	地球環境と生物事件史	地球環境と生物事件史の講義では、長い地質時代における顕著な生物の絶滅事件や爆発的進化などの大きな生物イベントに焦点を当てて、地球環境と生命の歴史を解説する。 地球環境と生物事件史の講義は、過去30億年の地球環境の変遷と進化や絶滅などの生物の変遷の記録をどのように読みとるのかを理解することを到達目的とする。		
	身近な気象学	気象学を専門にする学生対象ではなく、それ以外の大多数の学生向けの気象学である。本来、気象学は物理学の一分野であることから、数式がたくさん出てきて難しいイメージがある。本授業ではこのような堅苦しさを取り払い、天気図、天気予報や身近な天気変化、大きな社会問題である地球温暖化などに焦点をあてて、「実生活に役に立つ」気象学を解説することに努める。		

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
自然科学系科目	健康科学領域	肥満の科学	スポーツ科学や健康科学を通して、多様なものの見方を培うのに必要な幅広い基礎的知識を身につけることを目的とする。 「運動」、「栄養」、「休養」が有機的に融合したスポーツ科学や健康関連諸科学を体系的に修得し、生活の質的充実の基盤となる食事や健康の重要性とスポーツの果たす役割やスポーツが本来有する「楽しみ」を知り、自ら健康を維持増進させるための基本的な知識と実践力を養成する。	
		健康管理学概論	健康に関する知識・情報を提供する。生涯にわたる健康管理に役立ててもらえるような内容になっている。	
		健康のためなら死んでもいい!?	若く活気のある時期には、あまり健康について意識しない。健康を失いかけて、年齢とともに体の不調を感じ始めると、人は初めて健康を意識する。誰しも健康であり続けたいと願うのは当然である。しかし、なかには過剰に健康を意識するあまり、健康を害している訳でもないのに、我々を取り巻く様々な情報に踊らされて、健康維持のために多大なお金とエネルギーを費やす人が多く見受けられる。本講義では、栄養学の視点に立って、栄養に係わるいくつかのテーマを取り上げ、日常生活のなかで健康維持と栄養について考える場合の基本的なアプローチの方法を学ぶ。	
	自然総合領域	人間の感覚を測る	この授業では「人間の感覚」をテーマに実際に受講生たち自らが考えた実験を行い、この実験から得られたデータに対して、統計的手法を用いて分析を行う。その結果を考察し、発表してもらう。この授業はグループワークによる実験の計画立案、実施、分析、考察を行いこれらの一連の作業を通して、受講生間のコミュニケーション能力、自主性の育成、統計学の実践的応用例の体験を目的としたアクティブラーニング科目である。	
		生物の多様性とは何か	環境破壊の中でも、回復が最も難しいのが生物多様性の破壊である。野生で生活する個体が失われると、その個体群を回復させるのは非常に困難で、絶滅すれば、その種は二度と戻らない。人間は生態系がもたらす様々なサービスに完全に依存していて、そのサービスの相当部分を生物多様性がもたらしている。本講義では、「生物多様性を失うと、こうしたサービスも失われるのか」という問いかけに応じた様々な研究事例と、それらから得られた知見を平易に紹介する。	
		雑草と人の暮らし	雑草は人の暮らしと密接に関わる植物群である。本授業では、雑草と社会との関係について学ぶ。 雑草と社会の関係を理解するとともに、雑草管理を進める上での合意形成の考え方を習得する。	
		雑草観察入門	私たちの身の回りには様々な種類の雑草が暮らしており、その観察は最も手軽に自然や多様性を感じられる手段の一つである。この手軽さから、雑草は生態や進化を研究する材料として古くから利用され、多くの知見が蓄積されてきた。本講義では、大学キャンパスに生育する雑草を観察材料として用い、植物の生態と進化、そしてそれらに及ぼす人の役割について学ぶ。	
		ESD入門	本講義は、ESD*の考え方をベースとして、持続可能な今後の地球のあり方を考える。特に、自然地理学（気候学・地形学）的視点から地球を捉え、地球表層環境の現象について理解する。また、国内外の世界遺産やジオパークに注目し、地域資源を自然科学と人文科学の両面から捉えることで、自然と人間の共生のあり方を検討する。	
	初習外国語系科目	フランス語基礎 I	この授業では、初めてフランス語に接する者を対象として、フランス語の文法の基礎を中心に学習する。 まず発音を正確にできるようになることが肝心である。次に重要なのが動詞の活用である。基礎的な動詞にかんしては何度となく反復練習と小テストをくりかえし徹底的に身につけてもらう。これらの基礎を元に、より複雑な文法学習に取り組む。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
初習外国語系科目	フランス語基礎Ⅱ	現代人は英語は当然のこと、ぜひとも第2外国語を学ばねばならない。世界は流動化しつつあるが、それを引き起こしているのは欧米中心の価値観の変動である。フランス語を学び、ヨーロッパについて知らないこと今後の世界の動きに付いて行けない。アジアやアフリカで国際活動に携わろうとする者にもフランス語は必須である。この授業では、初めてフランス語に接する者を対象として、フランス語の文法の基礎を中心に学習する。	
	フランス語基礎Ⅲ	フランス語を初めて学ぶ人を対象に、基本的なフランス語の会話表現を学ぶ。またそのために必要なフランス語文法の学習を並行して進める。 挨拶、自己紹介や数量の表現など、日常の様々なシチュエーションに応じた表現を習得する。発音練習や聞き取りを通じフランス語の表現に親しみ、フランス語の基礎文法の習得を目指す。また、専門課程をより深く学ぶための語学力・表現力を磨く。	
	フランス語基礎Ⅳ	フランス語を初めて学ぶ人を対象に、基本的なフランス語の会話表現を学ぶ。またそのために必要なフランス語文法の学習を並行して進める。 挨拶、自己紹介や数量の表現など、日常の様々なシチュエーションに応じた表現を習得する。発音練習や聞き取りを通じフランス語の表現に親しむこと、またそれに対応したフランス語の基礎文法の習得を目指す。	
	フランス語応用Ⅰ	この授業は、フランス語の基礎知識を持つ者を対象とする。教科書を実際に声に出して読む、書く、聴く、話してみるといった方法で、文法事項の既習内容も適宜確認しながら、発展的な内容へとつなげていく。履修者の積極的な参加を求める授業である。授業担当者自身がフランス語を学びながら考えたこと、フランスで体験した色々な出来事も、皆さんにお伝えする。	
	フランス語応用Ⅱ	この授業は、フランス語の基礎知識を持つ者を対象とする。教科書を実際に声に出して読む、書く、聴く、話してみるといった方法で、文法事項の既習内容も適宜確認しながら、発展的な内容へとつなげていく。履修者の積極的な参加を求める授業である。授業担当者自身がフランス語を学びながら考えたこと、フランスで体験した色々な出来事も、皆さんにお伝えする。	
	スペイン語基礎Ⅰ	動詞の使い方など、基本的な文法事項の説明が中心になるが、毎回の授業内容と関連した会話文も読み解く。さらには、テキストにある練習問題をやりながら、文法に関する理解を深める。	
	スペイン語基礎Ⅱ	動詞の使い方など、基本的な文法事項の説明が中心になるが、毎回の授業内容と関連した会話文も読み解く。さらには、テキストにある練習問題をやりながら、文法に関する理解を深める。	
	スペイン語基礎Ⅲ	テキストの各レッスンには7～8行程度の短い会話文がある。まず主な会話表現について、それぞれの意味と使い方を確認する。必要に応じて文法的な解説を行ったのち、会話文に関する応用問題、動詞活用の練習問題などを解いていく。反復練習が必要な場合には、プリントを使って補足練習したり、受講生どうしが向き合って会話練習したりする。	
	スペイン語基礎Ⅳ	テキストの各レッスンには7～8行程度の短い会話文がある。まず主な会話表現について、それぞれの意味と使い方を確認する。必要に応じて文法的な解説を行ったのち、会話文に関する応用問題、動詞活用の練習問題などを解いていく。発音練習・反復練習が必要な場合には、受講生どうしが向き合って会話練習を行う。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
初習外国語系科目	スペイン語応用 I	スペイン語圏への留学、旅行、就職など、日常生活の場面に応じた簡単で実用的な文章を読み、日常的な会話出来るように演習する。 スペイン語応用Iとスペイン語IIを1年間受講することにより、毎年春、秋に行われるスペイン語検定試験の入門レベル（6～5級）か、外国語としてのスペイン語検定試験（A1-A2）に合格できるような実力を養成する。	
	スペイン語応用 II	スペイン語圏への留学、旅行、就職など、日常生活の場面に応じた簡単で実用的な文章を読み、日常的な会話出来るように演習する。 スペイン語応用Iとスペイン語IIを1年間受講することにより、毎年春、秋に行われるスペイン語検定試験の入門レベル（6～5級）か、外国語としてのスペイン語検定試験（A1-A2）に合格できるような実力を養成する。	
	中国語基礎 I	初心者を対象に中国語の発音からスタートし、やさしい挨拶と日常会話、また、初歩的な文法事項などを学ぶ。 中国語を学ぶ第一歩としての本授業は、前期15回の学習を通して、中国語の発音が正しく出来ること、簡単な会話や最も初歩的な文法を理解し応用できること、さらに、今の中国人と中国社会全般への関心と理解を持ち、中国に関する知識と教養を有することを目標とする。	
	中国語基礎 II	「中国語基礎 I」を終えた方を対象に、中国語の基礎文法を本格的に学ぶ。文法事項を多くの例文を通して理解した上で応用を通して記憶する。文の排列順序、実用的な慣用表現・会話表現などを教え、中国の文化や歴史に関する様々な話もする。	
	中国語基礎 III	本授業は、はじめて中国語を学習する学生が正確な発音や基本文型の使い方を習得することを目的とした入門の講義である。現代中国語のやさしくかつ基本的な重要文法事項について解説を加えるのはもちろん、とくに基礎的会話能力醸成を重視する。このため、日本人の中国語学習者がもっとも苦手とする発音の訓練、及び日常的に使用する頻度の高い語彙の習得を授業の中心に据えることになる。	
	中国語基礎 IV	本授業は、中国語基礎 I 及び III を履修した学生が正確な発音や基本文型の使い方を習得することを目的とした入門の講義である。現代中国語のやさしくかつ基本的な重要文法事項について解説を加えるのはもちろん、とくに基礎的会話能力醸成を重視する。このため、日本人の中国語学習者がもっとも苦手とする発音の訓練、及び日常的に使用する頻度の高い語彙の習得を授業の中心に据えることになる。	
	中国語応用 I	中国語基礎 I～IVを履修し、中国語の発音、初級文法を一通り習得した学習者を対象に、初歩文法を復習しながら、中級中国語への橋渡しをする授業である。 文法を復習した上で、語彙や日常会話表現を増やし、表現力を高め、更に読解力を向上させることを目標とする。また、後期に開講される中国語応用 II とあわせ、一年の学習を経た後、一定の会話能力や聴解力を具備することを要求する（中国語検定4級レベル）。	
	中国語応用 II	中国語応用 I を履修した学習者を対象に、上級中国語への橋渡しをする授業である。 中国語で一般的な会話ができることを目標とする。特に、話す、聞く力を身につけることを重視する。	
	朝鮮語基礎 I	初習者向けとして、文字・発音・基本文型の修得を中心に、朝鮮語の基礎能力を養う。授業では、語順・語彙・文法など日本語との共通性の多さを通して学習意欲を喚起するとともに、韓国・朝鮮の社会と文化への関心に応える話題を提供したい。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
初習外国語系科目	朝鮮語基礎Ⅱ	短い応答文を用いた語彙の拡大と基本文型の修得を中心に、朝鮮語の基礎能力を養う。授業では、初習者向けの文法上の要点を解説するとともに、韓国・朝鮮の社会と文化への関心に応える話題を提供したい。	
	朝鮮語基礎Ⅲ	朝鮮語は日本語と言葉の順序や語彙、文法的に似ているところが多く、その仕組みさえ理解できれば、どの外国語よりも早く簡単に覚えらる言語である。本授業では、まず文字（基礎文字24＋合成文字16＝40文字）とその発音を学ぶ。1学期終了後には意味は分からなくても地下鉄のハングル表記やK-POP歌手のハングルの名前がすらすらと読めるようになる。	
	朝鮮語基礎Ⅳ	前期の『朝鮮語基礎Ⅲ』に引き続き、文字と発音に重点を置きながら基礎文法をマスターする。文法が分かってくにつれて基礎的な朝鮮語の文章の構造が理解でき、自己紹介や簡単な会話ができるようになる。12月頃には韓国の留学生や韓流スターに韓国語でクリスマスカードや年賀状、e-mailを書くことができるようになる。	
	朝鮮語応用Ⅰ	「朝鮮語基礎Ⅰ、Ⅱ」「朝鮮語基礎Ⅲ、Ⅳ」で学習した基礎的な文法や基本フレーズを踏まえ、基礎会話能力を向上させるための中級レベルの語彙・文法を中心に学習する。とりわけ、語彙・聞き取り・会話の表現力を高め、朝鮮語と日本語の差異についても理解を深めていく。したがって、日本語と比較しながら、朝鮮語独特の表現力と洗練された表現力を身に付ける。	
	朝鮮語応用Ⅱ	「朝鮮語基礎Ⅰ、Ⅱ」「朝鮮語基礎Ⅲ、Ⅳ」で学習した基礎的な文法や基本フレーズを踏まえ、基礎会話能力を向上させるための中級レベルの語彙・文法を中心に学習する。とりわけ、語彙・聞き取り・会話の表現力を高めて朝鮮語と日本語の差異についても理解を深めていく。したがって、日本語と比較しながら、朝鮮語独特の表現力と洗練された表現力を身に付ける。	
総合系科目	野外調査論	社会科学、自然科学を問わず、どんな分野でも、町や自然の中に出かけ、自らの手足でデータを集める必要に迫られるかもしれない。この授業ではその手法と考え方を、野外調査の実践を通じて学ぶ。 この授業は実際に野外に出て、自らの手足で一次資料を収集する経験を通じ、野外調査の意義と楽しさを体得することを目的とする。	
	里山のサステイナビリティを考える	栃木県の農山村の社会と自然を素材として、専門的な観点で調査研究をおこない、今までに学んだ知識を実地で確かめることを目指していく。これは皆さんが今まで学習したことの総仕上げとなると同時に、高校までとは異なる大学での学習のやり方への導入にもなるだろう。この授業では、茂木の里山を自然環境と農村社会の2つの面から調査し、その価値を理解することを目指す。	
	実践・宇都宮のまちづくり	人口減少や高齢化などによる地域社会の変容に対応した持続可能なまちをつくるために、宇都宮市がどのような政策を立案・実行しているのかを、市職員が実体験を交えながら講義する。データや情報と実社会での行政活動との融合を理解するアクティブ・ラーニング科目である。最終回には、宇都宮市長がまちづくり全般について授業を行う予定である。	
	地域金融論	経済や金融の基礎知識、日本経済の現状・課題を学習した上で、栃木県を中心とした地域経済の課題や活性化策について考えるアクティブ・ラーニング科目である。明治28（1895）年創業の「足利銀行」の歴史や、地域金融機関の役割を通じて見える地域経済の今日的な課題など、実学を幅広く取り上げることを予定している。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
総合系科目	地域金融機関とともに「地方創生」を考える	我が国全体が急速な人口減少と高齢化を迎えようとしている中、栃木銀行は、平成27年2月に「とちぎん地域産業創生プログラム」を展開し、地方創生に対する取組みを行って来た。地域金融機関として地域のさまざまな課題解決のために、地域資源を活用した地域独自の地方創生についての当行の取組みを、事例を交えて講義する。当行地域創生室とともに、実社会に提案できる課題解決策について一緒に考えていくアクティブ・ラーニング科目である。	
	3.11と学問の不確かさ	2011年3月11日14時46分18秒に発生した東北地方太平洋沖地震とそれに伴う津波、東京電力福島第1原子力発電所の事故は、東日本大震災(3.11)として未曾有の災害を日本と世界にもたらした。この東日本大震災は、学問の在り方についても多くの問題を提起している。	
	食と生命のフィールド実践演習	附属農場における実習と関連する事前学習と事後ディスカッションを通じて、我々の生活を支える食・環境・生命について体験的に学ぶことを目的としたアクティブ・ラーニング科目である。附属農場の自然環境の中で、五感全ての感じる力を覚醒し、課題解決に向けて自ら考え、自発的に行動する力を養う。	
	ボランティアという生き方	ボランティアとはどのようなものなのでしょうか？この授業では被災地支援、子ども支援、薬物乱用防止など、現代社会の課題に市民として取り組んでいく方法の一つとしてのボランティア活動について体験的に学びます。ボランティア活動の現場への参加が必須となります。	
	ダイバーシティ社会の中の男女共同参画	日本は人口減少、少子高齢化による生産年齢人口不足が深刻となっている。また、産業化、技術革新による変化に伴い、社会のニーズや個人のライフスタイルの多様化している。このような背景を踏まえ、なぜ男女共同参画やダイバーシティ(多様性)を推進する必要があるのか、歴史的背景や日本の現状を理解するとともに、自分たちの暮らしている地域の現状と課題について考察する。	
	ものづくり体験	本授業では「ものづくり」を通して、ものづくりのセンス、ものづくりの精神、問題発見と解決能力、そして最も大切な、新しいものを創り出す創造性を身に付けることを目的とし、特に専門知識を必要としない「ものづくり」の製作体験をする。受講生は設定されたテーマに取組み、グループで自主的に「問題発見」「設計」「製作」「評価」をし、成果の「発表」を行うことを目的としたアクティブ・ラーニング科目である。	
	宇大を学ぶ	この授業では、様々な特色を持つ宇大での学び方について考えてみる。グループで学習活動を行うことで「宇大に入って良かった」と思えることを増やしていきたい。今後の学生生活において重要となる学生同士の学び合い(ピア・サポート)についても理解を深め、その方法としてファシリテーションという話し合いの進め方を実践的に学ぶ。	
	地域メディア演習	情報の高度・多様化により、企業や行政、さらには市民そのものがメディア化しつつあり、情報発信スキルを持った人材へのニーズが高まっている。本授業では、地域コミュニティの再活性化のための方策のひとつとして、地域情報の役割と積極的な発信について取り上げる。	
	環境マネジメント実践	宇都宮市役所の環境対策の実施状況を実地で監査する。宇都宮市役所は現在ISO14001という国際規格に基づいて環境マネジメントシステムを構築し、それを実施している。それが約束通りに実施されているかを学生が監査する。学生は2名程度のチームを組んで市役所の「課」などの部署に訪問して、書類のチェックと実地の観察を行い、環境マネジメントシステムとの整合性について考察する。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
総合系科目	宇大生の宇大生による宇大生のための理想の授業	本授業は「学生発案型授業」である。本授業の昨年度受講生と有志学生がSA(Student Assistant)となり、授業テーマや授業のやり方を主体的に発案し、教員と協働して授業準備を進めてきた。この授業では、授業当日の進行も学生自身が担う。	
	Iより始めよ	大学生活の中で、自信が持てない、積極的に行動できない、理解できない講義が多い、などと思っており、これらを何とかしたいと強く望む人のための、「自主的自己改良」実践プログラムである。単なるスキルアップ(how to型)の授業ではない。また、いわゆる自分探しの授業でもない。自分と世の中をそれぞれ客観的に認識することを目指す。毎週、思考しかつ手足口を動かす。	
	災害に強いコミュニティづくり	災害に備えるとはどのようなことなのか。授業では災害について知ることや、国内外の被災地の事例や取り組みから学ぶことを通して、災害や地域コミュニティについて主体的に考え、行動することを目的としている。	
	アカデミック・スキルズ	この授業では、大学での学びにおいて必要不可欠な、聞く力/読む力/書く力/話す力の養成を行う。具体的には、講義の聞き方、文献の読み方、論理的な文章を書く方法、プレゼンテーションおよびディスカッションの方法など、4年間の大学生活の様々な場面で求められる、学習の基盤となる力の養成である。	
	大学教育と学士力	この授業では、まず、急激な変化を見せる社会環境や自然環境の中で、変化に飲み込まれることなく確かな足取りで生き抜いていくための力について学ぶ。その後、各自の興味関心に沿って現代社会における問題を自由に取り上げ、分析を加えることで、これからの社会で必要となる能力を身につけていくためのきっかけを提供する。	
	不安を減らし大学の講義が楽しくなるために必要なこと	大学で学ぶ上で、講義内容が理解しやすくなるために必要なことを行う。言葉と図解による概念の理解の仕方、各自のイメージを描画し説明する、単調作業による非認知力の強化など、「自主的自己改良」実践プログラムである。単なるスキルアップの授業ではない。毎週頭を使い、かつ手と口を動かす内容になっている。	
	超高齢社会を生きる	2025年から日本は超高齢社会となり、65歳以上の高齢者が国の総人口の30%を超えると予想されている。栃木県の地域課題であると同時に我が国の普遍的な課題である高齢化をポジティブに捉え直し、高齢者に関する課題を自らの問題とし、高齢者と共に生きるための知識を学ぶ。	
	ライフデザイン論	地域住民の暮らし・生活に必要な支援策及びその現状や課題に関する情報を提供し、それをもとに対話を行う。授業は行政職員を中心とするゲストスピーカーによるオムニバス形式とする。自分自身の暮らし・人生を主体的に形成しようとする機運を高める。また、地域住民の暮らし・生活を支える支援者としての素養を身につける。	
	地域編集論～地域振興と情報発信	私たちが生きている「地域社会」は、少子高齢化や東京一極集中が進む状況下でさまざまな課題を抱えている。同時に「その地域ならではの」資源や可能性も多く有している。地域の状況をどのように読み解いて、どのような働きかけを興してゆけば、健全な地域の未来が描いていけるのか。この授業では、「編集的思考」に基づく「地域振興」のあり方を皆さんと一緒に探ってゆきたいと考えている。	
	とちぎ企業人に学ぶ～業界・仕事・社会～	幅広い業界から、様々な事業規模の、栃木県を基点に活躍する実務家からの講話を聴講することで、「仕事」や「働くこと」を学ぶ。本学学生が就職している皆さんがよく知る企業から、規模は大きくなくても個性的な企業まで、また、起業家や創業家の事業承継者など、年齢や性別を含めて、多士済々が講師を務める。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
総合系科目	人権と福祉	社会福祉の根底にある基本的な理念は基本的人権を尊重することを通して個々の人間の尊厳を保障することである。本講義では、社会福祉に関する基本的な事項を概観するとともに、その根底にある基本的人権の尊重を目的とする様々な政策、サービス、理念に関して理解を深めることを目的とする。また、社会のグローバル化や少子高齢化を背景として、個々人が市民(シティズン)として社会福祉を支える主体となることが求められていることから、その主体形成としてのシティズンシップ教育についても考察する。	集中
基盤キャリア教育科目	人間と社会	経済・社会のシステムの変化により、働き方が多様化している。生涯を通じて、社会の一員としてどのような人生を歩みたいのか、どのように仕事と関わっていきたいのかを考え続け、主体的に選択していくこととなる。そのためにはまず、社会や経済、産業、職業など働くことに関する現実を正しく理解することが大切になる。この授業は働くことに関するさまざまなテーマについて最新の情報に触れ、その実態と課題を正しく理解する。	
	キャリアデザイン	経済・社会のシステムの変化に伴い、働き方も多様化している。自分らしく生き活きと生きるために生涯を通じてどのように職業とかかわるのか、どのような職業人生を生きるのか、そのために大学生活をどう送るのか、など、自らのキャリアデザインを描き、行動する力が求められている。この授業は、自分の将来を考えキャリアデザインを具体的に描くための考え方、きっかけ、知識、方法等を提供する基礎的なキャリア科目である。	
	実践企業人材論	29歳で会社を設立し、すでに3社を立ち上げ30年の企業経営経験をもつ現役経営者の実践的な企業人材論である。授業では社会の実際、企業の実態を本音で語る。企業の実像を明らかにしながら、同時に、いかに“自分を生きるか?”。そして、“夢と理想に向かった力強い人生を歩むか?”を共に考えていく講座である。その上で、“自分にあった仕事は何か?”や“真の仕事のやりがいとは?”“実力養成と収入の関係とは?”といった現実の問題を楽しく学んでいく。	
	起業の実際と理論	ベンチャー企業の事例や、実際の起業家との対話を通じ、「起業」という社会活動について学習し、これからの若者に必要とされる資質や起業家精神(アントレプレナーシップ)を養う。また、実際に自らのビジネスアイデアを考え、他者にプレゼンテーションすることで、企画・提案の楽しさを体験するとともに、ビジネスに必要な基礎的なスキルを習得する。	
	先輩に学ぶ	学長自ら代表を務める唯一の科目である。本学の教職員と卒業生が、学生のみなさんに対して人生の先輩として、学生時代を含めこれまでのキャリアを振り返りながらメッセージを伝える。それぞれの先輩がこれまで歩んできた道でどのようなことに悩み、いかに乗り越えてきたのかについて聞くことで、これから先の人生について考えを深めることを目指す。	
	キャリア入門～自分を育てる～	「キャリア」についての基礎知識および様々な理論を理解し、演習等を通して自己理解の方法や表現方法を学び、キャリア形成の視点から自分自身で自分を成長させるスキルを身につける。	
留学生日本語科目	アカデミック・ジャパニーズ	1年次の留学生と上級レベルの特別聴講留学生(短期留学生、日本語・日本文化研修留学生)を対象にした授業である。大学の勉学に必要な日本語能力を総合的に身につける。大学生活を想定した種々の日本語運用場面を取り上げるとともに、学術的な場面での話し言葉と書き言葉の違いについても学び、日本語能力の向上を図る。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
留学生 日本語科目	日本語アカデミック・リーディングⅠ	本授業では、学部1年次生の留学生を対象にした上級レベルの日本語学習として、論説文を読み解く力を養う。また、関連する語彙や文法項目についても取り上げる。大学学部レベルでの勉学に必要な学術的な文章が読めるようになることを目指す。	
	日本語アカデミック・ライティング	大学で書くレポートや論文は、手紙や感想文、作文の文章とは異なり、事実や意見を客観的・論理的に述べる必要がある。この授業では、学術的な文章の書き方と日本語表現を学ぶ。1年次の留学生及び上級レベルの特別聴講留学生（短期留学生、日本語・日本文化研修留学生）を対象にした授業である。	
	日本語アカデミック・リーディングⅡ	本授業では、大学学部レベルでの専門科目で扱うような専門性の高い文章の読解力を養う。関連する語彙や文法項目についても取り上げる。大学学部レベルでの専門科目に必要な学術的な文章が読めるようになることを目指す。	
	日本語アカデミック・コミュニケーション	この授業では、専門学習における日本語による学術的な研究成果の発表、および、その場で質問やコメントをした他者との質疑応答や意見交換などのインタラクションに用いる日本語の表現技術を内容とする。日本語を母語としない学生を対象とした授業である。	
教職基礎科目	教育原論	この授業では、我が国の教育を成り立たせている基本的な論理と、その歴史的な特徴について、基礎的な知識を与える。まず、「教育を受ける権利」や「義務、無償、中立」といった教育の基本概念を教える。次に、西洋と日本における近代教育制度の成立と展開について基礎的な事項を教える。さらに、ロック、ルソー、ヘルバルト、デューイなどの教育思想を材料にして、家庭や子供、学校、学習といった教育学の諸概念の成り立ちを教える。	メディア
	教育の社会的背景と制度原理	この授業では、現在の日本の教育が、現代社会のどのような影響を受け、どのような社会的要請に応じていく必要があるか、客観的データに基づいて考察することができるようになることを目指します。そのために、現代社会の要請に現在の日本の教育がどのように応えようとしているのか、今後どのような教育が必要となっていくのかをともに考察します。また同時に、社会の構成員にとって公正・平等な公教育制度のあり方について理解を深め、理想的な教育制度を自分なりに構想することができるようになることを目指しています。そのため、公教育制度の基本原則と役割、発達段階に応じた教育制度の歴史、構造、理念、現状、課題について基礎的な講義を行います。 (オムニバス方式/全8回) (76 小原一馬/4回) 教育の社会的背景をテーマに、子どもたちを取り巻く社会状況を客観的なデータを用いて考察する。 (69 小野瀬善行/4回) 教育の制度原理をテーマに、公教育の基本原則、構造、理念、現状、課題（安全管理も含む）を扱う。	メディア オムニバス方式
	心身の発達と学習過程	児童及び生徒の心身の発達の過程及び特徴を理解する。また児童及び生徒の学習に関する基礎的な知識を身に付け、発達を踏まえた学習を支える指導について基礎的な考え方を理解する。児童・生徒の学習や発達に資する教育心理学の基礎的な知識や捉え方について講義する。具体的内容としては、学習理論と教授－学習方法、発達理論、測定と評価などについて触れる。	メディア

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
教職基礎科目	特別支援教育基礎論	<p>主として初めて特別支援教育を学ぶ人を対象に、障害の捉え方、障害がある子どもおよび障害はないが特別な教育的ニーズを有し配慮を必要とする子どもを理解し、教育的対応を進めるうえでの基礎的な事項について概説し、特別支援教育についての基本的知識と関心を深めることを目的とする。本授業は、これから特別支援教育の専門科目を学ぶための入門編となる内容である。なお、本授業は、学校種を問わず、広く教員になることを目指す学生を対象とした内容とする。</p> <p>(オムニバス方式/全8回)</p> <p>(251 池本喜代正/2回) 第1回：特別支援教育とは、第2回：わが国の特別支援教育の現状と課題</p> <p>(77 司城紀代美/1回) 第3回：特別支援教育の教育課程</p> <p>(144 福田奏子/1回) 第4回：障害のある子どもの理解と支援1：個別の指導計画および個別の教育支援計画を中心に</p> <p>(68 岡澤慎一/1回) 第5回：障害のある子どもの理解と支援2：自立活動を中心に</p> <p>(65 石川由美子/1回) 第6回：発達障害や特別な教育的ニーズのある子どもの理解と支援、</p> <p>(144 福田奏子/2回) 第7回：世界の特別支援教育の現状、第8回：まとめ</p>	メディア オムニバス方式
	教育課程論	<p>本授業科目は教育職員免許法に規定された「教育課程の意義及び編成の方法(カリキュラム・マネジメントを含む。)」に関する科目の一つとして、学習指導要領を基準として各学校において編成される教育課程について、基礎的な概念や意義に関して理解させることを主な目標とする。具体的には、学習指導要領の性格や位置づけ、学習指導要領の変遷と背景、教育課程編成の原理、児童生徒の発達や学校・地域の実態と教育課程の関係、カリキュラム評価の原理と方法、等に関して講じる。</p>	メディア
	道徳教育授業論	<p>道徳科の特質や基本的な授業構造、指導方法等について、授業映像等を基に講義をします。また、各学年段階で活用する教材を紹介し、小学校及び中学校における道徳科の授業づくりを行います。具体的には、実際の教材を用いて指導案を作成し、グループ等で検討します。そして、学校全体として取り組む道徳教育及び道徳科の評価の基本的な考え方について見識を深めるようにします。</p>	メディア
	総合的な学習の時間の指導法	<p>小・中・高等学校で実施されている「総合的な学習の時間」の学習指導を実践するために必要な「探究的な学び」や「評価方法」などの知識・技能を習得し、具体的な授業設計ができることを目指す。総合的な学習の時間の意義と原理、総合的な学習の時間の指導計画の作成、総合的な学習の時間の指導と評価について扱う。学習指導要領における総合的な学習の時間の内容・方法</p> <p>(オムニバス方式/全8回)</p> <p>総合学習の歴史と教育課程における位置づけ、総合学習の代表的実践の検討 (83 丸山剛史)</p> <p>総合学習の模擬実践 (83 丸山剛史)</p> <p>年間指導計画と単元計画の書き方(栃木の事例を中心に) (71 川島芳昭・83 丸山剛史)</p> <p>年間指導計画と単元計画の書き方(群馬の事例を中心に) (30 音山若穂)</p> <p>総合的な学習の時間における評価の在り方 (30 音山若穂)</p> <p>課題解決と情報メディア活用の実践 (1) 情報活用能力の育成との対応、実践事例と考え方 (71 川島芳昭)</p> <p>課題解決と情報メディア活用の実践 (2) 情報メディアの活用、課題演習 (グループワーク) (71 川島芳昭)</p>	メディア オムニバス方式
	教育の方法・技術	<p>本授業科目は教育職員免許法に規定された「教育の方法及び技術(情報機器及び教材の活動を含む。)」に関する科目の一つとして、これからの社会を担う子供たちに求められる資質・能力を育成するために必要な教育の方法、教育の技術、情報機器及び教材の活動に関する基礎的な知識・技能を習得させることを主な目標とする。具体的には、教育方法に関する代表的な理論と実践、近年の教育政策で求められている子供の資質・能力育成のための教育方法、学習評価のあり方、話法・板書などの基本的な教授技術、代表的な情報機器・教材とその活用、等に関して講じる。</p>	メディア

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
教職基礎科目	生徒指導・進路指導	生徒指導や進路指導という教育用語で使われる「指導」という言葉の意味はどのようなことか。決して良くない行動を強圧的に抑えこむという意味でなく、生徒の成長に資するという意味があることや教師がそれを行う難しさがあることについて実感してもらおう。また、効果的な指導に関連する発達の観点の理解も促す。また、全体集団に対する指導や個別の問題に対する指導の際の留意点を踏まえる。さらに、教員が困難を感じやすい指導の際のコミュニケーション技法や行動変容の技法について学ぶ。	メディア
	教育相談の理論と方法	教育相談は、生徒が自己理解を深めたり好ましい人間関係を築いたりしながら、集団の中で適応的に生活する力を育み、個性の伸長や人格の成長を支援する教育活動である。不登校や虐待といった象徴的現象にとどまらず、全ての子ども様々の様々な心理的状態に寄り添い、掴み、次なる方向性に向けて教師と子どもが共に進むことは重要である。このような教育相談について本授業ではその理論的な視点や基本的方法について理解することを目的とする。学校における教育相談の意義と目的を理解した上で、教育相談を進める際に必要な基礎的知識、子どもの状態や症状に対する感受性について学ぶ。子どもへの対応として教員のコミュニケーションとにカウンセリングの基本的態度（受容、傾聴、共感的理解、純粋性）について学び、さらに具体的な行動変容の基本的知見について理解する。	メディア
小学校教科専門	小学校国語	小学校国語科の目標である「国語で正確に理解し適切に表現する資質・能力を育成する」ために必要な知識・思考力を修得する。日本文学、日本語学、書写のオムニバス形式で、各専門性に基づいて教育現場に即した教材提示や解説を行い、小学校国語に関わる基礎的知識や考え方を講義する。 (オムニバス方式／全15回) (22 守安敏久、98 河内昭浩、121 瀧田秀行／1回) 導入ガイダンス (22 守安敏久／5回) 日本文学の分野で「作家と作品」「作品と思想」「小説作品の読解」「韻文教材と言語文化」について講義する。 (105 小林正行／3回) 日本語学の分野で「日本語の文字の特性・漢字の構成」「漢字の読み・漢字指導」「仮名と仮名遣い・ローマ字」について講義する。 (34 小林英樹／3回) 日本語学の分野で「和語・漢語・外来語」「同音語」「2種類の謙譲語」について講義する。 (44 永由徳夫／3回) 書写の分野で「硬筆を中心とした書写技能の習熟」「毛筆指導上の基本的な筆遣いの習得」「毛筆による楷書」について講義する。	メディア オムニバス方式
	算数	算数教育の意義と課題について知り、算数科の指導と学習に関心を持ち、算数科の目標や内容といった基本事項について理解することを授業の到達目標とし、新学習指導要領の内容を基に、算数の授業を考えていくために必要な基本的事項をはじめ、算数科教育の意義と課題について講義する。 (オムニバス方式／全15回) (82 牧野智彦／3回) 「主体的・対話的で深い学び」のねらいと内容とともに、数学的思考力と表現力について講義する。 (109 澤田麻衣子／3回) 算数科で学習する学習カリキュラムの内容構成について、算数科における図形教育に焦点をあて、内容や指導上の問題について取り上げ講義する。 (133 川上貴／3回) 算数科における統計教育、統計的な問題解決をについて講義する。 (138 小泉健輔／3回) 算数科において、数学的活動をどのようにして具体化していくかについて講義する。 (148 日野圭子／3回) 数学的に考える資質能力の育成に向けた、これからの算数科における授業と授業研究について講義する。	メディア オムニバス方式

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
小学校教科専門	小学校家庭	<p>小学校家庭科の指導に必要な家庭生活、消費生活、食生活、衣生活、住生活分野に関する基礎的知識を獲得を授業のテーマ到達目標に、衣食住を中心に、家庭生活と環境との関わりについて、小学校教科「家庭」の背景にある科学的知識及び考え方について講義する。</p> <p>(オムニバス方式/全15回) (1 赤塚朋子/3回) 小学校教科「家庭」と家庭生活、人々の関わり、消費生活と環境について講義する。 (123 前田亜紀子/2回) 衣生活における「自立の基礎を培う衣服選択」及び「手洗い洗濯と衣服管理」について講義する。 (11 佐々木和也/2回) 衣生活における「被服製作(ものづくり)の意義」及び「襤褸にみる環境教育の視点」について講義する。 (45 西園大実/4回) 食生活における「食事の役割、日常の食事」、「体に必要な栄養素の種類と働き」、「食品の栄養的な特徴と組合せ」及び「調理の基礎、食品の安全と衛生」について講義する。 (13 陣内雄次/2回) 住生活における「住まいについて学ぶことの意義」及び「住まいの学びを教科書から振り返る」について講義する。 (40 田中麻里/2回) 住生活における「住まいとまち環境の地域性」及び「快適な室内環境と住まい方」について講義する。</p>	メディア オムニバス方式
	生活	<p>本講義は、生活科の内容に関する科目として、生活科の教育目標に関する理解を深めつつ、生活科の指導内容に関する科学的認識やスキル、内容構成や教材の研究・開発、学習評価に関する能力を実践的に学ぶことを目的としている。具体的には、自己認識、家庭生活、社会認識、自然認識、地域社会、公共施設、動植物の栽培飼育等の内容を取り上げる。</p> <p>(オムニバス方式/全15回・宇都宮大学) (単独・群馬大学)</p> <p>(80 出口明子/4回) 生活科の内容構成と教材の特色、学校内活動、四季の教材、人間関係づくりに関する教材、生活科における評価について担当 (83 丸山剛史/2回) 公共物や公共施設に関する教材、家庭生活に関する教材、自己認識に関する教材について担当 (71 川島芳昭/2回) 栽培活動・動物飼育に関する教材、学校内の自然に関する教材、遊び・おもちゃづくりに関する教材を担当</p>	宇大オムニバス/群大単独
	小学校音楽A	<p>小学校教科「音楽」を実際に指導するために必要な基礎的能力を、実技等の実践を通して身につける。具体的には、小学校の教員が音楽科の授業を行う際に必要な音楽の基礎として、楽譜の読み方、リズムや拍子をはじめとする簡単な音楽理論、小学校で取り扱う機会の多い楽器の奏法などを学修する。歌唱や器楽、創作を取り入れた様々な音楽活動や鑑賞との関連についても、演習を通して実践的に学修する。</p>	宇大単独/群大共同
	小学校音楽B	<p>小学校の教員が音楽科の授業を行う際に必要な、簡単な楽典、歌唱、ピアノ奏法、弾き歌いの演奏法を身に付けることを目標とする。弾き歌いは、音楽授業で歌唱指導を行うために必要な技能であるため、歌唱共通教材や子どもの歌唱曲などのレパートリーの習得を目指す。各授業の前半では楽典や子どもの歌唱教材研究を行う。後半は弾き歌いの技能向上のため、個人レッスンを中心としながら、基礎的実践能力を高める。またコードネームからの簡易伴奏付け実習も行い、小学校の音楽授業の即戦力となるレパートリーの拡充に取り組む。</p>	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
小学校教科専門	図画工作	小学校図画工作科の内容について、学習指導要領や教科書、発達段階に即した理解を深め、児童の個性や主体性を生かした授業を担うための諸能力を身につけることを目標とする。 図画工作の「造形遊び」「絵や立体、工作」「鑑賞」について、教育方法や授業実践の視点、題材の特性、図画工作科の理念などを講義する。また、実技制作と教師役のロールプレイ、模擬実践、教材試作などを取り入れ学修を深める。	
	小学校体育	小学校での体育指導に関する専門的な知識及び技能を学ぶとともに、実践的な指導力を身につけることを目的とする。本授業は小学校学習指導要領で示されている体育の運動領域に関する内容について、いくつかの内容を取り上げ、実践を通じて、それらの特性を理解し。児童に指導する際のポイントなどについて学ぶ。また、指導に際しての安全面での配慮事項などを学ぶことで、授業の実践力を身に付ける。	共同
小学校指導法	初等国語科指導法	小学校での国語の授業における学習指導について基礎から学ぶ。国語の授業を構想・実践するための能力を育成する。学習におけることばの役割や学習者の立場からの授業構想、学習指導要領における国語科の構造、学習指導法について学ぶ。 (オムニバス方式／全15回) (宇都宮：63 飯田和明／3回、84 森田香緒里／4回) (群馬：121 濱田秀行／7回) 子どもの言語能力の発達や学習デザインについて、また「読むこと」の指導について講義する。 (宇都宮：84 森田香緒里／7回、176 中島望／1回) (群馬：98 河内昭浩／8回) 学習指導要領について、また、「書くこと」の指導、[知識及び技能]の内容(書写を含む)について、情報機器の活用について講義する。	オムニバス方式
	算数科指導法	小学校算数科の目標、内容及び指導方法に関する基礎的な知識を獲得すること、小学校算数科の内容やその指導方法への関心・意欲を高め、授業実践に活かそうとすること、小学校算数科の指導内容を踏まえ、教材のもつ数学的な背景や教育的意義について考察することができること、算数の指導案や授業展開の仕組みなど、算数の指導法の基礎について理解することができることを授業の到達目標とし、学習指導要領に示された小学校算数科の目標と学習内容をはじめ、算数の学習指導の過程、学習評価の考え方など、算数の授業をつくる上での基礎を学ぶとともに、小学校教員として必要な算数教育に関する基本的な資質・能力を習得する。	
	初等社会科指導法	本授業では、小学校社会科の歴史や現状、諸問題を概観したのち、カリキュラム構成の方法や、発問のあり方について実際の授業事例をもとに考える。小学校社会科の指導の基本を学んだのち、学習課題に基づくグループワーク、単元をとおした学習指導案の作成、模擬授業、授業や指導案の検討を行う。基本的には、授業内容に関する配布資料や学習指導要領解説等をもとにした講義形式で進めるが、適宜、小学校社会科教科書や副読本等を用いた学習活動を取り入れる。 宇都宮大学では熊田禎介が担当し、群馬大学では、宮崎沙織と中尾敏朗が以下のような分担で担当する。 (単独・宇都宮大学) (オムニバス形式／全15回・群馬大学) (126 宮崎沙織／8回) 小学校社会科の歴史や現状、教科の目的、カリキュラム構成論などを踏まえ、今後の小学校社会科授業のあり方について検討する。 (43 中尾敏朗／7回) 教材研究の進め方と教科書の活かし方など、授業設計や指導実践に関わる課題について学習し、その知見を踏まえて学習指導案を作成する。	宇大単独／群大オムニバス方式

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
小学校指導法	初等理科指導法	学習指導要領に基づき、小学校理科の目標と学習内容についての理解を深めるとともに、具体的な授業場面を想定して教材の扱いと指導法を実践的に学習する。講義では、小学校理科の学習内容とその系統性、子どもの自然認識、科学的概念の形成、理科における問題解決、などを取り上げる。教材研究と指導法に関する解説では、粒子・エネルギー・生命・地球の各領域から具体的な教材を取り上げ、体験的に学習する。さらに、学習指導案の作成、模擬授業の実施や振り返りを通して、理科授業づくりのための実践的指導力の基礎を習得できるようにする。	
	生活科指導法	本講義は、生活科の指導法に関する科目として、生活科の教育目標、指導の内容及び方法の特質を理解し、学習指導案を作成することができるよう、授業設計に関する科学的認識及びスキルを学ぶことを目的としている。講義では、模擬授業及びその批判的検討等により、授業実施の実践的な能力を習得させる。その他、生活科における的確な情報機器・教材活用に関しても取り上げ、指導する。 (オムニバス方式／全15回・宇都宮大学) (単独・群馬大学) (80 出口明子／10回) 生活科と小学校低学年の発達／生活科における自己認識、学校と生活、家庭と生活、地域と生活、社会や自然との関わる活動に関する内容、学習指導案の作成等を担当 (83 丸山剛史／4回) 生活課設置の経緯・背景、学習指導要領における目標及び内容、身近な人々と関わる活動、幼児教育との接続を考慮した指導を担当 (71 川島芳昭／1回) 生活科の学習指導案の構成、効果的な教材・情報機器の活用方法を担当	宇大オムニバス/群大単独
	初等家庭科指導法	初等教育における家庭科教育の位置づけ、教育目標、教育内容、領域、学習形態等、家庭科の教科としての特徴(歴史の変遷を含む)を理解し、それに沿った授業設計と学習指導案づくり、指導方法等を学ぶことを目的とする。また、学習指導要領における目標を達成するための学習指導や授業展開、評価等のあり方について検討し、主要な教育理論を踏まえて具体的な授業場面を想定した授業設計の方法を身に付ける。学生自身が主体的に教材研究・教材開発や模擬授業に取り組む中で、情報機器及び教材の効果的な活用方法を身に付けるように、授業研究と省察等を通して相互に批判・検討しながら家庭科教育実践の力量を高める。	
	初等音楽科指導法	小学校音楽科の教師として求められる幅広い知識や能力を培い、これらを基盤に学校現場での実践的指導力を養う。具体的には、我が国における音楽教育の歴史から初等教育における音楽科教育の位置づけを理解し、教育目標、教育内容、領域、学習形態等、音楽科の教科としての特徴を理解する。各論としては、歌唱では歌唱指導の方法や変声期について、器楽ではリコーダーや鍵盤ハーモニカを中心とした小学校で取り扱う機会の多い楽器について、音楽づくりでは教材の工夫について、鑑賞では鑑賞のポイント設定や取り扱う楽曲について理解する。その上で、学年ごとに各分野のバランスのとれた指導計画、学習指導案を作成し模擬授業を行う。さらには並行して、音楽科授業を実践するために必要な、歌唱や器楽等の演奏に関する基本的な知識と技能についても学習し、音楽科の授業をつくる力を身に付ける。	
	図画工作科指導法	図画工作科の成り立ちや教科の特性、学習内容について、教科書題材や理論的考察から理解を深め、図画工作科の学習指導における基礎能力と総合的な教育観を培うことを目標とする。小学校図画工作科に関する基礎的事項について、その現況および今日の諸課題、教科書掲載題材の分析、また、理論と歴史などから抽出される学的諸問題や学習指導法を解説・講義する。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
小学校 指導法	初等体育科指導法	小学校での体育授業の学習指導に関する基礎的な知識（目標、内容、方法、評価）を習得するとともに、授業設計および実践的な指導法を身につけることを目的とする。小学校学習指導要領における体育の領域について、いくつかの内容を取り上げ、その特性を踏まえた教材づくり・授業づくりを学ぶことによって、学習指導案を作成する。さらにマイクロティーチング等の実践により、体育の学習指導についての理解を深め、指導法を習得することをめざす。	共同
	初等英語科指導法	小学校外国語教育に関わる日本の英語教育政策や第二言語習得について理解を深め、多様な指導環境での教育実践という実情を踏まえながら、基本的な英語の指導技術や学習計画の立て方から学習の評価の仕方までの基本的な知識を身に付ける。指導法としては、学習指導要領に示された4技能5領域の力を育てるために、TPR, Communicative Approach, Natural Approach, CLILの理論から小学校英語教育の実践のあり方、具体的な指導技術について学び、考える。また、教科書や教材の分析のための基礎的観点を示し、教材分析を行うための能力を養うための活動も取り入れる。	
	文章表現	文章表現に関する諸知識を理解するとともに、「国語」を教える者に必要な文章表現力を修得する。様々なジャンルの文章を読解しながら、文種、構文、構成、レトリックなど、文章表現に関するさまざまな知識を理解する。また、文章表現を行うために必要な作文技術を、講義及び演習を通して修得する。具体的には、要約、引用、例証、論証、反論など、論理的な文章表現に必要な作文技術を扱う。実際に文章を書き相互批評を行うことで、国語教師に必要な文章表現力を養う。	メディア
中学校「国語」に係る科目	日本文学概説A	中学校・高等学校の国語科で文学的教材を扱う際に必要となる基本的態度と基礎的技能を養うために、近代日本の優れた掌編小説をとりあげ、様々なアプローチ方法を駆使して解釈と鑑賞を行う。日本近代文学の史的全体像を提示するとともに、「作者」「読者」「空白」「主題」「解釈コード」「文体」「人称」「視点」「モチーフ」「メタファー」「時代背景」「注釈」「批評的解釈」等々の分析方法を紹介し、文学を読むとはいかなる営為か、日本の近代文学はどのような特色を持ち、どのような命題に向かっていたかを、具体例に則して概説する。	メディア
	日本文学概説B	文学作品を読み、文学的な知識を深めるとともに、教員であれば必要とされる文学的な読解力と思考力を学び、それを読書指導に生かす。主として森鷗外作品を題材として、文学的な知識を深めるとともに、考察力を養成する。森鷗外の一連の歴史小説（『興津弥五右衛門の遺書』『山椒大夫』など）を読み進むとともに、その前後に書かれた現代小説（『雁』）をも考察する。さらに同時代の夏目漱石や自然主義文学の動向を見据えながら、明治末から大正初期にかけての文学史を俯瞰する。	メディア
	日本語学講読A	日本語の文法について理解を深め、日本語の仕組みを自分自身で分析できるようになることを目的とする。具体的には、1) 述語の構造、2) 動詞の自他（「クッキーが焼けました」vs. 「クッキーを焼きました」）、3) ヴォイス（「する」vs. 「される」）、4) やりもらい（「あげる」、「くれる」、「もらう」）、5) テンス（「する」vs. 「した」）などのトピックを取り上げる。教える側からの一方通行の授業にならないように、学生にも発表（上記のトピックを扱った論文の紹介など）を行ってもらおう。	
	日本語学講読B	日本語史上のさまざまな言語事象についての知識を得、説明できるようになることを目的とする。また、言語の歴史的な変化に対する知識に基づいて、教員として古典の言葉や日本語の変化にどのように接するか、知見を得る。 日本語学の諸分野について、歴史的な変化を概説する。古代日本語の特徴や現代の日本語に至る過程を知り、両者を連続的に捉え、現代も変化の過程にあることを意識できるようになる。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
中学校「国語」に係る科目	日本文学講読A	中学校・高等学校の国語科で文学的教材（小説・評論・随筆・詩歌）を扱う際に必要な日本近現代文学の基礎的知識と博く深い興味関心を涵養するために、近代日本の代表する作家・作品を、明治初年代から昭和戦前期まで、おおむね刊行年代順にとりあげ、その史的位相と文学的な特質と意義、および今日的な魅力を作品の抜粋の講読を通して講義する。文学の変遷を、時代の社会文化状況と関連させ、通史的・俯瞰的・多角的にとらえる見地を修得させる。	
	日本文学講読B	文学的教材（小説・評論・随筆・詩歌）を扱う際に必要な基礎的技術と態度を養うために、明治から昭和期の文学作品を面白く読むためのアプローチ方法を、作品に即して実践的に指導する。年度毎に「恋愛」「家族」「友情」「宗教」「死生」「都市」「自然災害」「少年少女」「犯罪」「怪奇幻想」「狂気」等々のテーマを設け、夏目漱石・森鷗外・樋口一葉・泉鏡花・志賀直哉・芥川龍之介・谷崎潤一郎・太宰治・井伏鱒二・中島敦・川端康成・太宰治・宮澤賢治等々の近現代日本を代表する作家の優れた作品を取りあげる。	
	日本文学講読C	上代から中世までの我が国の言語文化の流れを概観することを通じ、そこに見て取れる表現の特色を理解する。『古事記・日本書紀』『万葉集』『古今和歌集』『伊勢物語』『大和物語』『土佐日記』『蜻蛉日記』『枕草子』『源氏物語』『今昔物語集・宇治拾遺物語』『新古今和歌集』等、各時代を代表する古典作品を、おおむね成立年代順に取り上げて読解。話型・歌語の変遷・和歌の応酬・歴史的背景と准拠など、多様な視座から考察することで、我が国の言語文化の伝統性への理解を深める。	
	漢文学概説	中国文学、思想、東洋史等の学習の基礎となるべき漢文訓読法を習得する。更に、中国の散文、韻文の成立・展開を理解し、また我が国の漢文学の展開をも理解する。漢文すなわち文言文の語法や文を構成する基本構造について説明する。また、文言文の特徴や漢文訓読に使用される訓読語についても講義する。更に中国の散文・韻文がどのような歴史的背景において成立したか概説する。特に高等学校・中学校の教材として使用される『論語』、『孟子』などの思想書、司馬遷によって記された『史記』等の歴史書、唐代の漢詩、唐宋の文章等については、詳述する。	
指導法	中等国語科指導法A	「主体的・対話的で深い学び」の視点について理解を深め、中等教育段階での国語科授業における学びのデザインについて具体的に考える。学習指導要領における学力観にかかわる議論について検討し、今日的な授業観・学習指導観について理解を深める。また、学習指導要領のキー概念「主体的・対話的で深い学び」の視点と教科国語の内容構成について、具体的な教材の分析・構成と授業事例の検討を通して理解を深める。国語科学習指導の基本的な原理を踏まえた教材づくりと授業構想に必要な知識・技能を身に付ける。	
	中等国語科指導法B	中学校及び高等学校の国語教育において、「主体的・対話的で深い学び」の実現を通して言葉の価値を認識し、言語生活を豊かにしていける方途を、理論的・実践的に考察する。中学校、高等学校の国語科の各領域における教材研究、及び指導法研究について、実際の授業場面を想定しつつ考察を深める。具体的には〔思考力、判断力、表現力等〕のA、B、C各領域における指導事項、及び学習過程の確認を行い、それらをもとに教材研究法の検討に進む。また、〔知識及び技能〕の(1)、(2)、(3)で示される事項についてもその内容を確認し、教材研究法の検討を行う。最終的にはそれらを踏まえて授業実践事例の検討、模擬授業の構想に取り組むことから、実践的な場面を想定した総合的な考察を行う。	
	中等国語科指導法C	中学校及び高等学校の学習指導要領における「国語」の目標や内容を理解した上で、教材研究に関わる基礎的な知識を修得する。また、授業場面における生徒の言語行動を具体的に想定しながら教材分析を行い、教材開発や学習指導案の構想等、授業設計に必要な基礎技能を修得する。さらに、情報機器を用いて授業場면을様々な観点から分析することで、生徒の思考や言語力の実態に迫り、「主体的・対話的で深い学び」の要件について討議する。また別に、教材の分析や開発、学習目標と学習活動の設定、授業展開の構想、学習指導案の作成など、グループ活動を通して実践的な課題に取り組む。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
中学校「国語」に係る科目	指導法 中等国語科指導法D	中学校及び高等学校学習指導要領における「国語」についての、教材研究・指導法研究に関わる基礎的な方法を理解した上で、教材開発から模擬授業までの活動を行い、具体的な授業設計の方法を修得する。教材研究法・指導法研究法の基礎知識を生かし、教科書教材の分析や国語教材の開発などを行う。グループ毎に、生徒の発達段階や授業における反応等を具体的に想定して学習指導案を作成し、模擬授業を実施する。グループ活動や模擬授業での相互評価等によって授業改善の視点を得るとともに、「主体的、対話的で深い学び」についても実地的に学ぶ。	
中学校「社会」に係る科目	教科 日本史概説	そもそも「日本」史「概説」とはなにか、そしてそれは学校現場での営みとどんな関係があるのか、という基本的な問いについて最初に考える時間を設ける。ついで、日本の原始・古代から近現代までの通史を概説する。ただし、日本史上の個々の出来事を同じ比重でまんべんなく見ていくのではなく、政治上の事件や華々しい文化の表面よりは、根底にある社会や経済のしくみの変化に着目する。特定のテーマの通史を取り上げたり、時代の移行期に着目したりすることで、歴史の大きな流れを捉え、現代社会とのつながりを考えられるような内容とする。また、現行の指導要領・教科書と最近の学界動向を比較対照する。	
	外国史概説A	8世紀にカール大帝が、ヨーロッパに統一王国をつくったが、その後分裂し、ヨーロッパにおいては、中国や中東などと異なり、統一国家が成立することはなかった。なぜなのか。 この問いを解くために、ヨーロッパ史を「棲み分け」という概念を使って講義する。「棲み分け」には「自生的・生態学的棲み分け」と「能動的棲み分け」の2種類がある。自生的棲み分けは、権力、市場（都市）、富が分散していることをいう。ヨーロッパには、複数の大中小権力が並立していた。また、多くの市場都市が発達した。これは必然的に富の一極集中を抑制した。能動的棲み分けは、時間と空間を意図的に整理整頓することをいう。たとえば、教会は、元々聖と俗が混淆する場であったが、徐々に聖と俗の機能分化をおこなった。 この2つの「棲み分け」概念を使って、8世紀のフランク王国から封建社会の成立、フランス革命、産業革命を経て20世紀のナチズム、ソ連、21世紀のEU等までを論じる。	メディア
	人文地理学概論	はじめに「位置と分布」「地域」「人間と自然環境との相互依存関係」「空間的相互依存作用」等の地理学の基礎概念、および地図表現と地域調査の手法について学ぶ。それをふまえて、地理的な見方・考え方を働かせ、系統地理的なアプローチを用いて、人文地理学に関する諸課題を考察する。具体的には、農業と食料、集落立地、通勤圏・商圈の変化、都市の発展と衰退、地域づくり・地域振興のあり方などを取り上げ、問いを立てながら、地理的な見方・考え方を体験的に修得する。また、地形図・主題図の読み方や、児童・生徒が理解可能な地理情報を効果的に提示するための基礎的な力を身につけることを目指す。	
	地誌学概論	中学校社会科の地理的分野における諸地域学習を念頭に、静態地誌・動態地誌などの地誌学習のあり方を検討する。まず、地誌学の基本的な視点を押さえたのち、地誌書の構成と編纂の目的の変化を探る。次に、中学校地理的分野の教科書の記述を題材に、動態地誌的な追求課題の具体例を概観する。最後に、日本と世界の様々な地域について、地域の諸事象や地域的特色を理解し、地理的な課題を考察することによって、地誌学習に必要とされる基礎的な知識と技能を修得する。自然環境・人口・都市と農村・産業・地域間交流・文化など、それぞれ中核となるテーマを設定し、ローカルからグローバルまでマルチ・スケールな視点を活かして地域を捉える方法を身につけることを目指す。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
中学校「社会」に係る科目	法学概論	法学上の基本問題を検討する。基礎的な問題としては、法とは何か、法規範は他の社会規範とどう異なるのか、ルールは守るべきものなのか、憲法、民法、刑法はそれぞれどのような役割を果たしているのか、憲法学、民法学、刑法学それぞれの考え方にどのような特徴があるのか、といった問題を検討する。このような過程を通して、わが国の法制度や社会事象に関し、本来あるべき姿は何かについて、法的観点から論理的に思考し、法を根拠として自分の意見を表明できるようになることを目的とする。	
	社会学概論	身の回りの世界が、いかに社会全体の影響を受け、また影響を与えているか、社会的な観点から分析することによって、社会的な考え方を身につける。より具体的には、社会学の主要な二つの見方、すなわち方法論的個人主義（要素還元論）と方法論的全体主義（システム論）それぞれの観点から、いじめという社会現象がどのように分析できるか紹介する上で、二つの見方になじんでもらった上で、現代や過去の様々な社会現象をとりあげ、ともに分析していく。	メディア
	哲学概論	「哲学とはなにか？」という素朴な問いに対して、「その問いこそが常にすでに哲学である」という、いかにも哲学的な答え方が可能である。哲学における、そうした一見興味深く、しかし同時に、無責任ともいえるあり方を克服すること、つまり、曖昧で抽象的な要素を哲学という学問から排除していくこと、それが本講義の目標のひとつである。 西洋哲学史を概観した上で、とりわけ近代哲学者たちの議論を紹介しながら、主に次の二つの問いに迫る。第一に、哲学において「考える」ということはどのようなことかを明らかにすること、第二に、「自由と責任」という概念に軸に、「いかに生きるべきか」という、古くかつ新しい哲学的問いを探求することである。	メディア
指導法	中等社会科指導法A	<p>中学校社会科、高等学校地理歴史科の目標および内容について理解した上で、歴史的分野、日本史領域・世界史領域を中心に、教材研究の方法や授業づくりについて学習する。具体的には、資料調査・読解の方法や学習問題・単元づくりのあり方等を取り上げ、授業事例について検討する。その上で、中学校社会科歴史的分野、地理歴史科に関わる模擬授業を構想・実践し、相互検討を行う。</p> <p>宇都宮大学では松本敏と熊田禎介が以下のような分担で担当し、群馬大学では中尾敏朗が担当する。</p> <p>(オムニバス方式／6回・共同／9回・宇都宮大学) (単独・群馬大学)</p> <p>(宇都宮:149 松本敏／3回)</p> <p>中学校社会科の特質の探究と授業観察、教科書の内容と構成、深い学びの視点による指導方法の工夫</p> <p>(宇都宮:74 熊田禎介／3回)</p> <p>歴史的分野および地理歴史科の目標と内容、資料調査・授業構成の方法</p> <p>(宇都宮:149 松本敏・74 熊田禎介／9回) (共同)</p> <p>学生自身の教育体験の振り返り、学習問題・単元づくりのあり方、模擬授業と相互検討</p>	宇大オムニバス方式・共同(一部)／群大単独
	中等社会科指導法B	<p>中学校社会科、高等学校地理歴史科の目標および内容について理解した上で、地理的分野、地理領域を中心に、教材研究の方法や授業づくりについて学習する。具体的には、カリキュラム構成論や教授・学習過程、学習指導と評価等を取り上げ、その理論的・実践的動向や授業事例について検討する。その上で、中学校社会科地理的分野、高等学校地理歴史科に関わる模擬授業を構想・実践し、相互検討を行う。</p>	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
中学校「社会」に係る科目	指導法	<p>中等社会科指導法C</p> <p>中学校社会科公民科の分野、高等学校公民科の目標および内容について理解するとともに、教材研究の方法や授業づくりの基礎について学習する。具体的には、教科論・内容構成論や授業設計論、学習指導理論等を取り上げ、授業事例について検討する。その上で、中学校社会科公民科の分野、高等学校公民科に関わる模擬授業を構想・実践し、相互検討を行う。</p> <p>宇都宮大学では溜池善裕と熊田禎介が担当し（共同）、群馬大学では宮崎沙織と中尾敏朗が以下のような分担で担当する。</p> <p>（共同・宇都宮大学）（オムニバス方式／全15回・群馬大学）</p> <p>（群馬：126 宮崎沙織／8回）</p> <p>中高公民教育における教科論と内容構成論、また公民教育の世界的な動向と参加型学習の方法論に関する講義を行う。</p> <p>（群馬：43 中尾敏朗／7回）</p> <p>中高公民教育における授業設計論と指導実践論に関する講義を行う。また現代的な諸課題に関わる模擬授業を設計・実施し、その相互検討と指導・助言を行う。</p>	宇大共同／群大オムニバス方式
		<p>中等社会科指導法D</p> <p>中学校社会科公民科の分野、高等学校公民科の理論・歴史や諸課題について学んだ上で、教材研究の方法や授業づくりのあり方について学習する。具体的には、中学校・高等学校公民教育の理論・歴史について学ぶとともに、深い学びを実現するための授業設計や指導の難しい単元・教材を使った具体的な授業場面を想定したグループワーク等を行う。その上で、中学校社会科公民科の分野、高等学校公民科に関わる模擬授業を構想・実践し、相互検討を行う。</p> <p>宇都宮大学では松本敏が担当し、群馬大学では宮崎沙織と中尾敏朗が以下のような分担で担当する。</p> <p>（単独・宇都宮大学）（オムニバス形式／全15回・群馬大学）</p> <p>（群馬：126 宮崎沙織／8回）</p> <p>中高公民教育における教科論と内容構成論、また公民教育の世界的な動向と参加型学習の方法論に関する講義を行う。</p> <p>（群馬：43 中尾敏朗／7回）</p> <p>中高公民教育における授業設計論と指導実践論に関する講義を行う。また現代的な諸課題に関わる模擬授業を設計・実施し、その相互検討と指導・助言を行う。</p>	宇大単独／群大オムニバス方式
中学校「数学」に係る科目	教科	<p>代数学基礎Ⅰ</p> <p>線形代数の初歩的な内容について学び、行列に関する基本事項（演算、基本変形、行列式等）について、演習を交えながら講義する。行列の扱い方や性質を理解することが目標である。学校教育における算数・数学科の内容の背景にある数学の理論について学習する。全15回の講義のうち、前半の5回において、ベクトル・行列の定義や演算およびその幾何学的意味について学び、中盤の5回において、行列の基本変形および階数について学び、後半の5回において、行列式の定義や性質およびその応用について学ぶ。</p>	メディア
		<p>代数学基礎Ⅱ</p> <p>線形代数の発展的な内容について、演習を交えながら講義を行う。ベクトル空間や線形写像の性質および行列の対角化について理解できることが目標である。学校教育における算数・数学科の内容の背景にある数学の理論について学習する。全15回の講義のうち、前半の5回において、ベクトル空間についての基本事項（一次独立性、基底、次元等）について学び、中盤の5回において、線形写像の定義およびその表現行列について学び、後半の5回において、行列の対角化とその応用について学ぶ。</p>	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
中学校「数学」に係る科目	教科	幾何学基礎Ⅰ	平面上または空間内の直線、および空間内の平面について、それらをベクトル表示することの意味への理解を深める。そのために用いられる線形代数学で学んだ知識、特に内積空間における正規直交基底の概念について整理する。さらに、ユークリッド幾何の根本概念である「ユークリッド合同変換」について論ずる。ユークリッド合同変換が行列表示されることを示し、それによって、ユークリッド合同変換全体の集合が群構造を持つこと、その生成系、さらに変換どうしの関係について明らかにしていく。	
		幾何学基礎Ⅱ	ユークリッド空間が自然に持つ「ユークリッド距離」が、ユークリッド空間の「位相」構造を与えていることを理解する。さらに、このことを踏まえて、一般の集合に「距離」の概念を与えること、および「位相」の概念を与えることの意味を理解することを目標とする。まずは、ユークリッド距離のもつ基本性質について整理した後、ユークリッド距離によって空間内の各点に「近傍」が定まり、「開集合」と呼ばれる特別な部分集合が定義されることを見る。この「開集合」の概念が「位相」の概念に直接的に関わることを解説する。講義の後半で、一般に距離空間、位相空間の定義とその性質を具体的な例を観察しながら学ぶ。	
		解析学概論	この授業では、中学校・高等学校の「数学」免許を取得するための必修科目である。主に微分法についての講義と演習を通して、極限や微分の計算力を養い、解析学の基礎を身につける。具体的には、数列の極限の意味がわかり級数の和や極限值が計算できること、関数の極限や微分の意味がわかり極限や微分の計算ができること、平均値の定理やテーラーの定理を関数の解析に応用できることを到達目標とする。	メディア
		解析学基礎Ⅱ	この授業では、まず多変数関数の積分法を学び、具体的な立体の体積を計算する。次に、級数や基本的な微分方程式についての講義と演習を通し、解析学の基本的な考え方と計算力を身につける。具体的には、重積分や線積分の意味がわかり重積分の計算ができること、具体的な図形の体積や表面積が計算できること、級数について基礎的な計算ができること、基本的な微分方程式を解くことができることを到達目標とする。	
		統計学	統計学の基礎的な諸概念や手法について理解すると共に、それらを用いて統計的な探究を遂行することができること、小・中・高等学校で取扱う統計的な内容の統計学的な背景について考察することができることを授業の到達目標とし、次期学習指導要領算数・数学科において一層の拡充が示されている統計教育の親学問である統計学の基礎的な諸概念や手法について、統計的な問題解決を通して学んでいく。	メディア
		確率論	古典的確率論から初めてコルモゴロフによる公理的に構成された確率論の考え方を学ぶことを目標とする。確率論を公理的に構成し、離散的な内容だけでなく連続的な内容の確率論まで扱えるようにする。また、確率分布関数と確率密度関数を理解し、平均、分散の意味を理解できるようにする。確率変数の収束に触れ、大数の法則、中心極限定理を扱い、最後に、ランダムウォークについて述べる。講義を中心に、演習として、毎回、レポートを出し、中間試験と定期試験を実施する。	
		情報基礎	この授業では、情報処理の基礎知識と、基礎的な数学の知識を用いた簡単なプログラムの仕方について学ぶ。授業は講義とパソコンを用いた実習によって行われる。パソコンがどのような部品で構成されているか？それらはどのような機能を担っているか？インターネットはどのようにして実現されているのか？パソコンにはどのような言語を使って命令するのか？プログラミングとは何か？どのようにしてプログラミングするのか？といった情報処理の基礎を理解することが、この授業の目標である。授業は、前半に情報処理やプログラミングに関する基礎知識についての講義を行い、後半は実際にプログラミングの実習を行うことによって進められる。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
中学校「数学」に係る科目	指導法	中等数学科指導法A	本授業の到達目標は、中学校数学科の目標、内容（主に、数と式、図形）及び指導方法に関する基礎的な知識を獲得すること、中学校数学科の内容やその指導方法への関心・意欲を高め、授業実践に活かそうとすること、中学校数学科の指導内容を踏まえ、教材のもつ数学的背景や教育的意義について考察することができること、数学の指導案や授業展開の仕組みなど、数学の指導法の基礎について理解することができること、である。目標達成に向けて、学習指導要領に示された中学校数学科の目標と学習内容（主に、数と式、図形）をはじめ、数学の学習指導の過程、学習評価の考え方など、数学の授業をつくる上での基礎を学ぶとともに、数学科教員に必要な資質・能力を習得する。授業では、附属中学校の教員を現地指導講師として迎え、「主体的・対話的で深い学び」の実現のための指導法について内容を盛り込んでいる。	
		中等数学科指導法B	中学校数学科の目標、内容（主に、関数、データの活用）及び指導方法に関する基礎的な知識を獲得すること、中学校数学科の内容やその指導方法への関心・意欲を高め、授業実践に活かそうとすること、中学校数学科の指導内容を踏まえ、教材のもつ数学的背景や教育的意義について考察することができること、数学の指導案や授業展開の仕組みなど、数学の指導法の基礎について理解することができることを授業の到達目標とし、学習指導要領に示された中学校数学科の目標と学習内容（主に、関数、データの活用）をはじめ、数学の学習指導の過程、学習評価の考え方など、数学の授業をつくる上での基礎を学ぶとともに、数学科教員として必要な基本的な資質・能力を習得する。	
		中等数学科指導法C	本授業の到達目標は、算数・数学の学習指導を通して育成を目指す資質・能力について理解を深めること、算数・数学の学習指導上の諸問題を踏まえて、教材の工夫、授業展開や学習活動の工夫、指導や評価の工夫について理解を深めること、これらの活動を通して、算数・数学教育の授業の在り方についての理解を深めることである。本授業では、全国学力・学習状況調査の問題を使った授業をつくり、模擬授業を協働で行う。模擬授業へ向けて、各グループの指導案について協議する。そして、模擬授業の指導案を作成する過程をリフレクションして、算数・数学の授業の在り方について考察する。本授業では、内地留学中の現職教員も参加し、一緒に議論することで、現職教員の視点から算数・数学の授業について考える機会を設定している。	
		中等数学科指導法D	「生涯学び続けることのできる教員」の基本的な資質・能力として、数学の教材を解釈したり、設計したり、具体化したりする数学における教材研究プロセスを遂行する資質・能力を獲得することができることを授業の到達目標とし、数学教育における教材研究の入門として、中学校数学科の教科書の問題を「現実の世界」と「数学の世界」およびその行き来の視点から捉え、指導目的に応じて、その問題をアレンジし、模擬授業を通じて教材の評価・改善を行う。	
中学校「理科」に係る科目	教科	基礎の物理学	理科教育の1専門分野である「物理学」に関する入門編として、物質に働く力やそれによる運動を、数式を用いて記述する力を養う。高校数学の復習から始めて運動の数学的な記述を学び、ニュートンの第一、第二、第三法則を数式を用いて表現できるようにする。次いで、微分方程式と関連付けて運動方程式の解き方を学習し、保存則、回転運動の扱い方を学習する。身近な例を活用することで物理の実学的な側面を強調し、内容の区切りや学期末には演習の時間を設け、全体の進度を合わせて進めていく。	メディア

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
中学校「理科」に係る科目	教科	基礎物理学実験	<p>物理学の基礎的な実験（コンピュータの活用を含む）を行い、基本的な実験機器の原理や取り扱いに習熟し、あわせて実験上の留意点、測定値の処理方法を学ぶ。さらに、実験とレポート作成を通して、理科教員としての基礎的資質を育成する。宇都宮大学は南伸昌と瀧本家康が共同で担当し、群馬大学は寺嶋容明と青木悠樹が以下のように分担で担当する。</p> <p>（共同・宇都宮大学）（オムニバス方式／全15回・群馬大学）</p> <p>（117 寺嶋容明／7回） レポート作成、抵抗の測定などを担当する。</p> <p>（88 青木悠樹／8回） テスターによる様々な量の測定、電熱線による熱の仕事当量の測定などを担当する。</p>	宇大共同／群大オムニバス
		基礎の化学	<p>理科教育の1専門分野である「化学」に関する入門編として、原子レベルで物質を捉え、その変化を分析・理解する視点を養う。電子のエネルギーに焦点を当て、原子の構造や分子を形成する理由、結晶の構造やその安定性について理解を深める。エントロピーや自由エネルギーといった概念を用いて化学変化や安定性を記述する術を学び、酸塩基反応や酸化還元反応を、エネルギー的な側面から捉え直す。適宜演示実験を取り入れることにより、現象と理論を結びつけて理解できるようにする。</p>	メディア
		基礎化学実験	<p>中学校、高等学校理科で実施される化学分野の実験に関連づけながら、化学実験の基礎を修得する。具体的には状態変化や化学変化、滴定、有機化合物に関する基本的な化学実験の内容を扱い、各実験についての理解を深める。また、レポートの書き方を学ぶことにより、実験を自身の指導にフィードバックする術を学ぶ。宇都宮大学では山田洋一が担当し、群馬大学では岸岡真也と日置英彰が以下のような分担で担当する。（単独・宇都宮大学）（オムニバス方式／全15回）</p> <p>（99 岸岡真也／8回） 実験の基本操作、理科実験の安全指針、中和実験などを担当する。</p> <p>（49 日置英彰／7回） 有機化合物に関する実験、併せて化学実験においてネットワーク配信教材の活用方法などについても担当する。</p>	宇大単独／群大オムニバス
		基礎の生物科学	<p>（概要）小中高で生物分野の内容を教える上で知らなくてはならない基本事項として、高等学校の「生物基礎」、「生物」で学ぶ内容を正しく理解し、説明できることを目標とする。高等学校の「生物基礎」、「生物」で学ぶ基本事項のうち、細胞学、生化学、分子生物学、遺伝学、進化分類学、生態学を取り上げ、科学的に掘り下げた解説を加える。</p> <p>（オムニバス方式／全15回）</p> <p>（3 井口智文／1回） 生命体を構成する物質に関する講義を担当する。</p> <p>（37 佐野史／6回） 細胞のつくり、生物の主要な代謝、遺伝情報の複製と遺伝の規則性、遺伝子発現の基本と調節、突然変異とバイオテクノロジーに関する講義を担当する。</p> <p>（108 佐藤綾／8回） 生命の誕生と変遷、進化の仕組み、遺伝的浮動と中立進化、分類と系統、個体群変動、生物同士の相互作用、物質循環、生態的地位と生物多様性に関する講義を担当する。</p>	メディア オムニバス方式

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
中学校「理科」に係る科目	教科	基礎生物学実験	<p>基礎的な生物学実験を行い、小・中・高の理科に含まれる生物分野の実験・観察の基本的な方法や結果のまとめ方、考察のしかたを習得し、子どもに自ら指導できるようになることを目標とする。さまざまな動・植物の観察、解剖、実験を行って方法を習得するとともに、毎回レポートを作成することで結果のまとめ方や考察のしかたを学ぶ。また、動・植物の同定やデータ整理、レポート作成などはコンピュータを活用して行う。</p> <p>宇都宮大学では井口智文が担当し、群馬大外では、佐藤綾と佐野史が以下のような分担で担当する。</p> <p>(宇都宮大学：単独) (群馬大学：オムニバス方式／全15回)</p> <p>(群馬：108 佐藤綾／8回) 動物を材料とする実験を担当する。</p> <p>(群馬：37 佐野史／7回) 植物を材料とする実験を担当する。</p>	宇大単独／群大オムニバス
		基礎の地球科学	<p>地球惑星科学に含まれる固体地球分野、地質・岩石分野、気象海洋分野、天文分野等について幅広く学習し、中学校で理科(地学分野)を担当する際に十分に対応できるように、地学分野の基本事項を修得するとともに、地学分野の学習内容に対する理解を深める。講義形式に加え、討論や発表、探究活動などを実施し、総合的に地球科学の基礎を学習する。講義を通して幅広い視野を持てるように最新の知見や時事的なトピック、防災・減災に関わる事項も取り扱う。</p>	メディア
		基礎地学実験	<p>中学理科に関連した地学分野の実験・観察に必要な基本的な技術を習得し、それに関わる内容の理解を深め、実験・観察結果をレポートにまとめることを目標とする。実験は固体地球、地質・岩石、気象、天文分野の内容で行う。実験やデータ解析においては、ICT機器も活用することで、従来の実験手法とともに新しい実験手法についても修得できるようにする。実験を通じて、理科教員としての基礎的資質を育成する。高等学校での学習内容とも関連する実験も取り上げ、実験を通して中等教育における地学分野の理解が深まるようにする。宇都宮大学では瀧本家康が担当し、群馬大学では、岩崎 博之が担当する。</p>	
	指導法	中等理科指導法A	<p>学習指導要領に基づき、中学校及び高等学校の理科の目標と学習内容についての理解を深める。具体的な授業場面を想定し、理科教材の扱いと指導法を実践的に学習する。講義では、中学校理科および高等学校理科の目標、理科の教育課程編成、中学校理科及び高等学校理科の学習内容とその系統性、科学的概念の形成などを取り上げる。また、具体的な学習指導案作成を通して、指導上の留意点や発展的な学習内容の取り扱いなどを理解する。さらに模擬授業の実施とその意義の考察および振り返りを通して、具体的な授業場面を想定した授業を設計する方法を習得できるようにする。</p>	
		中等理科指導法B	<p>中学校及び高等学校理科の学習指導要領に基づき、目標や学習内容についての理解を深める。理科教育の原理、教材研究や授業を行うに当たっての心得や、具体的な指導上の留意事項等を習得する。観察や実験の観点の指導や、薬品使用等における安全な実験指導についても取り扱う。受講者自身による教材研究や学習指導案の作成を行い、模擬授業等を通して受講生同士の対話的な活動も取り入れる。また講義全体を通して、理科における言語活動や科学的コミュニケーション、対話的で深い学び等の現代的課題を考慮した理科授業づくりの基礎を習得できるよう進める。</p>	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
中学校「理科」に係る科目	指導法	中等理科指導法C	現代的な教育の課題を踏まえ、考え方として示された思考の枠組である探究の過程を、その各過程の関係を構築する観点からとらえ、これを資質・能力を育成する方法として検討する。さらに、第一分野および第二分野の具体的な授業場面をそれぞれ取りあげて、学習指導案を作成して模擬授業を実施するとともに、各過程の関係を構築する観点や指導の効果という観点で模擬授業を振り返ることで、実践的な指導力を身につける。	宇大共同／群大単独
		中等理科指導法D	新しい中学校学習指導要領理科の理念を踏まえた実践の動向から、見方・考え方を働かせるための探究の過程の重点化の理解を深める。また、中学校・高等学校理科における教材の位置付けや特質、教材研究の方法と学習指導の関係を理解し授業実践力の修得を目標とする。具体的には、受講者による主体的・対話的で深い学びになるよう、模擬授業の構想・実施やその評価としての振り返りを受講者同士で行い協議する。また、協議の結果を踏まえて改善した授業提案を受講者が行う一連の学びによって、理科教師としての総合的・実践的指導力を身に付ける。 (宇都宮大学：オムニバス方式／全15回) (群馬大学：単独) (23山田洋一／4回) 化学分野を担当。 (3 井口智文／5回) 生物分野を担当。 (142 瀧本家康／6回) 物理・地学分野を担当。	宇大オムニバス／群大単独
中学校「音楽」に係る科目	教科	ソルフェージュ	音楽の基礎である初見視唱、初見視奏、リズム、スコアリーディング、コード奏など、ソルフェージュの実践を通じて、教育現場での実践能力や専門的な勉強をする上での基本的な能力を養う。初めて見た楽譜を準備なしで歌うことができる。(初見視唱) 初めて見た楽譜を準備なしでピアノで演奏することができる。(初見視奏) 楽譜に書かれたリズムを正確に再現できる。演奏された音を聴き取り楽譜に記すことができる。ピアノを使って和声の課題を実施することができる。	
		声楽A	声楽に必要な演奏基礎技能を習得するため、グループレッスンを中心とした実技指導を行う。レッスンでは、各自が自分の声の特徴を把握し、改善すべき課題を認識することをふまえ、声楽の技能を構成する姿勢・呼吸・発音・共鳴などを含めた発声全体について理解を深めながら、具体的な楽曲を通して基礎技能の能力を高める。基礎技能の一つとして、各母音の自然な発声に重点を置いて響きのある安定した発声方法の獲得を目指す。個人の声楽基礎能力を伸ばし、それを基本に合唱における表現能力も身に付けます。また、日本の伝統的な声楽に触れ、教員として音楽科の学習指導に必要な基礎を学ぶ機会を持つ。実地指導講師担当授業は講師と日程調整の上実施する。	
		声楽B	声楽Aの内容のうち、特に声楽発声と歌唱表現を中心に学習を发展させる。声楽Aと同様に、演奏基礎技能を習得し伸長するため、グループレッスンを中心とした実技指導を行う。レッスンでは、各自が自分の声の特徴を把握し、改善すべき課題を認識することをふまえ、声楽の技能を構成する姿勢・呼吸・発音・共鳴などを含めた発声全体について理解を深めながら、具体的な楽曲を通して基礎技能の能力をさらに高める。また、声楽演奏に関する基本について実技指導を行う。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
中学校「音楽」に係る科目	教科	器楽A	<p>器楽実技を通じて表現、指導を行う上での基礎的・基本的な知識・技能を身につけることを目標とする。 (宇都宮大学：単独) (群馬大学：オムニバス方式/全16回)</p> <p>(宇都宮：134 平井李枝/8回) (群馬：53 三國正樹/8回) 第1回～第8回は、「伴奏法」とし、伴奏全般についての理解を深めるとともに、学校音楽で取り上げる歌唱・合唱教材を中心としたピアノ伴奏、旋律への伴奏づけ(コードネームによるものを含む)の実技演習をおこなう。</p> <p>(宇都宮：134 平井李枝/8回) (群馬：112 菅生千穂/8回) 第9回～第16回は、「和楽器演習」とし、中学校の音楽教員に必要な器楽の学習においての和楽器(箏など)の基礎的実践的能力を養うため、実技を中心に行う。実践的な教材研究にも取り組む。</p>	宇大単独/群大オムニバス
		器楽B	<p>音楽の表現、指導を行う上で必要な基礎的・基本的な知識・技能を身につける。リコーダー、撥弦楽器(ギター、ウクレレ等)、和楽器(篠笛、箏、三味線)等の器楽実技の実践を通して器楽を伴う音楽活動について理解を深め、基礎的実践力を養う。和楽器実技を通して、日本音楽の美意識に触れ、我が国の伝統的な音楽文化について理解を深める。さらに楽曲演習を取り入れ、レパートリーの拡充にも努める。</p>	
		合奏I	<p>合奏における基本的な事柄を、様々な形態のアンサンブルを通じて学ぶ。オーケストラ、吹奏楽の基礎知識、呼吸法等を含めた楽器の演奏技術、合奏上の音色の調和、響きの作り方を、基礎合奏や楽曲演奏を通して、楽器学的見地、演奏学的観点から学ぶ。さらにそれらの過程を重視しながら、指揮者と奏者の関係を体感し、指導法を学ぶ。また、楽器の特性を活かし、アンサンブル技能を高め、コミュニケーション能力を身につけていく。</p>	
		合奏II	<p>合奏における基本的な事柄を、様々な形態のアンサンブルを通じて学ぶ。オーケストラ、吹奏楽の基礎知識、呼吸法等を含めた楽器の演奏技術、合奏上の音色の調和、響きの作り方を、基礎合奏や楽曲演奏を通して、楽器学的見地、演奏学的観点から学ぶ。さらにそれらの過程を重視しながら、指揮者と奏者の関係を体感し、指導法を学ぶ。また、楽器の特性を活かし、アンサンブル技能を高め、コミュニケーション能力を身につけていく。</p>	
		指揮法	<p>指揮法の基本と、音楽作りの関係を実践的に学び、楽曲を用いて指導する際に必要な基本的知識、基礎的な技術・表現力の習得を内容とする。指揮者として音楽を作り上げるという実践の中で、演奏者と呼吸を合わせることや、人間的にコミュニケーションをとることを目的とする。「叩き」「平均運動」「しゃくい」に大別される指揮の基礎的技術を習得し、楽曲演習を通して様々な拍子、様式、編成における実践演習を中心に行う。</p>	
		和声I	<p>中学校及び高等学校教諭に必要な作曲・編曲の知識・技能の基礎となる和声を身に付けることを目標とする。概要についての説明と、実施した課題の添削(個人レッスン)を行うことをその内容とする。具体的には、基本位置三和音の配置・連結(主要三和音及びII度、VI度の和音)、三和音の第1転回位置、三和音の第2転回位置、属七の和音を使用した和声の実施について実習する。また、これらの和音を効果的に使用している楽曲の楽譜を分析することで、より洗練された和声の実施が可能となるような技能を身に付ける。</p>	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
中学校「音楽」に係る科目	和声Ⅱ	中学校及び高等学校教諭に必要な作曲・編曲の知識・技能の基礎となる和声を身に付けることを目標とする。概要についての説明と、実施した課題の添削（個人レッスン）を行うことをその内容とする。具体的には、和声Ⅰで修得した技能を基礎とし、属九の和音、Ⅱ度の七の和音、準固有和音、ドッペルドミナント諸和音（下方変位を含む）を使用した和声の実施について実習する。また、これらの和音を効果的に使用している楽曲の楽譜を分析することで、より洗練された和声の実施が可能となるような技能を身に付ける。	
	作曲Ⅰ	中学校・高等学校音楽教員たるために必要な、初級の作曲法（編曲法を含む）を修得する。課題・作品の個別指導を行うとともに、学生どうしの相互批判の場を設ける。必要に応じて理論的事項を概説する。まず、テクスチュアと非和声音について概説と実習を行う。次に、閉鎖型２部形式の楽曲、閉鎖型３部形式の楽曲、開放型２部形式の楽曲、開放型３部形式の楽曲、ソナタ形式的楽曲等について、編曲および作曲の実習を行う。補遺和音についても概説・実習する。音楽作品創作の実際を体験的に知ることによって、音楽芸術の持つ構造と意味について理解する。	
	作曲Ⅱ	中学校・高等学校音楽教員たるために必要な、中級の作曲法（編曲法を含む）を修得する。課題・作品の個別指導を行うとともに、学生どうしの相互批判の場を設ける。必要に応じて理論的事項を概説する。独唱歌曲および器楽作品（ソナタまたは変奏曲）の創作実践を通して、楽曲構想設計の策定、作曲技法の検討とその現実化、推敲・浄書の方法、実演にあたっての問題点などを実習する。音楽作品創作の実際を体験的に知ることによって、音楽芸術の持つ構造と意味について理解する。	
	音楽史	中学校・高等学校音楽教員たるために必要な、音楽史の能力を修得する。歴史的事項の理解とともに、音楽の実例を聴きながら資料を読解し、問題点を論考する。 (オムニバス方式／全15回) (6 木下大輔／8回) 西洋中世の音楽、ルネサンスの音楽、バロックの音楽、前古典派・古典派の音楽、19世紀の音楽、20世紀前半の音楽、20世紀後半の音楽、日本の洋楽と現代音楽について解説・論考する。 (297 前島美保／7回) 日本古代の音楽（雅楽、聲明、琵琶楽）、日本中世の音楽（能、狂言）、日本近世の音楽（三曲、人形浄瑠璃文楽、歌舞伎）、日本の民俗芸能、世界の諸民族の音楽について解説・論考する。	メディア オムニバス方式
指導法	中等音楽科指導法A	本授業は中等教育における音楽の教科論及びカリキュラム等について、学習指導要領を基に教科の目標・内容、指導方法、評価等について概説する。また、音楽生活を取り巻く諸課題と音楽科教育との関係性を考察することにより、その意義や役割について検討する。 授業の概要 1. 中等教育における音楽科の教科としての特質を理解する。 2. 中学校科および高等学校芸術科音楽について学習指導要領の内容を把握する。 3. 中学校および高等学校における音楽学習の現状を知り、学習指導にいかそうとする。	メディア
	中等音楽科指導法C	中学校及び高等学校の音楽科教員として必要な資質を習得することと、今日の音楽科教育の持つ課題について知り、追求することを目標とする。まず、学習指導要領にも明記され、近年話題にもなっている「音楽に関する知的財産権」（特に著作権法）の理解のために、著作権法の概要について講義及び事例検討により理解する。また、歌唱、器楽、創作、鑑賞それぞれの教材開発及び教材研究を、学生自身が、教科書に掲載されていない楽曲を用いることを行う。そして、それを踏まえた学習指導案立案とその模擬授業を実施し、学生相互で授業改善のための方策を検討する。	メディア

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
中学校「美術」に係る科目	教科	絵画 A	『表現基礎〔絵画〕』の内容を基に鉛筆デッサンや木炭デッサンを通して表現の実際的な理解を深める。素材による表現効果の違いを認識し、空間感や質感表現や明暗法、線の強弱、動勢、プロポーションの把握等の技能を身に付ける。 様々な対象を題材として、前半では鉛筆、後半では木炭を用いたデッサンを課す。それにより基礎的な描画能力の向上を図り、それぞれの素材特性の違いにも目を向けさせる。また、受講生には自分の制作した作品について解説を課し、絵画に関するリテラシーの強化を図る。	
		絵画 B	絵画の構成要素ならびに描画材の違いにおける表現の特性を体験的に学修し、理解する。それらが個別の表現と密接に結びついていることを理解する。 『表現基礎〔絵画〕』の内容を基に、透明水彩やアクリル絵の具を用いて課題制作することを通して、支持体や描画材の特性（透明性、可塑性）による絵画表現手法の違いを体験的に学修する。主題と素材選択の観点を養う。また、受講生には自分の制作した作品について解説を課し、絵画に関するリテラシーの強化を図る。	
		彫刻 A	立体造形としての彫刻の理念と基礎的な知識及び技能を、実制作（主に塑造）を通して身につけると共に、美術科教育における彫刻の意義と価値について考察できるようにする。 具象と抽象という表現の指向性について実制作を通して体験的に学修する。塑造を中心課題とし石膏取り等の技能も身につける。また彫刻作品についての批評を小レポートとして課し発表会をもつ。これらの課題を通し、美術科教育への可能性と意義について考察する。	
		彫刻 B	立体造形としての彫刻の理念と基礎的な知識及び技能を、実制作（主に彫造）を通して身につけると共に、美術科教育における彫刻の意義と価値について考察できるようにする。 実材を用いた彫造を彫刻制作を通し体験的に学修し、基礎的な技能を身につけるとともに、彫刻表現の意味と可能性について検証する。また彫刻作品についての批評を小レポートとして課し発表会をもつ。これらの課題を通し美術科教育への可能性と意義について考察する。	
		表現基礎〔デザイン〕	本授業は、今後デザイン分野での表現および鑑賞を指導に資する人材として必要とされる、造形表現の思考力や判断力・表現力の基盤形成をテーマとし、用具や材料、色彩や構成、映像メディアなど、今後同分野を発展的に学修していくための、基礎的な知識の理解や技能の習得を目標とする。 美術のデザイン分野を理解しデザイン造形として通底する、色彩や構成、映像メディア等について講義と実習と通して理解してもらう。各授業回をポートフォリオにまとめて提出してもらうことで個人指導も行う。1回目はオリエンテーション、2-8回は梶原担当、9-15回は齋江担当（4 梶原良成）（107 齋江貴志）	メディア オムニバス方式
		デザイン A	本授業では平面デザイン（グラフィック・デザイン）の実習課題を行うことで、デザイン分野の教科内容における題材開発や指導力向上をテーマとする。そして、平面デザインにおける基本的なプロセスや、生活の視点で造形を捉える判断力、デザイン的な思考によって発想や構想力、デザインの意図を適切に伝えるためのプレゼンテーション力などの能力育成を目標とする。 教員が設定する平面デザイン（グラフィック・デザイン）の課題（内容が異なる2課題）を授業回ごとに段階を追って行う。課題制作においては、各段階でポートフォリオにまとめてもらい、それらをもとにした全体や個人指導によって展開する。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
中学校「美術」に係る科目	教科	デザインB	主に立体（プロダクト）デザイン及び、空間（建築・環境）デザインの実技課題を行うことで、デザイン分野の教科内容における題材開発や指導力向上をテーマとする。そして、立体、空間デザインにおける基本的な過程や、生活の視点で造形を捉える判断力、デザイン的思考によって発想や構想力、デザインの意図を適切に伝えるためのプレゼンテーション力などの能力育成を目標とする。 教員が設定する立体（プロダクト）デザイン及び、空間（建築・環境）デザインの課題（内容が異なる2課題）を授業回ごとに段階を追って行う。課題制作においては、各段階でポートフォリオにまとめてもらい、それらをもとにした全体や個人指導によって展開する。	
		表現基礎〔工芸〕	工芸は、環境や風土の中で、私たちの生活と密接に関わりながら、多様で豊かな表現が生み出されてきた。現実には思い描いた工芸イメージを形成するためには、どのような認識や経験が必要なのか、機能・素材・用具・空間など様々なアプローチを通して造形を形成するための演習を行う。美術・工芸の教育における工芸教材の取り扱いと基礎的能力を養う。	メディア
		工芸A	工芸において素材の特徴や道具の扱いと加工方法を知り、その成り立ちを理解することが、表現の基礎である。 金・銀・銅・真鍮などの金属の特性を理解し、金槌(かなづち)・鑿(やすり)・鑿(たがね)・糸鋸(いとこのこ)などの彫金工具の使用方法を習得し、透彫り・毛彫り・打出し・七宝等、彫金の基本的な表現方法を体験し、どのような表現の可能性が見いだせるのか探りながら、テーマに沿った機能を満たした作品を制作する。テーマは「身につけるかたち」。	
		工芸B	工芸において素材の特徴や道具の扱いと加工方法を知り、その成り立ちを理解することが、表現の基礎である。 木工芸と漆芸の基礎的な材料や用具の使用・加工技法や表現効果を学習し、イメージが漆素材・木素材を通してどう表現されるのか、どのような表現の可能性があるのか、制作を通して探っていく。 木工芸において、鋸・鑿・鉋などの手工具、及び糸鋸・ジグソーなどの電動工具の使用、多様な木材種とその特徴について理解する。 漆芸において、漆・顔料、箆や刷毛などの取り扱い、多彩な表現について理解する。	
		美術史	西洋美術史および日本美術史の通史理解に加え、近代以降の芸術運動や美術概念の変遷を主要な論点として講義する。また、近代における日本美術の生成について西洋美術の受容や日本美術から西洋美術へ及ぼした影響など、東西の文化交流の観点や文化的様相を包括的に捉え、各時代、様式的美術概念を解説し、美術史の基礎的な包括的に理解する。テーマごとのレポート課題および必要に応じ美術館等での実作品の調査などを取り入れる。1回目はオリエンテーションで本田・市川担当、2-8回は市川担当、9-15回は本田担当（81 本田悟郎）(92 市川寛也)	メディア オムニバス方式
		美術実地調査演習	作品作家研究など、美術に関する調査活動を实地に演習することを通し、美術が作品単体で述べられるものではなく、その時代・地域・社会との関係の中で成立していることを捉えると共に、実地調査、資料検討などの研究の具体的なスキルを身につける。 テーマ設定、調査方法の検討をふまえ、個人またはグループで、作品或いは作家などについて文献等の資料調査及び実地調査をすると共に、その結果をまとめ報告会をもつ。	
		デザイン理論	デザインを人類史上のあらゆるメディアの創造ととらえて概観していくことで、デザインの成り立ちを理解する。また、私たちの社会活動の中でデザインがどのような役割を果たしているかを探求し考察する。以上の二つのアプローチから、社会のなかでのデザインのあり方について、多面的な見方を身につけ、それを自分の言葉で発表できるようにすることを目標とする。 前半は、近代におけるデザインの成り立ちを学生の発表を交えながら概観し、後半はグループワークにより、現代の社会の中でのデザインの役割について、調査分析し発表する。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
中学校「美術」に係る科目	教科	工芸理論 工芸は、環境や風土の中で、私たちの生活と密接に関わりながら、多様で豊かな表現が生み出されてきた。漆芸・金工・陶芸・ガラス・染織・木工などの工芸作品・文献に見る工芸の変遷・各種工芸素材の用い方や技術等を映像や作例にて紹介し、工芸の魅力と特性を、時代・地域・素材等、様々な角度から比較する。これからの工芸の展望と提案・工芸教育の意義について考察していく。	
	指導法	中等美術科指導法A (1) 中学校美術科教育の歴史を通して、教科の理念・目的や主要な学習理論を学修する。 (2) 中学校美術科教育の学習指導要領で示される教科目標や内容を理解し、育成を目指す資質・能力を「主体的・対話的で深い学び」によって学修する。 (3) 中学校美術科教育の基礎的な学習指導理論を理解し、具体的な授業場面を想定した授業設計を行う方法や評価方法を身に付ける。 (4) 授業は、必要に応じ反転授業を活用し、講義の他、ワークショップ型学習を行う。また、適宜、実践活動から課題を導き教育実践のための諸能力を身に付ける。	
		中等美術科指導法B 学習指導要領における美術科のねらい及び内容について背景となる美術領域と関連させて理解を深める。学生一人ひとりの模擬授業（マイクロティーチング）を通じて、美術教師としての立居振る舞いに対する意識を高めると共に、様々な学習指導理論を踏まえて具体的な授業場面を想定した授業設計を行う方法を身につける。模擬授業においては、実際の授業研究会と同様にITCを活用した記録の可視化等を重視し、協同的な省察に至るプロセスも同時に学びつつ教育現場での実践力を養う。	
		中等美術科指導法C (1) 中学校美術科教育をつくる理念・目的及び学習理論を学修する。 (2) 情報メディア時代の新しい中学校美術科教育の授業設計を理解し、教科書題材の分析・考察などを踏まえ、実践を通して教材・題材開発を行い検証する。 (3) コンピュータ等の映像メディア機器の活用方法を学び、情報メディアリテラシーのスキルを身につける。 (4) コミュニケーション能力を養う交流実践やメディアの活用から学びを深める。	
		中等美術科指導法D 学習指導要領における美術科のねらい及び内容について背景となる美術を中心とした芸術領域と関連させて理解を深める。中学生の実態や現状等を踏まえた上で、学生一人ひとりの興味関心に基づく芸術領域のサーチをもとに、生活や社会と接続する美術科のあり方について協議検討を重ねると共に、様々な学習指導理論を踏まえて具体的な授業場面を想定した授業設計を行い、日常的視点から教材研究を深めていく思考を育む。	
中学校「保健体育」に係る科目	教科	陸上競技 陸上競技の歴史、特性に加え、陸上競技の技能の向上に関わる専門的知識について実践を通して理解する。また、小学校の陸上運動および中学校、高等学校の陸上競技の授業における指導法についても学習する。その際には、「陸上競技」が得意な児童生徒の能力をもっと伸ばしたり、不得意な児童生徒には苦手意識を減らして積極的に取り組めるような指導方法を学び、体育やスポーツの指導者としての素養を高めることを目指す。	
	ダンス 講義及び実技をまじえ、現代的なリズムのダンス、フォークダンス、創作ダンスの3つの内容について、知識・技能の習得とそれらの実践や指導法を学ぶ。それぞれの内容の特性を理解し、現代的なリズムのダンスでは、ステップを踊る・創る、作品創作の技能を身につけ、フォークダンスでは、民族舞踊を教材としてその動きを習得する。また、創作ダンスでは、イメージを表現するための基礎的な身体の使い方やまとまりで踊ることを学ぶ。さらに、作品創作や発表などを通じて、現場における指導力を養う。		

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
中学校「保健体育」に係る科目	教科	武道A	<p>本授業では、武道としての柔道の歴史・特性の理解とともに、正しい基本動作や技能を身に付ける。また、安全な身の処し方の理解や、投げ技、及び固め技の原理の学習を通じて、保健体育科教師として、体育授業で柔道を安全に指導する能力の向上を目指して、以下の3点を達成することを目的とする。</p> <p>① 柔道の歴史・特性を理解し、説明できるようになる ② 柔道の基本動作や個々の技能及び対人技能を身に付ける ③ 安全に配慮した実技指導能力を身に付けることができる</p> <p>はじめに、柔道の歴史や基本理念等に関する講義を実施し、以降は、柔道の技術体系ごとに、簡単なものから難しいものへと学びを進めることで、安全かつ高い学習効果が得られるように、実習を行う。さらに練習や試合を通して、対人競技としての技能や能力を高める。また、柔道試合審判規定についても理解を深めて、試合運営ができるようにする。</p>	
		器械運動	<p>器械運動に関する指導に必要な基本的な知識や技術を身に付けるとともに、器械運動の指導方法と発展的な運動に関する学習および実習を通して、器械運動の指導能力を高めることを目標とします。マット運動、鉄棒運動、跳び箱運動など器械運動の各種目の基本技について実習を行い、それらの技の習得を行なう。また、様々な指導上の工夫などについて学習して、器械運動の指導能力を高めていく。さらに、各自の能力に合った技能の習得と運動の理解を深め、器械を通じた身体操作の発展について学んでいく。</p>	
		水泳	<p>水泳の技能とその指導法について実技と講義を通して学習する。具体的には、①クロール、平泳ぎ、背泳ぎ、バタフライの各泳法の基本的技術及びその指導法の習得、② 水中における安全技術及び安全指導の知識や技能の習得、③ 規律ある行動、協力、リーダーシップ及びファロアシップなどに関する態度の涵養、を目指す。その際、受講者各自が水泳指導に関する資料集や個人記録簿を作成した上で進める。</p>	
		球技B	<p>バスケットボールに関する基礎的な知識（歴史、特性、技術構造、指導法、ルール等）を理解するとともに、基礎技能・戦術を習得し、その指導法について学ぶ。授業では、指導者と学習者、両方の視点からバスケットボールを捉え、何が学習内容となるのか考えながら行う。学校現場での指導を意識した単元構成や授業展開についても触れる。その際、一般的に中学校や高等学校で扱うバスケットボールで取り上げられる技能的な課題を中心に技能ポイントや練習法を紹介しながら実践する。また、ゲームを繰り返す中で、自分たちの課題を適切に取り上げることを行い、ゲームに生かすことができるような力を高めていく。さらに、実際の指導現場に立った際に必要な指導のポイントなども適宜取り上げ、指導者としての力量も高めていく。</p>	
		球技D	<p>サッカーに関する基礎的な知識を理解するとともに、基礎技能・戦術を習得しその指導法について学ぶ。また、保健体育授業の単元構成や授業展開についても扱う。具体的には、①球技領域（サッカー）の指導に必要な基礎的技術を体得することができる、②球技領域（サッカー）の基本的な知識と技能を習得することができる、③球技領域（サッカー）の授業設計をすることができる、の3点を目標としながら、ドリブル、シュート、対人プレー、ハーフコートゲーム、リーグ戦などを取り入れて授業を進める。</p>	
		球技F	<p>一般的に、バレーボールは「初心者ではゲームができない、ラリーが続かない、楽しくない」と言われるが、最近の教材の開発や、小学校へのソフトバレーボールの導入は、従来のこうした概念を変化させつつある。本授業では、球技（ネット型）を通じた個人・集団技能の習熟とともに、特にバレーボールを中心としたゲーム成立に向けて「どんな条件を整え、どんなルールを独自に創造すれば良いのか」という指導法的観点からの実践を深める。</p>	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
中学校「保健体育」に係る科目	教科	運動学	本授業では、運動学習論とスポーツバイオメカニクスの知見をもとに、運動指導に関する専門的能力を高める。運動学習論では、運動技能の習熟レベルや運動観察などについて、スポーツバイオメカニクスでは、力学、生理学、解剖学などの基礎知識をもとに身体運動のしくみについて概説する。これらをもとに、体育やスポーツ場面などにみられる運動を客観的・科学的に理解できる能力を養う。	
		体育・スポーツ心理学	体育・スポーツ心理学の基本事項を理解し、講義で学んだ学問的知見を体育・スポーツの実施および指導に活用できるようにすることを目標とする。授業では、身体運動が心身にどのような影響を与えるのか、体育・スポーツ心理学の観点から、人間の身体と心の関係について理解を深める。また、運動の心理的効果やスポーツ実践場面特有の心理現象について理解し、体育・スポーツの実施および指導に役立てる方法を考える。	メディア
		衛生学及び公衆衛生学	人々の疾病の予防や健康の保持増進のための原理を主として扱う衛生学、集団としての人間の健康の保持増進を図るための環境や社会のあり方を主として扱う公衆衛生学について講義する。具体的には、環境、疾病構造、生活習慣、ライフステージ、社会制度等と人々の健康との関連について解説し、我々が健康な社会の創造に向けて何をしなければならぬのかを考える契機とする。授業の進め方としては、各週に設定したテーマについて、パワーポイント、映像資料、配布資料等を用いた講義を中心に進めるが、適宜、グループワーク等を取り入れる。	メディア
	指導法	中等保健体育科指導法A	体育科教育学の入門的な基礎知識をテキストの学習を通して獲得するとともに、すぐれた体育授業の映像教材などを用いて、より良い授業づくりに必要な知識を身に付けるとともに、実際に体育指導を経験する。具体的には、体育の目標・内容、教材づくりや教材の有効性を高める教具の機能などを理解する。後半では、学習指導案を作成し、模擬授業を実践することによって体育の授業づくりを学ぶ。	
		中等保健体育科指導法B	保健体育教師が保健授業を担当する意義、学習指導要領に示された中学校および高等学校の保健の目標や内容、保健授業づくりの方法（教科書の活用の工夫、教材づくり、多様な指導方法）等について学ぶ。授業の進め方としては、各週で設定したテーマについて、パワーポイント、教科書、配布資料、学習指導要領解説等を用いた講義に加え、グループワーク、情報機器を活用したプレゼンテーション、実習等のアクティブ・ラーニングの視点を取り入れた学習活動を積極的に取り入れる。	メディア
中等保健体育科指導法C		本授業では、保健体育の授業における単元全体の構造を理解するとともに、授業に必要な知識・技能並びに指導方法を身につける。保健体育の授業づくりや授業改善につながる具体的な方法の提案ができるようにするなど、授業の観察力を身に付ける。また、単元構造を踏まえ、今まで学んできた保健体育領域の知識を授業づくりに活かせるようにする。	共同	
中等保健体育科指導法D		中学校及び高等学校の保健体育科授業に関する実践的な指導力の向上と、授業改善の方法を身に付けることを目標とする授業である。具体的には、指導計画の作成方法や情報通信機器（ICT）の活用、授業観察及び授業評価の仕方等について講義した上で、実際に受講生が保健体育科授業の学習指導案の作成や教材づくりを踏まえた模擬授業の実践とその省察を通じて、課題を明らかにし改善策を考える内容とする。		

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
中学校「家庭」に係る科目	教科	家庭経営論	私達の生活拠点である家庭を中心とした生活経営に関する知識を習得するとともに、家庭生活の諸問題を社会との関わりでとらえ、生活課題を解決する基礎力を培うことを目標に、まず学問背景である家政学や家庭経営学について考察し、次に家庭科という教科の教育内容としての家庭経営に焦点をあて、社会の変化とのかかわりで家庭生活の変遷をたどり、その後、家庭生活の経営と管理の各論と家庭経営における現代生活の課題を検討する。	メディア
		生活経済論	生活者の視点にたった経済システムの構築の展望を目指す前提として、まず、これまでの経済社会システムの変遷について考察する。次に、経済のしくみ、国民経済と家庭経済といったマクロ経済について考察する。さらに、家庭経済の構造を中心としたミクロ経済について考察する。その際に「家計調査」を用いて宇都宮市を例に具体的な作業を行いながら実態を把握する。生活経済と社会保障、ライフサイクル、ライフステージとのかかわりにもふれ、最後に生活経済の今日的課題について検討する。	メディア
		生活環境論	家庭科において「環境」の視点は各領域において多面的に取り入れることが重要である。そのためには、(1)身近な生活から環境問題を捉えられるようになる、(2)生活を多面的に考えることができるようになる、(3)環境問題解決に果たす生活者の役割を考察することができるようになる、ことが大切になる。そこで、快適な生活環境を検討していくうえで必要な論点について、衣生活を切り口に整理し、それらがもつ基本的な問題や諸課題について講義する。	メディア
		被服構成実習 I	家庭科教育に必要な衣生活における被服構成について、科学的に理解し、裁縫技術を身に付けることができるよう、平面・立体構成の基礎的な実習をおこなう。採寸・製図・裁断・仮縫い・本縫いをおして、小中高等学校における手縫いやミシンの適切な取り扱い方法、用具を安全に取り扱い製作が適切にできる環境づくり等の指導方法についても修得する。また、身体を覆う衣服の構造について理解を深める。	
		衣生活環境実験	衣生活論ならびに被服素材論、衣管理論で理解した専門知識をもとに、繊維、糸、布の特性を実験や加工実習等で確認する。また、衣服を着装する側の人体の形態、体温、生理学的・物理学的・心理学的特性を知る。また、実験で得られたデータを解析・考察し、レポートにまとめる力を身につける。小中高の家庭科実習で必要となる実験実習の準備および実施能力を身につけ、家庭科の学習内容に関連させることができるようにする。	
		被服素材論	衣服の材料となる繊維高分子材料に関する基礎的知識を修得し、繊維及び繊維集合体の物理化学的な特性を理解し、快適な衣生活について材料学の視点から考えられるようになることを目標に、天然繊維と化学繊維の物理化学的特性の基礎として、糸や布の構造特性と消費性能について学ぶ。また、素材の視点からエコプラスチック等の環境対応技術の動向や地域の伝統染織の素材特徴から快適な衣生活を論じる。	
		調理実習 I	小学校、中学校、高等学校で行う調理実習の内容について、和食、洋食、中華、韓国等のメニューを段階的に取扱い、最後に各班で献立立案から実習までを行う。①基本的な調理操作や調理材料の取扱い、②調理科学的知識に基づいた実践力、③郷土食や伝統食への理解、④環境を意識したエコクッキングおよび食材の廃棄、の4項目について修得し、小中高の家庭科の調理実習で必要となる準備および実施能力を身につけ、家庭科の学習内容に関連させることができるようにする。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
中学校「家庭」に係る科目	教科	食生活環境実験	食生活論ならびに栄養学、食物科学で得た専門知識をもとに、食物を科学的に捉えることを中心に、食品の加工、食品の調理性、食品に含まれる栄養素、食品衛生などについて実験を通して理解を深める。①基本的な実験操作や実験器具類の取扱い、②食品加工の方法、③食品間の化学反応への理解、④食品に含まれる成分や衛生微生物の検出方法、の4項目を修得し、小中高の家庭科の調理実習で必要となる準備および実施能力を身につけ、家庭科の学習内容に関連させることができるようにする。	群大集中
		栄養学	五大栄養素、食物繊維を中心に、各栄養素の化学構造や身体における代謝、生理作用などについて基礎知識を詳説する。そして栄養素摂取と健康との関係について、食事摂取基準を考慮して不足のなく栄養素を摂取する必要があること、エネルギー摂取量と消費量のアンバランスが生活習慣病に繋がることなどについて取り上げ、エネルギー代謝とその算出方法をもとにバランスのよい献立づくりに活用できるようにする。	
		住環境論	住居領域の専門性を深めるため、住居と地域社会との関わりについて様々な視点から検討し、適切な住居領域の教育内容や教材を検討できるための基礎的知識を得る。また、都市環境や地域施設に関連する文献や資料をもとに、住環境の変遷や多様性について歴史的背景を含めて理解を深め、小中高の家庭科で住環境のあり方について学ぶための内容や教材研究を通して住居領域の学習内容について考える。	
		住生活環境実習	住環境の測定と分析を通して、住生活に対する子どもの理解や関心を高める授業実践力を身につけることを目標に、安全で快適かつ健康な生活を営む場としての住居について、日照、採光、換気、温熱、空気環境などを配慮できるよう測定を行うとともに、その結果と測定器具を用いた授業実践力を高める。また、住環境デザインの手法について造形活動を通して体験的に学び、子どもたちがバリアフリーなどの社会的課題等について体験的に学ぶための授業実践力を高める。	
		住生活実習	家庭科の住居領域の内容理解を深めるため、設計、製図の基礎技能を習得する。建築図面から住生活を読み取ることができ、製図を行うことができるようになることを目標に、製図の基本や製図道具の使い方を習得する。木造住宅図面のトレースを行い図面の種類や図面を読み解く方法について学び、小中高の家庭科における住居領域での授業への応用について基礎的な知識と実践力をを修得する。	
		保育学	生涯発達の視点から、胎生期・乳幼児期・児童期の心身の発達の諸相と発達理論、各ライフステージの発達課題とそれらの達成に重要な意味を持つ家族関係、地域・社会関係について理解を深める。また、「保育」「児童」「親性」「保育環境」の概念とそれらに関する現代的課題について検討し、児童の生涯発達を保障する保育環境と保育教育のあり方を家庭科の観点から考察する。	
		児童福祉論	子どもの貧困や虐待が社会問題化している今日、社会が子どもの権利を守り、地域で子どもを育てる観点が重要になってきている。そこで、子どもの福祉の現状と課題について法・制度を踏まえながら理解させ、世界と日本の子どもや家族と、児童福祉政策の現状と課題を通して、人権を基軸とした教育・福祉の在り方とは何かを探求する。また、小中高の家庭科の家族・保育領域における学習内容に関連させることができるようにする。	メディア
		家庭電気機械及び情報処理	家庭で適切に機器や情報を扱うための要素として、その仕組みやエネルギーについて講義する。そして、生活の向上にそれらが果たす役割や適切な利用の仕方について、自分の生活に即して主体的に考えられるようにする。エネルギーの種類と特性を理解し、エネルギー機器の効率的かつ安全な利用や、省エネルギーや情報セキュリティなどの持続可能社会に向けての必須事項の理解を深める。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
中学校「家庭」に係る科目	指導法	中等家庭科指導法A	本授業は中等教育における現代家庭科の教科論及びカリキュラムについて、戦後の変遷を踏まえながら、目標・内容、指導方法、評価等について概説する。また、家庭生活を取り巻く諸課題と家庭科教育との関係性を考察することにより、その意義や役割について検討し、(1)中等教育における現代家庭科の教科としての特質を理解する、(2)中学校家庭科および高等学校家庭科学習指導要領の内容を把握する、(3)中学校および高等学校における家庭科学習の現状を知り学習指導に生かそうとする、ことを達成目標とする。	演習を含む
		中等家庭科指導法B	本講義は、学習指導要領等における中学校・高等学校の家庭科の目標、内容について理解を深め、それに沿った授業設計と学習指導案づくり、指導方法等を学ぶことを目的とする。また、学習指導要領における目標を達成するための学習指導や授業展開、評価等のあり方について検討し、主要な教育理論を踏まえて具体的な授業場面を想定した授業設計の方法を身に付ける。学生自身が主体的に教材研究や教材開発、模擬授業に取り組む中で、情報機器及び教材の効果的な活用法も身に付くように、演習、討論、授業研究と省察等を組織して、相互に批判・検討しながら家庭科教育実践の力量を高める。	演習を含む
		中等家庭科指導法C	学習内容の科学的理解や、課題解決能力の育成を目指した家庭科の授業のあり方について講義、議論する。また、授業における「指導と評価の一体化」の考え方について解説した上で、授業の学習指導案づくりや教材づくり、模擬授業、相互検討を通して、実践力をつける。模擬授業では「主体的、対話的で深い学び」の視点を取り入れた学習活動を積極的に取り入れる。	演習を含む
		中等家庭科指導法D	中学校、高等学校の家庭科の授業設計と学習指導案作成および授業改善の具体的な手法を身につける。また、授業における「指導と評価の一体化」の考え方のもと、授業の学習指導案づくりや教材づくり、模擬授業、相互検討を通して、総合的な実践力をつける。模擬授業では「主体的、対話的で深い学び」の視点を取り入れた学習活動を積極的に取り入れ、次世代の家庭科学習について検討する。	演習を含む
中学校「技術」に係る科目	教科	木材加工学演習	技術・家庭科(技術分野)、工業高校の木材加工の指導に必要な木材の加工に利用する手工具、電気工具、工作機械に関する演習を行う。授業を通して、手工具・電気工具・工作機械を適切に利用した木材加工の技能、作品の構想図、部品図を等角図、第三角法等の図法を使って表す技能、手工具・電気工具・工作機械を使用して、安全・適切に材料取り、部品加工、組立て・接合、仕上げや、検査等を行い、製品を製作する技能を習得することを達成目標とする。	宇大共同/群大単独
		製図I	技術・家庭科(技術分野)、工業高校の加工分野の指導に必要な製図法についての基本的な知識の学修および手製図の演習を行う。これらを通し投影法および製図法について理解し、機械の構想図や組立図、部品図の見方や描き方を修得する。描画に用いる線の太さや種類について知り製図におけるそれらの使い分けについて学修する。作品の構想図、部品図を等角図、第三角法等の投影法を使って描くことができる。製作の構想を製図により具体的に表示できる。	
		金属加工学演習	技術・家庭科(技術分野)、工業高校の金属加工分野の指導に必要な手工具、電気工具、工作機械を用いた演習(製図を含む)を行う。これらを通し手工具、電気工具、工作機械を実際に利用して、金属加工の理解を深めることができる。作品製作に必要な構想図、展開図、組立図を製図法に則って製作することができる。手工具、電気工具、工作機械のしくみや操作法を理解し、安全に作品を製作することができるようにする。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
中学校「技術」に係る科目	教科	製図Ⅱ	技術・家庭科(技術分野)、工業高校の加工分野の指導に必要な製図法についての基本的な知識の学修および手製図の演習を行う。これらを通し投影法および製図法について理解し、機械の構想図や組立図、部品図の見方や描き方を修得する。製図を通して製作物の設計や加工方法について考えることができ、製作物の形状だけでなく、その設計意図や加工方法についての伝達手段としての製図ができる。	
		機械工学	「機械とは何か」(機械の概念)について、および機械を構成する機械部品や機械要素について学修する。機械の目的とする機能を達成するための手段・方法について学修する。運動(動力)の伝達、変換、制御のための仕組みについて学修する。機械設計における基礎概念(荷重、応力、強度など)について学修する。産業における工作機械(マザーマシン)の重要性を理解し、工作機械の精度・確度の重要性(母性原理)について理解する。	
		機械工学演習	身近な機械や機械模型(ラジコンカー・組立キットなど)を組み立てたり分解したりする活動を通して、機械を構成する機械部品や機械要素の機能や、機械の目的とする機能を達成するための機構等について学修する。機械の機能や構造の理解し、それに基づきその機械の設計意図を考えることが出来る。機械に用いられている各種の機構や機械要素の機能や仕組みを理解し、その役割を具体的な言葉で説明することが出来る。	
		電気工学	オームの法則やキルヒホッフの法則、重ね合わせの理、テブナンの定理などの諸定理を用いることで電気回路の振る舞いについて学修する。日常生活において主となる正弦波交流回路について直流回路との対比などによりその特徴について学修する。日常生活において、もはや必要不可欠となった半導体利用機器について理解を深めるため、その基本となる半導体素子であるダイオードやトランジスタの仕組みや特性およびその利用方法について学修する。学修内容を活かして、電気を安全に利用するために遮断器等の安全装置の機能や仕組み、電気保安についての法令等の根拠について理解を深める。	メディア
		電気工学演習	複数箇所自由に電灯を点滅することができる回路の製作などを通して電気回路と実体配線の対応関係について学修や、白熱電球と発光ダイオードの電気的特性の違いと使い方や発光ダイオードの順方向電圧と発光色の関係、電圧計や電流計(または回路計など)の仕組みと使い方、ダイオードやトランジスタ、IC等の能動素子を用いた簡単な電気・電子機器の製作などを通して電気・電子回路についての演習を行う。	
		生物育成学	現在の農業について理解するなかで、作物栽培の基本的技術を学び、身近な野菜類を栽培することが可能になるまでの十分な知識を取得する。中学校技術・家庭科(技術分野)を担当する教員として、農業の現状を理解し、身近な農作物の基本的な生理、生態の知識を身につける。農作物栽培のための土壌、肥料、病害虫防除の知識を身につける。薬物としての農薬について正しい知識と環境への影響を理解する。	
		生物育成学演習	学内の農場において、数種の農作物について播種から収穫までの体験をすることにより、基本的な栽培管理方法、肥培管理方法、病害虫防除の方法などを体得する。中学校技術・家庭科(技術分野)を担当する教員として、基本的な圃場管理、農機具の使用法を指導することができる。身近な農作物の栽培を行うことができる。農作物の病害虫防除、肥培管理(農薬の適正な管理法および使用法を含む)を行うことができるようにする。	
		情報工学	本授業は、コンピュータを構成するハードウェアの基礎、及びデータ構造、基本ソフトウェア、そして応用ソフトウェアなどのソフトウェア、社会生活への情報活用としてIoTやAIの基礎などについて修得することを目指す。また、ネットワークの仕組みやセキュリティ、情報モラルなどについても学習する。以上の学習により、情報通信社会への理解、安全性や危険性を考慮した活用などに必要な知識・技能をその仕組みから修得することを目指す。	メディア

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
中学校「技術」に係る科目	教科	情報工学演習 本授業は、中学校技術・家庭科技術分野の教員に必要なプログラミングの基礎的知識・技能を、「Excel VBA」及び「Scratch」を用いて修得することを目指します。さらに、センサの制御技術の基礎をシングルボード・コンピュータである「Micro:bit」を用いて修得することも目指す。これらを通して、学校現場で利用可能なオリジナルソフトを制作できる能力をつける。	
	指導法	中等技術科指導法A 中学技術・家庭科（技術分野）という教科は、時代背景や技術革新、産業構造の変化に伴い進化していく教科である。まず技術教育が生まれた歴史的背景を学び、国内外における技術教育について取り上げ、現状と課題について学習する。次に学習指導要領を読み込み、技術教育の内容についても学ぶ。また代表的な教育実践を取り上げて批判的に検討し、よりよい授業設計・学習指導案作成ができるようにする。	メディア
		中等技術科指導法C 「技術科教育法A」「技術科教育法B」で学習した成果に基づき、中学校技術・家庭科（技術分野）の教育に携わる教員として、技術分野の「材料と加工の技術」「生物育成の技術」「エネルギー変換の技術」「情報の技術」の4つの内容について、学校現場での実践を視野に入れた「指導方法」「教材開発」のについて学ぶ。授業を通して、技術科教育の目的と課題の理解を理解し、指導計画、指導案を作成することができることを達成目標とする。（19 松原真理, 71 川島芳昭）（小倉良一, 33 楠元一臣, 122 古田貴久, 137 片柳雄大）	オムニバス方式
		中等技術科指導法D 「技術科教育法A」「技術科教育法B」「技術科教育法C」で学習した成果に基づき、学校現場の実践を踏まえた技術分野の4つの内容について実践的な指導力を身に付けるための模擬授業を中心に授業を行う。授業全体を通して、技術分野4つのそれぞれの指導内容及び授業のねらいに基づいた授業設計、教材作成を行い、模擬授業を実施する。また、模擬授業についての協議を行い、授業改善についての視点について学ぶ。（19 松原真理, 71 川島芳昭）（小倉良一, 137 片柳雄大）	オムニバス方式
中学校「英語」に係る科目	教科	英文法演習 現代英語の実態を踏まえて、伝統文法をはじめとする科学的英文法研究の観点や方法、成果等を援用しつつ、学習英文法の理解を深めるとともに、中高での授業における教材分析や導入・説明、練習指導のあり方などを見据えて、文法の科学的、多角的な理解を深めてゆくための基礎力を身につけるとともに、英語の歴史的変遷や国際共通語としての英語の実態を理解する。授業では、単元の事前学習に基づく小テストや課題を踏まえて英文法の諸相に関する知識の再確認と拡充・定着をはかり、基本語順・基本文型、形式と意味・機能の関係、構文個別の特性などについての理解を深め、教材研究等への応用を考察する。あわせて、英語の歴史的変遷や国際共通語としての英語の実態を理解するための講義も交える。	メディア
	教科	英語学演習 A 児童・生徒が英語の非母語話者としてどのような発音を身につけるのが適切かを考えるために、以下の項目を設定する。 (1) 英語の母音体系を日本語と対照しながら学習する。 (2) 英語の子音音素を日本語と対照しながら学習する。 (3) 国際音声字母(IPA)を習得する。 (4) 英語の音節構造とアクセントについて学習する。 (5) 英語のリズムとイントネーションを学習する。 (6) 音声学的に正しい英語の発音を身につける。	
	教科	英語学演習 B 英語科教員養成の観点から、教材研究開発の基礎となる専門力を身につけるため、英語の言語学的研究の目的や方法、成果などを概観し、具体的な言語現象についての基本的な知見を理解し、基礎的な観察・分析力を身につけるための演習を行なう。到達目標は、具体的な英文や音声資料等の英語表現の事例について、文法や英語の音声の仕組みなどに関する言語学的な観点からの基本的な分析ができ、教材理解や教材研究等への応用ができることである。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
中学校「英語」に係る科目	教科	英語文学演習 A	<p>(授業形態) 演習</p> <p>(目標) (1) 多様な英語のテキストを精読することによって英語力の向上を目指す。(2) 他者の意見を踏まえながら自らの考えを述べ、また他者の意見に応答するアカデミックなコミュニケーション能力の向上を目指す。(3) 異文化へのより深い理解を通して、豊かな人間性と教養を身につける。</p> <p>(概要) 代表的なアメリカの短編小説を精読する。受講者の発表を元にグループディスカッションを行う。発表では、ディスカッションの論点を挙げてもらうほか、語学的な注釈や疑問を挙げてもらい、その都度、解消していく。</p>	
		英語文学演習 B	<p>イギリス文学作品を読むことで、多様な英語表現を学びながらイギリスの歴史や文化について理解を深め、英語教育に不可欠な素養を身につける。授業においては、ナラティブ構造や修辞に注目しながら、18-20世紀の小説を取り上げ、それぞれのナラティブ構造や修辞に注目することで、内容だけではなく形式から文学作品を読み解く態度を養う。その際、「文学」の位置づけ、批評の機能、ナレーター、作者と読者、視点といった文学批評に纏わるさまざまな事項を題材とする。</p>	
		オーラルコミュニケーション演習 I	<p>(授業形態) 演習</p> <p>(目標) 生徒の理解のレベルに応じて英語で授業を行える英語運用能力を育成する。そのため、①目的や状況に応じて、様々なトピックやジャンルについての英語を聞いて理解できたり話したりできる能力、②目的や状況に応じて、読んだり書いたりできる能力を育成する。</p> <p>(概要) 全て英語で行い、グループやペアでの活動、ロール・プレイ、個人とグループでの発表を多く取り入れ、履修者が英語を使う場面を多く設定する。様々なトピック、ジャンル、コンテキストに触れながら正確さと流暢さに焦点を当て、多聴のプログラムを行い、聞いたことに関して、互いにその場で要旨を述べたり、ディスカッションを行ったりする。各自がオーディオジャーナルとして課題についての私見を録音し、教師にその音声ファイルを送ってはフィードバックをもらって改善していくスパイラル方式の学習活動も行っていく。読む・書くことも加えた全ての技能を統合的に組み合わせ、英語運用能力全体の向上を図る。</p>	
		オーラルコミュニケーション演習 II	<p>(授業形態) 演習</p> <p>(目標) 生徒の理解のレベルに応じて英語で授業を行える英語運用能力を育成する。そのため、①目的や状況に応じて、様々なトピックやジャンルについての英語を聞いて理解できたり話したりできる能力、②目的や状況に応じて、読んだり書いたりできる能力を育成する。</p> <p>(概要) 「オーラルコミュニケーション演習 I」と同様、全て英語で行い、履修者が英語を使う場面を多く設定する。様々なトピック、ジャンル、コンテキストに触れながら正確さと流暢さに焦点を当て、多聴のプログラムを行い、聞いたことに関して、互いにその場で要旨を述べたり、ディスカッションを行ったりする。オーディオジャーナルを活用したスパイラル方式の学習活動を継続し、ディベートや英検準1級・1級の2次試験問題を参考にしながら、「やり取り」と「発表」の力を伸ばす。読む・書くも含め、全ての技能を統合的に組み合わせることで、英語運用能力全体の向上を図る。</p>	
		現代英語表現法演習	<p>英語による発展的な総合的英語運用能力の涵養のために、リスニングやスピーキング(インタラクション・スピーチ)などの言語活動を主にしながら、リーディング(文献検索等)ライティング(パワーポイント等発表資料作成)を取り入れた学習活動を行う。具体的には、自己開示を必要とするローカルな話題(自己紹介および自分の住んでいる地域等の特徴や文化等)から、英語を学ぶ意義に繋がる社会的な課題(SDGs(Sustainable Development Goals:持続可能な開発目標)等)に基づくトピックを取り上げ、協働学習を取り入れ、学習する。</p>	メディア

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
中学校「英語」に係る科目	英作文Ⅰ	より自然で正確な英語作文をするための文法知識の整理・発展をはかり、聞き取りや発話練習と合わせて、総合的な英語の表現力と理解力の向上を見据えた英作文演習を行う。授業では、日英語比較等の観点から、書いたり話したりするうえで注意すべき文法や語法の項目を単元とし、事前学習に基づく小テストや課題を踏まえて必要な知識を再確認・拡充し、口頭練習を合わせた総合的な学習を進め、英文法の正確な運用に基づく表現力と理解力（読解力）の涵養と学習指導上のポイントの理解をはかる。	
	英作文Ⅱ	より自然で正確な英語作文をするための文法知識の整理・発展をはかり、聞き取りや発話練習と合わせて、総合的な英語の表現力と理解力の向上を見据えた英作文演習を行う。授業では、日英語比較等の観点から、書いたり話したりするうえで注意すべき文法や語法の項目を単元とし、事前学習に基づく小テストや課題を踏まえて必要な知識を再確認・拡充し、口頭練習を合わせた総合的な学習を進め、英文法の正確な運用に基づく表現力と理解力（読解力）の涵養と学習指導上のポイントの理解をはかる。さらにパラグラフ等のより長い表現単位の発展的なライティングに接続させる。	
	教科	イギリス文化論 授業のテーマ及び到達目標 イギリス文化についての基礎的な知識を獲得する。特に、歴史的にヨーロッパ諸国、アジア、アフリカといった他地域との相互関係によって発展してきたイギリス文化の多様性に注意を払う。獲得した知識をもとに、その他の分野・地域の文化的事象に対しても積極的に興味を広げられるようにする。その際、例えば日本の文化など身近な文化との比較を通じて、文化の意義について考察する。 授業の概要 イギリスの文化を形成する様々な側面（特に、他地域の文化との関係に注目する）について広く学ぶ。講義形式が基本ではあるが、受講人数によっては、発言をしたり、考えをまとめたりする機会もある（その際、身近な文化との比較を行う）。併せて、文献を要約する作業と作品調査を複数回行ってもらう。	
		アメリカ文化論 米国の社会や文化、歴史などを多角的な観点から概観し、基礎的な知識を身につける。具体的には、植民地時代から米国の独立、宗教、多民族社会、移民政策、奴隷制廃止、大衆文化、工業化と都市、西部開拓、公民権運動などを扱う。中学・高校の英語の教科内容に関連する米文化関連事項や実際の授業に直接的、間接的に役立つ情報にも触れ、理解を深める。語学教育の背景としての米国の文化史に関する豊かな知識を形成する。	
	指導法	中等英語科指導法A 中学・高校の学習指導要領(外国語編)の目標・内容および小学校英語教育との関係を中核として、国際社会における英語の役割から今日求められる英語力の育成のあり方を学ぶ。教科書・教材、学習者の特性、各技能の育成、言語活動、第二言語習得と外国語習得の特性、誤りの処理、文法や語彙の習得などを中心に授業の組み立てや実践の基礎となる話題を取り入れ、指導に関する知識と基礎的な技能を育成する。ディスカッションと発表をとおして、習得した知識に基づく私見を持てるようにする。必要に応じて、模擬授業的な活動を取り入れる。	
		中等英語科指導法B 「中等英語科指導法A」での学習内容を踏まえ、到達目標と年間指導計画、題材配列、単元指導計画、学習指導案の作成について学ぶとともに、評価のあり方を考える。CAN-DOリストやルーブリックを用いたパフォーマンス力の育成・測定・評価など、今日の英語教育で取り組まれている話題を取り入れ、指導に関する知識と基礎的な技能を育成する。また、英語教師に求められる資質と能力を考え、教育実習に向けた視野を持てるようにする。ディスカッションと発表をとおして、習得した知識に基づく私見を持てるようにする。必要に応じて、模擬授業的な活動を取り入れる。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
中学校「英語」に係る科目	指導法	中等英語科指導法C	新学習指導要領における中学・高校の英語教育の目標達成に向け、「中等英語科指導法A・B」での学びを生かしながら、指導計画立案、目標設定、各時の授業の組立て方について実践的に学習する。授業で行う様々な言語活動について理解し、それらを支える基礎的な指導技術の習得を目指す。「小・中・高の一貫した英語教育の目標」の理解の下に、中学校で用いられている教科書を使用し、教材研究・指導案作成・模擬授業・授業研究ディスカッション等の活動を多く取り入れて、履修者は主体的に学ぶ。授業実践で重要な項目については、毎回スポットを当てて学習する。現職教員による授業の様子などを見ながら、教育実習や現場での授業場面を想定して授業実践について具体的に考える。	メディア
	中等英語科指導法D	「中等英語科指導法C」と同様に、新学習指導要領における中学・高校の英語教育の目標達成に向け、「中等英語科指導法」での学びを生かしながら、指導計画立案、目標設定、各時の授業の組立て方について実践的に学習する。授業で行う様々な言語活動について理解し、それらを支える基礎的な指導技術の習得を目指す。「小・中・高の一貫した英語教育の目標」の理解の下に、中学校で用いられている教科書を使用し、教材研究・指導案作成・模擬授業/授業映像・授業研究ディスカッション等の活動を多く取り入れて、履修者は主体的に学ぶ。授業実践で重要な項目については、毎回スポットを当てて学習する。		
特別支援教育科目	特別支援教育総論	特別支援教育免許状を取得するための必修科目であり、教育職員免許法施行規則に規定される「特別支援教育に関する基礎理論」に関する科目である。本授業では、我が国における「特殊教育」制度から「特別支援教育」制度への移行を踏まえながら、1)障害の社会的・文化的・歴史的意味を理解すること、2)日本における障害児教育の理念と制度に関する基本的知識を習得すること、3)インクルーシブ教育の理念と制度に関する基本的知識を習得することを目的とする。障害について、その種類・程度の理解だけでなく、障害の意味するところの社会的・文化的・歴史的変遷を理解したうえで、障害種別によらない教育的ニーズに基づく教育とは何か、さらに障害のある子どもの社会参加において学校教育が担う役割について概説する。		
	知的障害児の心理・生理・病理	知的障害児の心理的特性、解剖・生理についてその基礎的な知識を学ぶ。知的障害の原因を理解するうえで重要な脳の構造と機能を解剖・生理学的に解説する。知的障害を引き起こす素因と要因について学び、さらに知的障害を引き起こす疾患とその病理性について学びを深める。知的障害の生理学・病理学的理解に基づき、知的障害の心理特性について学ぶ。また、知的障害児の幼児期から思春期にかけて発達について学習し、知的障害を持つ幼児・児童・生徒への理解を深める。		
	肢体不自由児の心理・生理・病理	肢体不自由のある子どもを理解するために教員が必要とされる心理・生理・病理の知識を習得し、肢体不自由のある子どもが抱える困難と障害状況について理解を深める。さらに、肢体不自由がある子どもとの教育的係わり合いの実際について具体的に検討することをとおして、肢体不自由がある子どもの行動の意味を捉えるための基本的な観点について学ぶ。 まず、肢体不自由が児童生徒に及ぼす心理的影響について学習し、肢体不自由をきたす疾病についての理解を深め、適切な肢体不自由児の支援を行うための基礎知識および肢体不自由教育の特色・教育内容について実践事例を通して学ぶ。さらに、肢体不自由がある子どもとの教育的係わり合いの展開過程について紹介し、係わりの糸口や行動のとらえ方、行動の意味などについて具体的に検討する。		

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
特別支援教育科目	病弱児の心理・生理・病理	病弱の子どもを理解するために教員が必要とされる心理・生理・病理の知識を習得し、病弱の子どもが抱える困難と障害状況について理解を深める。また、疾患・外傷などが病弱の子どもに及ぼす心理的影響や長期入院を要する疾病についての理解を深め、適切な支援を行うための基礎知識を学ぶ。さらに、病弱の子どもとの教育的係わり合いの実際について具体的に検討することをとおして、病弱の子どもの行動の意味を捉えるための基本的な観点について学ぶ。 具体的には、病弱教育の特色・教育内容について実践事例を通して学ぶ。また、病弱な子どもとの教育的係わり合いの展開過程について具体的に紹介し、係わりの糸口や行動のとらえ方、行動の意味などについて具体的に検討を重ねる。	
	知的障害児心理学特論	知的障害児における日常生活、言語、認知、運動、社会性、行動などに関する発達課題を学び、それに対する心理学的な視点に立った指導方法の理解を図る。具体的には、知的障害児、およびその周辺領域の子どもたちへの支援に生かすことができる認知・発達理論と心理アセスメントを中心に学びを深める。また、知的障害の判断基準にかかわる、発達の水準、適応行動、認知機能をアセスメントする検査について学ぶと共に、その知見を個別支援に有効に利用する方略について事例を交えて主体的に学び合う機会とする。	
	知的障害児教育課程・指導法	この授業では、知的障害のある児童生徒の特性について知るとともに、以下の観点を中心に知的障害教育の特色と内容について理解することを目的としている。特に、特別支援教育における教育課程や指導形態について理解し、知的障害のある子ども各教科、合わせた指導の考え方や編成の方法について知り、特別支援学校教員としての基礎的な知識を習得してほしい。講義のみならず、実際の授業のビデオを視聴したり、学生自身が調べて発表したりする時間も設けながら進めていく。	
	病弱児教育課程・指導法	病弱教育の歴史をふまえ、今日の病弱教育の対象・場と、解決すべき課題を理解する。病気の子どもの治療・療養の実際と、心理特性を理解する。学校教育の役割について考え、病弱・身体虚弱の子どもにとっての教育の意義を理解する。そして、病弱教育の特色と内容について理解し、特別支援学校教員としての基礎的な知識を習得することを目的とする。小児医療の進歩のなかで、病弱教育の対象者が変化してきている現状を踏まえ、病弱教育に求められている役割を学び、特別ニーズ教育の視点から病弱教育について考察を加える。	メディア
	知的障害教育特論	以下の3つの観点を踏まえながら知的障害児への指導方法について具体的に考えることができることを目指す。①知的障害のある子どもの指導と学級経営の基本について理解する。②知的障害のある子どもの単元計画の考え方と作成方法について理解する。③知的障害のある子どもの社会生活を意識した授業作りの方法を知る。 知的障害のある子どもの卒業後の社会参加を意識しながら、講義及びグループワークの活動等を通して知的障害児の指導と学級経営について理解を深める。	
	視覚障害児教育課程・指導法	特別支援学校教員免許の取得を目指す人を対象に、視覚障害児の指導について実際に理解するために、触図を用いた触察体験や弱視ゴーグルを用いた弱視体験等の体験活動を行う。活動に基づき、担当教員が作成したワークシートを用いて、自分の考えを文章にするとともに、グループ討議を行う。視覚障害児の具体的な教育内容や方法について、映像を通して学び、小レポートを求める。ワークシート・小レポートへの記入、テストから評価を行う。	メディア
	視覚障害児指導法特論	特別支援学校教員免許の取得を目指す人を対象に、視覚障害児の特性に応じた各教科の指導や、アセスメント、指導計画、評価法等について、解説する。各教科における指導上の配慮や工夫について、グループ討議をする。アセスメントや評価法の演習を行い、アセスメント結果に沿って個別指導計画の作成の演習を行う。これらの演習に基づき、担当教員が作成したワークシートを用いて、自分の考えを文章にする。ワークシートへの記入、テストから評価を行う。	メディア

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
特別支援教育科目	障害児自立活動論	知的障害児や肢体不自由児、病弱児の自立活動について学ぶために必要な基礎知識を概説した後、自立活動の前身である養護・訓練の成立、養護・訓練から自立活動が成立するまでの歴史、そして自立活動の理念と基礎概念（個別の指導計画を含む）を概説し、自立活動の考え方とその問題、学校現場で実際に行われている自立活動や個別の指導計画に基づいた授業のづくりの実際についての学びを深める。また、共同活動による自立活動の指導計画作成や模擬授業などを通して自立活動の意義を体験したりする。	
	障害児発達臨床論	障害のある子どもを理解し支援するための具体的な方法について、発達段階を踏まえて考え、他者と協働しながら支援計画を立てる過程について理解することを目指す。障害のとらえ方、障害のある子どもから学ぶ支援のあり方について確認した上で、保育の場における支援、小学校段階における支援、中学校段階における支援について検討する。併せて、保幼小の連携、小中の連携、子ども同士の関係づくりについても扱う。 授業者による講義のほかに、ビデオ映像や資料を用いて小グループによる事例検討を行う。	
	視覚障害教育概論	主として特別支援学校教員免許の取得を目指す人を対象に、視覚障害教育に関する入門編となる内容である。視覚障害の原因や程度、視覚障害児の発達的特徴、視覚障害児に対する教育課程と指導法について、基礎的事項を扱う。視覚障害についてなじみのない学生にも、イメージをもちやすいよう配慮する。ビデオ映像を見て、ワークシートに記入したり、グループ討議をしたりする。ワークシート・コメントシートへの記入内容、テストから評価を行う。	メディア
	発達障害教育概論	現在一般の小学校・中学校に知的に障害を伴わない高機能自閉症、アスペルガー症候群、LD、ADHDのある人が約6.3%存在するといわれている。共生社会を目指す現代の学校教育において、彼らの障害特性の理解と支援のあり方を学習することは極めて重要である。本講義は、1. 発達に即した発達障害児者の特性についての理解を深める。2. DSM5に添って、発達障害(神経発達障害)の特性理解ができる。3. 生活障害といった概念を解して、発達障害児者の発達に即した『認知と関係の発達』を理解し、対象児および支援者への適切な支援について事例を交えながら主体的に学び合うことで、発達障害の特性理解と支援の方法について理解を深める。	
	重複障害教育概論	障害の重い子どもが抱える困難と障害状況について理解を深めるとともに、障害の重い子どもとの教育的係わり合いの実際について具体的に検討することをとおして、障害の重い子どもの行動の意味を捉えるための基本的な観点について学ぶ。 障害の重い子どもへの教育のあり方について、特に実践的・臨床的観点から学ぶ。実践研究論文の講読、映像資料に基づく事例検討などを重ね、個別性に基づいた教育的係わり合いのプロセスを共有する。こうした取り組みのなかで、受講生は、障害の重い子どもとの教育的係わり合いの実際について見識を重ねていくことになる。	
	盲ろう教育概論	盲ろうの子どもが有する障害の独自性を理解したうえで、実践場面の映像視聴や資料(実践研究論文、報告書、図書など)の講読を通して、盲ろうの子どもとのコミュニケーションの方法や学習の進め方について理解する。さらに、国内外の盲ろう教育の展開と様々な障害のある子どもの教育との共通点に視野を広げながら、盲ろう教育の発展が我が国の特別支援教育に果たす役割やその意義について理解を深める。 具体的には、①盲ろう障害の概念とその原因について知る、②視覚障害と聴覚障害を同時に有することで生じる盲ろう独自の困難について理解するとともに、それによって生じる発達的な課題を理解する、③盲ろうの基本的な困難であるコミュニケーションおよび周囲の情報摂取に関する実際的な配慮を知る、④盲ろう教育の展開について、国内および国外の動向を踏まえつつ、さまざまな障害のある子どもの教育との共通点を見出す。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
分 野 専 門 科 目	教 育 分 野	現代学校教育論演習	<p>本授業科目は、学校教育の現代的な課題を理解し、教育実践を通して課題を解決する方法を考えることができるようになってもらうことを目的としている。授業の主な教育目標は、1) 学校教育の現代的な課題がわかる、2) 学校教育の現代的な課題を、教育思想の問題、社会的背景、子ども・青年の心身の発達への影響との関係でとらえることができる、3) 学校教育の現代的な課題を、教育実践を通して解決していくための方法を考えることができる、以上の3点である。具体的には、3名の教員（教育思想・哲学、教育課程、社会福祉学）が各々の立場から体罰、いじめ・不登校、児童虐待、等の問題について講じ、講義の内容に関するグループ討議を行わせり内容理解を深めさせる。</p> <p>(オムニバス方式/全15回)</p> <p>(66 上原秀一/5回) 教育目的論、体罰問題などについて講じる。</p> <p>(83 丸山剛史/5回) カリキュラム論、いじめ・不登校問題とそれらへの教育的対応などについて講じる。</p> <p>(16 長谷川万由美/5回) シチズンシップ論、児童虐待問題などについて講じる。</p>	メディア オムニバス方式
		教育哲学	<p>この授業では、今日の教育に関する諸概念を哲学的に吟味するために、過去の教育思想に関する基礎的な知識を修得させる。近代における教育思想の課題の構造を理解することと、今日の教育思想の構造の歴史的な成り立ちを理解することを授業の目標とする。ロック、ルソー、ペスタロッチ、ヘルバルト、デューイといった近代教育思想家たちの教育思想の構造を理解させる。それによって、今日の教育諸概念の成り立ちについて基礎的な事項を教える。</p>	メディア
		比較教育	<p>諸外国の教育や学校の制度・態様を比較教育文化論的視点から学び、各国の特色を明らかにしていくとともに、それらとの比較を通して日本の教育・学校の特質を浮き彫りにしていく。個人またはグループによる発表と全員によるディスカッションを行う。現在日本で問題となっている教育事象について国際的視点、複眼的視点で考察できるようになる。目標としては、以下の項目が挙げられる。(1) 各自(グループ)のテーマに沿って文献資料を元に発表資料を作成し、的確な発表・プレゼンテーションを行うことができる。(2) 発表内容について質問・意見を出すなど、積極的に議論に参加することができるようになる。(3) 政治・経済・文化などと関連づけながら教育問題を考察できる。</p>	メディア
		教育方法学	<p>子どもたちがより深く学ぶことのできる学習環境を実現するために、学習環境デザインの基本的な考え方や改善のサイクルを習得する。授業の教育目標は、(1) 学習環境デザインの主要な概念について説明することができる、(2) 授業の中でどのような学びが生じていたのか、グループで分析することができる、(3) 学習環境デザインの視点からグループで授業を再デザインすることができる、(4) 学習環境デザインの視点を生かしてグループで模擬授業を実施することができる、以上の4点である。具体的には、学習とはなにか、教えることと学ぶこと、思考を外に出す、協調学習、授業ビデオの視聴、ワークシートの作成、等に関して講じる。</p>	メディア
		教育評価論	<p>本授業科目では、教育評価の意義、歴史的背景、現状、論点、課題を講義する。そして受講者が、教育評価とは、教師にとっては自らの教育実践をふり返り、自己反省と自己点検を行う活動であり、児童・生徒にとっては教師の評価活動をとおして教師から与えられる情報を契機に自らの学習活動を点検する活動であることがわかるようにすることを目標とする。具体的には、教育評価の立場、教育評価の機能、教育目標と評価、教育実践の改善、学校経営と評価、教育評価の制度、日本における教育評価の歴史、等に関して講ずる。</p>	メディア

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
分野 専門科目	教育分野	道徳授業論	児童生徒の発達段階に応じて道徳授業づくりについて具体的に学習します。始めは映像視聴による授業観察と研究協議を中心に行います。小学校低学年、小学校中学年、小学校高学年、中学校の各段階の特徴を踏まえながら、道徳科の特質について検討します。そして、学習指導要領に示された道徳科の内容項目から一つを選んで、教材を決めて道徳授業づくりを各自行います。その際、ねらいとする道徳的価値の吟味や児童生徒の実態の把握、教材研究などを通して、学習指導案を作成していきます。模擬授業等を通して全体で検証し、道徳授業における実践的手法について学びます。	
		授業の研究	受講者一人一人が模擬授業を構想、実践し、そして協同で省察し、さらに協同での省察をふまえて最終的に個人としての省察を書く、という形で展開している。教員は、学生が模擬授業を構想する段階において、個別指導を1時間以上行い、多様な視点からまず構想そのものを見直し、さらに具体的な授業の展開の過程についての検討をおこなっている。本授業の目的は、受講者一人一人が、授業において「主体的、対話的で深い学び」を産み出すための教材の作成、発問、授業時の関わり、授業全体の構成を意欲をもって自立的に考えられるようになることである。	
		教育課程論	本授業科目は、教育課程の意義、歴史的背景、現状、論点、課題に関して共通教職科目よりも詳細に講義を行う。そして受講者に教育課程とは、学校による子どもの人格形成設計ないしは子どもの人格と学力の統一的発達のプログラムであることがわかるようにすることを目標とする。具体的には、教育課程とはなにか、教育課程の構造、教科論の意義、教科と子どもの認識発達、教科における知的概括と指導の系統性、教材編成の基本原則、教科における並行的形成、教育内容の大綱的基準と学校の教育計画、教育課程の住民統制等に関して講ずる。	
		教育と情報	小・中・高等学校の中で特に小学校教員に必要な情報教育の基礎について講義・演習します。具体的には情報教育の目標・内容、教育の情報化の状況、情報活用能力の育成、情報モラル等について取りあげます。また、教科の学習指導へICTを活用する基礎的な方法について演習します。 具体的な授業の進め方は、講義と演習を並行して行います。講義では、学校教育における情報化の現状、学習指導におけるICTや教育用ソフトウェアの活用、情報教育の目標・内容、情報活用能力の育成等について講述します。 演習では、教材の作成、コンピュータやネットワーク、電子黒板やデジタル教科書などを活用した授業の計画や実践を行います。	メディア
		シティズンシップ教育論	社会の一員としてどのように社会とかかわっていくかに関わるシティズンシップ(市民性)を身につけるシティズンシップ教育についての基本的な文献を読んでいく。また日本におけるシティズンシップ教育実践事例について検討する。可能であれば実践現場の見学または参画を行う。	
		教育統計学	この授業では、教育統計を活用して我が国や諸外国の教育の特徴を調べるための基礎的な知識を修得させる。具体的には、学校基本調査などの国内の教育統計を活用して我が国の教育の経年変化の状況を調べる方法を修得させる。また、OECDやユネスコなどの国際機関による国際的な教育統計を活用して我が国の教育の国際的な特徴を調べる方法を修得させる。さらに、PISAやTIMSSといった国際学力調査を使った教育現実の解釈方法についても教える。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
分野専門科目	教育分野	視聴覚教育	<p>小・中・高等学校の中で特に小学校教員に必要な視聴覚教育の基礎について講義・演習します。具体的には視聴覚教育の背景、目的、方法に関する内容や情報教育との関連について取りあげます。また、視聴覚教材を活用した授業設計や教材の基礎を演習を通して行います。</p> <p>具体的な授業の進め方は、講義と演習を並行して行います。講義では、学校教育に視聴覚教育が導入された背景や目的を話します。次に、視聴覚教育の実践事例からどのような教育的効果があるのかを議論し、発表を通して意見交換を図ります。さらに、教育の情報化との対応から今後、学校教育の中で視聴覚教育をどのように扱った授業が望まれるのかを議論します。</p> <p>演習では、視聴覚教材の検索や作成などの実践と授業設計や模擬授業を通して適切な活用方法などの実践を行います。</p>	メディア
		幼児教育の方法・技術	<p>「幼稚園教育要領」「幼保連携型認定こども園保育・教育要領」の内容及び平成29年改訂の背景を理解することが幼児教育の方法・技術を考えるためのスタートとなる。とくに新しく示された「幼児期の終わりまでに育って欲しい10の姿」を主体的・対話的で深い学びを通して幼児期に育む教育を行うための方法や技術を身につけることが必要であるとの理解から、具体的な方法や技術、教材の開発、情報機器の活用などについて学ぶ。また小学校とのスムーズな連結が可能となる教育方法やカリキュラムについても学ぶ。</p>	
		教育学研究セミナー I	<p>教育現場などでは、答えの出ない問題に直面することは多々ある。その際に、その問題と格闘し、自ら答えを出す力が欠かせない。そのような力を、卒業論文での研究などを通じて獲得することが求められる。そこで、本授業では、ものの考え方など研究の出発点を確認した後、教育学の代表的な研究方法について学ぶことを目的とする。</p> <p>前半では、教育学諸分野の概要を説明する。後半は、興味・関心に応じ、教育専攻所属の各教員にわかれて、演習形式で行う。</p>	
		教育学研究セミナー II	<p>教育学研究セミナー I の講義を基に、受講生が研究テーマとして選んだ個別課題についての研究方法を修得することを目的とする。第1回に全体でのオリエンテーションを行い、以降は、それぞれの受講生が取り組みたい研究テーマに応じ、特定の担当者のもとに所属する。受講生は、それぞれの研究分野に応じた文献の探し方、調査方法、研究方法等々について学修し、個別課題について毎週進捗状況を報告するという形式で進める。</p>	
	教育心理分野	人格心理学	<p>心理学の中でも人格・性格（パーソナリティ）に関する内容を概説する。本授業は3つの柱より成っている。1) 性格の類型区分についての研究者の考えや性格検査の概要といった教員採用試験にも必須の事項を学ぶ、2) フロイトやエリクソンの精神分析の視点から見た人格発達のあり方を丁寧に読み取り学校現場の子どもへの適用を考える、3) 現代の精神医学で診断基準となっている人格障害（パーソナリティ障害）に触れ、偏りに対する適切な視野と対応とを学ぶ。これらを通して、学校現場での児童生徒の人格上の教育や支援に資するようになることを目的とする。</p>	メディア
		子ども理解の心理学	<p>幼児理解についての心理学的な理論、知識を身につけ、その意義を理解する。また、幼児理解から発達や学びを把握する原理、原則を理解するために、観察、記録の意義を具体的な事例から学ぶ。幼児の発達過程におけるつまずきや保護者対応について、自ら支援、援助できるようアクティブラーニング形式で受講生が自主的に考察する。</p>	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
分野 専門科目	教育 心理 分野	青年期以降の心理学	青年期, 成人期および老年期における心理学的な理論, 知識を身につけ, その意義を理解する。また, 青年, 成人および高齢者についての理解を深めるため, 身体的, 社会的変化に着目しながら事例検討を行い, 受講生同士の討論から, 誰もが経験する青年から高齢者にかけての生き方について考える。	
		認知心理学	人の心の機能、認知について、基礎的な知識や概念について講義を行います。その際、デモンストレーションも交えながら、伝統的な方法論から最新の研究まで紹介します。この授業では、思考・認知についてのこれまでの知見を学び、それらを学校教育に活かすにはどうしたらよいかについて考え、議論することも重視しています。	
		臨床心理学	臨床心理学については主に「症状の理解」「アセスメント」「具体的な療法」といったものから構成されているが、本授業ではその中で症状の理解について講義を行う。症状の基礎知識として、アメリカ精神医学会の診断基準であるDSM-V（一部はDSM-IV-TR）からいくつかを取り上げる。それぞれの症状の実情（診断基準）や形成要因、症状の意味や対応の留意点について学び、学校現場や日常生活に適切に活かせる視点を持てるようにする。専門的診断をするという目的ではなく、人の心の動きの諸様相を理解し、その表現の歪みに対して教育的に丁寧働きかける意識を形成することを目的とする。	
		集団心理学	児童生徒は、本人も意識しないうちに、自身の認識や学級内の教師・他の子ども、さらには学級の置かれた学校・地域や文化の影響を受けながら生活している。教員として学級に携わる上では、児童生徒の心理がどのような仕組みになっているのかを知った上で、児童生徒の行動を予測したり、児童生徒に関与していくことが肝要である。 そこで本講義では、こうした学級に関わる児童生徒の心理について、特に社会心理学の知見を学び、学級に教師として関わる上での基礎的な知識理解ならびに実践上の指針形成を目的とする。	
		メンタルヘルス実習	平成27年12月より施行された「労働安全衛生法に基づくストレスチェック制度」により、職場での精神的健康に関する対応がより重視され、これは教員になる学生自身の精神的健康の問題にも直結するものである。教師を取り巻くストレスの実態を把握し、自己の状態を把握し、自分のあり方を見つめ、その改善策を模索することは、安定した教職生活（のみならず、人としての生活）として不可欠である。本授業では様々な実習体験を通して、スキル習得ならびに自己省察の機会とその改善について見つめる機会を持ち、教職を担う人としての自分自身の精神的健康の課題にアプローチしていくことを目的とする。	
		教育心理学論文作成法	「教育心理学」に関する専門的視点からの研究に必要な態度や手法を修得するため、専門的知見に触れて理解を深めるとともに、問題設定の手順、接近法あるいは思考法など分析手法の基礎を学ぶ。具体的には、APA（アメリカ心理学会）スタイルに準拠した日本心理学会の「執筆・投稿の手引き」に示された論文表記仕方、文献表記の仕方、図表の表記の仕方に関するルールを学習し、また学術論文にふさわしい段落構成、論理構成、文字や文章表記を行えるようになることを目的とする。	
		心理統計学	心理学の実証研究で用いられる統計・測定の基本的な考え方とその手続きについて学ぶ。共通授業での「基礎」編に続き、その復習ならびにより専門的な部分の学習を行う。具体的には、「尺度水準」「信頼性・妥当性」「代表値と基礎統計量」「2変量間の関係」「統計的仮説検定」「平均値の差の検定（t検定と分散分析）」「多変量解析の全体像」「重回帰分析」「判別分析」「因子分析」「主成分分析」「共分散構造分析」等に触れる。学生には、分析の基本的な考え方と分析方法について具体的に理解してもらい、自らの卒業論文作成の際、分析方法について見通せることを目的とする。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
分野専門科目	教育心理学研究法	教育心理学の基本的な研究方法や査定である「面接法」「知能検査・発達検査」「実験法」「観察法」「質問紙法」「性格検査法」について、その基本的手続きを学び、研究スキルを習得していく。各研究方法や査定について一通りの実施や操作ができ、自らの卒業論文作成につなげる。また、特定の方法のもとでのデータ収集の仕方や分析の詳細を学ぶ。	共同
	認知心理学特講	認知心理学についての理論・研究について、学校教育において重要な知見を、伝統的なものから最新のものまで紹介します。授業内では適宜、議論の時間も設けます。授業内の質問・発言を歓迎します。この授業を通して教育心理学についての理解をより深め、さらに「教員として、より適切な指導を行うためどうしたらよいか」「目指す教員像とは？」などを考えることで、今の自分（が持つ知識）と未来の自分像とを繋げます。	
	発達心理学特講	教育現場で求められる発達心理学に関する基礎的知識と研究の方法について、習得する。また、研究論文を自ら選択して講読、発表を行い、国内外の発達心理学に関する研究動向を理解する。発達心理学の基礎的知識とともに、発達心理学に関する調査、研究の方法や、データの解析方法と結果の読み方について理解を深めることを目指す。	
	臨床心理学特講	心理療法の中でも著名な4つの心理療法である「精神分析的療法」「行動療法」「認知・論理療法」「クライエント中心療法」について、その心理療法の基本的捉え方と実際の治療に関する用語等を学び、学校現場や日常生活への適用について考える。実際に専門的に治療するというのではなく、心理療法で考えている人の精神性への働きかけ方や対応の仕方の本質を学び、それを現実生活の場でその人なりに活かした対応になるように考えてもらうことを目的とする。	
	集団心理学特講	社会心理学は、対人関係や集団、社会に関わる心理学の理論や知識を扱う分野であるため、学校に集まる「人」を理解する一助になると考えられる。そこで本授業では、社会心理学で扱われる理論や知識を幅広く習得し、それらの理論や知識を学校に関わる諸現象と如何に結びつけられるかを考えていく。こうすることで、社会心理学に関わる知識を、既存の知識と関連させながら、他の人にわかりやすく説明できる力、社会心理学に関わる知識を適切な文献にあたって調べ知識を深めることができる力、他者の意見と関係づけながら、自分の意見を述べる力、他者の意見に反応したり、質問を行うことで、自他の意見や考えを深めることができる力の涵養を図る。	
	カウンセリング演習	本授業は、3年次までに川原が開講する「臨床心理学」「人格心理学」「メンタルヘルス実習」「臨床心理学特講」等を意欲的に受講した学生に対して、4年次に行うものである。前記受講を通しての様子やそれまでの担当教員との関係を基にして受講生を選抜するものである。本授業では、カウンセリングに象徴されるような対人援助の実践的な練習や体験、社会参加等を行い、自らの関わりを内省し、人の話をよりよく聴き、人のことをよりよく理解し、人に対してよりよく関わる実践的スキルを向上させる。これらの実践的活動を通して、教職に就いたときに児童生徒やその保護者の様々な悩みや困惑に対しても対応する志向や意識を高めることを目的とする。	
	教育心理学研究セミナー I	教育心理分野での4年次の卒業論文作成に向けて基本的・発展的内容について学修する。学生たちは各教員のもとで、専門文献や学術論文等に触れることによって、通して専門的内容についての知識確認、専門性の深化等を図る。これによって卒業論文を作成するために必須の素養と視点とを獲得し、次年度の作成に向けての準備・計画を行う。また、これらの中で教員との指導関係や学生との協力関係を築き、研究上の人的ネットワークを構築できるようにもする。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
分野専門科目	教育心理分野 教育心理学研究セミナーⅡ	教育心理分野での4年次の卒業論文作成に向けて基本的・発展的内容について学修する。学生たちは各教員のもとで、専門文献や学術論文等に触れることによって、通して専門的内容についての知識確認、専門性の深化等を図る。これによって卒業論文を作成するために必須の素養と視点とを獲得し、次年度の作成に向けての準備・計画を行う。また、これらの中で教員との指導関係や学生との協力関係を築き、研究上の人的ネットワークを構築できるようにもする。ⅡはⅠに続いて行うものである。	
	日本語学演習A	日本語の語彙について理解を深め、日本語の仕組みを自分自身で分析できるようになることを目的とする。具体的には、1) 語と語彙、2) 語の基本的な特徴(形式、意味、文法的特徴、文体的特徴)、3) 語種(和語、漢語、外来語)、4) 語構成(単純語、複合語、派生語)、5) 類義語(「たのしい」、「うれしい」)などのトピックを取り上げる。教える側からの一方通行の授業にならないように、学生にも発表(上記のトピックを扱った論文の紹介、上記のトピックについての模擬授業など)を行ってもらおう。	
	日本語学演習B	日本語史上の資料を読み、現代語と比較しながら語彙や語法について調査・発表を通して学習する。資料の性質や背景、当代の言語の概観や、言語の歴史的変化について理解を深め、古典に対する知識を広め、古典指導へ資する知識を体験的に得ることを目的とする。また、調査・発表・討議・まとめという演習の流れを通し、言語研究の基本となる形や、プレゼンテーション能力を高めることを体験的に学習する。	
	国語分野 日本文学演習A	4年次の卒業論文の制作を念頭におきながら、明治・大正・昭和期の文学作品を採りあげ、小説・戯曲・詩歌を解釈・鑑賞・評価するためのアプローチ方法を、作品に即して実践的に指導する。中学・高等学校の文学的教材の教材研究に必要な知識・技能の育成にもなる。開講年度毎に、受講者の興味関心に応じて、テーマと作品を設定する。担当者の発表を聞き台に、全員参加の活発な議論を指導するとともに、①参考文献の検索・入手方法、②作者・作品に関する基礎的情報の整理方法、③文献の整理と論点の見つけ方、④注釈的アプローチの方法、⑤作品分析の方法、⑥試論の立て方、⑦発表レジュメの作り方、⑧質疑の仕方、⑨論述式レポートの書き方などを、個々の作品に即して指導する。	
	日本文学演習B	4年次の卒業論文の制作を念頭におきながら、明治期の文語体で書かれた作品、あるいは明治・大正・昭和期に発表された、上代～近世の古典文学・古典芸能を素材とする作品を採りあげ、小説・詩歌を解釈・鑑賞・評価するためのアプローチ方法を、作品に即して実践的に指導する。中学・高等学校の文学的教材・古典的教材の教材研究に必要な知識・技能の育成にもなる。開講年度毎に、作家と作品を設定する。担当者の発表を聞き台に、全員参加の活発な議論を指導するとともに、①参考文献の検索・入手方法、②素材となった(引用された)古典テキストの入手・読解、③作品と典拠・素材との比較分析、④時代背景を検証する注釈的アプローチの方法、⑤試論の立て方、⑥発表レジュメの作り方、⑦質疑の仕方、⑧論述式レポートの書き方などを、個々の作品に即して指導する。	
	漢文学演習	句読点や返り点がない漢文(白文)を、漢文学概説で習得した漢文法その他の知識を利用して、正確な訓読並びに現代語訳ができる方法を習得することを目標とする。高等学校・中学校で教材として使用されるものを中心として中国古典の散文・韻文を読解する。時には本文だけでなく、注釈を読解することを行う。また、本文校訂の方法をも修得する。演習形式で行い、発表者には、レジュメを作成することを課す。なお、読解する作品としては、『論語』『史記』、唐宋八大家の文章、唐詩、『聊齋志異』、文学理論書等の中から適宜選択する。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
分野 専門科目	国語分 国語教育演習A	国語科における授業実践の目的、内容、方法について理解を深め、学習指導要領を踏まえた授業を構想していく。〔思考力、判断力、表現力等〕のA、B、C各領域における指導事項、及び学習過程を踏まえながら教材を分析・構成し、授業を具体的にデザインする演習を行う。「社会に開かれた教育課程」の視点から国語科の学習指導を捉え直すとともに、初等・中等教育の期間における子どもの発達段階に応じた国語科学習指導のあり方について理解を深め授業研究の能力を培う。	
	国語教育演習B	国語科の教材研究や授業分析、児童の言語発達や言語環境等に関わる先行研究の講読を通して、教材研究の方法、授業の作り方や授業の見方、児童言語の捉え方等の実際を学ぶ。具体的には、これまでの教材研究の歴史や授業実践研究、言語データの分析方法などについて学ぶ。授業場面の視聴や様々な言語データの収集などを行い、国語教育に関わる多面的な観察や分析の方法を学ぶ。研究や分析で得た知見を活かしてさらなる実践力の養成を行うとともに、国語教育領域における諸課題について理解を深め、卒業論文につなげる。	
	日本史特講	日本史の特定の時代やテーマについて学習しながら、歴史学的思考を高める。社会科・地歴教員として必要な日本史に関する知識を習得すると同時に、歴史教育の中で思考を育む方途を探っていく。授業では、(1)史料(典籍・記録・古文書等)の読解を取り入れ、史料から何を読み取り、そこからどのような歴史がわかるのかを考えることで、歴史に対する理解を深める。また、(2)最新の研究成果やさまざまな学説を紹介し、固定された知識の暗記には留まらない論点を強調し、思考を促す。(1)と(2)を通して、歴史研究の現場では何が行われているのかを学び、それを歴史教育にいかにか活かしていくのかを考える。	
社会 分野	外国史特講	「死者の埋葬・祖先崇拝と近代社会」と題して講義する。おおまかにいって、前近代社会においては、死は血縁・地縁共同体に担われていた。死が近づくと親類・近所、在地聖職者が集まって死を看取った。通夜、葬式も血縁・地縁共同体の仕事であった。その後の法要も同じである。死者と生者は1つの共同体をつくっていた。墓地は、教会・寺院による儀式の場であると同時に、世俗の場でもあった。墓地では、手仕事、商売、祭りのダンス、裁判などがおこなわれている。 19世紀以降、死者は地縁共同体から徐々に排除され始める。墓地につくられた遺体安置所が通夜を不要にしていっていった。墓地も、もはや市内ではなく郊外に造られることによって、その管理が、地縁社会から行政の手に移っていくことになる。 しかし、その具体的なあり方は日本と諸外国では異なっている。講義においては日本、ドイツ、華僑社会などの事例をとりあげながら中近世から21世紀までを概観し、人々の死へのかかわり方について考える。	
	日本史調査法	くずし字で書かれた江戸時代の古文書を解読する。歴史は古文書などの史料があつてはじめて明らかになるものであり、史料の調査方法や解読能力を身に付けることは、歴史学に必要な力である。本授業では、古文書の調査方法を学び、古文書に関する基本的な知識とくずし字の読み方を修得する。くずし字で書かれたさまざまな種類の古文書を読み、古文書の読解力を養う。そして、歴史の研究方法を学び、歴史学習における教材研究の力を身に付ける。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
分野 専門科目	社会 分野	人文地理学特講	経済地理学の研究視角を学びながら、農業、製造業、流通・サービス業などの地域的展開を科学的に説明するための立地論や各種モデルについて講義する。次に歴史地理学的観点から、それら経済活動の舞台となった地域について、さまざまな時間と空間における歴史的景観を読み解き、地域の歴史的背景をふまえ、過去から現在に至る地域変容について考察する。中近世の地図、中世の荘園、近世の城下町、近世の農地開発などの具体的な事例の検討を通じて、景観の特色を理解し、産業地域に関する地理的認識を深めるとともに、社会科の地理的分野と歴史的分野をつなぐ視点を修得する。	
		地域調査法	人文地理学における地域調査の手法、調査計画の立て方、調査結果の考察、データの加工、主題図作成の基礎を学ぶ。授業は、地理学の論文作成に用いる地図や統計類についての講義と、野外での土地利用観察、調査票の作成、データの加工・分析、主題図作成という実験からなる。実験では、土地利用観察で関心を持った事象について市町村規模の調査の計画を立て、調査票の相互検討を行う。続いて政府統計を利用して出身都道府県・市町村の年齢別・産業別の人口構成、事象間の相関関係を把握するための各種指標の算出を行うとともに、簡易GISを用いてそれらを地図化する。最後に、人口動態と産業特性からみた地域の特色と振興策についてのプレゼンテーションを行う。	
		地理学実地調査	身近な地域または栃木県内外の市町村を対象とする野外調査を実施し、小学校・中学校・高等学校における学校区または市町村規模の地域の野外調査にあたり、指導計画を立案する力を育成する。授業は、室内実験、巡検、第一次調査、第二次調査、調査報告会での発表からなる。まず巡検の事前・事後学習や室内実験では、野外調査のテーマ設定と調査計画の立案、ヒアリング項目・調査票の検討、調査先へのアポイントメント等、具体的な調査の準備を実践的に学ぶ。最後に、入手したデータの整理・分析・考察を行い、実地調査報告会に向けた資料を準備する。	
		法学特講A	日本国憲法第3章の基本的な人権について、自由権、社会権、参政権、平等原則のそれぞれにかかわって、どのような法制度があるのか、またどのような課題があるのか、どのような紛争が生じていて裁判所はどのように判断しているのか、といったことを検討する。また、人権保障の意義と司法の役割について、具体的な裁判例を取り上げながら検討を加える。さらに、現代日本法制の立法論上または解釈論上の課題を、国際比較の視点を取り入れながら検討する。このような過程を通して、受講生が法的思考法を身につけることを目的とする。	
		法学特講B	国家の権力作用の中でも立法・行政に比べて情報に接することの少ない司法について、その果たしている役割を、憲法の諸規定を踏まえながら手続き法に即して検討する。また、現代日本法制の諸課題を、それら貫く法政策の視点から、最近の立法動向を視野に入れながら分析する。さらに、法教育、主権者教育、人権教育、消費者教育といった法と教育にかかわる諸課題について、中学校社会科ないしは高等学校公民科における授業実践を念頭において検討する。	
		政治学概論	日本を含め先進国では高齢化が進み、政府の財政赤字は、年々増加し、国民への負担増が避けられない状況になってきている。多くの国では、民主主義に基づいて政治、経済などに関わる決定がなされている。民主主義の理念はどのようなものであり、民主主義を支える制度はどのようなものだろうか。国民の代表を選出する制度はどのようなものになっているのだろうか。誰が、どこで、どのような過程で予算や法律を決定しているのだろうか。講義では、選挙制度、政党、大統領制・議院内閣制、議会制度等の制度について日本を中心とした事例を取り上げながら説明する。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
分野専門科目	社会学特講	社会学の方法論を用いて、現代日本社会が抱える様々な問題を分析し、解決するための方法を考察する。 宇都宮大学では学歴社会という問題を中心に考察し、群馬大学ではジェンダー、若者のアイデンティティ、格差社会についてとりあげるが、ともに現代社会の特質や他社会との比較を重視し、客観的なデータに基づいて社会的に捉える仕方を身につけることを目的とする。	
	経済学概論	まず、家計の選好、効用最大化、需要、供給、などのマイクロ経済学の議論、及びGDP等の経済統計や景気変動の理論などのマクロ経済学の議論を基礎的に学習する。そのあと、具体的な経済のあり方、現代社会の経済をめぐる諸問題（国家の役割、他国との経済関係の変遷、代表的な産業の動向、格差の拡大、環境問題など）を日本社会の変遷に注目しつつ学習していく。その際、日本と諸外国との間の経済的なつながりやアメリカ、中国など代表的な国との経済のあり方に関する比較の視点を織り交ぜながら授業を進める。経済学の基本的な方法論の応用を学び、経済学的な思考のセンスを養うことを最終的な目標とする。	
	社会調査法	この授業では、社会調査結果を利用するとき間違いやすいポイントを学ぶところからはじめ、実際に自分たちでアンケートを作成し、調査を実施することで、量的な方法に基づく社会調査をどのように行っていくらよいか、学んでいく。調査を実施する具体的な過程としては、まず社会調査によって答えることのできる調査テーマの設定からはじめ、先行研究の確認、調査対象の選定とサンプリング、質問文の作り方・選択肢の作り方、質問紙全体の構成というように進めていく。統計学に基づくデータの分析方法については、社会調査実習で扱うが、この授業でも簡単なクロス表の分析方法だけは学ぶ。	
	社会調査実習	この授業では、社会調査法で行ったアンケートの調査結果をどのように分析していくらよいか、統計学の基礎と同時に学んでいく。統計学の基礎については、e-learningの教材を用いて予習してもらい、授業ではわかりづらい点の解説を行う。統計学としては、クロス表のカイ二乗分析、平均のt検定、相関係数と順位相関、散布図の作成と回帰直線、偏相関、重回帰分析、因子分析までを扱う。これらの統計手法をExcelおよびSPSSにおいて用いる方法を学び、調査の報告書を完成させる。この授業を通じて、社会学や関連分野の卒業研究で行うような調査の過程を一通りすべて学ぶ。	
	哲学特講	西洋近代哲学史を概観し、その概念・論理・主張と歴史的意義について理解する。原則として一回の講義で一人の思想家を取り上げ、主要な哲学的議論を解説していく。カントとヘーゲルについてはとくに重要かつ難解なため、複数回に分けて解説していく。哲学および哲学史に学びながら、同時に、哲学の一分野である「論理学」を基礎に、①他者の論証を正確に理解する力、②自らの主張を他者に向けて論証する力、③他者との対話を構築する力を身につける。以上を通じて、現実社会における諸問題の認識能力が高まることが期待される。	
	倫理学特講	「論理的に考える力」を基礎に、社会科教育、公民分野に関わる、自由、人権、民主主義といった基本的価値について、その発想の根幹と論理を含めて理解する。そのために、哲学者・倫理学者の議論を紹介し、彼らのテキストを読み、哲学的論証を再構成し吟味することを通じて現代的諸価値の意味を理解する。また、グループ活動など、アクティブ・ラーニングをとりいれて、学生相互の「対話」を通じて自身の考えを整理、深めることを目指す。適宜、関連論文やニュース記事、独自の解説文章などをその都度配布し、参考資料として用いる。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
分野専門科目	社会分野	社会科学教育特講A	本授業では、具体的な社会科学授業について、授業記録等をもとにして議論し、「社会科学の授業とは何か」について考究する。具体的な授業記録や動画等をもとに、授業研究、授業分析、発話記録、分節、集団的思考、個性的思考、一人学習、相互学習等のテーマを即して議論を中心にして授業を進める。以上のような内容・方法を通して、社会科学授業における子どもの事実をとらえつつ、それを学習指導に位置づける具体的な方法等について理解することを目的とする。	
		社会科学教育特講B	社会科学における歴史教育の理論・実践に関する論文・記録を読むことを通して、社会科学教育における研究方法について学ぶ。具体的には、これまでの社会科学教育・歴史教育史研究に学びながら、①戦後初期における地域教育計画・コアカリキュラムの理論・実践、②1950年代以降における歴史意識の発達論的研究、③1970年代後半以降における「子どもが動く社会科学」の実践、④1990年代以降における「考える日本史授業」の実践等、代表的な実践を取り上げ、実践の分析と検討を行う。以上のような内容・方法を通して、社会科学における歴史教育の理論・実践に関する知識・理解を深めるとともに、社会科学教育研究における研究方法の基礎を身につけることを目的とする。	
		社会科学研究セミナー I	哲学・倫理学、歴史学、地理学、法学、社会学、社会科学教育学の学問分野ごとにセミナーを実施する。まず研究資料としての文献、史料の適切な収集法、授業記録の取り方について学ぶ。次に、これらを輪読・精読し、内容について受講者相互のディスカッションをおこなう。社会科学の各専門分野における研究を遂行するための、読解力、論理的な思考力、対話力、課題解決力などを身につけることを目指す。	
		社会科学研究セミナー II	社会科学教育セミナー I につづき、哲学・倫理学、歴史学、地理学、法学、社会学、社会科学教育学の学問分野ごとにセミナーを実施する。社会科学教育セミナー I での学習を踏まえ、文献、史料、授業記録などをより多く渉猟し、精読にもとづく質の高い発表と、受講者全員が積極的に議論に参加することを促す。卒業研究に向けて読解力、論理的な思考力、対話力、課題解決力などのさらなるレベルアップを目指す。	
数学分野	代数学 I	代数学における群論の初歩について、演習を交えながら講義する。群の定義やその様々な具体例について理解すること、また、非常に基本的に思える群の定義から多くの性質が導かれることを理解することが目標である。学校教育における算数・数学科の内容の背景にある数学の理論について学習する。全15回の講義を通して、「群の定義と具体例」、「部分群の定義とその判定法」、「剰余類とラグランジュの定理」、「準同型写像」等について学ぶ。		
		幾何学 I	平面内または空間内にある曲線、および空間内の曲面について、その幾何的性質を調べる方法を解説する。曲線については微分幾何学的アプローチをとる。すなわち、微分可能なパラメータ表示が与えられた曲線に対し、長さ・曲率・回転数といった量の定まることを示し、それらによって曲線の（パラメータ表示に仕方に依らない）性質が明らかにされることを見る。空間内の曲面については位相幾何学的アプローチにより論ずる。すなわち、曲面上の閉曲線全体の集合を考え、その上に曲線の連続変形に関する同値関係を与え、その同値類が群構造を持つことを解説する。さらに、この群が有向閉曲面の位相型を決定することを示す。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
分野 専門科目	数学 分野	解析学Ⅰ	この授業では、複素数や複素関数の性質、複素関数の微分積分法についての講義と演習を通し、計算力を養い、複素数の世界における解析学の基礎を身につける。具体的には、全15回の授業を通して、複素数を平面幾何へ応用できること、複素関数の極限值や微分を計算できること、そしてコーシーの積分定理や積分表示の意味がわかり、正則関数の級数展開を複素関数の解析に応用できることを到達目標とする。	
		代数学Ⅱ	代数学における環および体の理論の初歩について、演習を交えながら講義する。環および体の定義やその様々な具体例について理解すること、多項式と整数のアナロジーを理解すること、そして、剰余の概念を理解することが目標である。学校教育における算数・数学科の内容の背景にある数学の理論について学習する。全15回の講義を通して、「環および体の定義と具体例」、「整数環の性質」、「多項式環と性質」、「剰余環および剰余体」等について学ぶ。	
		幾何学Ⅱ	3次元空間内の曲面を微分幾何学を用いて調べる方法を学習することにより、中学校・高等学校における数学の内容の背景にある現代幾何学の考え方を理解することを授業のテーマおよび到達目標とする。講義と演習を中心に授業を進める。授業概要は以下の通りである。 ・まず、曲面のパラメータ表示について説明し、曲面を調べるための基本概念である第1基本量と第2基本量を導入する。さらに、それらの幾何学的意味を説明し、曲面の形が二つの基本量によって決定されるという「曲面論の基本定理」を証明する。 ・次に、曲面の重要な不変量であるガウス曲率の定義を述べ、第1基本量と第2基本量を用いてガウス曲率を計算する公式を導く。さらに、ガウス曲率は第1基本量だけから決まるという「ガウス驚異の定理」を証明する。 ・最後に、変分法について説明し、測地線および極小曲面の方程式を導く。	
		解析学Ⅱ	この授業では、1次元・2次元力学系やフラクタル理論の基礎を学修するとともに、コンピュータ支援により具体例を考察する。また、力学系の軌道構造や力学系がもつフラクタル図形の具体例を、コンピュータ支援により可視化することにより、力学系がもつ数学的な性質を視覚的に理解・表現する。具体的には、1次元・2次元力学系の具体例を基にフラクタル理論の基礎について理解を深めるとともに、コンピュータ支援により具体的にフラクタル図形が作成できること到達目標とする。	
		数学研究セミナーⅠ	本授業は、卒業研究を視野に入れて、その基盤を形成することが目標である。代数学、幾何学、解析学、数学教育学の各分野の中で、興味・関心のある分野について学ぶ。授業はゼミ形式で行われる。授業で、学生は調べて考えてきた内容について発表し、教員や他学生とのディスカッションを通して、その内容についての理解を深める。講義を通して、卒業研究に向けて、数学的な視野を広げていく一方で、当該学問分野のテキスト、研究論文及び書籍、国内外の報告書等の調査資料を読解する力をはじめ、批判的に考察する力、対話力、課題を発見し解決する力を身につけていく。	
		数学研究セミナーⅡ	数学研究セミナーⅠにつづき、本授業は、卒業研究を視野に入れて、その基盤を形成するために、代数学、幾何学、解析学、数学教育学の各分野について、ゼミ形式で行われる。授業で、学生は調べて考えてきた内容について発表し、教員や他学生とのディスカッションを通して、その内容についての理解を深める。講義を通して、卒業研究に向けて、数学的な視野を広げていく一方で、当該学問分野のテキスト、研究論文及び書籍、国内外の報告書等の調査資料を読解する力をはじめ、批判的に考察する力、対話力、課題を発見し解決する力を身につけていく。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
分野専門科目	理科分野	物理学特論A	力学、電磁気学と同様に物理学の基本的な分野である、熱力学、波動（光を含む）に加え、量子力学の導入部分について講義・演習を行い、数式を用いて自然現象を扱うことに慣れる。力学の復習を行った後、気体分子運動論から熱力学へと展開する。次に、三角関数や指数関数の復習をしながら、波動方程式の扱い方を学び、振り子や回転運動を記述し、光の回折・干渉へ繋いでいく。そして、前期量子論からシュレディンガーの波動方程式に進み、井戸型ポテンシャルの扱いを理解できるようにする。	
		化学特論A	平衡論において、圧力、温度、体積といった状態量が、原子・分子の運動で記述できることを学ぶ。そして、内部エネルギー、エンタルピー、エントロピー、自由エネルギーを状態量の関数として表現し、実際の系において、相変化や化学変化の方向を決定できるようにする。また、平衡定数、標準電極電位といったデータから、化学変化の方向を知る方法を学ぶ。以上をエクセルによるシミュレーションを交えながら行い、身近な現象を再現することにより、理解を深めていく。	
		生命科学特論A	高校生物で扱う遺伝学領域の内容と分子生物学の基礎的内容を正しく理解し、正確に説明できるようになることを目標とする。生物分野の遺伝学や分子生物学の内容を解説する講義形式の授業である。特に生命の根幹に関わると考えられている「遺伝子」について遺伝現象との関係を含め説明し、最新の遺伝子研究とその応用についても解説する。これらの内容を理解した後に、受講者とともに中・高等学校の生物分野の教科書の内容を確認し、学習内容の単元間の関係性と階層性について「遺伝子」をキーワードに考察する。	
		地学特論A	気候学・気象学、地学教育、(物理教育)等それぞれの研究分野に関する基礎的内容の講義、書籍・研究論文の輪読、発表を行う。気候学については、気候学全般に加え、特に局地的なスケールの気候について、理論と観測の両面について理解する。地学(・物理)教育においては、ICTを活用した新しい教材や授業の開発等を先行研究の知見を踏まえて行えるようにする。また、当該分野の実験も実際に行いながら、内容の理解を深める。いずれの分野も専門的な学術論文の購読を基礎とし、週ごとに発表・演習形式で実施する。	
		理科教育実験A	小・中・高等学校理科における観察・実験を実際に行い、観察・実験についての基礎的な理解を深め、観察・実験に必要な技能・操作を習得することを目標とする。小・中・高等学校理科における様々な観察・実験の中から精選した題目について、受講生自身が個人あるいはグループで器具・材料・試薬等の準備を行い観察・実験を行う。また、各自がレポートを作成することによりそれぞれの実験内容の理解を深め、実験・観察指導における方法を検討する。さらにそれらを踏まえて、学校現場での実験・観察指導を想定し、他の受講生を対象に模擬授業を行う。	
		理科教育実験B	小・中・高等学校理科における観察・実験を実際に行い、観察・実験に必要な高度な技能・操作を習得し、観察・実験を取り入れた授業の立案、実践ができる能力を育成することを目標とする。小・中・高等学校理科における様々な観察・実験の中から精選した題目について、受講生自身が個人あるいはグループで器具・材料・試薬等の準備を行い観察・実験を行う。また、各自がレポートを作成することによりそれぞれの実験内容の理解を深め、実験・観察方法の開発と指導法の改善を検討する。さらにそれらを踏まえて、学校現場での実験・観察指導を想定し、他の受講生を対象に模擬授業を行う。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
分野 専門科目	理科分野	理科教材実験法A	理科授業における教材の意義や位置づけ、教材の特質や指導のポイントなどを解説し、受講生が理科授業づくりにおいて教材研究を自立的に進めるスキルの修得をめざす。理科授業における教材は学習内容（領域）との関係から多種多様である。教材の意義や授業内での位置づけを解説し、科学の方法との関係について検討する。授業における教材提示の場面は、問題解決の過程と密接に関連している。導入、探究、自由観察・自由試行など、授業の各場面を想定した教材の特質は、模擬授業を通して実践的に学習できるように配慮する。エネルギー（物理）、粒子（化学）、生命（生物）、地球（地学）の各領域から教材例を取り上げるとともに、理科におけるものづくり活動の特質も取り上げる。	
		理科教材実験法B	小学校・中学校の理科におけるエネルギー（物理）、粒子（化学）、生命（生物）、地球（地学）の各領域からいくつかの単元を取り上げ、そこで児童・生徒に理解させるべき内容、及び教科書等で扱われている実験について、具体的な実験教材及び実験ワークシートを体験・検討・開発しながら理解を深める。具体的には、学習指導要領、教科書、授業書等の吟味を通して、小学校・中学校理科で児童・生徒に理解させるべき内容や、そこで取り扱われている実験について検討する。それをもとに、受講生自らが実際の理科授業で活用されることを想定した実験教材及び実験ワークシートを作成し、模擬授業等を通して、実践的な教材研究の基礎を習得できるようにする。	
		理科研究セミナーI	図書文献や論文の講読を通して、最新の理科教育の研究動向を知るとともに、研究テーマの選び方、研究の進め方についての理解を深めることを目標とする。受講生が各自で図書文献や論文の講読を行い、内容を報告し、それに関する議論を進める演習形式の授業である。それぞれの発表では、発表レジュメ（要旨）を用意して、議論の手掛かりとなる情報を提供する。これらの活動により理科教育における研究方法を理解するとともに、現在の理科教育における主要なトピックスについて知識・見識を深める。また、学習指導要領と教科書の関係性を学習し、小・中・高等学校で学ぶ理科の各分野の内容の階層性と関連性を理解する活動も行う。	共同
	理科研究セミナーII	図書文献や論文の講読を通して、最新の理科教育の研究動向を知るとともに、研究の進め方についての理解を深め、論文内容についての発表を行い、基礎的な説明能力を身につけることを目標とする。受講生が各自で図書文献や論文の講読を行い、内容を報告し、それに関する議論を進める演習形式の授業である。それぞれの発表では、発表レジュメ（要旨）を用意して、議論の手掛かりとなる情報を提供する。これらの活動により理科教育における研究方法を理解するとともに、現在の理科教育における主要なトピックスについて知識・見識を深める。卒業論文執筆に向けて、各自の研究分野に関する基礎的知識を習得し、自身の研究テーマに関する土台を築く。	共同	
音楽分野	和声III	中学校・高等学校音楽教員たるために有用な、より高度な音楽理論（エクリチュール）の修得を到達目標とする。学生は、前記到達目標に達するために、和声の修練を行う。課題実施の個別指導を行うとともに、学生どうしの相互批判の場を設ける。必要に応じて理論的事項を概説する。種々のバス課題・ソプラノ課題の実施を通して、IV度の七の和音、ドリアの七の和音、ナボリの七の和音、副V度の諸和音、借用和音の総括、転調の技法等を修得し、音楽表現の語法を理解する。	隔年	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
分野 専門科目	音楽分野	音楽分析	音楽分析の理解と実習。中学校・高等学校音楽教員たるために有用な音楽分析能力の修得を到達目標とする。上記到達目標に達するための音楽分析演習を行う。学生は、輪番による研究発表を行い、受講者全員による討論・相互批判を行う。ベートーヴェンの32のピアノ・ソナタを教材としてソナタ形式に即した楽曲分析を、また、J.S. バッハの平均律クラヴィーア曲集（第1巻および第2巻を教材としてフーガの楽曲分析を実践する。音楽作品の持つ構造性とその特徴について、形式と内容の両面から理解を深める。	隔年
		音楽アウトリーチ研究A	社会への音楽普及プロジェクト（音楽によるアウトリーチ）の企画と実施を行うことにより、音楽と教育による地域貢献を図ることを目標とする（第1年度）。社会への音楽普及プロジェクト（音楽によるアウトリーチ）の企画と実施を行う。具体的には、計画及び企画書の作成、先方との打ち合わせ、使用物品の準備、当日の進行表作成、当日の流れ確認、反省会、報告書作成を学生主体で進めていく。	共同 隔年
		音楽アウトリーチ研究B	社会への音楽普及プロジェクト（音楽によるアウトリーチ）の企画と実施を行うことにより、音楽と教育による地域貢献を図ることを目標とする（第2年度）。社会への音楽普及プロジェクト（音楽によるアウトリーチ）の企画と実施を行う。具体的には、計画及び企画書の作成、先方との打ち合わせ、使用物品の準備、当日の進行表作成、当日の流れ確認、反省会、報告書作成を学生主体で進めていく。	共同 隔年
		作曲応用演習	作曲をめぐる実技と理論の諸局面（音楽構造理論、和声法、対位法、楽器法、形式理論、音楽分析法、編曲法など）を、教育、演奏実践、地域・社会貢献などさまざまな場面で有意義な形で援用する可能性について論考し、実践に結びつける。作曲行為およびそれをめぐる文化の持つ社会的意義について探求する。授業は、学生一人ひとりが設定した主体的課題への個別指導、およびグループ活動への支援を中心とし、学生どうしの相互批判的なゼミナールの場を設ける。	隔年
		音楽科教育演習	音楽科教育に関する諸問題を知り、それらについて主体的に考えることを目標とする。内容としては、音楽科教育に関する諸問題について、先行研究について検討した後、各自がテーマをもちより、検討していくことで、音楽科教育についてより深く理解し、問題解決能力を高めていく。具体的には、総論、歌唱、器楽、音楽づくり及び創作、鑑賞、共通事項、他教科との関連、授業研究、評価などのトピックを取り扱う。	
		鍵盤アンサンブル演習	ピアノを用いたアンサンブルとして連弾、2台ピアノの実技演習を行う。さまざまな作曲家のピアノアンサンブル作品を取り上げ、レパートリーを増やすとともに、ピアノ演奏を通して楽曲を比較考察すること。また協調性を養いながら、演奏表現を高める。連弾や2台ピアノの演奏をとおして、音楽への理解を深め、他者との協同や協調する演奏技術を養いながら、表現力を育成することを目標とする。	隔年
		声楽アンサンブル演習	声楽アンサンブルを実践するために必要な総合的な能力を習得するため、演奏を主体とするグループレッスンを中心に実技指導を行う。レッスンでは、各自の声楽発声の基礎能力を伸ばしながら、アンサンブルの基礎練習を行う。他の声楽パートおよび器楽パートも含め、アンサンブルに必要な「声を使い他者と共演する能力」を楽曲の具体的な実践から導き出すとともに高い水準で音楽演奏を満たすための方法を楽曲の演習を通して習得する。声楽演奏者としてアンサンブルパートを担う演奏技能を身につけると同時に、指導者としてアンサンブル演奏を完成させるために必要な能力も考慮し、アンサンブルによる音楽表現の特徴や良さを具体的な楽曲演奏の体験を通して多面的に学ぶ。	隔年

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
分野専門科目	音楽分野	合奏Ⅲ	吹奏楽器（管楽器・打楽器群）構造とその奏法を理解し、管打合奏の基本を習得する。また、演奏を通じて社会に対してどのように貢献していくか探求する。吹奏楽オリジナル作品を中心に、オーケストラアレンジ作品、ポップス、ジャズ等のパリエーションを広げ、研究発表を行う。また、多方面との連携し、より幅広いコミュニケーション能力を身につけていく。演奏のみならず、演奏するために必要な環境整備の重要性を理解する。合奏体の中で、楽器同士が演奏上で共有し合っていることも考慮する。	
		室内楽（一）	器楽（ピアノを除く）のアンサンブルに関する技能を身につけ、音楽に関する様々な要素を理解することを目標とする。室内楽の編成とその楽器の役割について説明し、演奏を通じて楽曲に関する分析力を養う。また少人数での合奏と位置づけ、呼吸を基盤にした合図の仕方、フレージングから、音色の調和、和音構造の理解、伴奏楽器から楽曲を構築する重要性を理解する。オーケストラの作品から抜粋し、オーケストラ全体の中での楽器の用法も研究する。共同作業を行うことにより組織の中でどのように貢献するかについて考え、理解を深めていく。	
		音楽研究セミナーⅠ	音楽教育、作曲、音楽学、声楽、器楽など、音楽に関する諸領域について、自発的に問題意識を持ち、調査研究し、批判的に考察・論考し、論理的に説を構築し、それを主体的に表現する能力、集団において議論する能力を養うことを目標とした、3年次前期段階の学修を成すための授業。与えられたテーマの研究遂行および学生一人ひとりの個別テーマ設定のための予備的研究に対する個人指導（座学・実技の両方を含む）を中心とし、相互批判的なゼミナールの場を設ける。	
	音楽研究セミナーⅡ	音楽教育、作曲、音楽学、声楽、器楽など、音楽に関する諸領域について、自発的に問題意識を持ち、調査研究し、批判的に考察・論考し、論理的に説を構築し、それを主体的に表現する能力、集団において議論する能力を養うことを目標とした、3年次後期段階の学修を成すための授業。学生一人ひとりの個別テーマによる研究遂行に対する個人指導（座学・実技の両方を含む）を中心とし、相互批判的なゼミナールの場を設ける。学期末に成果発表会を実施する。		
	美術分野	絵画C	学習者自らが主題を生み出し、主題を表現するのに適切な媒体や技法を模索・創出することを通して、絵画における色・形・イメージに対する理解を深め、表現に必要な思考方法や態度を養う。学習者が個々に生み出した主題に基づき、『表現基礎〔絵画〕』による既習事項を応用・発展させながら、主題に適した表現媒体や技法を創出して作品を制作し、合わせて作品の展示方法についても考察する。また、受講生には自分の制作した作品について解説を課し、絵画に関係するリテラシーの強化も図る。	
		絵画D	油絵具の素材特性を理解し、『表現基礎〔絵画〕』、『絵画A』、『絵画B』の内容を踏まえ、表現法を体験的に学修する。作品制作を通して画家の油彩作品の技法的特徴を理解し、表現内容との関連について考察する。油彩画制作を通し、基礎的な実技指導を行う。インパスト、グレース、スフマート等の表現的特徴の理解のため、歴史上の作品や現代作家の作品を取り上げ、絵画様式や技法の解説を合わせて行う。また、受講生には自分の制作した作品について解説を課し、絵画に関係するリテラシーの強化も図る。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
分野 専門科目	美術 分野	版画	<p>版種による版画の大きな分類（凸版、凹版、平版、孔版）を教授し、表現の違いを作例を通して確認する。それを踏まえ本授業では、腐食銅板および多版多色木版の制作指導を行う。授業の前半ではエッチング、ソフトグランドエッチング、アクアチントの課題制作を通して、凹版の表現的特徴を認識させる。</p> <p>授業の後半は多版多色木版の課題制作を踏まえ、錦絵の制作工程も併せて教授する。それにより、図工・美術の教科書に登場する作品の技法面での見方を深め、日本の伝統文化についての関心を高める。</p>	
		野外絵画表現	<p>屋外にて三日間にわたり、水彩画もしくは油彩画を制作する。風景の中にある美しさや良さを実感し、それを絵画で表現する場合の手法を学ぶ。自然観察や鑑賞を通して、風景画における造形要素（形態、色彩、明暗、空間感）を意識した制作が出来ることを目標とする。美術や図画工作において、風景画はオーソドックスな題材の一つである。その目的として普段見慣れている場所であっても、絵を描くという視点で見た時に様々な発見がある事に気付く。風景を絵画で表現するための方法や視点を養うことで、指導力を身に付ける。</p>	
		デザインC	<p>本授業ではグラフィック・デザイン及び、主に地域等を主題としたデザイン・プロジェクトの実習課題を行い、デザイン分野の教科内容における題材開発や指導力のより一層の向上をテーマとする。そして、様々な対象に応じるプロセスの計画力、課題を社会とのつながりの中で捉え発想や構想していく能力、デザインの意図を適切かつ効果的に伝えるためのプレゼンテーション力など、デザイン分野での発展的な能力の獲得を目標とする。</p> <p>教員が設定するグラフィック・デザイン及び、地域等のデザイン・プロジェクトの課題を授業回ごとに段階を追って行う。課題制作においては、各段階でポートフォリオにまとめてもらい、それらをもとにした全体や個人指導によって展開する。</p>	
		デザインD	<p>プロダクトデザイン及び、建築・環境デザインの実技課題を行うことで、工芸分野の教科内容における題材開発や指導力向上をテーマとする。課題に対して、段階的なデザインプロセスを踏みながら、社会的な関係性の中でとらえる発想力や構想力、デザインの意図を適切かつ効果的に伝えるためのプレゼンテーション力などの能力育成を目標とする。</p> <p>教員が設定するプロダクトデザインの課題及び、建築・環境デザインの課題の制作を授業回ごとに段階を追って行う。課題制作においては、各段階でポートフォリオにまとめてもらい、それらをもとにした全体や個人指導によって展開する。</p>	
		工芸C	<p>工芸作品に用いられる素材は多様で、いずれも様々な技法により成り立ち、様々な表現が可能である。特に漆芸作品における素材は、木・布・土・皮・紙、貝、金属、ガラス、顔料等の素材を用いた多彩な加飾が可能である。工芸Cでは、基礎的な漆芸の加飾技法を体験し、漆芸素材を通しどのようにイメージ展開できるのか学んでいく。</p>	
		工芸D	<p>工芸作品に用いられる素材は多様で、いずれも様々な技法により成り立ち、様々な表現が可能である。課題2では、漆芸に限らず、各自設定したテーマに沿って、各種工芸素材・技法を用い、発展的な表現・工芸作品に取り組む。課題1では、工芸Cで習得した漆の加飾表現をもとに、制作した漆造形作品に多彩な加飾を施し、漆芸素材を通しどのようにイメージ展開できるのか学んでいく。</p>	
		図法I	<p>図とは、造形において、形態を表示するための美術の基礎となる表現手段であり、図法には図形一般を科学する図学と器具を用いて正しく描くための製図法が含まれる。本授業は、デザイン・工芸・絵画における図像・文様や平面計画の基礎となる平面図形の実践的な作図能力を修得することを目的とする。製図用具を正しく用いて、正確で美しい図を描けるようにする。この授業では、この授業では平面図学の基礎を主として扱う。実演を基に作図法を解説し、受講生にも同様の作図の課題を課す。</p>	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
分野 専門科目	美術分野	図法Ⅱ	
	美術分野	美術学概論	
	美術分野	美術研究セミナーⅠ	
	美術分野	美術研究セミナーⅡ	
	保健体育分野	運動発達論	
	保健体育分野	武道B	隔年
	解剖学		

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
分野専門科目	保健体育分野	体育・スポーツ経営管理學	体育・スポーツ経営學は、スポーツ科学の中でも特に「人とスポーツとの関わり」を問題にする点に特徴のある学問である。今日の多様な体育・スポーツ現象を視野に入れながら、体育・スポーツ経営學の基礎的な理論を解説する。この学問はこれまで、その時々々の体育やスポーツの実践現場における「管理」や「経営」といった営みの必要性に応える形で発展してきた。「体育管理學」から「スポーツ経営學」への流れを理解し、「体育・スポーツ経営」とはどのような活動かを理解することを目的とする。	隔年
		体育・スポーツ社会学	現代社会においてスポーツは、政治・経済・教育などさまざまな分野で大きな影響力をもって展開されている。本授業では、スポーツとその他の文化との関わりについて具体的な事例を挙げながら学ぶ。その際、スポーツの高度化と大衆化という社会現象を踏まえ、スポーツと社会・文化との関わりに焦点をあて、その背景にある社会性と内在する問題の存在について理解し、検討することを目標とする。	隔年
		保健体育研究セミナーⅠ	本演習は、卒業論文を作成するために必要な保健体育、スポーツおよび健康科学に関する分野の動向や課題について自ら問題意識を持ち、これらの課題を解決していくために必要となる調査方法、方法論、それに関連する文献検索法や統計学的手法を学習する。最初の2時間程度は各教員が現在行っている研究やその専門領域についての紹介を行う。各自の課題に応じて、予習・復習を行い、発表の場を設け、そのことについて学生、教師間で意見の交換を行う。	
		保健体育研究セミナーⅡ	「保健体育研究セミナーⅠ」の内容を継続しつつ、卒業研究の課題設定に向けて、各教員から指導・助言を受ける。指導教員によって異なるが、論文購読、実習、実験などを行う。各自の課題に応じて、予習・復習を行い、発表の場を設け、そのことについて学生、教師間で意見の交換を行う。これまでに学習した保健体育やスポーツ・健康に関する講義・実技・演習及び自分の専門種目などの経験を基本としながら、それらを「研究」という視点で捉え、課題解決に向けての方法等を議論する。	
		野外実習A	野外活動の一つであるスキーを取り上げ、自らの技能を高めるとともに、指導の際のポイントを身につける。また、用具を使うスポーツであることから、用具の管理方法や場所や指導の際の安全管理についての基礎的知識を身につける。さらに、スキーが生涯スポーツへの位置づけとなるよう、その特性や基礎的スキル、楽しみ方について理解する。授業においては、実際のスキー場での集中講義を通して、スキーの技能を習得し、その指導法について学ぶ。	共同／集中
	家政分野	家族関係論	私たち人間は、特殊な場合を除いて、家族の中で生まれ育てられる。家族はあまりにも身近な存在であるために、家族について自分なりの見解をもち確信をもって語る者も少なくない。しかしそれは、個人の私的体験の範囲内で得た情報をベースにしている場合が多い。家族に関する概念や客観的データに基づいて、また現代社会の動きも視野に入れながら、現代日本の家族関係について科学的・体系的に説明する。	
生活福祉論		生活福祉の概念、社会福祉の歴史の概観、生活福祉に関する制度、法律の調査と報告、生活福祉の課題について講義し、生活者の視点から福祉をとらえ、生活の福祉とは何か、生活福祉のあり方とはどうあるべきかについて考察する。また、高齢者疑似体験ツールを活用して生活者視点を実感しながら、著しく変化する社会から発生する生活問題の原因を検討し、その解決の方策を考えられるようにする。		

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
分野専門科目	家政分野	消費者教育	2012年に「消費者教育推進法」が成立し、消費者教育は幼児から高齢者までのすべての国民に対して、消費者としての自立を支援し、消費者市民社会への関心を深める目的で行われることとなり、国や地方公共団体はその責を担うこととなった。また、2022年には18歳成人となることが確定し、消費者教育の早急な展開が必須である。本講義の前半では、消費者問題と消費者行政の歴史に絡めて消費者教育の現状と課題を示し、受講者自身が消費生活と環境・格差・持続可能性のかかわりを理解することで、主体的に行動する消費者リーダーになろうとする意識を育てる。後半では、受講者自身が消費者教育の指導的立場に立つことを想定し、具体的な事例に触れながら、消費者教育で扱うべき基礎知識と指導法を修得する。	
		衣管理論	衣服は着用によって汚れが付着し、本来持っている性能が低下する。そのため、衣服を長く、快適に着用するためには、洗濯や補修などの被服管理・保管の専門知識が必要である。被服管理学の基礎的知識を身につけ、環境保全と日常生活に直結した科学的視点から洗濯について理解し、修繕等を含む被服管理技術を修得する。また、小中高の家庭科の被服領域における学習内容に関連させることができるようにする。	
		被服構成実習Ⅱ	本実習では、糸紡ぎ、染色、糊つけ、製織を通して、製布に関する加工技術を修得する。また、その他の製布技術として編み物、フェルトづくりの基礎を行う。手織りで完成させた生地を使って、立体構成の衣服としてブラウス等のデザインならびに製作実習を通じて、窄衣の構造、立体構成の方法を学修する。衣服製作の基本技術を習得し、自分で製作した衣服を実際に着用することで、ゆとり量や着心地についての理解を深める。	
		食物科学	本講義では、(1)食品に含まれる成分や特性、おいしさ等の基礎知識の修得、(2)調理過程における成分間反応について理解し、調理科学的視点をもって調理操作を捉えられるようになる、ことを達成目標とし、食品に含まれる成分や特性、調理過程における食品材料の化学的・物理的变化について、また、食の安全を確保するための食品衛生に関する基礎知識について講義する。食品の分類方法や成分・特性機能性・調理性などについて概説した後、食品成分間化学反応について取り上げる。また、食品に含まれる有害な物質や生物について食品衛生の視点から説明する。	
		調理実習Ⅱ	調理実習Ⅰの基礎的知識や技術を発展させた内容となり、和食、洋食、中華等の他、各国のメニューを取扱う。また、行事食、伝統食について食文化的背景を踏まえながら実習する。最後は各班で献立立案から実習までを行う。各料理の特徴とマナーについて講義した後、文化横断型の実習を行う。自由献立による調理では主食・副食・汁物・デザートを設定し、地域的食文化を踏まえた料理を取り入れるように献立立案する。	
		子どもの保健	子どもの保健をめぐる世界と日本の現実を、医学の延長線上として捉えるのではなく、関連する社会システムの現状と課題から、権利基盤型のアプローチとは何かを詳説する。それを踏まえて、子どもの発育・発達の基本を理解するとともに、子どもの保健に関わる具体的場面において、どのような対応や援助が可能かを検討する。さらに子どもの保健に関わる家庭、行政、医療機関、民間団体等との連携にどのようなものがあるかを知り、教育現場でどのような取り組みが可能かを考察する。	
		保育原理	保育・教育についての基本的な概念や方法について学習する。また、子どもの保育に関する昨今の問題についても理解を深める。具体的には、保育に関連した社会問題を踏まえながら「保育」とは何かについて考え、日本および諸外国における保育の歴史を振り返り、保育が現行制度ではどのように位置づいているのかを課題を含めて検討し、子どもの発達に応じた保育内容について検討する。また、講義で得た知識をもとにグループワークを行い、家庭科における保育領域の学習内容と関連づけられるようにする。	
		家政研究セミナーⅠ	教員が専門分野を中心に研究成果等を学術論文、著書を取り上げて教員が問題提起を行い、受講生自らの問題設定を行うことで卒業研究の方向性を定めていく。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
分野専門科目	家政分野 家政研究セミナーⅡ	家政教育に関する諸分野について、セミナーⅠで設定したテーマについて自発的に問題意識を持ち、調査研究し、論理的に考察し、それを口頭および文章で表現する能力、集団において議論する能力を養う。	
	工業数学	技術分野の内容を構成する電気・機械・情報という科目を学ぶ上で、数学が必要不可欠であり、これらの授業を履修する前に学ぶべき講義である。本講義ではまず、複素数・関数と平面図形・ベクトル・三角関数・指数関数・行列・微分・積分等高校の復習から始める。その後、大学1年生向けの基礎数学を学び、最終的には現象を表すための微分方程式を解くことまでを演習を取り入れながら身につける。	
	機械加工学	最近、ロボットは産業用や医療福祉の分野に止まらず、教育現場他私たちの生活の中にも浸透しつつある。しかしながら子供たちにとってロボットはブラックボックス化している。本講義ではロボットを制御するためのセンサ類やアクチュエータの原理、運動学を身に付ける。さらには実用化されている各種ロボットの現状と未来について理解する。これらを通して、中学校技術科内でロボットコンテストを企画できる能力を身に付ける。	
	電気電子工学	電気工学・電気工学演習を履修した後に学ぶ科目である。近代のエレクトロニクスの発達はめざましく、その進路を予測することさえ困難である。このエレクトロニクスの中核をなしているのが電子回路である。本講義はアナログ電子回路（ダイオード・トランジスタ）からデジタル電子回路（オペアンプやIC）までの回路の構成方法を理論的にだけでなく、製作を交えながら理解し、使いこなすことを目標とする。	
	技術分野 プログラミング	中学校技術・家庭（技術分野）の「情報に関する技術」の学習指導を行うための基礎となる知識・技能を習得する。「情報工学」「情報工学演習」で修得した知識・技能を基に、課題解決の手順を構造的に考え、解決のためのアルゴリズムを設計し、プログラミングを通して実践することを目指す。また、プログラミングを行う事で、ソフトウェアとハードウェアとの関係性やデータ処理技術、論理演算などの知識を深め、中学校技術・家庭技術分野の教員に必要な「情報に関する技術」を指導する知識・技能を修得させる。	
	技術科セミナーⅠ	卒業論文を作成するため、また将来中学校技術科の教員になるために必要となる授業である。授業は技術教育専攻の2名の教員が担当し、技術学の分野についての講義が行われる。また、各教員の専門分野についても、その専門の入門部分について、理解しやすくまた興味を持てるような講義を行う。 (オムニバス形式／全16回) (71 川島芳昭 8回) ガイダンス、学校教育における情報教育 (19 松原真理 8回) ガイダンス、電気とものづくり	オムニバス方式
	電気電子工学演習	本授業は、電気電子工学の講義の履修後に受講する科目である。理論について実際に測定することにより、より深い理解を得ることを目的としている。また電子回路部品を用いて中学技術科や工業高校で用いられる教材開発を行う。これらを通して将来技術科の教員として相応しい、電気・ものづくり分野の技術を習得し、指導できるような力をつける。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
分野 専門科目	技術分野	プログラミング演習	本授業は、「プログラミング」の授業の履修後に受講する科目である。「プログラミング」の授業により修得したプログラムの設計、製作、実行、デバックのサイクルを用いて、より発展的な課題を解決することができる能力を育成する必要がある。また、センサー技術などのハードウェアと組み合わせることにより、身近な生活の中でのプログラミングだけでなく、産業を支える技術としてのプログラミングが不可欠な技術であることを理解させなければならない。さらに、第4次産業革命といわれる現代においては、ビッグデータの分析、機械学習、ディープラーニングなどの基礎的な知識・技能を修得することも必要である。以上のことをプログラミングの演習を通して修得させ、中学校技術・家庭技術分野の教員としての資質を高めることを目指す。	
	技術科セミナーⅡ	4年間の大学での学びの中で知り得た知識・技能を基に、卒業研究を行うため、また将来中学校技術科の教員になるために必要となる授業である。授業は技術教育専攻の教員が担当し各教員のゼミ等に出席する。 ・技術教育全般、情報教育に関する教材開発・授業提案(71 川島芳昭) ・技術教育全般、エネルギー変換、電気とものづくりに関する教材開発(19 松原真理)		
	加工学演習	イギリスでは小学校で、プログラミングの授業の一環で3Dプリンタを利用しています。このようなプログラミングとものづくりを融合する授業の傾向は日本でも浸透しつつあります。本講義ではCADで図面を作成し、3Dプリンタやレーザ加工機などの工作機械を利用して加工を行い、エンジンやロボットなどの部品など教材の開発を行います。工作機械を利用することにより、自由度が増える教材の開発が可能になります。		
	英語分野	英語学特殊講義A	日本の学校教育で教えられている現代の標準的な英語が国際的に見るとどのような位置付けにあるかを理解するために、以下の項目を設定する。 (1) 英語という自然言語の通時的な変化を概観する。 (2) 現代英語が国際共通語となった過程を理解する。 (3) 現代英語における地理的変異(方言)を観察する。 (4) 現代英語の社会的変異を標準英語と対照する。 (5) 非母語話者として習得すべき英語を発見する。	
	英語学特殊講義B	英語学の理論的な知見を英語教育の授業実践にどのように応用できるか考える。日本語と英語の文法構造を比較対照し、日本人英語学習者がつまづきやすい学習項目を明らかにすることで、実際にどのような支援が効果的であるか考察する。到達目標は、①日本の英語教育における課題を分析し考察することができる、②日本の英語教育における課題について英語学で培った理論的な知見を活用して自分なりの解決策について考えることができることである。		
	英語文学特殊講義A	なるべく多くの作品に触れるために、アメリカの代表的な作家の短編を翻訳を交えながら、できる限り原文で読み、作品の解釈・分析を行う。作品の背景(出版時のアメリカの社会的・文化的状況、作者の伝記的背景など)にも目を向けつつ、主に作品が提示している様々な問題や語り的手法について考察する。到達目標は以下のとおり。 (1) コンテキストを踏まえ、時に翻訳を参照しながら英語を読む訓練をし、英語力と読解力の向上を目指す。 (2) 他者の意見を踏まえながら自らの考えを述べ、また他者の意見に応答するアカデミックなコミュニケーション能力の向上を目指す。 (3) アメリカの代表的な作家の短編を時系列で読んでいくことによって、アメリカの歴史や社会、文化についての理解を深める。		

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
分野 専門科目	英語 分野	英語文学特殊講義B	イギリス文学作品を読むことで、多様な英語表現を学びながらイギリスの歴史や文化について理解を深め、英語教育に不可欠な素養を身につける。この授業では特に古英語の時代から現代までのイギリス文学の流れを概観しながら、代表的な散文、詩、劇だけではなく、これまで扱われてこなかったマイナーな作家の作品も取り上げて精読し、それぞれの特質や歴史的な位置づけを考える。同時に、イギリスの歴史や文化についての幅広い知識を身につけ、イギリス文学や歴史について英語で説明し、議論できる能力を養う。受講生は、多くの作品を原文で通読することが求められる。	
		英語科指導法特殊講義A	英語科指導法について、理論・実践の両面から理解を深める。特に、指導法・評価法について焦点を当て、具体的な事例を取り上げるケーススタディを行い、教室で起こる様々な事象に対応できるような実践的能力を養う。また、小・中・高等学校の多様な授業を映像で視聴し、受講者相互の気づきを交流させつつ授業分析を行う。一つの事象を多面的・多角的かつ批判的に検討し、意味付けることを通して、教員の指導、児童・生徒の学び、言語習得、授業規律、教員と児童・生徒の信頼関係、指導技術等様々な視点から授業研究力の育成を図る。	
		英語科指導法特殊講義B	英語科指導法について、理論の探究を主として、実践のための学びを深める。具体的には、第2言語習得理論に基づく教授法および指導法の変遷と現在について理論と実践演習から理解を促し、多様な学習者に対処する指導方法等、教室での実践における問題解決について、実践的能力を養うため、それを支える理論に関する理解を深める。さらに、多様な手法による授業分析方法について、研究論文を原文で読み、理論的な理解を深め、授業研究力の育成を図る。	
		英語学特別演習A	児童・生徒が非母語話者としてどのような発音を身につけるのが適切かを考えながら、教師自身は可能な限り教材と同じ発音に近づくために、以下の項目を設定する。 (1) 英語の母音がアクセントの有無や隣接する子音によってどのような影響を受けるかを観察する。 (2) 英語にあって日本語にはない子音同士の結合によって生じる様々な現象（同化現象など）を観察する。 (3) 発音練習を通して可能な限り標準的な英語母語話者の発音に近づくことを目標とする。	
		英語学特別演習B	英語学分野、とりわけ文法・語法研究、談話分析、意味論等を巡る卒業研究の計画立案・遂行や論文作成等の過程に応じたディスカッションや先行研究・基本資料調査等の報告やレビュー、中間発表等にかかる演習、指導を行なう。具体的には、英語教育における課題について、英語学の観点から解決策を探り、それを具体的な研究課題として卒業研究において設定し追究する。到達目標は、①英語学と英語教育に関連した研究課題を先行研究に基づいて発掘することができる、②設定した研究課題について独自のアプローチを提案し、追究することができることである。	
		英語文学特別演習A	代表的なアメリカの長編小説を、それについて書かれた論を参照しながら精読する。受講者の発表を元にグループディスカッションを行う。発表では、ディスカッションの論点を挙げてもらうほか、語学的な注釈や疑問を挙げてもらい、その都度、解消していく。また、同時にタームペーパーの構想を発表してもらい、アカデミックペーパーを書く練習を行う。 (目標) (1) 多様な英語のテキストを精読することによって英語力の向上を目指す。 (2) 他者の意見を踏まえながら自らの考えを述べ、また他者の意見に回答するアカデミックなコミュニケーション能力の向上を目指す。 (3) 他者の意見を引用しながら、アカデミックな論を書く訓練をする。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
分 野 専 門 科 目	英語文学特別演習 B	イギリス文学作品を読むことで、多様な英語表現を学びながらイギリスの歴史や文化について理解を深め、英語教育に不可欠な素養を身につける。扱う題材としてはイギリス短編小説とするが、19世紀後半から20世紀の比較的新しい作品だけではなく、幾つかの18世紀の短編にも触れることで、さまざまな歴史的な視座からテキストを研究する能力を養う。授業形態としては、発表者の発題を元に議論をしながら進めるため、十分な予習が不可欠となる。また最終のレポートは英語で作成し、自らの考えを英語で論理的に表現する力も身につける。	
	英語科指導法特別演習 A	英語科指導法について、理論と実践の融合を目指し、各受講者が1単位時間の模擬授業を行うとともに、学習者の立場で参加をする他の受講者とともに授業後の事後研究会を行い、考察を行う。具体的には、小・中・高の模擬授業のプランニング、授業実践、事後の省察までを通して行い、授業実践力を高めるとともに、自身の授業観や指導の特性・傾向等について把握（よさと改善点）することを目指す。英語授業の在り方について探究するとともに、教室における具体的な事象への対応力・実践的能力を高める。	
	英語科指導法特別演習 B	英語科指導法について、理論の理解に基づき、小中高の発達段階および連携を考慮したよりよい実践のための発展的な学びを深める。主として第2言語習得理論に基づく教授法、および指導法の理解に基づいた多様な学習者に対処するインクルーシブ教育実現のための指導方法を取り入れた実践を行い、効果的な英語指導法についての実践的能力を養う。さらに、その実践について、自己省察および多様な手法による授業分析を通じて、授業研究力の育成を図る。	
	英語科研究セミナー I	文献の検索方法、先行研究の扱い方、仮説の設定と検証方法、論理的な議論の展開方法、データの分析方法など、卒業論文作成に必須の研究能力を養う。研究テーマとしては、各受講生の興味や関心を重視するが、言語学、英語文学、英語コミュニケーション、異文化理解、英語教育学を横断的に扱うことで、学際的な研究を行うことが求められる。先行研究を網羅しながら、新たな視点を提示する卒業論文を作成する土台を作り上げる。	
	英語科研究セミナー II	「英語科研究セミナー I」で養った卒業論文作成に必須の研究能力を発展させながら、さらに高度な研究を行えるように、さまざまな視点から自らの論を検証する視点を身につける。授業では、実際に論文を作成し、また発表しながら、他の受講生との議論を通して、論理的思考能力や批評能力を養う。最終的には、多角的な視点に立った卒業論文を作成し、その成果発表としての卒業論文発表会では、英語によるプレゼンテーションと質疑応答を行う。	
特別支援教育分野	障害児教育学演習 A I	この演習では、障害児教育学のうち障害児教育史・教育制度・教育方法などに関する問題群の中から受講生の関心に即してテーマを設定し、先行研究を購読し、研究方法論について検討しながら、障害児教育学の専門的知識を深めていくことを目的とする。進め方としては、受講生の問題意識に基づいた障害児教育研究について学び、文献購読・論文購読を行って研究方法論を学んでいく。それぞれの時間において各自の課題を整理しながら、報告・検討を中心に進めていく。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
分野専門科目 特別支援教育分野	障害児教育学演習A II	この演習では、障害児教育学のうち障害児教育史・教育制度・教育方法などに関する問題群の中から受講生の関心に即してテーマを設定し、先行研究論文を購読し、研究方法論について検討しながら、障害児教育学の専門的知識を深めていくことを目的としている。それぞれの時間において、受講生の問題意識に基づいた論文購読を通して先行研究で残された課題・方法論を整理しながら、受講生の報告を中心に進めていく。そして随時、卒業論文の指導も行う。	
	障害児心理学演習B I	家庭、保育園、幼稚園、学校、支援施設など、障害のある子どもが生活している場にはいろいろな形態がある。その中で、子どもたちは、他者と対象物を介した活動を展開する。場が違えば、関わる他者も対象物も異なるため、多様な活動が生きたちとして営まれることとなる。その総体がいわゆる生活という活動である。障害のある子どもの生活を読み解くためには、その活動を障害のある子どもの生きたちとして記述する力が問われる。この記述する力を問うために、心理的手法を学び、文献や、観察記録等を収集し、レビューし検討する体験が必要となる。	
	障害児心理学演習B II	障害児心理演習B Iを基盤に、障害のある子どもへの関わりの知識や技術の洗練、および支援計画などを実際の子どもの生活の場に添って具体的に立てられるようになる。また、自らの授業実践、個別指導実践に具体的に利用できるようになるために、文献収集および購読と発表、観察演習、授業演習、個別指導演習などを積極に行なっていく。 また、ここでは、実証研究の方法論にも触れる。これらを通して、自らの卒業研究のテーマと研究方法をプランできる力を身につける。	
	障害児心理学演習C I	言語やコミュニケーション、各種障害がある人との事例研究や実践研究に関する文献あるいは教育実践報告の吟味および種々の障害疑似体験を行なう。そのなかで、受講学生各々が自身の教育観や障害観、科学観などを吟味し、障害がある人への教育的対応において必要となる視点や方法論などについて自分自身の考えを構築し、深めることを目標とする。また、研究を進めていく上で必要となる種々の機材の使い方や記述記録のとり方などについても演習を行なう。将来、教員を目指す学生にとって、実践事例研究の方法論を学ぶことは必須である。いわゆる障害種や診断名、障害の程度の軽重に関わらず、実践事例研究を志す学生は積極的に受講し、教育的係わり合いの実際の一端にぜひ触れてほしい。また、受講学生の希望に応じて、特別支援学校や特別支援学級、施設や病院、教育相談場面などの見学やそうした場での実践研究を行なうことも可能である。	
	障害児心理学演習C II	言語やコミュニケーション、各種障害がある人との事例研究や実践研究に関する文献あるいは教育実践報告の吟味および種々の障害疑似体験を行なう。そのなかで、受講学生各々が自身の教育観や障害観、科学観などを吟味し、障害がある人への教育的対応において必要となる視点や方法論などについて自分自身の考えを構築し、深めることを目標とする。また、研究を進めていく上で必要となる種々の機材の使い方や記述記録のとり方などについても演習を行なう。将来、教員を目指す学生にとって、実践事例研究の方法論を学ぶことは必須である。いわゆる障害種や診断名、障害の程度の軽重に関わらず、実践事例研究を志す学生は積極的に受講し、教育的係わり合いの実際の一端にぜひ触れてほしい。また、受講学生の希望に応じて、特別支援学校や特別支援学級、施設や病院、教育相談場面などの見学やそうした場での実践研究を行なうことも可能である。本演習は、「障害児心理学演習C I」と内容的に連続するものである。	
	障害児教育方法学演習 I	学校や保育の場において特別な支援が必要とされる子どもたちへの理解と支援の方法、その研究法について扱う。文献の購読のほか、観察記録のとり方、データの整理のしかたなどの演習を行いながら、実践研究や質的研究について学ぶ。卒業論文のテーマ決定に向け、特別支援教育に関する自分自身の研究の問いを立て、その研究課題を明らかにするための方法について吟味することができることを目指す。 授業者からの話題提供、研究手法に関する演習、受講者による報告を組み合わせる。基本的な研究方法、観察記録（フィールドノート）の作成・分析方法等について演習を行った後、障害のある人を理解するための視点、その視点を生かした支援方法や授業づくりについて文献購読やビデオ視聴を通して検討する。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
分野専門科目	障害児教育方法学演習Ⅱ	学校や保育の場において特別な支援が必要とされる子どもたちへの理解と支援の方法、その研究方法について扱う。文献の講読のほか、観察記録のとり方、データの整理のしかたなどの演習を行いながら、実践研究や質的研究について学ぶ。卒業論文の執筆に向け、特別支援教育に関する自分自身の研究の問いを立て、その研究課題を明らかにするための方法について具体的に吟味することができることを目指す。 授業は受講者からの報告を中心に進める。	
	視覚障害教育演習Ⅰ	視覚障害児への理解と支援、指導の方法、およびその研究方法について扱う。視覚障害児に対する指導場面の映像を通して観察記録の取り方を学び、発達段階や必要な支援、有効な指導法について、グループ討議を行う。グループで指導者役と子ども役、観察役に分かれ、指導の演習を行う。文献講読を通して、視覚障害児に対する実践研究や質的研究の手法について学ぶ。視覚特別支援学校等の見学を通して、指導法の実際について学び、レポートの作成を求める。	
	視覚障害教育演習Ⅱ	視覚障害児への理解と支援、指導の方法、およびその研究方法について扱う。視覚障害児に対する指導場面の映像を通して観察記録の取り方を学んだ後、実際の指導場面に参加し、観察記録を実践する。記録のまとめ方や、実態についての評価の仕方、実態に応じた指導計画の作成の仕方について、実践を通して学ぶ。文献講読を通して、視覚障害児に対する実践研究や質的研究の手法について学ぶ。視覚特別支援学校等の見学を通して、指導法の実際について学び、レポートの作成を求める。	
	卒業研究	教員養成課程における4年間の学びの集大成として、指導教員と相談の上で自らの意志により決定したテーマについて研究し、その成果を論文やプレゼンテーションの形に結実させ、発表する。研究を進めるにあたっては、自らがそれまでの学修を通じて獲得した知識・技能を活用し、先行研究等を丹念に探索・検討しながら、課題の解決を目指す。このような研究に取り組むことによって、教員としての資質・能力を高めるとともに、将来において直面するであろう種々の問題と主体的に向き合い解決するための力を育む。	
教育実習	事前・事後指導 (幼・小)	事前指導では教育実習生として学校の教育活動に参画する意識を高め、遵守すべき義務等について理解するとともに、その責任を自覚したうえで意欲的に教育実習に参加することができるようにする。具体的には観察記録の取り方の学習や、実習のオリエンテーションなどを行う。事後指導では教育実習を経て得られた知識と経験を振り返り、成果と課題等を省察するとともに、教員免許取得までにさらに習得することが必要な知識や技能等について理解する。具体的には、大学や実習校で実習の振り返りを行う。	共同
	事前・事後指導 (中・高)	事前指導では教育実習生として学校の教育活動に参画する意識を高め、遵守すべき義務等について理解するとともに、その責任を自覚したうえで意欲的に教育実習に参加することができるようにする。具体的には観察記録の取り方の学習や、実習のオリエンテーションなどを行う。事後指導では教育実習を経て得られた知識と経験を振り返り、成果と課題等を省察するとともに、教員免許取得までにさらに習得することが必要な知識や技能等について理解する。具体的には、大学や実習校で実習の振り返りを行う。	共同
	初等教育実習Ⅰ	児童や学習環境等に対して適切な観察を行うとともに、学校実務に対する補助的な役割を担うことを通じて、教育実習校の児童の実態と、これを踏まえた学校経営及び教育活動の特色を理解する。具体的には、教育実習Ⅱ前後における、附属学校での「授業参観」とその協議からなる。教育実習Ⅱで関わるクラスを中心に、授業を観察することを通して、実際の授業のあり様、子どもの学校生活の実態などを知り、自らの教育実習での活動に生かす。また、教育実習Ⅱの後に中学校や幼稚園の授業・保育参観をすることで、学びの連続性を理解する。	共同

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
教育実習	中等教育実習Ⅰ	生徒や学習環境等に対して適切な観察を行うとともに、学校実務に対する補助的な役割を担うことを通して、教育実習校の児童の実態と、これを踏まえた学校経営及び教育活動の特色を理解する。 具体的には、教育実習Ⅱ前後における、附属学校での「授業参観」とその協議からなる。教育実習Ⅱで関わるクラスを中心に、授業を観察することを通して、実際の授業のあり様、子どもの学校生活の実態などを知り、自らの教育実習での活動に生かす。また、教育実習Ⅱの後に小学校や幼稚園の授業・保育参観をすることで、発達の違いを理解する。	共同
	初等教育実習Ⅱ	教育実習を行うことによって、教職の本質を理解し、またどのような学習・研究が今後求められるのかを理解し、教職に対してさらなる意欲をもつ。3週間の附属学校教育実習では、指導講話や全体指導、授業観察と授業分析、教材研究と学習指導案立案、授業の振り返りや反省会、児童指導や学級事務等を行う。これらを通して、授業の実際、子どもの実態、学校現場の状況に関する理解を深め、小学校教育に関わる実践的指導力を身に付ける。	共同
	中等教育実習Ⅱ	教育実習を行うことによって、教職の本質を理解し、またどのような学習・研究が今後求められるのかを理解し、教職に対してさらなる意欲をもつ。3週間の附属学校教育実習では、指導講話や全体指導、授業観察と授業分析、教材研究と学習指導案立案、授業の振り返りや反省会、生徒指導や学級事務等を行う。これらを通して、授業の実際、子どもの実態、学校現場の状況に関する理解を深め、中学校教育に関わる実践的指導力を身に付ける。	共同
	初等教育実習Ⅲ	大学で学んだ教科や教職に関する専門的な知識・理論・技術等を、各教科や教科外活動の指導場面で実践するための基礎を修得する。 具体的には、栃木県内の公立小学校において、指導講話や全体指導、授業観察と授業分析、教材研究と学習指導案立案、授業の振り返りや反省会、児童指導や学級事務等、2週間の教育実習を行う。教育実習Ⅱで学んだことを公立学校で展開し、教職についての理解を深める。教育実習Ⅱとは異なる学校種の子どもたちの指導に携わることによって、子ども理解を深め、実践的指導力の向上を図る。	共同
	中等教育実習Ⅲ	大学で学んだ教科や教職に関する専門的な知識・理論・技術等を、各教科や教科外活動の指導場面で実践するための基礎を修得する。 具体的には、栃木県内の公立中学校において、指導講話や全体指導、授業観察と授業分析、教材研究と学習指導案立案、授業の振り返りや反省会、生徒指導や学級事務等、2週間の教育実習を行う。教育実習Ⅱで学んだことを公立学校で展開し、教職についての理解を深める。教育実習Ⅱとは異なる学校種の子どもたちの指導に携わることによって、子ども理解を深め、実践的指導力の向上を図る。	共同
	幼稚園教育実習	大学で学んだ領域や教職に関する専門的な知識・理論・技術等を、保育で実践するための基礎を身に付ける。 具体的には、2週間の実習中、半日保育（午前／午後）、部分保育（20～30分）を4～5日経過した後、全日保育を4～5日、以下の内容に取り組む。 ・保育実習（幼児、発達の理解） ・保育観察（記録の取り方） ・教材研究 ・保育準備（環境の構成） ・幼児の保育（部分保育、部分保育の連続、全日保育） ・学級経営 ・他クラス参観・観察 (71 川島芳昭・61 浅川邦彦)	共同

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
教育実習	高等学校教育実習	卒業した高等学校、もしくは栃木県内の高等学校において教育実習を行うことによって、高等学校教育の本質を理解し、またどのような学習・研究が今後求められるのかを理解するとともに、高等学校の教育に対してさらなる意欲をもつ。大学で学んだ教科や教職に関する専門的な知識・理論・技術等を、各教科や教科外活動の指導場面で実践するための基礎を修得する。具体的には、指導講話や全体指導、授業観察と授業分析、教材研究と学習指導案立案、授業の振り返りや反省会、生徒指導や学級事務等、2週間の教育実習を行う。	共同
	特別支援学校教育実習	大学で学んだ教科や教職に関する専門的な知識・理論・技術等を、各教科や教科外活動の指導場面で実践するための基礎を修得する。特別支援教育コースは、5月中に3週間の実習を行う。詳細は4月中に行われるオリエンテーション時に連絡する。学校教育コース・教科教育コースは、8月末～9月中旬に3週間の実習を行う。詳細は7月中に行われるオリエンテーション時に連絡する。それぞれ具体的には、指導講話や全体指導、授業観察と授業分析、教材研究と学習指導案立案、授業の振り返りや反省会、生徒指導や学級事務等を行う。	共同
	教職ボランティア入門	主に小学校での授業や学校行事などの支援活動を通して、教職の意義、教員の役割、職務内容や、それらが子ども達の発達支援のために位置づいていることについて理解を深めることをねらいとする。具体的には、大学での事前指導を受けた後、学校現場に40時間程度赴き、学習支援補助や児童生徒指導補助、学校行事運営補助等、教員のサポートに従事する。大学における中間振り返りや、まとめの振り返り活動を通じて情報を共有し、学びを深める。	共同
教職実践総合科目	教育実践インターンシップ	学校等の教育関係施設において、その管理下にある指導者のもとに、放課後の学習支援、授業や部活動の補助など、さまざまな体験的活動を行い、大学で行われる「振り返り」に参加することで、自らの体験を省察する。具体的には、教育実践インターンシップ説明会への参加、体験活動を行う施設等の決定のあと活動計画を提出し、30時間以上の体験活動に入る。2回の中間振り返りを経て活動計画に基づいた企画書のプランを実施し、自己評価する。	共同
	教職実践演習(教諭)	教育実践科目の学修で習得した理論的知識・技能、実践的指導力を「学びの軌跡(履修カルテ)」及び「ポートフォリオファイル」により振り返り、子ども理解、教職への使命感・責任感、教育的愛情、対人的関係能力、教科指導にかかわる資質を確認し、向上させる。具体的には、ガイダンスや講話、現職教員による研究授業の参観と授業研究会参加、ワークショップやロールプレイ、模擬授業の立案と実施、教職課程全体の振り返り等を行う。	共同
	教育実践研究(幼・小)	附属学校あるいは一般公立学校等の教育機関において、大学の授業あるいは教育実習等で自覚したテーマ(教育内容、教育方法、教材研究に関わるもの等)を実践的に探求することを通して、理論と実践を統合する力、また省察する力を獲得する。具体的には、卒業研究指導教員などの指導のもとで、実習機関と十分協議して実習内容・時期などを決め、各自の卒業研究テーマに基づいて授業実践・調査・観察などを、2週間の実習に相当する程度実施する。	共同
	教育実践研究(中・高)	附属学校あるいは一般公立学校等の教育機関において、大学の授業あるいは教育実習等で自覚したテーマ(教育内容、教育方法、教材研究に関わるもの等)を実践的に探求することを通して、理論と実践を統合する力、また省察する力を獲得する。具体的には、卒業研究指導教員などの指導のもとで、実習機関と十分協議して実習内容・時期などを決め、各自の卒業研究テーマに基づいて授業実践・調査・観察などを、2週間の実習に相当する程度実施する。	共同

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
forefront科目	環境教育	地球環境問題の現状とともに、それらの解決を考える上で重要なESD（持続可能な開発のための教育）やSDGs（持続可能な開発目標）の基礎や教育における実践例について学ぶ。講義を通して、持続可能な社会の構築における環境教育の意義や役割、可能性や限界について理解を深める。具体的には、環境教育の目的やねらい、歴史的経緯、環境教育で扱われるテーマや主要な概念についての知識を身に付け、環境教育の現状や課題、可能性などについて複合的な視点をもち、自分なりの意見や考えを持てるようにする。	メディア
	ESD教育法	1980年代に「持続可能な開発」という概念が登場して以来、自然保護が中心であった環境教育はサステイナブルな生活や社会を構築できる人材育成を目的としたESDという概念に拡張されてきた。本授業では「環境教育」で修得した知識をベースに、初等教育（幼児期、学童期）、中等教育（中高）、生涯教育におけるESDを推進していくための指導法の理論について、宇都宮大学が編纂しているSDGs事例集、環境教育指導資料（国立教育政策研究所）等を通して修得する。	メディア
	SDGs総合演習	「環境教育」「ESD教育法」で修得した環境問題に関する基礎的知識と指導法を元に、発達段階に適応した指導案立案、模擬授業と振り返り活動を通して実践力を高める。具体的には、グループ毎（一括クラスを想定）にSDGsの17の目標に基づいて演習課題を設定し、関連する資料収集（学術論文、実践先行事例等）を行い、それら进行分析して与えられた発達段階に適応した指導案作成を行う。教グループ毎に模擬授業を展開し、相互評価とディスカッションを通して指導案を改善し、SDGs授業実践事例集としてまとめる。	
	国際インターンシップ	本実習は「国際キャリア教育」プログラムの一環として行われ国内および海外の企業・NGO・公的機関・地方自治体、国際機関等でインターンとして実習経験を積み、実務能力を高めます。インターン後はレポート提出を課します。本実習は、「国際キャリア教育」の3つの目的を達成させるために、現場体験、実習経験を積み、実務能力、企画力とコミュニケーション力を高めます。さらに、自分の関心分野や専門性をより明確にします。	共同
	国際キャリア教育	2泊3日の合宿形式の集中講義である。1日目：開校式、全体講義とワークショップ、パネリストによるパネルトーク、分科会（イントロダクション）、2日目：分科会、中間発表の準備、中間発表、発表準備、3日目：発表準備、全体発表、振り返り、意見交換、全体総括、閉講式。合宿セミナー後にレポート提出。アクティブラーニングの技法としては、グループワーク、ディカッション、ディベート、プレゼンテーションなど各講師の指示に従って行い、①「働くとは何か」、②自分と地域社会や世界とのつながり、③主体的に関わりたい問題や分野を見つけ、今後の学びの動機を考えることを目標とする。	共同
	International Career Seminar	本プログラムは、グローバルマインドを養う「グローバル人材」の育成のためのプログラムです。「International Career Seminar」は、本プログラムにおける「合宿セミナー」の一環として開講するものであり、学内外の講師によるテーマ別の分科会ごとに、ワークショップやディスカッションを取り入れた、2泊3日の合宿形式の集中授業で、授業は全て英語で行います。	
	海外英語研修	外国語の学習には、その外国語が日常生活で使われている地域で、実際にその外国語を使って生活することが、運用能力の獲得にきわめて有効である。本授業科目の目的は、その効率的な方法に従い、マレーシアのサラワク大学（UNIMAS）で2週間の英語研修を受けて、より高度な英語の運用能力を獲得する。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
forefront科目	食と生命のフィールド実践演習	附属農場における実習と関連する事前学習と事後ディスカッションを通じて、我々の生活を支える食・環境・生命について体験的に学ぶことを目的としたアクティブ・ラーニング科目である。アクティブラーニング手法としてフィールドワークを中心に、作物分野、園芸分野、畜産分野、作業機械分野について実習する。最後にディスカッションとプレゼンテーションを行ない、自然環境の中で五感すべての感じる力を覚醒し、課題解決に向けて自ら考え、自発的に行動する力を養う。	共同
総合教職科目	教職特別演習Ⅱ	教育実習後に、演習を通して、子ども理解、教職への使命感・責任感、教育的愛情、対人的関係能力、教科指導にかかわる自らの資質能力を振り返り、確認する。また、教職に対して自信を持って臨めるよう、教員として最小限度必要な資質能力の育成を到達目標とし、これまでに習得した理論的知識・技能、実践的指導力を演習を通して振り返り、グループワーク等で、子ども理解、教職への使命感・責任感、教育的愛情、対人的関係能力、教科指導にかかわる資質を向上させる。	集中共同
	生涯学習概論	(1) 生涯学習および社会教育についての基礎知識の習得、(2) 生涯学習時代への主体的・能動的対応として「考える方法」を考えること、(3) 生涯学習実践の中心的課題として「自分自身を学ぶ」を教育目標に、教育そのものを根底から問い返すという問題意識を常に背景に置きながら、「生涯学習」がどのように理解され、どのようにして実践されるべきかについて、受講者自身の見識を修得する。	
	健康教育	教師として最低限必要とされる、子どもの心身の健康問題や疾病の予防、安全の確保に関する基礎的・基本的な知識を、学術上の知見、統計資料、事例等を紹介しながら講義する。また、学校を基盤とした健康教育に関する制度、効果的な指導を進める上で有用な理論、実践例等についても取り扱う。さらに、受講生自身が健康教育の実践案を作成し検討する機会を設定することで、実践的指導力の向上も図る。	
	教育行政学	教育行政の基本原則と制度を概説し、公教育の理念と制度に関する基礎的知識を習得する。また、それらが教育政策にどのように反映されているか、中央・地方の教育行政の具体的な姿と課題について理解する。そして、公教育の権限関係、地方分権、学校の自立性、教育財政などをめぐる今日の問題について、具体的なデータや事例を通して自分なりに考察できるようにする。	
	野外教育	自然や環境にかかわる学習の総合的で多様な在り方や、子どもの自発性を生かし、自主性を伸ばす支援の在り方について、体験的な知識とスキルを獲得する。具体的には、自然の中での身体的および知的な諸活動を自ら行うとともに、子どもたちの自然体験活動（イニシアティブゲーム、ネイチャークラフト、ネイチャーゲーム、ナイトプログラムなど）の支援を体験する。また、自然体験活動において重要な救命講習も実施する。	
	スクールソーシャルワーク論	現代社会において子どもをめぐる課題は複雑化しており、多様な機関・組織との連携を必要とする。その要としてスクールソーシャルワーカーの活躍が期待されている。本講義ではスクールソーシャルワークの基礎となるソーシャルワークの基本を身に付けた上で、その学校での応用としてのスクールソーシャルワークが取り組むべき課題や地域や家庭、多専門機関との連携の意義と具体的方法を学ぶ。	
	「子どもと教育」探究講座	これからの変化の激しい社会の中で、子ども達が「生きる力」(確かな学力、豊かな人間性、健康や体力)を獲得していくことを支援する教師の資質が問われている。そこで、家庭教育、幼児教育、学校教育、地域社会の教育等に関する諸制度や教育の現状や課題の理解を深めるとともに、教員として求められる資質・能力の向上を図るために、「生きる力」を育む教育のあり方について探求する。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
小学校 アドバンスト科目	アドバンスト算数	小学校算数科の指導方法についての基礎的な知識を土台にして、小学校算数における教材研究や授業設計を行うための基礎的な資質・能力を育成することを授業の到達目標とし、学習指導案の作成及び模擬授業の実施を中心に展開し、算数の学習指導案の作成、算数の授業の省察の仕方、算数の指導方法についての実践的に学習する。算数教育に関する理論や今日的動向に関する講義と、算数の教材研究や授業づくりについての協働的な演習を織り交ぜて理論と実践の往還を図る。	
	アドバンスト小学校理科実験	(概要) 小学校理科における4つの柱, 「エネルギー」, 「粒子」, 「生命」, 「地球」各領域の実験指導に関する理解を深めることをねらいとして, 各領域2コマずつのオムニバス形式で演習中心の授業を行う。 (オムニバス方式/全8回) (21 南伸昌/4回) 「エネルギー」領域の中の「ふりこのきまり」, 「電気の活用」および, 「粒子」領域においては器具や試薬の使い方の練習の後, 「水の状態変化」, 「水溶液の性質」を担当する。 (3 井口智文/2回) 「生命」領域の中の「植物の体のつくりと働き」の単元内容の実験(顕微鏡の使用法を含む)を担当する。 (142 瀧本家康/2回) 「地球」においてはPC等のICTを活用した効果的な指導方法を担当する。	オムニバス方式 演習 12時間 講義 4時間
	アドバンスト小学校英語教育	小学校英語の指導方法についての基礎的な知識を土台として、授業・教材研究や授業設計を行うための発展的な資質・能力を育成することを授業の到達目標とする。具体的には、授業・教材研究・相互文化理解について学びを深め、それに基づき学習指導案の作成及び模擬授業の実施し、小学校における英語の授業の省察の仕方、教材研究の方法、学習指導案の作成、評価方法について、オムニバス形式で、実践的かつ協働的に学ぶ。同時に小学校英語教育に関する理論、中学校英語との連携についても、理解を深める。 (オムニバス形式/全8回) (86 山野有紀/全6回) 小学校英語のための第2言語習得理論、小学校英語教育の教授法、小学校英語教育における相互文化理解、授業・教材研究、評価方法、模擬授業指導を担当する。 (143 田村岳充/全2回) 小中英語教育連携について担当する。	オムニバス方式
	アドバンスト特別支援教育	特別支援教育に関する基礎的な知識を土台として、小学校において特別な支援を必要とする児童を理解し支援するための発展的な資質・能力を育成することを目指す。特別支援教育に関する学校現場の課題について知るとともに、子どもの具体的な姿から支援や授業デザインを考える方法について学ぶ。 (オムニバス形式/全8回) (251 池本喜代正/全2回) 特別支援教育の理念と制度、特別支援教育をめぐる現状と課題について担当する。 (144 福田奏子/全2回) 見えにくさのある子どもへの理解と支援について担当する。 (65 石川由美子/全2回) 知的障害や発達障害の子どもへの理解と支援について担当する。 (77 司城紀代美/全2回) 通常の学校における特別支援教育、通常の学級での授業づくりや学級経営について担当する。	オムニバス方式

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
グローバル関連科目	International Political Economics	The course introduces students to some major topics in IPE, such as globalization, free trade, inequality, and the decline of US power. It does so by critically examining major theoretical approaches and concepts.	集中
	Global Management : Asia and Development	This course provides students with the opportunities for critically reviewing and analyzing the on-going global challenges, beyond borders and across disciplines around the world. Through providing conceptual clarity and concrete case studies, students will be directed to understanding and drawing an overall picture of global issues. Students will also learn about some practical technics and tools for problem analysis, in order to analyze the global issues and seek the real global agenda.	集中
	Globalization and Society	In this course, we learn and discuss about what "globalization" is and what have been going on in this global society. This course introduces some basic ideas of "globalization" and "global issues" in local and global communities. Also, through some groupworks and workshops, some participatory learning skills of global education will be introduced so that we can understand those global issues and take actions for our common future.	
	Risk Management	This course introduces risk management principles with the practical cases in and out of Japan. In general, "risk" is defined as an (exposure to) the possibility of loss, injury, or other adverse or unwelcome circumstance; a chance or situation involving such a possibility. This course focus on disaster risk from the third class.	集中
	Intercultural Education	The course format is primarily made of lectures, pair or group work, presentations and in-class discussions. Each student will be assigned to present one of case studies in a class. In your presentation, you have to summarize reference books and provide your comment on it. この授業は、全学共通科目の"Learning+1"が目標とする「英語運用力や異文化社会およびグローバルな共生社会への知識を深め、国際的なフィールドでの実践力を身につける」と関連します。	集中
幼稚園免許	幼児の健康・運動	本授業では、発育期の子どもの運動発達や健康の特徴を把握するとともに、スポーツ運動系の運動学習や運動指導についての正しい知識を身につける。発育期の子どもは心身ともに大きく成長する時期であることから、発育発達段階に合わせた運動能力の変化や健康の特徴を理解し、安全で効果的な指導を行う上での知識を養うとともに、各年代における運動能力を高める方法や健康の増進に関する専門的能力を習得する。	
	幼児と人間関係	安心の輪の中で自我の芽生え、自己主張をしながら信頼関係を築き、やがて自己をコントロールしていく社会性自我の芽生えに至る発達においてコミュニケーションの基礎が養われる。幼稚園教育用要領に示された領域「人間関係」のねらい及び内容を踏まえ、幼児期を中心に人間関係の特徴について主に発達心理学的な視点から学ぶ。特に社会性の発達に焦点を当て、「人と関わる力」を培うプロセスについてについての講義を行う。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
幼稚園免許	幼児と環境	幼児の発達や学びの過程を理解し、領域「環境」に関わる基礎的な知識を習得し、幼児期の環境構成の重要性を理解することを目標とする。人間の発達における土台を形成する幼児期の育ち環境のあり方について、認知的発達を踏まえて幼児と環境との関わりについての専門的事項との関連を事例を交えて教示する。また、幼児期の保育の質保証としてのESDの課題について示し、深い学びを保障するために領域「環境」が保育に果たす役割について講義する。	共同（一部）
	幼児と言葉	幼稚園教育要領における領域「言葉」のねらい及び内容を理解し、幼児期の言葉の学問的背景と基礎的な知識を学ぶ。また、発達段階をふまえ、幼児が親しみをもって身に付けていく言葉をとおして、自分なりの言葉で表現し、他者の話す言葉を聞こうとする意欲、態度を理解する。幼児の言葉に対する感覚や表現する力を育む体験や環境を構築できるよう幼小連携を踏まえた主体的、対話的で深い学びの保障について講義する。	
	音楽表現	手遊び歌や伝統的な唱歌をはじめ音楽的表現は幼児の情操を豊かにし、感性的な発達には欠かすことができない。幼児の発達段階に応じた様々な音楽表現を身につけ、その指導法を習得することを目的とする。音楽を通じた表現活動として、四季折々の子どもの歌の歌唱および指導のための簡易伴奏付け、音楽レクリエーションとしての「手あそび歌」、子どもの合奏などの基礎的実践的能力を養う。また、教育現場で即戦力となるよう、保育における実践的な教材研究にも取り組む。	
	造形表現	表現のなかでも造形表現の特色や子どもの造形的な発達を理解し、幼児の造形表現を指導、支援するための基礎的な諸能力を高め、子どもの造形表現の意味と面白さを知り、実践につながる力を身につけることを目標とし、幼稚園教諭として必要な造形表現の知識・技能を講義や演習、実践を通して学修する。材料用具の扱い方や学習環境のデザイン、教材開発、造形活動の支援のあり方など、幼児の造形表現の実際を様々な文献・資料の他、実践を基に理解を深める。また、テーマに沿ったレポート課題や実践活動への取り組み、授業時の制作を通じて、発表や意見交換を行う。	
	保育内容の指導法（健康）	保育内容の領域「健康」に関わる指導についての基礎・基本的な知識や技能を修得し、子どもの心身の健全な発育発達を促し、遊び・身体運動の楽しみ方について指導する実践力を養う。講義では、領域「健康」の意義・ねらい・内容を理解し、子どもへの健康指導の視点および子どもの健康課題の解決に繋がる実践力を学習する。また、子どもの心身の健全な発育発達を促し、遊びを通じた身体運動、健康で安全な生活習慣を身につけるための知識と指導法を模擬保育を通して身に付ける。	
	保育内容の指導法（人間関係）	幼稚園教育要領における領域「人間関係」のねらいや内容を理解し、具体的な援助場面を想定して保育を構想することができるようになる。講義では、幼稚園教育要領における「人間関係」のねらい、内容を概説する。また、提示する事例（附属幼稚園保育実践、レジョエミリアの幼児教育実践等）について幼児、保育者それぞれの観点からディスカッションを行うことで、保育者として幼児の人間関係を援助する方法について考えていく。また、異年齢保育や気になる子、個人差等に対応するための保育指導案作成と模擬保育を実践する。	
	保育内容の指導法（環境）	幼児の発達や学びの過程を理解し、領域「環境」に関わる具体的な指導場面を想定した保育を構想する方法を身につけ、幼児期の環境構成の重要性を理解することを目標とする。人間の発達における土台を形成する幼児期の育ち環境のあり方について、幼稚園指導要領の幼児と環境との関わりについての専門的事項を踏まえて理解し、深い学びを保障するために、実地指導講師ならびに講義者の保育現場での経験を生かして具体的な指導場面を想定した模擬保育と振り返りを通して保育の構想、指導方法を修得する。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
幼稚園免許	保育内容の指導法 (言葉)	幼稚園教育で育む資質・能力を理解し、幼稚園教育要領・領域「言葉」のねらい・内容について理解を深め、幼児の発達に即して主体的・対話的で深い学びが実現する過程を踏まえて、具体的な指導場面を想定して保育を構想する方法を身に付ける。講義では、幼児の言語発達、コミュニケーションを通じた認知発達、脳科学と言葉の発達、遊びを通じた言葉の発達などについて心理学の知見を基に概説し、具体的に保育計画を立て、模擬保育の実践と省察により実践的な指導方法を習得する。	
	保育内容の指導法 (表現)	領域「表現」のねらい及び内容について、背景となる専門領域と関連させて理解を深め、幼児の発達に即した主体的・対話的で深い学びが実現する過程を踏まえ、表現支援に重要な視点や指導技術を習得し、具体的な指導場面を想定した保育を構想する指導方法を身に付ける。講義では、保育現場における参観や指導案作成・模擬保育等を通して、領域「表現」のねらい及び内容を理解し、「表現」を通じた実際的な保育や指導のあり方を考える。	
	幼児教育課程論	具体的な指導計画の編成や計画にあたって重要となる、子ども観の捉え方、カリキュラムの立案ならびに教材研究、そしてこれらの理解につながる歴史(現制度の現状と課題を含む)を踏まえ、子どもを主体として捉えた教育課程とは何かを理解することを目的とする。講義では、幼児教育制度の歴史、保育原理、幼児教育の特性及び意義を学ぶ中で保育と教育の在り方を整理し、各学校の子どもの現状を軸としたカリキュラム・マネジメントの基本を身に付ける。	
	幼児教育の方法・技術	「幼稚園教育要領」「幼保連携型認定こども園保育・教育要領」の内容及び平成29年改訂の背景を理解することが幼児教育の方法・技術を考えるためのスタートとなる。とくに新しく示された「幼児期の終わりまでに育って欲しい10の姿」を主体的・対話的で深い学びを通して、幼児期に育む教育を行うための方法や技術を身に付けることが必要であるとの理解から、具体的な方法や技術、教材の開発、情報機器の活用などについて学ぶ。また、小学校とのスムーズな連結が可能となる教育方法やカリキュラムについても学ぶ。	
	子ども理解の心理学	幼児理解についての心理学的な理論、知識を身につけ、その意義を理解する。また、幼児理解から発達や学びを把握する原理、原則を理解するために、観察、記録の意義を具体的な事例から学ぶ。幼児の発達過程におけるつまずきや保護者対応について、自ら支援・援助できるようアクティブラーニング形式で受講生が主体的に考察し、幼児教育の現場で教師としてあるべき姿がとれるよう、幼児・保護者に対する基礎的態度を修得する。	
	幼児教育相談	幼児の発達を理解しつつ、幼児個別の特質や教育的問題を支援するために必要な基礎的知識を習得する。また、幼児と保護者に対するカウンセリングマインドの必要性を理解し、幼児の問題行動や不適応行動に対する教育相談を展開するために組織的な取り組みの重要性、関連機関との連携の在り方のあり方を理解する。カウンセリングの基本的な姿勢や技法については、アクティブラーニング形式で自らが実践できるように取り組む。	
高校免許	工芸科教育法 I	高等学校学習指導要領解説と資料をもとに、工芸の定義、工芸教育の変遷、工芸科教育の内容・目標・指導・評価等の基礎的知識に関する講義形式の授業を行った上で、実際の工芸の授業の具体的な内容や進行について、演習課題に取り組みながら、課題発表やロール・プレーイング、鑑賞を織り交ぜながら模擬授業を通し、情報共有し学生同士の学び合いと振り返りを通し、工芸の授業を実践的に展開していくための指導案を作成する。演習課程は詳細に材料の扱い方や手順など詳細記録し、図や写真等を織り交ぜた記録ノートを作成することで、教科の内容を理解するとともに教材研究し、授業を展開するための情報機器及び教材の活用と資料作りとする。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
高校免許	工芸科教育法Ⅱ	高等学校学習指導要領解説と資料をもとに、工芸の定義、工芸教育の変遷、工芸科教育の内容・目標・指導・評価等の基礎的知識に関する講義形式の授業を行った上で、実際の工芸の授業の具体的内容や進行について、演習課題に取り組みながら、課題発表やロール・プレイング、鑑賞を織り交ぜながら模擬授業を通し、学生同士の学び合いと振り返りを通し、工芸の授業を実践的に展開していくための指導案を作成する。演習課程は詳細に材料の扱い方や手順など詳細記録し、図や写真等を織り交ぜた記録ノートを作成することで、教科の内容を理解するとともに教材研究し、授業を展開するための情報機器及び教材の活用と資料作りとする。	
	工業技術基礎	本科目は、高等学校（工業）教員免許状取得に必要な教科に関する専門科目である。高等学校工業科の「各分野に関する科目」の内容について理解することを主な目標とする。授業では中学校技術・家庭科（技術領域）からのつながりに留意しつつ、各分野の専門的内容（工業材料、製図、機械工学、電気・電子工学、情報工学など）について学修する。また学修指導に際しては、建築や工業デザインなど、工業科の広がりにも留意して指導するものとする。 (宇都宮大学：単独) (群馬大学：オムニバス方式／全15回) (33 楠元一臣) (122 古田貴久) (136 小熊良一) (137 片柳雄大)	宇大単独/群大オムニバス方式
	職業指導論	工業高校の免許を取得するために必要な科目である。工業高校における職業指導の意義を理解する授業を行う。まずは職業指導の歴史的な流れについて学ぶ。また、小学校、中学校、高等学校普通科におけるキャリア教育を知ることを通して体系的に職業指導をとらえていく。さらに、進路指導計画の作成やキャリアカウンセリングなど学校現場での実施を視野に入れた職業指導の具体的な方法を学習する。	
	工業科指導法Ⅰ	工業高校の免許を取得するために必要な科目である。工業高校の指導科目、工業科教育の目標、原則履修科目、共通的な基礎科目、選択的な基礎科目の内容を、指導要領や教科書を用いて理解する。また実際に工業高校において授業見学を行う。授業を行うための実践的な学習指導計画・指導案を作成し模擬授業を行う。学習指導要領の基づく評価の観点を検討した学習評価の方法を学ぶ。	
	工業科指導法Ⅱ	工業高校の免許を取得するために必要な科目である。工業高校に関する科目、電気、機械、情報、金属材料、機械工作、製図等の指導法・教材開発について講義、演習を学ぶ。工業高校の教員である実地指導講師を招いて工業高校の実情を講話して頂く。また工業高校は、地域の産業との結びつきが大きい。よって、工場見学なども行う予定である。工業高校生のための研究成果発表会にも参加する。	共同（一部）